
あなたのそばですっと

しゃーむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたのそばですっと

【Nコード】

N7008K

【作者名】

しゃーむ

【あらすじ】

この春から晴れて高校生になる主人公、椿誠二。高校生活に期待と不安に胸を膨らませていた。いろんな友人との触れ合い、異性との恋愛。そんな当たり前の青春を描く物語。

とある理由から恋愛に臆病になっている主人公、椿誠二。

その誠二が高校生活のなかで少しずつ大人になっていく。

新しい出会い。

別れ。

多くの人が一番の思い出となっている高校生活。

その三年間を描きます。

入学、部活動、友人との語り。

恋愛。

「私、あなたに出会えて・・・あなたを好きになってよかった」

「オレも、好きになってよかった」

一生懸命駆け抜けた日々はかけがえのない宝物。

辛い日々を乗り越えた先に待つものとは。

切なくもあり、暖かくもある青春ラブストーリー。

入学（前書き）

初めての投稿です。

出来るだけ読みやすいように頑張って書いておりますが、至らない点もあると思います。

暖かい目で見守っていただけるとありがたいです。

入学

朝、目が覚める。

ベッドから這い出てカーテンを開ける。まだ薄紫色の空になんともなく懐かしさを感じていた。

「まだこんな時間か・・・」

そんなことを一人呟いたオレは椿誠二。つばき せいじ

この春から住んでいる地元の柳ヶ浦町にある柳ヶ浦高校やなぎうらこうこうに入学するしがないごく普通の高校生だ。いや、高校生になる。

普段ならまだ空が薄暗いこんな時間に起きることなんてないのに、今日は柄にもなく緊張しているのか早起きしてしまったわけだ。

このまま二度寝して初日から遅刻なんてバカなことにならないようにしないとな。

とりあえず学校に行く準備だけはしておこう。

二階にある部屋を出て顔を洗いに一階に下りる。人は第一印象が大事だ。誰かが言っていたな。身だしなみはきちんと。

「あら、あんた早いわね。はーん、さては緊張して目が覚めたんでしょ」

「違っつて。早めに準備しようとしてるだけさ。用意周到、準備万端、基本だろ？」

「そんな言葉並べてもわかるわよ。あんたはあの父さんの子よ、緊張しないわけがないわ。あーもう、そんなとこばっかり父さんに似ちゃって。だいたい父さんったらこの間もねえ・・・」

「あー、顔洗ってくる」

そう言っつてオレは洗面所に向かった。

危ない危ない。オレの母さんはよく喋るんだ。このまま付き合っていたら朝の貴重な時間をいくらつぶされるかわかったもんじゃない。この前も近所の主婦友を捕まえて一人で延々話していたのはこの界限では有名な話した。

そのまま顔を洗って自分の部屋に戻った。

まだ当然ながら真新しい柳ヶ浦高校の制服を身にまとい、朝食を頂くためにリビングへ向かった。

「朝ごはん、出来てるわよ」

「ああ、ありがとう」

そんな会話を交わして食卓につく。

「ついに今日から高校生ねー。早く彼女でも作って話しに花を咲かせてね」

「興味ない」

「あんた、何しに学校に行くのよ」

いや、あんたは何しに学校行ってたんだよ。

実は恋愛なんて興味ない。なんて言ったら嘘になるんだろうけど、ちよつと怖いんだ。

前・・・中学の時に一人の女の子に告白されて付き合ったことがある。まだまだお互いに子供だったけれど、ただ告白されたっただけでなんとなく付き合っただけでもやっぱり好きになれなくて・・・。そんなに時間もたたないまま別れを告げて・・・ひどく泣かせた。ひどく傷つけた。

それからかな、自分から好きになった人じゃないと恋愛できないなって思い始めたのは。

少し話しがそれたけど、今日からとりあえず高校生だ。

「いいひとがいたら紹介するのよ?」

「・・・まあ、行つてきます」

見送りの最後まで息子の恋愛に興味津々の母さんを尻目に、オレは柳ヶ浦高校までの道のりを歩き出した。早く起きたから少し早目の出発だ。

柳ヶ浦高校はオレの家から約15分くらい歩いた丘の上にある。

途中からはずつと登り坂だ。自転車じゃ逆にきつい。かと言ってバスで通う程の距離でもない。夏は灼熱の太陽に照らされ、冬は北風に凍えながら通学するわけだ。

制服は紺色のブレザーに緑色のネクタイ。ズボンには白と灰色の干鳥柄。女子はそのスカートだ。デザインは割と好きかな。

「誠二、おはよ。早いね」

「おう、おはよ、美香。そっちも早いな」

「ちよつと緊張して早く起きちゃつてさ」

「ははっ、オレもだよ。入学初日に緊張しないやつっているのかな？」

「どうなんだろうねー」

今話しかけてきたのは、幼馴染の川口美香^{かわぐちみか}。家が近所で小さい時からよく一緒に過ごしていた。オレの母さんに口撃^{くつげき}を受けた母親を持つ。

肩くらいまであるセミロングの茶色がかった髪で、前髪にはいつもヘアピンをつけている。本人曰くチャームポイントなんだそう。

目は大きめでスタイルもよく、成績優秀、運動神経抜群、容姿端麗、すばらしい幼馴染だ。

当然ながらモテる。

だけどオレは幼いころから一緒に居たからか、女として意識したことがない。本当に仲が良い親友だ。周りの友達からは羨ましがられてたけれど。

幾度となく告白されたという話を聞いてきたが美香は誰とも付き合ったことがないんだ。昔っから心に決めた人がいるらしい。そんなやつ見たことないけどな。

「おっはよー！お二人さん！」

いた……。入学当日つていうのに緊張しないやつが。

「おう、勇介。早いな。まさか柄にもなく緊張して早く起きたのか？」

今声をかけてきたのは堀川ほりかわ勇介ゆうすけ。こいつも幼馴染だ。

身長も高くてなかなかのイケメンなんだが変態的な性格ゆえに残念ながらモテないやつだ。がっしりとした体格の割になよよしている。

「まさか。知ってるだろ？オレ達一年の教室は校舎の三階。つまりベランダからは登校してくる女子高生の姿が一望できるわけだ。それを拝めるためにも早いとこ行かないとな。女子高生よ、じよ・し・こ・う・せ・い！この響きだけでも高校に入った甲斐があるってもんだ！」

とまあ、こんなやつだ。

「そんなんじゃないつまでたつても彼女できないよー？」

「その通りだぞ、勇介」

「お前らに言われたつて説得力ねえよ」

それもそうだ。オレ達はよく三人で遊んでいたからな。趣味もテレビゲームとよく合い、休みの日なんかは誰かの家に集まってよくゲームしてたな。恋愛なんて縁がなかった。オレは少しだけ……な。

高校も仲良く一緒。これから先、こんな感じで登校していくんだろつ。

「楽しみだなあ、誠二。もしクラスが別れたらかわいい子の報告頼むぞ」

「知らねえよ」

初日つからそんな余裕があるなんてなんと羨ましい。

「ねえ誠二。部活なんだけど……」

「ああ、わかってるつて」

「うん、多分見学とかあるだろうつから一緒に行こうね」

中学までは陸上部に入っていた。こんなオレでも一応エースだったんだ。だけど高校では吹奏楽部に入ろうと思っている。中学の時の陸上があまりにきつすぎて今回は文化部にしようと思っているんだ。幸い、美香が中学でトランペットをやっていてお誘いを受けたかたちだ。

「勇介は？」

「さあ。とりあえずはお前らについていくさ」

こいつは中学ではなにもやっていなかった。今回は特別な理由がない限り、必ずどれかの部に入部しないといけないらしい。

通学路、そんな話しをしながら柳ヶ浦高校への道を歩いてきた。

柳ヶ浦高校への最後の上り坂、桜並木がオレ達を迎えるように花びらを散らせていた。

・・・なんてこった。

「せ、誠二、落ち込まないで」

「短い付き合いだったな」

「はあ・・・」

なんでだよ、神様。

当然のようにオレは三人同じクラスだと思っていた。なにをそう思い込んでいたんだろう、美香と勇介は同じクラスでオレだけ別のクラス。だれだよ、クラス割決めたやつは。

入学式が終わった後一緒に帰る約束をして教室へ。

オレは一年一組、美香と勇介は二年二組だ。

教室に入ると何人が知った顔もあつた。早く来たつもりだったんだけどな。

「おはよう。誠二くん。一年間よろしくね」

「お、渉。おはよ、よろしくな」

こいつは森田もりた渉わたる。

小学校からの同級生で特に仲が良かった内の一人だ。女のようなきれいな顔をしていて身長もそんなに高くない。根っからのゲームでよく攻略方法などお世話になっていた。

成績優秀で昔っからテストの時も助けられていたんだ。

「はい、みんな席についてー！出席番号順に名札を置いてるからその通りに座ってねー！」

どうやら担任の先生が来たみたいだ。

女の先生。スーツを身にまとい肩くらいまでのストレートヘアをなびかせている。

クラスメート達はそれぞれ自分の席を確認して席に着いた。

「みんなおはよう！まずは入学おめでとう。先生の自己紹介は入学式のあと、LHRでやるからね。みんなもその時に。まもなく入学式が始まるから体育館へ移動します」

それからクラスごと順番に体育館へ移動した。

入学式はこれといって特別なことはなく滞りなく終了した。みんなやっぱりそわそわしていた感じだった。

そして教室へ戻りLHR。自己紹介だ。

それぞれ出身中学や趣味や自分の性格なんか話してたな。

オレが話した内容もそんな感じだった。

担任の先生は本田奈美^{ほんたなみ}。28歳。なんていうか・・・エロいね。フレンドリーな感じの先生だ。男子からは人気が出そう。

「今日はここまでね。明日からは普通に授業が始まるから準備を忘れないようにねー！それと明日の午後からは部活動紹介があるからそのつもりで！それじゃあ解散ー！」

こんなもんか。

緊張して損したかのようにあっさりとした初日だったな。

そしてその帰り道。

「誠二、どうだったよ？クラスは」

美香と勇介と三人で帰っている。

「どうって・・・別に普通だったけど。知ってるやつも何人かいたし」

「そんなことを聞いてるんじゃない。かわいい子はいたかってことだよ！」

ああそうか。勇介の頭のなかはそれしかなかったな。

「さあな、よく見てないから」

「はあ・・・、つまんねえな。こっちは美香がやつぱ一番だったな」

「あら、ありがと」

まあ、そうかもな。それくらい美香はかわいいから。

「誠二も同じクラスならよかったのにな」

美香が寂しそうに言った。

オレも心底そう思う。オレに話しを振ってくれたらいいんだけど、さっきから二人はクラスの話しで盛り上がったた。

ちくしょー。なんだこの敗北感。

でも、美香は自分が寂しいって言うよりオレの心配をしてるみたいだった。こいつは昔っから優しいやつだったもんな。

それからいろいろと話しながら家にたどり着いた。

「ただいまー」

玄関を開けてまずはリビングへ。

「あら、おかえり。どうだった？かわいい子いた？」

この人の本当の息子は勇介なんじゃないか？

自分がこの人の息子だって疑いたくなるくらいに母さんは勇介とシンクロしている。

「知らない。見てない。聞いてない」

知らない三段活用を駆使して答える。

「知りなさい。見なさい。話しなさい」

反撃か。

母さんには口では敵わないからな。

「父さんは？」

「あそこで起きてるか寝てるかわからない感じで新聞読んでるか夢を見てるわ」

ソファーに父さんらしき人物が座っている。

「ただいま。父さん」

「・・・」

返事はない。ただの父さんの形をした置物のようだ。

そのまま父さんはスルーして自分の部屋に入り、少しだけ気疲れした体でベッドに倒れ込んだ。

使い慣れたベッドがいつもよりも気持ち良く感じてこのまま寝てしまいたいになる。

「高校生・・・か」

その響きに少しの嬉しさとプレッシャーを感じて明日の準備を始めた。

新しい教科書を鞆に詰め込み、まだ固い革の鞆を机の上に置いた。

「ご飯食べてしまいなさーい！」

母さんの声に急かされて一階へと下りる。

明日からは本格的な高校生活が始まるんだ。

期待と不安に胸を膨らませ、夕食の食卓に着いた。

部活動紹介

「おはよう、誠二」

「おはよ、美香」

「おーっす」

これが当たり前になりそうな三人での登校だ。オレ、美香、勇介。二人は今日の授業のことを話しながら歩いている。オレだけのけものにされている気分だ。

「今日誠二のこの授業は？」

「おお！神よ感謝します！」

この哀れな子羊に一筋の光を与えてたもつた！

「今日は現国、数？、科学、体育だよ」

今日のオレのクラスの時間割りはこう。勉強自体は苦手だ。この中では体育が一番得意。球技とかじゃなかったらな。

「ふーん、さあ、誠二は高校の授業についていけるのかな？」

美香は意地悪そうに言う。オレが勉強出来ないこと知ってるからな。

美香は多分、オレのことを一番良く知っている友達だ。勇介には相談しにくいことだって美香には相談出来たし。

「クラスに涉がいるから大丈夫さ」

「まーた、人に頼って。自分の身になんないよ？」
なるようになれ、だ。

それから学校に着いてそれぞれのクラスに分かれた。

朝のSHRが終わってさっそく一時限目の授業だ。

現国の担当は担任の本田奈美先生。何人かのクラスメートはすでに「奈美先生」と親しげに呼んでいた。

最初の授業は「先生への質問コーナー！」なんてノリでやってた。みんな次から次に質問を浴びせていたんだ。オレは何にも質問しなかったけど。でも、楽しかった。

後の授業は大体が先生の自己紹介と教科書なんかの確認で終わった。

体育は鬼ごっこだった。オレの得意分野だな。

女子は必至に逃げていたよ。そりゃあもう鬼という男子から逃げるために必死だったさ。オレは元陸上部の意地で一度もつかまることはなかった。

いい具合に体を動かして昼食だ。この学校には学食なんてものはない。弁当か購買のパンだ。オレの今日の昼食はパン。

昼休みは涉とゲームの話をして過ごしていた。校舎の中を少し歩き周りたかったけど、ゲームのこととなると涉はマシンガントークになるんだ。

そして昼休みも終わり、午後の時限に入る。

予定通りに体育館での部活動紹介。

全校生徒が体育館に集まり、それぞれの部活の部長が紹介しているらしい。

『えー、それではただいまより部活動紹介を始めます。本校は特別な理由がない限り、必ずどれかの部に所属してもらうこととなります。尚、本日より一週間、新入生は部活動の見学期間となりますので、その間によく考えて入部届けを提出してください』

決定まで一週間あるのか……。

一応美香には吹奏楽部に入るって言うてはみたものの、実際にそんな興味があるわけでもないしな。

うーん……良く聞いておこう。

そしてまず運動部の方から紹介されていった。

運動部は……入るとしたらやっぱり陸上部しかない、かな。

そして文化部。

吹奏楽部はもちろん聞いていたけれど、パソコン部というものがあつた。

中学の時はなかったな……。

何だろう、ネットゲーとかするならやってみたいかな。

良く説明を聞いているとゲームはゲームなんだけど自作ゲームとかプログラムとかそういうのをやるらしい。オレは聞いているだけで頭が痛くなっていた。

多分、渉はここにするんだろうな。

そしてオレは。

……美香には悪いけど、やっぱり陸上やってみようかなと思った。せつかく中学三年間やってきたんだし。

だけどその時に、オレが「吹奏楽部に入るよ」って美香に言った時の美香の顔がよぎった。

すぐくつれしそうだったんだよな。

そんなことがあつた手前、やっぱりやめるなんて言いづらい……。

見るだけ！

見学するだけならいいよな！

少し見てから吹奏楽部を見学しよう！それでやっぱりきつかったイメージが甦るならやめよう。

よし、それでいこう！

『それではこれで部活動紹介を終わります。各自教室へと戻ってください』

ん、もう終わりか。

いろいろ考えてたらあつという間だったな。

そして教室へ戻り放課後。

オレはさっそくパソコン部へ行こうとしていた渉を呼び止めた。

「なあ、渉」

「何？誠二くん」
「ちよつくらお願いがあるんだけど・・・」
「何？トイレなら一人で行ってよね」
「そんな子供じゃねえ！・・・って場合じゃなくてさ、陸上部の見学に付き合ってくれない？」
「こんなことを頼むのにはちゃんと理由がある。」
「えー・・・」
「なんとか頼むよ。渉にも付き合うからさ」
「うーん・・・まあ、ちゃんと付き合うなら・・・、パソコン部だよ？」
「わかつてるって。それでもう一つ頼みがあるんだ」
「何？」
「ここからが本題。」
「もし美香に会ったらさ、渉が陸上部を見学したいからってことにして欲しいんだよ」
「えーっ！イヤだよ！だいたい僕陸上なんて興味ないし、正直に言えばいいじゃん」
「いやあ、美香に吹奏楽部に入るって言ったらすごく喜んでさ。いまさら言えないっていうかなんていうか・・・」
「なにそれ、意味わかんないし」
「まーまーまー、さっさと見に行つて渉のパソコン部に行こうぜ！」
そして強引に渉を連れて教室を出ようとする。
「あ、誠二。吹奏楽部、見学しに行こー！」
「・・・やっぱこうなるよなあ。」
「悪い、美香。渉が陸上部見たいって言うからさ、ちよつと付き合ってくるよ」
「えっ！涉くんが陸上！？ほ、ホントに？涉くん」
オレは渉にチラッと目線を送る。
「う、うん。ちよつと違うことやってみようかなーって・・・」
「ふーん・・・なんか挙動不審ね、二人とも」

うっ、さすがに鋭い。

疑いたつぷりの目だ。

「ほ、ほら、オレって陸上やってたからさ、渉に説明出来るだろ？だからさ、なっ、渉」

そこでこっちに振るなっっていう顔をしないでくれ！渉！

「う、うん。まだ頼れるのって誠二くんだけだから」

よし、さすがは頼れる渉くんだ。

「まあ・・・いいか。じゃあ明日は行こうね、誠二」
「おう」

「ごめんね、美香ちゃん。誠二くん借りちゃって」

「えっ！べ、別に誠二は私のものじゃないんだし。ぜ、全然いいよ、気にしないで！じゃあ私は吹奏楽部行くから！」

美香はなんか慌てて行ってしまった。

「・・・誠二くん」
ん？

「絶対に吹奏楽部がいいと思うよ、美香ちゃんいるし」
な、なんだ？なんか怖いぞ、渉。

「美香ちゃんいるし！」

「わ、わかってるって。明日はちゃんと行くよ。ほら、早く行こうぜ」

なんなんだ、いったい。

責められている感覚があったのでさっさと見に行くことに。

グラウンドに出てみるとそれぞれの運動部が新入生をつかまえて話しをしている姿が目止まった。とりあえず見学だけ。

渉がかたくなに近寄ることを拒むものだから遠くから練習風景を眺めた。

陸上の内容的なものは中学にやっていたこととそう変わりはない。わかってたんだけど、雰囲気っていうのも大事だろ？見るものも見て渉が望むパソコン部へ。

とりあえずパソコンの前に座らせられたものの言ってることがさっぱりだった。

渉はさっそくなじんでいたけどな。渉はここで決定だね。

唯一惹かれたのは暑い夏場にはエアコンも使うということだった。この高校でエアコンが設置されているのはパソコン室のみ。部活の時は公認で使っていていいそうなんだ。

このエアコンオプションはかなりの魅力だった。

ただまあ、さっきも言った通り雰囲気合わなかなって感じてパス。

ゲームならまだしもパソコン画面とにらめっこし続けるなんてオレには無理だ。

渉はこのまま部活時間内残るって言ったからオレだけ早めに退散した。

美香と勇介は吹奏楽部だろうし、このまま帰るか。

今から一人で行くのも行きにくいしな。

オレは一人校門に向かっていた。そろそろ校門を出る。

美香には一言先に帰るとメールしておいた。すると。

「誠二ー！」

美香と勇介が走ってやってきた。

メールを打ってから時間を考えると急いで来たみたいだな。

「吹奏楽部は？」

「とりあえず今日は帰ってきたよ」

一人で帰るオレに気を使ったかな？

「誠二！オレは吹奏楽部に決めたぞ！」

勇介がにこやかにそう言い放った。

こいつがこうもあっさり決めるなんて……。

「いいとこだ！吹奏楽部は！あそこにはオレの求めるものがある！」
それは聞かなくてもなんとなくわかるな。

「かわいい子がいたのか？」

「何人かチエツクはしておいた」

「はあ……お前は……」

「いいじゃん、これで三人同じ部活なんだしさ」

嬉しそうに言う美香のその言葉がグサツと突き刺さる。

「ま、まあそうだな」

悩んでることなんて言えそうにないな、やっぱり。

「……誠二さ、ホントは陸上やりたいんじゃないの？」

「……」

わかるもんなんだな。幼馴染つてのはすごいな。

「別に私が誘ったからって、気にしなくていいんだよ。無理強いはできないし」

「……ごめん。でも、明日はちゃんと吹奏楽部に行くからさ。そ

れから、かな」

「うん！」

こりゃあ、明日は絶対行かないとな。

それから途中で寄り道をして家に帰った。

部活が始まったらこんな時間もなくなるのか、それが少し寂しい。

何言ってるんだかね。

まだ高校生活始まったばかりかだつてのに。

吹奏楽部

「誠二」

放課後、美香がにんまりと笑ってオレの教室へやってきた。

目的はそう、オレを吹奏楽部の見学に連れて行くこと。

まだこっちはSHRが終わったばかり。帰りの身支度も出来ちゃいない。

「まだ？早く行こうよ」

「そんなに焦らなくても逃げはしないって。ちょっと待ってるよ」

急いで準備を済ませてしまう。

実はあんまり乗り気じゃないんだよな。

音楽は良く聞けどJ・POPばかりだし、楽器なんてやったことないしな。

リコーダーくらいかな。あとは口笛。

ああ、そう。

某有名ゲームの太鼓を叩くゲームなら得意だけどな。

「よし、いいぞ」

勇介は先に行っているみたいだった。

女子のこととなると一生懸命なんだよな、あいつ。

それから吹奏楽部の練習場に足を向ける。

美香の話しによると吹奏楽部の練習場は校舎の中でもはずれの方にあるらしい。

屋外から直接行くことも出来るみたいだ。

廊下を歩き、練習場に近づくにつれて楽器の音が聞こえてくる。

楽器のことなんてまるでわからないからどの音がどんな楽器なのかも想像出来なかった。

ちなみに美香はトランペットを中学からやっている。

美香の家の前を通るとたまにその音色が聞こえてきていた。うま

いか下手かなんてわからないけど。

そしてしばらく歩くと、教室がある校舎とはまた違う雰囲気
の校舎が見えた。

一応本校舎とつながってはいるものの用事がなければ誰も近寄
らないだろう。

コンクリートで出来ている本校舎とは違い大半が木製だ。

まるで吹奏楽部のためだけにあるようなもの。そんな感じだっ
た。

「もうすぐそこだよ」

美香が足を弾ませて言う。

相当吹奏楽部がお気に入りのようにだった。

楽器の音も、よりはっきり聞こえている。

練習場への道は一枚のドアをはさんである。

そのドアを開けると、まずは通路。そして十段もない階段を上
った先に建物が見える。

そこが吹奏楽部の練習場だった。

校舎からは完全に切り離された建物で、一つの古い小屋のよう
な感じだった。

通路を抜けて練習場に向かう途中、先輩たちだろう、それぞれ
が楽器を持って音を出していた。

メロディーじゃない、多分練習をしているんだろうな。

「どう？吹奏楽部。なんか特別って感じじゃない？」

美香がそう言うのは、多分この校舎から離れた空間だからなん
だろう。

オレの第一印象は、まず一つ、男子がいないってことだ。

目に見える範囲にはいない。部員の数もけっこう多いみたいだ
けど女子ばかりだ。

なるほど。

勇介が即決めるはずだ。

「あー！川口さん！今日も来たんだ！」

オレがきよろきよろ周りを見てみると誰かが美香に話しかけてき

た。

「村田部長、こんにちは！今日は友達を連れて来ました！」

美香がそう言っただけの方に手を向けた。

どうやらこの村田って人が吹奏楽部の部長らしい。

黒髪のポニーテールで目元のほくろが大人っぽく見えた。

「こんにちは！えーっと……」

「初めまして、椿誠二です」

「椿くんだね！初めまして。私は村田千秋むらたちあき！一応部長だよ！よろしくね」

人当たりが良さそうな先輩だ。

それなりにかわいいし。

「椿くんは何か楽器の経験あるの？」

「いえ……あつ、太鼓の鉄人なら得意です」

「太鼓……あつははは！椿くんおもしろいね！今日は一曲演奏するから聞いていってね、じゃ」

そして村田部長は練習場の中に消えていった。

「もうっ、誠二ったら恥ずかしいよ」

だって、ホントのことだし。

そんなことを話しているときだった。

くく

いろんな音が入り混じる中、ひときわ耳に残る音色があった。

なんだろう、この音……。

なんだか引き込まれるようだ。

誰が……。

「美香、あの人は？」

オレはその耳に残る音源を見つけ、指を差して美香に尋ねた。

「ああ、あのフルートの子？どうかしたの？」

「いや、なんか聞いてて周りの人と違うなって……」

あれがフルート……か。

「あんまり詳しくない誠二にもわかるんだ……。すごいな。あの子は

特別。両親が有名な奏者なんだ。でも、確か誠二と同じクラスだったと思うけど？」

なんですと!？」

……よく見れば確かに……いた。

自己紹介の時にはあんまり話さなかった子だ。

確か名前は相田恵^{あいためぐみ}。

ふーん、あの子も吹奏楽部なんだ……。

「おっ、今日も何人か来てるわねー。みんなー!集合ー!」

その時、担任の本田先生がやってきた。

なんと、吹奏楽部の顧問らしい。

「誠二のこの担任でしょ? やりやすいんじゃないの?」

美香が言う。そうだな、やりやすいっちゃやりやすいけど面倒事も多そうだ……。

程なくして部員が練習場へと集まってきた。

人数は……結構多い。

やっぱり大半は女子生徒。男子は数えられる程度しかない。

現部員は所定の持ち場だろうか、段があつてその上に置いてある椅子に座つていった。

オレ達新入生はその後ろの席に座らされた。

「さ、みんな、今日も新入生の子たちが見学に来てるからいい演奏お願いね」

その本田先生の言葉に対して部員が元気よく返事をすると、本田先生の指揮棒? が上げられた。

そして部員の人たちが順番に音を出していった。

「チューニングっていうんだよ。音程を合わせるの」

美香がその行動の説明をしてくれる。

そう言われても何のことかわからないんだけどさ。

全員のチューニングというものが終わり、本田先生の指揮棒が再び振り上げられた。

それと同時にみんなが楽器を構える。

そして。

指揮棒が振り下ろされた。

演奏が始まったんだ。

静かに曲が奏でられていく。

オレは少しだけドキドキしていた。

こんな間近で聞いたことなかったから。

素直な感想は、すごいと思った。

なんていうか、みんなが一体になって一つの曲を作り上げていく。

それがすごいと思った。

うまくひとつひとつの楽器が組み合わさって絶妙に奏でられる音楽。

にわかに感動してしまった。

きつと、こんなふうになんたと一つになって演奏出来たら気持ちいいんだろうな。

みんなが演奏している光景を見て、一瞬、その中で演奏している自分の姿を想像してしまった。

悪くないな。

この音楽だつて嫌いじゃない。

むしろもつと聞きたいと思った。

なぜ？

生で聞いたから？

とにかく、オレはこの音楽に引き込まれていた。

それに…。

あの相田さんのフルートの音。

もう一度聞いてみたいと思ったんだ。

だから…。

「美香…：やってみようかな…：吹奏楽」

「ホント！？よかったあ」

そうやって満面の笑みを見せる美香。

その時オレは、なぜか少しばかりの罪悪感を感じてしまったんだ。

それがなんなのかわからなかった。

ただ、吹奏楽部に誘ってくれた美香に少しだけ心の中で感謝していた。

新しい自分に気がついた、そんな気がしたから。

それから少しの間演奏に耳を傾けていたら演奏が終わった。

周りで聞いていた新入生から、オレも含めて拍手が巻き起こる。

「新入生のみんな、どうだったかしら？少しでも興味が沸いたならこの後も楽器別に分かれて練習するから、それも見て行ってね」

本田先生がそう言って部員のみんなは散っていった。

周りで見学していた新入生は興味がなさそうに帰る人もいれば、さっそく楽器を持たされている人もいた。

「椿くん」

え？

「あ、どうも、村田部長」

「どうだった？興味沸いた？」

「あっ、はい。なんていうか…かっこよかったです」

「クスツ…そっか。ね、どうかな？吹奏楽やってみたいと思わない？」

どうやら勧誘されてるみたいだな。

「はい、やってみたいと思いました」

「うんうん、そっかぁ！正式な入部にはまだ一週間くらいあるけどさ、毎日来ていいからね」

うれしそうに話している。

部長として新入部員が入るっていうのはうれしいんだろうなあ。

でも、まだこう、一歩踏み出せないっていうか…。

入部はしようと思うけど、顔を出すのは正式入部の時からでいいかな…。

「今日は帰りますね、入部はしようと思ってますから」

「うん！わかったよ！男子が入ってくれたら助かるなあ」

そんなことを言いながら部長は別の新入生のところへ向かってい

た。

「誠二、帰るの？」

「おう。美香は気にしないで残ってていいからな」

「ううん、私も帰るよ。誠二が入部してくれるみたいで安心したし、それと帰ることは関係ないと思うけど…。」

「まあ、それなら帰るか。勇介は？」

「いいと思うよ、楽しんでるみたいだし」

そう言っつて美香が指差した先には、先輩たちと楽しそうに話している勇介の姿があった。

「だな」

いつ勇介が変態扱いされるようになるのか楽しみに思い練習場を後にした。

帰り道では、美香と吹奏楽部のことについて話していた。

入部

吹奏楽部へ見学に行った日から六日が経ち、今日は正式入部の日。あれから結局一度も顔を出さなかった。

でも、吹奏楽部への入部は変わりなし、今日からは通うつもりだ。それに伴ってちょっと考えていることがあるんだ。

それは同じクラスの相田恵さんのこと。

美香からの話しだと吹奏楽部の新入部員で、オレのクラスはオレと相田さんだけみたいなんだ。

そこでせっかく同じクラスで同じ部活なんだから少しでも話しておこうかなって…。

実は、話そうと思ったのは今日が初めてじゃない。

今まで何度か話しかけようとしたんだけど、なかなか声を掛けることが出来なかった。

相田さんは教室にいるときはいつも一人で本を読んでいるか音楽を聞いている。

そしていつも無表情で人を近寄らせないようなオーラを出しているんだ。

見た目はすごくかわいい。

茶色がかった背中の中ほどまであるストレートで小柄。

顔のパーツは均等に整っている。見ただけでは誰もが美少女と言っただろう。

でも相田さんはその無表情さから、まるで人形みたいだったんだ。入学して一週間経つけど人と話すのをあんまり見たことがない。

そんな相田さんと会話すべく、オレのちっちゃな勇気を振り絞ろうとしてる今なんだ。

さあーで、今日こそは！

オレは気合いを入れて相田さんの席に向かって行った。

「あ、相田さん、おはよう」

「えっ…、あ、おはようございます。えーっと…た…さきくん？」
おっとー、そうきたか。

まあオレも練習場では相田さんのことわからなかったし、おあいこつてことで。

それにしてもかわいい声だな。って声すらまともに聞いたことなかったな。

「っ、椿だよ。相田さん」

「あ、ああ、椿くんでしたね。何か？」

「あのさ、オレこの前吹奏楽部見学しに行ってたんだけど、わからない？」

「いつですか？私は毎日行っているの…」

ん…絡み辛い。敬語だし。相変わらずの無表情。

「あ、いや、いいんだ。相田さん、吹奏楽部入るんだよね？」

「はい、それがなにか？」

「あ、いや、このクラスでオレと相田さんだけみたいだからさ」

「…それがどうかしましたか？」

「い、いや、これからよろしくね！」

「はい、よろしく願います」

つと、ここでオレは退散した。

決して空気に耐え切れなくなったわけじゃないよ！

ほら、いきなりなれなれしく話すのもひかれるしさ。

うん、でもこれで覚えてもらったはずだ。

……いやいや、覚えてもらうことが目的じゃないだろ。

昼休みだ、昼休みにはまた時間がある。

そう思って迎えた昼休み。

いつものように涉と弁当を食べ終えたオレは、また相田さんの席に向かつていった。

相田さんはいつも昼休みになると教室を出て行くが、運良く今日

は教室で昼食を済ませていた。

そして、見るとちょうど食べ終わったみたいだった。

「相田さん」

「え、あ、今朝の……」

吹奏楽の話題だ。それで責めるんだ。

「相田さんはフルートなんだ」

「めぐー……！」

くっ！やっと会話が成り立ちそうなところで誰だ！

一人の女子がバタバタと慌ただしく教室に入ってきてこちらに向かってきた。

元気がよさそうな、ショートボブの髪を跳ねあがらせている。

相田さんの友達か？全然タイプが違うようだけど。

「あ、紗耶香ちゃん」

相田さんが紗耶香と呼んだその子が目の前に立った。

「めぐ、ご飯食べた？」

「うん、今食べたとこだよ」

「ん？その人は？」

紗耶香という人はオレを見て疑問符を浮かべた。

「えっと……、たさ……椿くん。クラスメートで吹奏楽部」

また田崎って言おうとしたな。文字数と「き」しか合っていないの

に。あれか？天然ってやつか？

「えーっ、こんな人部室にいたっけ？」

ん？ということは。

「正式な入部は今日からだよ、紗耶香ちゃん」

「あ、そっか。じゃあ初めまして、椿くん。私は三組の春日かすがさやか紗耶香、

めぐの親友よ！」

自分で親友って言ったな。

「あ、オレは椿誠二。よろしく」

「よろしく、椿くん、部活のパートは？」

「パート？」

パート…なんだ？なにかの分別には間違いなさそうだけど。

「あー、楽器のことだよ。ちなみに私はパーカツ！」

「パーカツ？」

知らない言葉がどんどん出てくる。

「打楽器のことだよ。ドラムとか小太鼓とかシロ……木琴とか鉄琴とかトライアングルとか」

小太鼓！それならオレにも出来るかも！太鼓の鉄人の技術が生かせるんじゃないか？

ん…待て待て、オレは相田さんと話そうとしてるんだった。

「相田さんはフルートなんだよね？」

「めぐはフルートすごくうまいんだから！」

う、うーん……。

「相田さん、い、いつからフルートやってたの？」

「中学の時にはもうすごくうまかった！」

オレの言葉が春日さんに吸収されていく……。

「あ、紗耶香ちゃん、私、職員室に用事あるんだった」

「そうなんだ。わかったよー、また部活でねー」

そう言っただけで相田さんはそそくさで行ってしまった。

結局話せなかった。春日さんが間に入ってたさ。

「えーっと、椿くんだったよね」

ん、なんか攻撃的な感じ……。

「うん、なに？」

「めぐに手出したら絶対許さないからね」

………おう？

「なぜそういう話になる？」

「めぐはあの通り純粋なの！変な男には近寄らせないんだから！」

…オレの中でこいつは要注意人物確定だな。

それにしてもオレのことを変な男扱いとは…。勇介じゃねえつつの。

「そういつつもりじゃないよ。ただ、クラスで吹奏楽部はオレと相

田さんだけだから話とこうって思ったただけだ」

「ふーん、どうだか……」

警戒されてるな。

「でも……」

「ん？」

「オレって…変な男に見えるのかな？」

少し涙目を見せる。

「えっ、あ、あの、言葉のアヤでさ。そ、そうだ！めぐったらあんな感じだしさ、よかつたら話し相手になってあげてよ」

「そんなことなら任せとけ」

ククク……男の涙には案外弱いものよ。

「う、うーん……じゃあね」

納得いってないみたいだったけど春日さんは自分の教室に戻って行った。

目的の相田さんは昼休みが終わるギリギリに戻って来て、話す時間はないかった。

そして午後の授業の授業も終わり放課後。

S H R が終わると美香と勇介が教室へ迎えに来た。

迎えに来てくれるのは案外助かる。一人で部活に行くのはまだ心細いからな。

まだ二回目だけど練習場への道はもう覚えた。一本道だから迷うことなんてないけれど。

練習場へ着くと、この前来た時と同じ席に座った。

部員のほとんどはもう来ていて、中はがやがやと騒がしかった。

新入部員の中には相田さんと今日話した春日さんの姿もあった。

二人は仲良さそう？に話している。相田さんは相変わらず無表情だからよくわからない。話しは弾んでいるようだっただけ。

それからしばらく美香と勇介と話していると奈美先生がやってきた。まだ本人の前では「本田先生」って呼んでるんだけどね。周り

のみんなに便乗してオレもそう呼んでるんだ。

「はい！みんな静かに！……………コホンツ……………えー、新入部員の諸君、ようこそ吹奏楽部へ！まずは自己紹介しちゃいませよ！」

それからまずは村田部長から自己紹介をしていった。

自分の学年とパートの楽器と名前。

オレ達新入部員は名前だけ。

吹奏楽部員は全員で六十一人。

三年が十六人、二年が多くて三十人、一年が残りの十五人だ。

その内男子はたった五人。三年に三人とオレと勇介だけだった。

二年は全員女子。勇介にとってはまさに天国ってわけだな。

「みんな自己紹介終わったわね。それじゃ、夏まではこの人数でいくことになるわ。改めてよろしくね」

夏まで？

「なあ、美香」

「夏にね、吹奏楽コンクールがあるの。三年生は受験とかあるからその時まで、だからだよ」

さすが美香。何も言わなくても答えてくれる。

「新入部員の楽器のパートは経験者、未経験者別にこっちで分けてあるけど希望があれば後で言っつてね。この後はそれぞれのパートに分かれてお互いにまた自己紹介とかしてもらおうから。それじゃあ、パートを発表していくわね」

経験者はその楽器か。まあ当たり前だな。

「まず経験者の人から。相田さん、フルート。春日さん、パーカッション。川口さん、トランペット。椿くん、パーカッション」

……………今、オレの名前言ったか？

い、いや、聞き間違いだよな。経験者なんてそんなこと一言も言っつてないし。

パーカッションはいい。その楽器がいいなって思っつてたから。

経験者っつてなに？

経験者っつてずばりパーカッションをやっつてたっつてことだよな。

いやいやいやいや、やってないし！

どこからその間違った情報が流れたんだ？

……………まさか、部長？

経験者って太鼓の鉄人のことじゃないだろうな。

「以上がパートの振り分けよ。じゃあ後はパートリーダーの人に任せるわね」

えっ！いつの間に…………。

「じゃ、誠二。部活終わったらまたね」

「あつ、ああ」

美香すら経験者ってどこに突っ込まないのかよ。

それにパートリーダー？パートリーダーって誰？

「椿くん！椿誠二くん！こっちだよー！」

ん？あの人かな？

一人手招きしてオレを呼んでいる人がいた。

その人の周りには春日さんが言っていたドラムや木琴、鉄琴なんかその他にも小さいものから大きいものまでところ狭しと楽器が並べられていた。

そこには春日さんも立っていた。

オレも足を進める。

「じゃ、自己紹介しちゃおっか。改めまして、私はパートリーダーの田口理恵たくちりえ、二年生だよ。よろしくね。みんなからは下の名前で呼ばれてるからそっちで呼んでね」

手招きしていた人だ。

理恵先輩って呼べばいいのかな。理恵先輩は春日さんと似ているショートボブで身長も高くナイスバディだ。

「わたしは〽新居理沙あらいりさだよ〽。アリサって〽呼んで〽」

アリサ先輩…でいいのか？

おっとりした話し方だ。長めのツインテールをなびかせている。

理恵先輩もアリサ先輩も美人だ。

っていうかこの部は女子のレベルが高いよな。

今年のパーカッションは四人でこの二人の先輩とオレと春日さんだ。

「春日紗耶香です。よろしくお願ひします」

「よろしくね、紗耶香ちゃん」

「よろしく〜さやや〜」

あ、あだ名ついた。

「椿誠二です。よろしくお願ひします」

「誠二くん、よろしく」

理恵先輩は誰でも名前で呼ぶんだな。

「よろしく〜つじく〜ん」

ん？辻？津路？ツジ？オレのこと？

「椿ですけど？」

「あたまと〜おしりで〜つじく〜ん」

紛らわしい！まるつきり違う人じゃんか！

「出来れば他の呼び方がいいんですけど……」

「う〜〜ん、思いつかないから〜思いつくまで〜きみは〜つ〜じ〜」

「

ま、まあいいか。

「ところで、部長から誠二くんも経験者って聞いているけど前は何を担当してたの？紗耶香ちゃんは来てくれたから鍵盤って聞いているけど」

「私もびっくりした。教室で話した時にはとてもそうは思えなかったけど」

部長……やはり部長か。となればやっぱり……。

「太鼓です……」

「え？ああ、スネアドラム？」

「太鼓の鉄人です……」

「

「

「

くっ、長い！長いぞ沈黙が！

「じゃ、じゃリズム感はバツチリだね！」

…ありがとう理恵先輩。オレはこの人を尊敬しよう。

部長め、後で会ったら何か言ってる。

「部長くいたずら好きくだから」

いやしかし、みんなに経験者として認識されたのは問題だぞ。

「やっぱそうよね、何も知らなかったし」

春日さん、君の見解は間違いじゃなかった。

「とりあえずみんなで基礎練習でもやるっか」

理恵先輩がパートリーダーらしく練習を提案する。

パーカッションの基礎練習は主にゴム盤みたいなやつのリズム打ちだった。

まずはドラムスティックの持ち方から教えてもらう。鉄人のバチの持ち方とは違うんだな。

軽く握って人差し指を上添えるように持つ。そんなに違和感はなかった。

そして楽譜を見ながらメトロノームに合わせてゴム盤を叩いていく。

楽譜は音階がないから音符の長ささえわかれば大丈夫だった。それくらいは音楽の授業で身についていた。

四分音符、八分音符、三連符、十六分音符の順番で打ち、その繰り返し返し。

「さすがリズム感はバツチリ」

アリサ先輩が意地悪そうに笑って言う。

フツ、太鼓の鉄人で大達人まで上り詰めた腕を舐めてもらっちゃあ困る。

そこでオレは得意げな顔をしていると…。

「じゃあこんなのは出来る？」

春日さんが楽譜のページをめくり別のリズムを打ち始めた。

アクセントというらしい、「>」がついている音符だけ強く打つ。

それが変則的についでいた。

それくらい…とやってみるもの。

「うぬぬ…」

右手と左手がバラツバラだ。リズムすらまともに取れてない。

「フフツ、これは？」

今度はロールというのをやって見せた。

手品なんかのクライマックスでダララララ〜と連続で太鼓を叩いているあれだ。

ひたすら早く打つんじゃなくて柔らかく手首を使っている。片方の手で連続で叩いてそれを両手で繰り返している。繊細だ…。

「うおっ！」

思わず驚いてしまった。見ただけで出来そうにない。

なんてこった…。

オレなんかまだまだ見習いの腕前だったんだ…。

「練習もこれだけじゃないからね。ここに置いてある楽器は全部パーカッションだから」

これ全部…。

少なくとも十種類は置いてある。それぞれに練習が必要ってわけか？

先が思いやられるな…。

もちろん簡単に出来るなんて思っではいなかったけど。

「誠二くん、大丈夫だよ。誠二くんがリズム感バツチリっていうのはホントだし。それだけ上達だつて早いと思うよ！」

理恵先輩がオレを気使つてか、励ましの言葉をかけてくれた。

そうだよな、せっかく入部したんだし、しっかり頑張らないとな。まだ何にも始まつちやいなんだし。

「誠二、唇が痛えよ〜」

しばらく基礎練習をしていると勇介が涙目でやってきた。

勇介のパートはトランペット。美香と同じだ。

「なんだその唇？」

勇介の唇は腫れて真っ赤に膨れ上がっていた。
聞くところによると唇を震わせて音を出すらしい。

「あ、変態が来た」

そう言ったのは春日さん。すでに勇介を変態扱いだ。なかなか人を見る目がありそうだな。

「その唇どうにかしないと変態密度が増していくぞ？」

「みんなオレの努力なんてわかつちやくれないんだー!!」

そう泣きながら勇介は逃げて行った。

誰も勇介を見ようとはしていなかったな。

それから部活の終わりまでひたすら基礎練習をしていた。

悔しかったし、オレ以外経験者だ。早く追いつきたかった。

でも、同じ練習してたってこのままなんだ。

「これ、持って帰っていいですか？」

そう、家に帰ってから練習だ！

新しいことは楽しかった。単純で地味な練習だったけれど。

だからこそ出来ない自分が悔しかったのもあるかもな。

「いいけど忘れずに持ってきてね」

みんなと一緒に演奏したいなって思ったから入部したんだ。あの

一体感に混じりたかったから。

早くうまくなって一緒に出来るようになりたい。

部活の終わりには特別なミーティングなんかはなかった。終わりの時間を迎えるとそれぞれが楽器を片づけて下校する。

楽器を片づける場所は練習場とは別に部室があった。

木造校舎の一室を使っていた。パーカッションは別として他のパ

ートはそこに楽器を片づけていた。

「誠一、帰ろうー！」

美香が呼びにやってきた。

こっちもちょうど終わったところ。

勇介は買い物とかで先に帰ったみたいだ。唇に塗る薬でも買いに行っただか？

「あっ！」

そのまま校門まで歩いてきたところでオレは大事なことに気がついてしまったんだ。

「どうしたの？」

「わりっ、基礎練の道具忘れちゃった。先に帰ってていいからさ」

「あっ、ちよっと……」

どうしたもんか、あれだけ練習しようと思っていたのに基礎練習の道具を部屋に忘れて来てしまった。

呼びとめようとした美香を尻目にオレは部屋へと急いだ。

みんな帰ってしまったっていたら鍵を閉められてもう入れないから。

誰かいてくれと願いながら走る。

そこで部長のいたずらを思い出した。もしまだ居たら一言物申してやる！

息を切らせて走り部屋のそばまでやってくると、練習場の方から音が聞こえてくる。

よかった、まだ誰か居たと、ほっと安心してゆっくりと息を整えながら練習場へと向かった。

近づくにつれ、音がよりはっきり聞こえてくる。

この音は……。

どの音よりもひときわ耳に残っている音だった。

練習場のドアの前に立ちそつとドアを開けて中を覗いた。

やっぱり……。

そこで一人フルートを吹いていたのは相田さんだった。

この音色……やっぱり引き込まれる。

でも、オレが目にした相田さんは相田さんじゃなかったんだ。

一人でフルートを吹いていた相田さんの表情は普段の無表情とは違い、豊かで、何もかも包み込むような暖かな表情だった。

音色も違う……。さらに引き込まれるかのような……。

オレは見とれていた。

普段の相田さんからはとても想像出来ない豊かな表情。見とれていたんだ…。

不意に、音が止まった。

ぼーっと、ただ黙って立ちつくしていたオレに、相田さんの視線が向けられていた。その表情はいつもの無表情に戻っていた。

「あ、ご、ごめん。邪魔するつもりは…：…なかったんだけど…」
「椿くん、まだいらっしやっただけですな」

「あ、うん、…：…わ、忘れ物…取りに来てさ」
「な、なんだ？うまく喋れない…」

「そうですか」

「う、うん。ごめんね」

「いえ、私ももう帰るところでしたので。でも、部室の鍵は私が預かってますから…：…」

「あつ、す、すぐに帰るから」

オレは急いで基礎練習の道具を取った。

「じゃ、じゃあね、相田さん」

「はい。練習、頑張って下さいね」

「う、うん。ありがとう」

そしてオレは練習場から出ようとした。

でも…、今は話す機会なんだと思って…。

「あの、相田さん」

「はい？」

「その…同級生なんだしさ、敬語なんていらさないから…：…ごめんなさい、誰とでもこんな話し方なので…」

「そ、そっか。じゃあね」

「はい」

そして練習場をあとにした。

ゆっくりと歩いて校門に向かう。

…：…ふう…：…。

緊張した…。

なんだっただらう。

相田さん…あんな顔するんだな…。

そんなことを思いながら校門までやってきた。

「あつ、誠二」

校門では美香がまだ待つていた。

「なんだ、待つててくれたのか？」

「荷物、あるんじゃないかって思ってたさ」

「そうか、基礎練するって言ったから。」

「これだけだよ、サンキューな」

「うん、帰ろう」

それから一緒に歩いて家までの道のりを歩いていた。

途中、美香がいろいろと話しかけてきていた…んだらう。

「じ！誠二！聞いている？」

オレは相田さんの表情が頭の中に残っていて、そればかりが頭に浮かんできていた。

「よっ、お二人さん、今帰りか？」

「勇介…」

偶然、勇介が通りかかった。今買い物の帰りなんだらうか。

「なんだ？誠二、元気ねえな」

「そうなの、誠二がなんか変なんだよ」

「まさか、ついに誠二にも恋の悩み到来かー？」

恋？

「ま、まさか！誠二に限ってそんなこと…：…っ、疲れてるだけだよ。

初めての部活でさ、ね、誠二？」

「そうだな、少し疲れたのかもな」

そんなこと言いつつ、なぜか美香に対しての罪悪感を覚えた。

それがどんな気持ちからきているのかわからなかった。

「誠二、どうだったの？パーカッション」

パーカッション。そうだ、パーカッション！

えーい、あれこれ考えるのはやめた！

練習だ！帰ったら練習するんだ！

それからオレは人が変わったように喋りまくった。

美香からは「誠二が変になっちゃった」なんて言われるほど。

家に帰って夕食を済ませ、風呂に入り、部屋で基礎練習をした。

少し疲れたなと思ってベッドに潜り込む。

すると、またフルートを吹いている相田さんの姿が浮かんできた。

その日は、なかなか寝付けなかった。

日常的非日常

入学してからもう一月ほど経った。クラスにも、部活にも慣れて来た頃だ。

そんな、ある日の午後。

いつものように昼休みを迎え、机の上に母さんの愛情たっぷり弁当を広げる。

ひとつ言っただけだ、オレは偏食がけっこうひどい。

生もの、無理。

魚介、無理。

野菜全般、無理。

でも、野菜炒めは食材によりOK。魚も火を通せば種類によるが食べれる。

とにかく生だな。肉でも魚でも野菜でも生はだめだ。

ああ、貝は無理、見た目から。内臓系も。ホルモン焼き肉とかもちょっと癖がある偏食なんだ。

そんなオレに愛情たっぷり弁当を毎日作ってくれている母さんに感謝だ。

こゝろんなに嫌いなものばかり入れられなかったら！

毎日思っただけだ……。いくつか嫌いなものが入っていること。

でも今日は特にひどい。オレが好きなおかずなんてただの一つも入っていないじゃないか。

なんだ？

昨日も彼女のことを聞かれて興味ないなんて言ったからか？

パンを買おうにも今月の小遣いはすでに底をついている。母さんの策略か。

いやいや、母さんはきつとオレの健康を気遣ってくれてるんだ。そうに違いない。

だとしても……。

逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ……。

うう……。

「誠二くん、なにうなってるの?」

「涉……、べ、弁当交換しないか?」

「ごめんね、今日はパソコン部の人たちとパン買って屋上で食べる約束してるんだ。みんなで全種類買おうってことになってるから……」
くそう。やっぱりこの弁当を食べなきゃならんのか……。しかも一人で。孤独な戦いだな。窮地に追いやられた勇者には必ずどこからの助けがあるはずなんだけど。

「じゃあね、誠二くん」

現実はそのなに甘くないよな。

食べるんだ、この弁当を食べても死ぬわけじゃないんだ。

(あなたは死なないわ。私が栄養あげるもの)

弁当が……語りかけている……?

「あんた、なに永遠に勝負のつかないにらめっこしてんの?」

「紗耶香……」

春日さんが教室にやってきた。おそらく相田さんを探しに来たんだろう。

春日さんとは別のクラスながら同じ楽器のパートだから話す機会も多く、お互いに名前で呼び合うようになっていた。

勇介をいち早く変態呼ばわりしていた時からこいつの性格を垣間見えていたんだけど……。

なかなかきつつい性格なんだよな。

「めぐは?」

「さあ……さっきまで弁当食べてたみたいだったけど」

「もう……せつかくめぐに会いに来たのに話したのが変態の仲間なんて……今日の運勢最悪ね」

よかった……、オレはまだ変態扱いされてないみたいだ。って喜ぶ

ところじゃねえ！

「お前から話しかけてきたんだろ」

「ふん、このクラスに知り合いいないんだから、仕方なく話しかけた私の身にもなつてよね」

ぐぬぬ……こ、こいつ……！

でも、それは本当の話しみたいなんだ。

相田さんと紗耶香はこの柳ヶ浦町からは少し離れている緑ヶ丘中学出身らしい。聞く話によると、今年の新入生でその中学から来ているのはこの二人だけらしいんだ。

緑ヶ丘中学の人は大体は近くの高校か、柳ヶ浦高校とは逆方向の進学校に行くらしい。それがなぜこの高校に来たのかはわからないけど。

「さ、めぐを探しに行こうつと」

紗耶香は相田さんのこととなると人が変わるんだ。登下校はもちろん一緒だし、相田さんも紗耶香と話す時だけはよく話す。まあ、自分で親友って言うてたくらいだし。

まあ、紗耶香に弁当のお願いをしても仕方ないな。

なんとか食べないと午後には体力が尽き果ててしまう。

ゴクリ……………。

んぐつ……………。

おっぷ……………。

うげえ……………。

きつい……………。

お昼の弁当なんて腹を空かせた学生が楽しみにしてるひと時なんじゃないのか？

全然楽しくないし……。

でも。

なんとか……。

本当になんとか弁当をたிரらげたオレは、涉もいなくて暇だったから少しうるついでみよう教室を出た。

特に目的もなかったんだけど、今まで行った事がなかった図書室へ向かった。

どんなところかは少し興味があつたからな、本自体は読まないけど。

そして、そろそろ図書室が見えてくるというところで見慣れた人物に出会った。一冊の本を傍らに抱え歩いていた。

「相田さん」

「あ、椿くん」

相田さんは一人で図書室へ向かっているところのようだった。紗耶香には会っていないみたいだな。

「図書室に用事？」

「はい、本を返しに」

「へー、どんな本読んでのの？」

「って、こんなこと聞くのって失礼なのかな。」

そう思っていたら相田さんはスツ…と本を差し出してくれた。
ふむふむ…。

『音の人間の脳への影響』

なんだ、難しそうな本だな。

「難しそうな本読んでるね」

「いえ、そんなことは…。実は日常にも脳に影響を及ぼす音はあります。ただ、どんな音で人間が壊れるのかがわかりました」

「…そ、そうなんだ…」

い、一体どんな内容が書かれてあるんだ。人間が壊れるなんてそんな本、学校の図書室なんか置いていいのよ？

「安心してください、今の科学技術ではそう簡単に作りえない音ですから」

「そ、そう。ありがと、安心出来た」

「では、私はまだまだこの事に関して知りたいので」

そうやって図書室へ入る相田さんの姿をにこやかに見送った。
なんだ、なにが知りたいんだ、相田さん。

「あつれー、誠二くん！」

「つじくんだ〜」

図書室の前で呆けていたら理恵先輩とアリサ先輩がやってきた。こんなとこにこない限りは部活以外で会うことなんてないよな。

「誠二くん、本なんて読むんだ？」

「いえ、たまたま来てみただけで」

「これ〜、読んでみて〜」

そう言っただけでアリサ先輩は一冊の本を取り出した。

『優雅さと軽やかさを身につける』

ププツ、アリサ先輩にぴったりの本じゃないか。

「あ〜、笑ったな〜つじく〜ん」

だって、まさにピンポイント。

「ところで誠二くん、今日は美香ちゃんと一緒じゃないんだ？」

「え？クラスは違いますし、いつも一緒にいるわけじゃ…。ただの幼馴染だし」

「ふ〜ん、ただの幼馴染ねえ」

理恵先輩はみんなと仲が良い。勇介や美香ともよく話しているみたいだった。

「つじくんの〜ば〜か」

ぬっ、人をいきなりバカ呼ばわりするとは…。

「アリサ！いいのよ、これはこれでおもしろそうだし」

一体なんの話してるんだ？

「ば〜か〜」

「アリサ！行くよ。じゃね、誠二くん」

「ば〜か〜」

「アリサ！」

二人は行ってしまった。

まったく…。

「わけがわかんねえ…かしら？」

「うおっ！びっくりした」

「青春よねえ」

二人が行ってしまつた方を見てみると背後でささやく声が聞こえて、振り返ると奈美先生が立っていた。

「椿くん、どうかしら？吹奏楽部には慣れた？」

「はい、だいぶ」

「期待してるわよ、大達人さん」

今確信した！パート発表では部長とグルだつたんだな！

「頑張つてますよ」

「そうね、家でも自主練してるみたいだし。今年のコンクールは上に行きたいものだわ」

コンクールか。まだ詳しくは聞いていないけれど、吹奏楽コンクールは地域コンクール、地区コンクール、全国コンクールがあつて、地域コンクールで代表校に選ばれると地区コンクールに、そのコンクールでまた代表に選ばれると全国コンクールに行けるらしいんだ。

地域コンクールは地域内で吹奏楽部がある高校が出場してくる。その数約三十校らしい。その中で選ばれる代表校はたったの四校。

コンクールは金賞、銀賞、銅賞の三つで評価されて、金賞を取つた高校の中から代表校が選出されるらしい。

うちの高校は毎年金賞常連校らしいんだが代表になるまでは至つていないみたいだ。

「三年生にはいい思い出を作ってもらいたいものだわ」

奈美先生が少し寂しそうに言う。代表になればそれだけ長く三年生は部活を続けることになるから。

「頑張りましょう」

「そうね」

しみりしちやった、かな。

「椿くん」

ん？

真面目な話しか？雰囲気か…。

「はい」

「うちの部での恋愛は自由よ！思いつき青春なさい！」

「……はい？」

「数少ない男子部員だからね、期待してるわ。じゃあね」
にこやかに言い放って行ってしまった。

この学校には、いや、オレの周りにはあんな人しかいないのか？
こんなことをしてるうちに、そろそろ昼休みも終わってしまう時間だ。

「こ・ん・に・ち・は！」

バンツ！

「あいつた！」

誰だ！思いつきり背中を叩きやがって！

あつ、部長。上機嫌だな。

おそらく昼休みの時間的に最後の関門。

「こんにちは、村田部長」

「いやん、千秋って呼んで？」

はい？

「村田部長、一体なにを？」

「……………」

なんだ？なにを期待している？そんなキラキラとした目で見つめられても……。

「千秋部長」

「んゝ、おしい！」

「…千秋」

「なあに？誠二」

…なんなのこれ？

「ねえ、誠二。太鼓の鉄人のゲーム得意なんだよね？ゲーム持っているの？」

部長は興味深そうに聞いてくる。

「はい、家にありますけど……」

「じゃあ今度の休みに遊びに行くから！わーい！じゃあねん！」

お？

「ちょ…部長！」

キーンコーン…。

やべっ！予鈴だ！

なんだなんだ？家はまずいぞ、母さんが黙っちゃいない。なんと
しても阻止しなくては。

部活の時にでも話そう。

そして今日のSHRを迎える。

「じゃ、今日からテスト期間で部活は原則禁止。まっすぐ家に帰っ
て勉強すること。いいわね？」

……忘れてた。

そうだ、テストのこともだけど部活のことも。

これからオレが最も現実逃避したくなる期間がやってくる。

だがしかし、勇者には必ず心強い仲間がいるもので。

「涉く〜ん」

「なに？誠二くん、気持ち悪い」

「出来てるんだよな？テスト予想」

「また？高校入ったんだから自分でやりなよー」

「ま、ま、そう言わずに、オレと涉の仲じゃないか」

涉の成績が良いのは単に頭が良いだけじゃなく、テストに出る問
題を予想して見事的中させる超人的能力を持っているからなんだ。
今回をその涉様のお力にあやかりたいと思っっているわけで。

「もうー、今回までだからね」

「ははーっ、感謝いたします」

これで記憶問題は大丈夫だ、記述問題と英語以外は。英語は問題
の意味すらわからないことだっただってあるからな。

涉から問題予想メモを頂いた。

「誠二ー、帰ろうー」

「おう、美香。じゃな、渉」

「さーて、部活もないなら時間はあるしな、どっか寄って帰るか。ん〜でも何か忘れているような…。」

「まあ忘れるくらいなら大した事じゃないか。」

「美香、駅前寄って行くか」

「勉強は？大丈夫なの？」

「平気平気！」

「もうー、知らないからね？」

「そして次の休みの日。」

「来ちゃった」

「どうも…」

「これは重要なことだろ、何を忘れてたんだオレは。部長のあの言葉を。」

「それにしても本当に来るなんて…。」

「よくオレの家わかりましたね」

「私は部長よ？部員のことならなんでもわかるわ」
「怖え…怖えよ部長。」

「まあ、来てしまったものは仕方がないとしても…。」

「あの、後ろの方たちは…」

「見慣れた方々がいらっしやっている。」

「誠二くん、遊びに来たよ」

「やつほ〜、つじく〜ん」

「ふん、来てやったわよ」

「椿くん、お邪魔します」

「理恵先輩、アリサ先輩、紗耶香、相田さん…。」

「なぜ…？」

「あらあ、私と二人つきりの方がよかつたかしら？」

「そんなことはない。そんなことはないんだが。」

はあ……。

「どうぞ……」

あえなくみんなを迎え入れる。

バタバタバタバタ！

あゝあ、やっぱりおとなしくしてないよな……。

「ちよつと誠二！」

母さん、驚きの中にも期待と喜びがあることがわかるよ。

「母さん、先に言っておくけど……」

「誠二」

「ん？」

「やるじゃない！」

…はあ、この人数じゃどう見ても彼女とかじゃないだろ。

「それで、誰が彼女なの？まさか全員……」

「違う！みんな吹奏楽部の部員だ！」

「なるほど……これから見定めていこうってわけね」

何をどう解釈したらそうなる？

オレがため息を吐きながらうなだれていると母さんがみんなの前に立った。

おいおい、何をする気だ？

「みなさん、どうぞ誠二をよろしくおねがいします」

部活についてじゃないよな、間違いなく。

「任せてください」

誰だ誰だ、便乗してるやつは！

「母さん、もういいだろ？みんな、オレの部屋は二階なんで案内しますよ」

それからみんなを部屋に迎え入れた。

母さんからは、まるでこうなることを予測していたかのようにジューズとお菓子を渡された。きつちり人数分。

普段はないぞ？こんなお菓子なんか。

いや、いい。何も出さなかつたら紗耶香なんて文句言いそうだから

らな。

「ふーん、ここが誠二の部屋ね」

「おもしろみのない部屋」

みんなキョロキョロと部屋の中を見回していた。

オレの部屋には特別に変わったものはない。ベッドと机とテレビとコンポと本棚。勇介が喜びそうなものがベッドの下に隠してあるわけでもない。

「みんな！」

部長？イヤな予感が…。

「……はい！」

「物色タイムよ……！」

……………

なにを……！

「部長！ベッドの下には何もありません！理恵先輩！ゴミ箱あさらないで！アリサ先輩！ベッドに潜り込まない！紗耶香！ひき出しを開けるな！相田さん！……は、お菓子でも食べてて」

あー！あー！あー！あー！

「やめてくれ……！」

……………

「おかしいわね、男の子の部屋にあるはずのものが無いわ」

部長が首をかしげながら呟いている。

「何もないですよ！ゲームするんでしょ、準備しますからおとなしくしててくださいよ」

まったく、吹奏楽部にはこんな人しかいないのか？ん、相田さんは例外だな。

えっと……太鼓の鉄人は……。

「先輩！わたくし小学校の卒業文集を発見いたしましたあ！」

……………

「でかした紗耶香ちゃん！アリサ！」

「は……い」

ガシッ！

「ちよつ、アリサ先輩、放して！」

「だ〜め〜」

アリサ先輩から羽交い絞めされて身動きが取れない。このままで
はオレの汚点が…。しかしこの背中のやわらかい感触が…。良い！つ
て場合じゃねえ！

「えつとー…あ、あつた。これが誠二のね。なになにー？」
うわわわわ…。

「僕の将来の夢はかわいいお嫁さんをもらってたくさん子供を作る
ことです。それには夜にたくさん体力がいるみたいなので…体を…
鍛えたいです…？」

ああ……。

「い、一体何を教わってきたのかしら」

くつ、母さんの言葉を真に受けていた幼いころの自分を恨む！

「かわいい夢ですね」

「めぐー！かわいいー！」

ずっとそのままの純粋な相田さんでいて欲しいよ。

バタン！

「誠二ー！何一人で楽しんでやがる！」

勇介がやってきた。オレが楽しんでいるように見えるのか？

「勇介、出来ることなら代わってやりたいよ…」

「みんなオレの家に来ませんか？こいつの部屋より夢と希望がいっ
ぱいですよ！」

そいつは良い考えだぞ勇介。

「男の子の夢と希望ね」

「気持ち悪い」

「へんた〜い」

「そんな部屋に女の子呼ぼうなんて最低ー」

「夢や希望は多い方がいいですよ？」

やっぱり相田さんは良い子だ。

「勇介、前言撤回だ。お前とは代わりたくない」

「う、うわー！ーん！！」

勇介は逃げるように部屋を飛び出して行った。彼の横顔にきらりと光る何かが見えたのは秘密だ。

早いとこゲームを準備してそつちに意識を向けさせないと。

カチヤツ…。

ん？

「い、一体何事ですか!?!」

今度は美香か…。

ややこしくするなよ？

「みんなで遊びに来ただけだよ。美香ちゃんこそ、いつも来てるのかな?」

「いえ、走って誠二の家を飛び出した勇介が見えたから気になって

…」

「ふーん…てつきりいつも来てるのかと…」

「いえ、そんなことは…」

よし、ゲームの準備完了!

「部長、ゲームの準備出来ましたよ」

「……………」

なんだ、その目は？

部長はしらぶつとした目でこつちを見ている。

いや、この目は見たことがある。

「千秋…」

「なあーに?誠二」

「なななっ!いつの間に名前呼び合う仲に!?!」

いや、違うんだ美香。呼び合ってるんじゃないって言わされてるんだ。

「あらあ、ついこの間だよー。何をそんなに驚いてるのかなあ?美香ちゃん」

「えっ、あっ、いや…………べ、別にちっとも驚いてなんかありません!

あ、焦ってなんかいいです！」

そっだ、何をそんなに戸惑う？

「そこまで言ってないけど…」

「ぶちよゝやめるゝ」

「そうですよ、部長」

なんだ？理恵先輩もアリサ先輩もわかったように…。

「はいはい、わかりましたよ」

それからやつとみんなゲームをしようということになった。

これで落ち着けるな。どれどれ、オレの太鼓の鉄人の腕前を披露してやるうじやないか。大達人の腕を！

そこでオレが意気揚々としているところでせつかくだから対戦しようとの提案が。

オレの相手はアリサ先輩。聞くところによると初めてやるらしい。

フフ…パーカッションとしての腕前はまだまだ追いつけないけど、これでオレのことを少しは見直すことになるだろう。

そしていざ対戦してみる。

ドンドンカッカッドドンドン！

フフフ…いやー…。

「絶対初めてなんてウソだ！」

「ほんとだよゝ」

そう、負けた…、オレは負けたんだ。唯一勝てると思っていた太鼓の鉄人で。オレの自信とプライドは粉々さ。

「自信満々だった割にはたいしたことないのね」

紗耶香め！傷口に塩を塗るようなことを言いやがって！

た、たまたまだ！初対戦で少しだけ緊張していたこともある。

「もう一度！」

「のぞむところだゝ」

もう一度対戦してみたもののまた負けた。

いや、お互いフルコンボだよ？タイミングの差だけ。

それから何度も対戦したけど結局一度も勝てなかった。

あまりにも悔しかったから違うゲームで対戦したけれど全敗…。
対戦格闘ゲームだって必殺技なんか一つも使われてないのに負け
たし。

なんだ、オレが弱いのか？

否！断じてそんなことはない！いつも勇介をいじめて優越感に浸
ってるんだ。

「みんな、そろそろ帰ろうか？明日からテストだし」

「そうそう、明日からテストなんだからそろそろ……。」

「ってテストおおおお！！」

「うるさ！誠二、いきなり発狂しないでよ」

「やっぱり変態の仲間ね」

すっかり忘れてたぜ…、そうだ、今日一日しっかりやるはずだっ
たんだ。でも突然の訪問に何もかも…。

でも…。

「みんなどうしてそんなに余裕なんですか！」

「だって、みんな例外なく成績いいもの」

…なに？

美香が成績優秀なのは知ってるが…。

「アリサ先輩も？」

「しつれ〜、わたしは学年とつぷ〜」

「紗耶香も？」

「どういう意味よ、変態とは違うのよ」

「相田さんも？」

「めくは中学ですーっと一番だったんだから！」

「そ、そうなの？」

「はい、一応そうでした」

部長と理恵先輩はしっかりしてるから成績良さそうだ。

なんてこった。なら、オレの気持ちをわかってくれる人はこの中
にはいないんだ…。

オレはこのピンチを脱すべく、みんなを追い出すように帰した。

帰り際、美香が心配していたがいまさらどうにかなるもんじゃなし。徹夜だな…。

夕食の時には母さんがいろいろしつこかったが勉強を口実にその場を凌いだ。

母さんはオレの母親らしく「勉強なんてどうでもいいでしょ」「なんて言っていたけどな。

その日の夜は今までで一番渉の要点メモが役に立った時でもあった。

翌日、オレのやつれた顔を見て、渉はオレが自力で頑張ったものだと思い込んでくれた。

この分だと次のテストもお力添えしていただいただけそうだ。

そしてなんとかオレは赤点を取らずに今回のテストを乗り越えた。

そしてまた、いつもの日常が戻ってきて、舞台は吹奏楽コンクールになる。

コンクールに向けて

中間テストが終わり、いつもの毎日に戻ったところで吹奏楽コンクールの課題曲が届いた。

吹奏楽コンクールでは二曲演奏しなくてはならない。

それが最近届いた四つの課題曲の中から一曲。そして各学校で決める自由曲の二曲だ。

一年に一度の、それも三年生にとっては吹奏楽部で最後の演奏になるかもしれないコンクールだけあって、部室の中にはピリリとした空気が流れていた。

オレは先日まで、自分はまだ一年だからコンクールなんてまだ関係ないって思っていた。

でも違ってたんだ。

今年の四曲の課題曲の中で奈美先生が選んだ曲には、なんと、パーカッションがソロで演奏するところがある。

どうしてこの曲を選んだのか…、オレもコンクールに出なくてはならなくなっただ。

理恵先輩がスネアドラム（小太鼓）、アリサ先輩がティンパニ（直径1mくらいの大きい低音楽器。今回はそれが四つ）、紗耶香がシロフォン（木琴）、そしてオレがタムタム（ドラムの上の方についている小さい太鼓な）だ。

オレ達パーカッションの四人は特に気合いを入れて練習に励んでいた。

オレは不安だった。今回が初めてのステージになる。それでいてソロの演奏。弱気にならないはずがなかったんだ。

「誠二くん、ソロの部分合わせてみるよ」

「あつ、はい」

曲自体は何度か聞いた。頭の中で実際の曲と自分の演奏をイメージしてみてもうまうまいかなかった。それが人と合わせるなんてなお

さら…。

！

「ストップ！」

「やっぱり…みんなについていけないし、オレの演奏はバラバラ。一人だけ始めたばっかだし仕方ないのかもって思うけれど…」。

「誠二くん、焦らなくてもいいからね。最初だし、まだ時間はあるから」

「はい…」

落ち込むよ。

オレ以外の三人はほとんど出来てるし、オレが足をひっぱっていいようなもの。自信ないよ。

それに、これは課題曲だけの話し。自由曲だってあるんだ。

イヤだな、やりたくない。迷惑かけたくない。オレのせいだ…。

「じくん！誠二くん！」

「あつ、は、はい！」

「ぼーっとしないで、もう一度、ね」

それから何度かやっても同じだった。結局はオレだけ出来ないんだ。

時間はあるって言ったって、余裕があるわけじゃないし、出来るならコンクールなんて出たくない。

「今日はもう終わりにしよう。誠二くん、頑張ってるね」

「が〜ん〜ば〜る〜」

「……………」

「はい……………」

紗耶香は無言でオレをにらみつけていた。そりゃそうだよな、こんなへたくそが混じってちゃ迷惑だよな、わかってるよ。

「曲、家でも聞いてきなさい」

紗耶香はそれだけ言って練習場を出て行った。

次の日も、その次の日も練習の繰り返し。

自由曲も決まって、オレの担当はシンバル。ドラムセットに一緒になっている叩くシンバルじゃなくて、二枚を一枚ずつ両手で持つて合わせて音を出すシンバルだった。

これもまた難しい。ただ合わせるだけじゃダメなんだ。音が広がる表現なんかもしないといけないらしい。そしてあまりにきれいに二枚を合わせてしまうと、二枚のシンバルの間に空気が入ってパフっというなんとも情けない音が出てしまうんだ。

自由曲ではオレの出番はシンバルを鳴らす二回だけ。少ないけれど、曲の中で重要なアクセントになる部分で失敗は出来ない。本番の事を考えるだけでもプレッシャーに押しつぶされそうになる。

でも、本番さえちゃんと出来さえすれば大丈夫なんだ。

やっぱり問題は課題曲。

数日経った今でも、まだ一度もきれいに出来たことはなかった。

「ちよつと誠二、もつと気合い入れてやりなさいよ。入部したての勢いはどこ行ったのよ」

紗耶香にそう言われるけれど、気合いどころか逃げ出したくもある。

そうなんだ……。オレはこの時、逃げていたんだ。目の前の不安から、プレッシャーから。だから……。

「紗耶香……、オレみんなに迷惑かけてるし、まだ来年もあるんだし、やっぱりコンクールに出ない方が……」

こんなことを口走った。紗耶香や、みんながどんな気持ちでコンクールに臨んでいるかなんて考えもせず。

オレが口に出した言葉で紗耶香の表情が怒りをあらわにしたものに変わった。

例えば、このことがあったから、オレの高校生活は人生で一番の思い出になったのかもしれない。

「取り消しなさい……」

「え？」

「取り消せって言ったのよ！」

さ、紗耶香？

「あんだ！三年生の人たちがどんな気持ちでコンクールに臨んでるかわかんないの！？出たくても出れない人だっているんだから！最後の…最後のステージなのよ、三年生にとって！来年なんか無い！みんなが一つにまとまらないと良い演奏だって出来ない、あんな何やってんのよ！？うじうじして、逃げ出すことしか考えないで！少しでも出来るようになって先輩たちに良い思い出をつて思わないの？……………もうしたくない。あんな思い……………もうさせたくないのよ……………」

「紗耶香……………」

何か、前にあったのか？

でも、オレは何もしてないんだな。イヤだからって一生懸命にならないで、来年もあるからなんて……………。わかってたはずだろ、部長たちは今年が最後だったこと。みんなで頑張るって、言ってきたじゃないか。

出来ないことが迷惑なんじゃなくて、やらないことがいけないんだ。一生懸命に。自分に与えられた役割を出来るだけ頑張るんだ。

「紗耶香…ごめん。やれるだけやるから、迷惑とかそんなんじゃないよ、出て来るだけのこと」

「そうよ！最初っからあんななんか期待してないんだから！……………それでも、一緒になって頑張るってことが、一体になるってことが、三年生にとっても私たちにとっても大切なことなんだと思う」

紗耶香はにっこりと笑って言った。でもどこか寂しそうに。

コンクールに対しての思い入れが強いんだろうな。でも、どうして？

「うーん、青春だねー」

「だ〜ね〜」

「ほら、先輩達も頑張りましたよー！」

「紗耶香…前に何かあったのか？」

オレのその言葉に紗耶香は鋭くオレをにらみつけた。

「はあ…さあやろつってしてるこのタイミングで聞く？」

「う、ごめん…」

「……ま、いいわ。これは私とめぐがこの学校に来た理由でもあるんだけど…。先輩たちにも聞いて欲しいんです」

真剣な表情で紗耶香は言った。

この学校に来た理由…わざわざ地元の高校に行かないでこの柳ヶ浦高校に。特別に何かあるっていう学校でもないんだもんな。

紗耶香は少し深呼吸したあとゆっくり話した。

「私とめぐの出会いには中学校の吹奏楽部です。私は最初、部活なんてやってなかったんですけど、たまたま吹奏楽部の近くを通りがかった時にめぐのフルートの音が聞こえて。それが気になって足を運ばせたのがきっかけです。秋頃からの入部でした。めぐのフルートの音に惹かれて入ったんです。めぐはもちろんその頃からすごくうまくて、同じ一年なのに別世界の人のような気がしてなかなか話せないでいました。話しても挨拶程度くらいで。でも、私はめぐを尊敬していました」

相田さんとの出会い…か。見た感じは昔っからの友達っぽいんだけどな。

「めぐは一年のときからコンクールに出て、もちろんすごく期待されてました。私も入ってすぐに吹奏楽が好きになって次のコンクールには出たい！なんて、へたくそながらに思っていました。だけど…そんなめぐを良く思わない人たちもいたんです。ちょうど二年生の時のコンクールが終わったくらいだったと思います。…めぐに対しての嫌がらせが始まったんです。めぐと同じフルートの人たちでした。めぐがコンクールに出て、自分たちが出れなかったから。嫌がらせは最初は軽いものだったんですけど、だんだんエスカレートしてきて…めぐも…だんだん人と話さなくなってきました…」

相田さんが…いじめられてた…？

紗耶香は少し辛そうに話していく。

「めぐも前はよく笑って、よく喋るっていうくらいおしゃべりだった

たんです。私はそんなめぐが変わっていくのを見てられなくて……。それがめぐと話すようになるきっかけでした。初めは拒まれてたけど、少しずつ話してくれるようになってきました。私は、めぐに嫌がらせをしていた人たちと何度も衝突しました。めぐは私にとっても吹奏楽部にとっても必要な存在だったから。でも、あの人たちは止まらなかった……。めぐはそれから人と関わり合いになることを極力避けるようになって、部活にも顔を出さなくなって……。そんな中で迎えた最後のコンクール。私はその時が初めての出場の良い結果を残したかった。でも……。ダメだったんです。あんなに……。バラバラになってしまった私たちじゃ……。悔しかった……。本当に。私にとっては最初で最後のコンクールだったから。それから、めぐは私とだけは普通に話してくれるようになります。そして、二人で吹奏楽部があつて、誰も知り合いがないところをつて、それでこの学校に来ました。だから私は、コンクールは頑張りたい。みんなで一つになって頑張りたいんです」

そんな……。ことがあつたんだ……。

「うっ……ざやがぢゃん……」

「みんなで……がんばる……」

そうだな、みんなで……。

「だから、この部でも同じことが……」

「……大丈夫！みんな一生懸命なんだから！」

「……はい……」

紗耶香は安心したかのようににっこりと笑った。

理恵先輩が言った言葉。

でも、大丈夫じゃなかったんだ。

それからまた数日後。

「誠二くん、紗耶香ちゃん呼んで来てくれない？部室にCD取りに行つたつきり戻らないんだ。また合わせたいからさ」

「はい」

「まったく、何やってんだ紗耶香のやつ。CD取りに行くくらいでオレは言われた通りに部室に紗耶香を呼びにやってきた。」

「ん？」

「相田さんもいるのか。話しこんでさぼってやがったな。」

「紗耶香、先輩が呼んでるぞ」

「二人とも少し首を傾けてこちらを見た。」

「あ、椿くん」

「ああ、誠二。これ持って先に行つて」

「そうやってCDを渡された。まだ別の何かを探しているようだ。」

「何してるんだ？」

「めぐの楽譜がないみたいなのよ、一緒に探してるんだけどなかなか見つからなくて」

「一緒に探そうか？」

「あんたは戻つてさっさと練習しなさい！」

「わ、わかつたよ」

「怖えよ、紗耶香。」

「さぼつてたわけじゃないし、先輩にはちゃんと話して…。」

「ん、何だ？」

「部室を出て練習場へと戻ろうとしたところでオレは何かを見つけた。廊下の隅に不自然に落ちていた。」

「これって…」

「楽譜……、でも、ボロボロだ。」

「何の楽譜かを確認してみると今年の課題曲の、それもフルートの楽譜だった。」

「まさか……。」

「不意にこの前聞いた紗耶香の話しが頭をよぎる。」

「紗耶香！！ちょっと来てくれ！」

「うるさいな！後で行くつてば！」

「いいから！」

「…な、なによ…」

声を荒げたオレに少し驚いたように部室から出てきた。

「これを……」

オレは拾った楽譜を紗耶香に見せた。相田さんの楽譜かどうか確認してもらったために。

「なに……これっ、めぐの……!」

やっぱり相田さんの楽譜なんだな。だとすると……。

「紗耶香ちゃん、どうしたの?」

「……………!」

「め、めぐ! な、なんでもないよ。が、楽譜さあ、やっぱり家に忘れてきたんじゃないの? ほら、めぐってどっか抜けてるし」

「うーん、持って帰ったかなあ……」

この場はどうか凌がないと。これを見せるわけにはいかないよな。

「知らないうちに鞆に入れてたとかさ。なっ、紗耶香」

「そ、そうそう。ありえるよ」

「とりあえず今日は基礎練習でいいんじゃない?」

「……はい……そうですね。ありがとうございます」

オレは探してないんだけど……ってどうでもいいか。

相田さんはそれからフルートの練習場所に向かって行った。

取り残されたオレ達は……。

「紗耶香……」

「許せない……絶対……!」

この事をオレ達だけで解決しようとするのも無理がある。

誰とでも仲の良い理恵先輩に話した。それに相田さんの過去を知っているし。

理恵先輩はすぐに動いてくれた。「心当たりがある」と、オレ達を連れてフルートの練習場所へ向かった。

オレは自分が今まででも一番って言うてもいいほど怒りがこみ上げていた。

どうしてここまで自分が怒っているのかわからないけど、とにかく気が気じゃなかったんだ。

「あら、相田さん、あなた楽譜は？」

「すみません、忘れてきたみたいで。基礎練をしておきます」

「珍しいわね。楽譜の中身覚えてる？」

「はい、一応」

「なら問題ないわ。十六小節から、いい？」

「はい」

「ちよつと待つて下さいリーダー！いいんですか？こんな大事な時に楽譜忘れてくるなんて、やる気がない人がいたって迷惑ですよ！」

「やる気のない人なんていないわ。大野さん」

「ここでオレたちは到着した。」

「その通りよ！」

理恵先輩がフルートのパートリーダーの先輩に同意して言い放った。

「田口さん、どうしたの？」

「練習中失礼します、ちよつと愛理と話しがあるんですけど」

そう言つて視線を向けた先にはフルートの二年生、大野愛理先輩おおのあいりがいた。

「だそうよ、大野さん」

「なに？理恵」

「わかつてるんじゃない？ここじゃなんだからちよつと来て」

理恵先輩は大野先輩を連れ出して部室へと向かった。

オレ達もそれについていく。

「違つてたらごめんなさい、単刀直入に聞くけど、恵ちゃんの楽譜、愛理がやったの？」

「楽譜？何のこと？そんな話なら戻るから」

「ちよつと待つて、愛理言つてたよね。今年こそはコンクールに出てやるんだつて。それにあんまり恵ちゃんのことよく思つてないの

も知ってる」

相田さんはすでにフルートのメインパートを務めているらしく、そのおかげで大野先輩は出ないらしい。

「だからなに？それがあんなところに楽譜を捨てたことの証拠になるの？」

ん？ちよつと待て…。

「愛理、誰が捨てたって言った？」

「え？あつ…！」

大野先輩はしまったという顔で目を伏せた。

「語るに落ちたわね」

この人が、相田さんの楽譜を…！

「な、なによ！みんなして相田恵ってさ！コンクールに出れるっていうのに喜びもしないでさ！いい気になってすましてるからムカつくのよ！無表情でさ！あんな暗い子のどこが良いって言うのよ！」

「めぐを悪く言ったら許さな」

「ふざけんな…！」

「せ、誠二？」

「みんなで一つになるうつつて時になにやってんだ！悔しかったら必死に練習して負けないくらいにうまくなるうとしろよ！それを汚いやり方で引きずり降ろそうとしゃがって！あんなのような奴のおかげで苦しむ人がいるんだ！あんなに相田さんの何がわかる！紗耶香や部長達三年生がどんな気持ちでコンクールに臨んでるのかわかんのか！」

「誠二……」

「な、何よ、私だつて」

「みんな努力はしてんだよ、頑張ってるんだ。あんだだつてそうだろうさ。でもあんな一人だけ良い思いすればいいのか？部のことを思うなら絶対にこんなことはしない。最後になる三年生のためにも入賞して最高の思い出をつて思わないのか？」

「そ、それは……」

「そう思っただったら相田さんのことは認めるべきなんじゃないのか？あんたの独りよがりのわがままで人を傷つけて、部員の輪も壊そうとしたんだ。三年生に来年はないんだ……なら、一つになって頑張ろうよ……」

「……うう……ごめんなさい……」

「誠二くん、もういいよ」
はっ……。

オレは先輩相手になにを……。

「愛理。愛理だけじゃないんだよ、頑張ってるのは。恵ちゃんだってあんなになるまでは相当努力してきてるはずだよ」

「……うん」

「今回のことは黙っておくからコンクールは一緒に頑張ろう？ステージに上がらなくなっただって、取った賞はみんなの賞なんだから。紗耶香ちゃん、もういいよね？」

「あっ……はい！」

それからみんないつもの場所に戻って行った。

「ふふふ、誠二くん、かつこよかったよ」

「す、少し見直してあげたわ！」

「かつこいい〜」

「オレは別に……」

楽譜は紗耶香が見つけて水浸しにしてしまったことにした。無理ないいいわけだったけど、フルートのパトリーカーの人に話して新しい楽譜をもらったんだ。

相田さんに、話したいことがある。

オレは前に見てしまったから。相田さんの豊かな表情を。

頭の中がごっちゃごちゃになって練習に集中出来なかったオレは、紗耶香と先輩たちからダメだしをくらいまくってかつこ悪いオレに戻っていた。

そのあと。

「相田さん」

「椿くん、どうしました？」

いきなりはまずいかな。でも……。

「その、紗耶香から聞いたんだ。中学の時のこと」

「……そうですか」

相田さんの表情はわかるくらい暗いものになった。

「ここではあんなことないからさ！もしあつてとしてもオレが守るから！」

「え？」

な、何言つてんだ？オレ！

「あ……いや、紗耶香もいるし！先輩たちだって相田さんのことすく頼りにしてるんだよ」

「………ありがとう」

その時、相田さんは初めて笑顔を見せてくれた。

ま、まともに見れない。

それくらい眩しい笑顔だったんだ。

「相田さん、お願いがあるんだけど……」

「………？」

「フルート、聞かせてくれないかな？」

「あ………うん！」

それからオレのリクエストに答えてフルートを奏でる相田さんの姿は、あの日の豊かな表情で音色を奏でる相田さんだった。

演奏が終わって、しばしの沈黙が流れる……。

パチパチパチパチ……！

「すごいよ！」

「えへへ……ありがとう、椿くん」

あつ、また笑った。

なんて……。

「椿くん」

.....。

「椿くん！」

えっ！

「どうしたの？ぼくとして。顔赤いよ？」

「な、なんでもないよ！」

相田さんの笑顔に見とれてたなんて…。

「相田さん、今の感じでみんなとも演奏しなよ」

「えっ……でも……」

「大丈夫だから」

「……うん」

「じゃあオレは行くから。コンクール頑張ろうね」

「あっ……うん、頑張ろう」

そうやってオレは部室をあとにした。

吹奏楽コンクール

あの大野先輩が起こした事件は吹奏楽部内に広まることはなく、静かに消えて行った。

あれからの相田さんは少しずつではあるけど、みんなと自然体で話せるようになっていった。

敬語も止めて、人前でも時折明るい笑顔をみせるようになった。そして、フルートも。

今までだつて当然うまかつたんだけど、さらに輝きを増してみんなに驚かれていた。

大野先輩ですらその演奏に圧倒されて、今では尊敬の念すら抱いてるみたいだ。そのことは理恵先輩から聞いた。いつか必ず謝ると本人は言っているらしい。

「これならいけるわ！」

相田さんの変わりようは周りのみんなも感化して、自分も頑張るんだと良い具合に部の刺激になっていた。

奈美先生もこの雰囲気在意気揚々としている。

部員がみんな今まで以上にやる気になって練習に取り組んでいた。そんな中で迎えた学期末テスト。

この間でも間近に迎えている吹奏楽コンクールのために部活のテスト休みはない。時間制限付きで部活が許可されていた。

オレはまた涉様のお力にあやかつて無事にこのテストを乗り切つた。コンクールのことを言いわけにするとなんの抵抗もなく要点メモを貸してくれたよ。

そして学校は一学期を終え、夏休みに入った。

コンクールは八月上旬にある。

それまではいかに夏休みと言えども朝から夕方まで部活だ。

大変だったけれど楽しかった。みんなが一体となつて吹奏楽コンクールという目標に向かっているその雰囲気はたまたまなくよかつた

んだ。

オレも毎日の練習に明け暮れて何とか課題曲も自由曲もミスなく演奏出来るようになり、コンクールまではその質を高めるための時間に費やした。

一体となつている、その言葉の通りに全体での曲合わせもオレが聞く限りは完璧だった。どこに非の打ちどころがあるだろうか、そんなことを思っていた。

みんなと一緒に演奏することがすごく心地良く感じて、何度も何度も演奏したいと思った。

でも、部長たち三年生とはコンクールまでなんだ。

そんなことを思うとすごく寂しくなる。

特に部長はここに初めて来たときに最初に話しかけてくれた人だったし。オレのことを経験者って言ったり、いきなり家に来たり、ちよつといたずら好きな人だったけど、多分この人だったから楽しかったんだろうな。持ち前の明るさでよく部員をまとめて、誰よりも部のことに一生懸命だった。

今度のコンクールに一番思い入れが強いのも多分部長なんだ。

そんな部長や、三年生の先輩たちに最高の思い出を作ってもらいたい。

だから頑張ってきたんだ。

吹奏楽コンクール当日。

「ほらー！男子頑張つてー！」

朝からオレは汗を流していた。勇介もだ。

今、コンクール会場へ楽器を運ぶためにトラックに楽器を搬入しているところだ。

入部当初に部長が言ってたな、男子が入ると助かるってこういうことだったんだな。

パーカッションの楽器で重い楽器は一人で持つことが到底無理な重さの楽器もある。ここでオレたち男子が大活躍ってわけだ。勇介

と二人がかりで楽器を運んでいた。

「ひいひい、無理だ！死ぬ！」

「もつと気合い入れろよ。ここしかないぞ、勇介の見せ場は」

勇介は今回のコンクールには出ない。サポートくらいしつかり頑張つて欲しいもんだ。

「大丈夫？堀川くん」

相田さんが勇介に優しい言葉をかけている。できれば変態の相田さんを近づけたくないもんだがな。

「ああ！なんて優しいんだ相田さん」

そりや感動だろう。もはや勇介は変態ということでもかり通っているからな。

「めぐに気易く話しかけないで！変態！」

紗耶香の護衛は厳しいもので。特に勇介には。

しかし、この暑い中でさすがに疲れるな。

「椿くん、何か手伝うことない？」

ああ、相田さん、君の優しさが身に染みるよ。

「いいのよ、めぐ。か弱い私たちが手伝うことないんだから」

「か弱い？聞き間違いか？」

「何か言つたかしら？誠二？」

「さ、さっ！勇介！きばるぞ！」

危ねー、紗耶香のやつは手が早いんだ。それも相当な威力だ。女とは思えないね。

それからコンクールに必要な楽器を全てトラックへ運び終えた。

コンクール会場へはバスで移動する。片道三十分つてとこかな。ちよつとした遠足気分だったりもする。

「あつ、つば」

「誠二、お疲れ様。はい、タオル」

「お、サンキュー、美香」

今回のコンクールに出る一年はオレと美香と相田さんだけ。未だにオレなんかでいいのか？なんて思つたりもするけど、やれること

はやってきたつもりだ。後は本番で精いっぱい頑張るだけなんだ。
あれ？相田さん？

美香からタオルを受け取ったところをじゅっと相田さんが見ていた。

「相田さん、どうしたの？」

「あつ、ううん。朝から大変だったね。お疲れ様」

「うん、ありがとう」

それだけ言って紗耶香とバスに乗り込んで行った。そういえば呼ばれたような……気のせいかな

「誠二、私たちも行こう」

「ああ」

そしてバスに乗り込み、窓側に勇介、その隣がオレ、通路を挟んで美香が座った。

バスの中はみんな落ち着きがなく、ざわざわと騒がしかった。

コンクール前だからってガツチガチに緊張するよりもいいのかな

「誠二、緊張してないの？」

「なんか、実感が沸かないって感じかな」

「そっか、いいなあ。私はけっこう緊張してる」

「まだ会場に着いてもいないんだぜ？」

「だつてえ……」

そんなことを美香と話していた。

「あんたは少し緊張感なさすぎよ！」

「あいた！」

後ろの席に座っていた紗耶香からこづかれた。手加減してるのか？

「いってーな！」

「あんたが一番の不安要素なんだからね」

「言われなくても自覚してますー」

「だったらその小さな脳みそで黙ってイメトレでもしときなさい！」

「パカッ！」

「いって！叩くな！もっと脳みそ小さくなるだろうが！」

「あら、認めるのね」

くっそー！こいつはこんな時まで！

「みんな緊張感なさすぎ」

「いいんじゃない？緊張しすぎるよりは」

アリサ先輩と理恵先輩がため息をはきながら話していた。

そんなオレ達の様子を見て、部長も笑っていた。

本当にコンクールって感じじゃなかったけれど楽しかった。今日が部長たちと最後のかもしれないってことなんて忘れるくらいに。

そしてコンクール会場に着いた。

さすがに人が多い。当たり前だけど。

いろんな高校、いろんな制服。周りのそれだけ見ても緊張してくるのがわかった。

どの高校の生徒を見ても自分よりもうまく見える。心理的に弱気になってるんだな。

「き、緊張するね、誠二」

「ああ…さすがにな」

美香が少し震えながら言う。

オレも少しだけ震えていた。かつこよく武者奮いなんてことはなく、明らかな緊張から。

自分だけが浮いた存在に思える。周りの目が気になる。

コンクールのプログラムを受け取ると、うちの高校は最後の方だった。

まだしばらく時間がある。

「みんな、まだ少し時間があるから他の高校の演奏でも聞いていましょう」

奈美先生がそう言って各々が会場の観客席へと足を運ばせる。

ホールの中の別の高校の演奏が終わって中に入る。

客席はほぼ満席だった。

こんなに人が見ている中で……。

そう思うだけでまた逃げ出したくなる。

「誠二くん、こっち」

理恵先輩から呼ばれて向かうと、アリサ先輩と紗耶香が席を取っていた。

「ちょうどこれから演奏する高校が毎年の代表常連校の豊ヶ峰ほうがみね高校よ。課題曲は私たちと同じだから。よく見ておいて」

理恵先輩が真剣な顔つきで言う。理恵先輩がこんな顔するなんて…。そんなにかな？

少し待つと会場の明かりが落ちて暗くなった。

『次のプログラムは豊ヶ峰高校です』

そしてステージの幕が上がると豊ヶ峰高校の生徒がピシッと姿勢を正して座っていた。しぐさまでなんとなく堂々としている感じだった。

オレの目はすでにパーカッションの方へと向けられる。

先に代表常連校だと聞いていたからか、オレ達とは違う空気があるように感じた。

チューニングが終わり、指揮者の指揮棒が振り上げられ、演奏が始まった。

最初は静かな立ち上がり。

オレは所詮まだまだ素人の域は出ちやいない。

他のパートがどうだかなんてわからない。注目すべきことはもうすぐやってくる。

もうすぐ……。

ここから！

パーカッションのソロ演奏を食い入るように見る。

さすがに完璧と言っている程の演奏だ。きれいに息が合って噛み合っている。

安心して見ていられる、そんな感じだった。

ふと隣の席に目を向けると、理恵先輩が悔しそうに拳を膝の上で震わせて唇を噛みしめていた。

その視線は動くことなくステージの一点に向けられていた。

理恵先輩はパーカッションのソコの部分が終わると、ふうっと一息ついて席にもたれかかった。

そのまま課題曲、自由曲を演奏する豊ヶ峰高校を静かに眺めていた。

演奏が終わると会場からは割れんばかりの拍手が沸き起こった。

オレも素直にすごかったと拍手を贈る。

会場が明るくなって少しざわついてくる。

理恵先輩はそのままぼくとステージの上を見続けていた。

「理恵先輩、もうやるしかないんですから。やれるだけやりましょ

うよー！」

「誠二くん……」

「そうですね！まだ負けたわけじゃないですよ！」

「きつとくだいじょうぶ」

「……うん、そうだね！ごめんね、パートリーダーがすっかりしいといけないのに……よし！頑張ろう！」

そうやって理恵先輩はオレ達に笑顔を見せてくれた。

オレもそれを見て安心出来た。なんだかんだで理恵先輩のことは頼りにしてるから。

それから順番が来るまで会場で他の高校の演奏を聞いていた。

去年の代表校の演奏も全部聞いた。どこの高校ももちろんうまかったけど、理恵先輩が悔しそうな顔をするとはなかった。

そして奈美先生から呼ばれて裏の控え室へ。といってもホールの通路で順番待ちをしてるんだけど。

トラックから降ろしたパーカッションの楽器を運びながら舞台袖へとやってくる。

もうすぐオレ達の番だ。

前の高校がステージと上がっていく。

待っている間もチューニングをしたり最終確認をしたりと準備は怠らない。演奏時間が十二分間と決められていて、楽器の搬入時間

も含まれるから結構慌ただしいんだ。

次だ、もう、すぐにステージに…。

あ、あれ？

足が震えて…。

き、緊張してきた。なんだこれ？

こんなの初めてつていうくらいに緊張してる。

やばいやばいやばい！頭の中も真っ白になってる。

「ばきくん」

落ち着け、落ち着くんだ…！

「椿くん！」

えっ！

「あ、相田さん」

呼ばれて振り向くと相田さんがにっこりと笑っていた。

「緊張してるの？」

「あ…はは…そうみたいなんだ」

「椿くん練習頑張ってたし、きっとやれるよ」

「う、うん…」

「『大丈夫』、だから、ね？」

あっ…。

相田さんは軽くウインクして『大丈夫』と言ってくれた。その時にオレが相田さんに同じ事を言った時のことを思い出した。このウインクはきつとそういうことなんだろう。

「誠二！気合い入れるわよ！」

バンツ！！

「いってー！！！」

相田さんの笑顔でほっとしているところに紗耶香のやつに背中を思いつき叩かれた。これじゃ気合いが入るところか…。

「手加減しろよ！ばか力！怪力女！背中に穴空いて逆に気合い抜けるぞー！」

「なんですってー！！！」

「ま、まあまあ紗耶香ちゃん」

でもま、二人のおかげで緊張はほぐれたかな。

「うーん、青春ねー」

「だ〜ね〜」

その様子を見ていた理恵先輩とアリサ先輩に紗耶香は…。

「先輩たちにも気合いを…」

と言つて右手を振りかぶる。

「わ、私たちはいいよ!」

冷や汗をかきながら遠慮していた。

今からステージに立つつていうのに、なごやかだな。

「誠二、頑張ろうね」

「おう、やれるだけやろう」

美香もいい顔つきをしていた。もう意識はステージのようだ。

「みんな!」

そんな中で部長がみんなを呼んだ。

「今まで頑張つて練習してきたんだから自信持つて!今日は良い演奏をして会場の人たちに楽しんでもらおう!今日が…: 今日が最後なんて思つてないから!また、みんなでステージに!」

「はい!…!…!」

部長は満面の笑みで声を張つて言った。その通りだ、自信持つて良い演奏して代表になって、このメンバーでもう一度ステージに立つんだ!

「はいみんな注目ー!」

今度は奈美先生だ。

「今、村田さんがいいことを言ったわ。自信を持つて。背伸びなんかしなくていいの、今出来る最高の演奏をしましょう!きつとその気持ち審査員の人たちにも届くから。楽しんで演奏してね!」

『次のプログラムは柳ヶ浦高校です』

「さあ!行くわよ!」

「はい!…!…!」

いよいよか。自信持ってやれば大丈夫。最高の演奏が出来る！
奈美先生を先頭に順々にステージへと足を進める。
進むにつれてだんだんと光が眩しくなってくる。

そしてオレも、ステージへと立った。

時間が限られている。急いでパーカッションを所定の位置へと移動させる。

緊張してる暇はない。

そして、楽器の移動が終わって前を向いた。

バクンッ！

心臓が跳ね上がる。

幕が上がると会場の視線が全てこちらに向けられていた。

暗くてよく見えないけれど、全て自分に向けられているように思えた。

ものすごいプレッシャーがかかる。

集中するんだ！

そう自分に言い聞かせる。

奈美先生の指揮のもとに少しのチューニング。

意識を集中させる。

そして、奈美先生の指揮棒がゆっくりと上げられて……振り下ろされた。

最初は静かな立ち上がり。相田さんたちフルートが先陣を切って立つ。

それから美香やいろんな楽器が絡み合って曲を作り上げていく。

そして課題曲の中盤。

ついにやってくる。

何度も想像した。

何度も失敗した。

何度もくじけそうになった。

でも。

今は出来る！

一瞬の静寂…。

！
！
！

理恵先輩がスネアドラムでリズムを刻み、アリサ先輩がティンパニで深みを増し、紗耶香が鍵盤でメロディーを奏で、オレがタムタムで掻き立てる。

オレ達パーカッションの四人全てが噛み合った。

ミスはない。

今まででも一番の演奏だった。

気持ちが良い。

そう思ったんだ。

集中して、一生懸命に演奏して。最高に気持ち良かった。

課題曲は無事に終わり、次は自由曲。

オレの出番は少しだけ。

でもその一瞬に集中する。

シンバルに。

シャーーーーーン！シャシャーーーーーン！！

いよっし！

自由曲の出番も無事に終わり、後はこのまま何事もなく終わることを願うだけだ。

みんな、頼む！

課題曲も、自由曲もオレは今までで最高の演奏が出来た。

演奏が終わるとみんな立ち上がり会場へ向かって一礼した。

会場からは豊ヶ峰高校と変わらない程の拍手がオレ達に向けられていた。

その拍手の大きさからもオレ達は良い演奏をしたんだって思った。

ステージをあとにして、外で全員集合だ。

みんなも満足そうに笑っていた。

「誠二、よかったよお」

「ははっ、なんだよ美香。泣くなよ」

美香は安心したのか半泣きで笑っていた。

「みんな！今日は本当に最高の演奏だったわ！後はみんなで祈りましょう」

そうだ、これで終わりじゃないんだ。

オレはここまでで満足していたのかもしれない。でもまだ、表彰が終わってない。代表はたった四校だけなんだ。

オレ達の後にはもう演奏する高校は少しだけだった。

急いで楽器を片づけて会場内へと入った。

中に入ると、残っている高校は一校だけだった。

最後の高校の演奏が終わると、会場は妙な緊張感に包まれていた。『続いて表彰に移りますので、各校の代表の方は舞台裏へ集合をお願いします』

代表はもちろん部長だった。演奏前はあんなに笑っていた部長も緊張を隠せない様子だった。

きつと大丈夫。

オレ達は最高の演奏をしたんだ。絶対代表になってる！

みんなに「行ってくるね」と、無理やり笑顔を作って部長は一人舞台裏へと消えて行った。

『それでは表彰を行います』

そのアナウンスのあとにステージの幕が上がった。

部長を探して見ると、その表情はやっぱり硬いものだった。

『 高校、金賞』

「きゃあああああああ！」

金賞と評価を受けた高校の生徒が歓喜の声を上げた。

その高校の代表者は笑顔で表彰状を受け取りに行っていた。

『 高校、銅賞』

パチパチパチパチ…。

先ほどとは違って変わって静かな表彰だった。それでも代表者は笑顔で表彰状を受け取りに行っている。

『 高校、銀賞』

「きゃあああああああ！！」

多分、去年銅賞だったんだろう、すごく喜んでいる。

『 高校、金賞』

「きゃあああああああ！！」

その後も次々と表彰が進められていく。

『 豊ヶ峰高校、金賞』

「きゃあああああああ！！」

毎年代表になつているとはいえ、金賞の喜びはみな同じなんだな。

去年の代表校はそれぞれ各校とも金賞だった。

そして…。

『 柳ヶ浦高校、金賞』

「きゃあああああああ！！」

や、やった！！

金賞だ！

部長は満足そうに表彰状を受け取りに行っていた。

部員のみんなも手を取り合ったりして喜んでいた。

紗耶香も涙ぐんで喜びを表していた。

理恵先輩もアリサ先輩も美香も相田さんも、勇介だって大いに喜

んでいた。

でも、まだ終わりじゃないんだ。金賞はもちろんうれしいけど、

まだ…。

『 高校、銀賞』

「きゃあああああああ！！」

これで、最後かな。

『 続いて、今年の代表校を発表いたします』

きた！

ここだ…。

心臓がバクバクと激しく脈打っているのがわかる。

今日は緊張しっぱなしだ。絶対寿命が縮んだな。

『 高校』

「きゃあああああああ！！」
ドクンッ！

「やっべー、マジで心臓に悪い。」

『 高校』

「きゃあああああああ！！」

頼む…選ばれてくれ…！

『 豊ヶ峰高校』

「きゃあああああああ！！」

さすがだな、今年も当然のように選ばれるんだ。

あと…一校だけ。

周りのみんな誰ひとり言葉を発することなくその瞬間を待っていた。

最高の演奏だったんだ。

だから…！

『 高校、以上が今年の代表校に決定いたしました』

あっ……。

う、ウソだろ…？

部長…。

部長は笑顔だった。

紗耶香は声を殺して泣いていた。

誰もが言葉を失って…さっきの金賞を取った喜びさえどこか行ってしまったかのよう…。みんなが天国と地獄を味わったかのようだった。

信じられない。絶対、部長たちと代表になれるって思ってたのに。何かの間違いなんじゃないか？そんなことを思わずにはいられなかった。

表彰も終わり、会場の外に出て帰りのバスの前に集まっていた。

部長の言葉だ。

「みんな！そんなに肩を落とさないで！今日は本当にいい演奏だったよ！代表になれなかったのは残念だったけど、金賞だって十分立派なんだから！来年は三年生が多くなるんだし、きつと行けるよ！これで引退する私たちの気持ちは、みんなに引き継ぎます。えつと……この！吹奏楽部で……過ごした……思い出……は……うっ……ひっ……つく……」

部長はこらえきれず泣した。

オレも含めてみんなが部長に頑張れと声をかけている。

「おっ……思い出は……一生の宝物になりました！！ありがとうございます！！……」

パチパチパチパチパチパチパチパチ！！

ありがとうございましたと、深く頭を下げたままの部長にいつまでも拍手をしていた。

上げられなかったんだらう、部長の足元には涙の粒がいくつもこぼれていた。

オレも涙がこぼれそうになる。

でも、しっかりと見届けるんだ。部長の吹奏楽部としての最後の姿を。

いつまでも鳴りやまないかと思われた拍手は、部長がいきなり頭を上げ、満面の笑みで止まった。

そして「帰るぞー！」と元気いっぱいみんなをバスの中へと誘導した。

そんな部長の笑顔を見た後だったけれど、帰りのバスの中は重い空気が流れていた。

今日のコンクールでオレ達が演奏したテープがバスの中で流れている。

本当に良い演奏だったんだ、なのに……。

「くそっ……！」

悔しい……！

「誠二くん……」

「理恵先輩……何が、何が他のとこと違っただんですか……！最高の演奏だった！」

「仕方ないよ……。それに、笑ってたけど本当に一番悔しいのは千秋部長なんだからさ。その悔しさを噛みしめて来年頑張ろう？三年生の分までさ」

……また来年か。今になって三年生の気持ち genuinely 分かった。

口じゃ偉そうなこと言ってたけど、来年に希望を残せるオレ達と違ってもう三年生は終わったんだよな、本当に。

悔しかっただろう……。それを笑ってた。

強いな、部長は。

三年生の夏は、今日、終わったんだ……。

学校へ帰ってきて楽器を部室に片づける。

さっきほどの重い空気はなく、会話もそこそこ聞こえていた。

「みんな今日はお疲れ様！金賞は誇っていい賞よ！本当に残念だけど三年生はここまでになったわね、今までお疲れ様でした。明日から一週間、部活は休みにして一週間後に三年生を送る送別会をしましょ。その後は一年生と二年生の新体制でいくからそのつもりで。今日は本当にお疲れ様」

「お疲れ様でした！！」

奈美先生の言葉で今日の吹奏楽コンクールは終わった。

一週間休みか。

それならみんなとも一週間会わないんだろうな。夏休み中だし。

「誠二！」

「あ？おう、紗耶香。今日はお疲れだったな」

「あんたも少しは頑張ってたわね、褒めてあげるわ」

「素直によくやったって言えばいいのにさ」

紗耶香と相田さんだ。今から帰るんだろうか。

「う、うるさいわね！それより、夏休みどうせ暇なんですよ？携帯教えなさい、遊んであげてもいいわよ」

携帯か…。

「そんなこと言うやつには教えん」

「なんですつてー！」

「つ、椿くん！」

「うわっ！びっくりした。」

「め、めぐ？」

「椿くん、わ、私にも携帯教えて？」

「え？あ、ああ、いいよ」

「なによ、私の時とずいぶん態度が違うじゃない」

「相田さんみたいに素直に言えば交換するさ」

「ふんっ！いいからさっさとする！」

な、なんだよ、いつも上から目線だよな。

それから相田さんと紗耶香と連絡先を交換した。

「暇なら連絡してもいいわよ」

「お前が暇なんだろう？」

「忙しいのよ！いろいろと！」

「椿くん」

「ん、なに？」

「わ、私も、め、メールとかしてもいいかな？」

「え？ああ、もちろん」

「ホント！？ありがとう！紗耶香ちゃん、帰ろ！」

「あっ！ちよつとめぐー！待ってよー！」

慌ただしく二人は行ってしまった。

なんなんだ、一体？

「誠二、なにしてたの？」

「おう、美香、帰るか」

「ねー、なにしてたの？」

「なにつてー、紗耶香と相田さんと連絡先を交換してたんだよ」

「……ふ〜ん」

「なんだよ、ご機嫌斜めだな。」

「帰る」

「は？おい、待てよ」

「まだ勇介いるから待ってれば！じゃあね！」

「おい！美香！ったく……」

何か言ったか？わけわかんねえ。

ホントに帰って行ったし。

勇介なんて待っててもおもしろくないしな、たまには一人で帰るか。

オレは今日のことを振り返りながら一人学校をあとにした。

悔しかった。

楽しかった。

今日一日でいろんな経験をした。

きっと今日のことはオレを成長させてくれたと思う。

部長、先輩たち、今までありがとうございました。

吹奏楽部送別会

吹奏楽コンクールから一週間後。午後五時。

空は良く晴れていて、遠くに見える入道雲が夏を感じさせた。

今日は予定されていた吹奏楽部を引退する三年生を送る送別会だ。場所は部長の両親が経営しているというレストラン。

今日はそこを貸し切って送別会が行われる。

「誠二、早く行こうよ!」

「待てつて!そんなに急がなくても料理は逃げないって」

コンクールの日になぜか不機嫌になって一人先に帰ってしまった美香は、翌日に玄関先で顔を合わせた時にはもう機嫌は直っている様子だった。

それからはせっかくの休みなので前のように勇介と美香と三人で遊ぶ毎日だった。

「そんなんじゃないし!早くみんなに会いたいの!ほら早く!」

「勇介がまだだぞー」

「いいじゃん、先に行こうよ」

美香にまでこんな扱いをされるなんて、本当に終わってしまうぞ、勇介。

別に先に行ってもかまわないんだが、さすがにこんな暑い中で一人寂しく歩かせるのは忍びないと思うんだな…。

「おーい!」

勇介が走りながらやってきた。

「ほら、勇介来ちゃったじゃん」

いや、来ていいだろ。

ひどい奴になったな、美香。

それから走ってきたために汗だくになった勇介から五メートル程の距離を置いてレストランに向かった。

歩いて約十分程。

暑さも手伝ってたどり着く頃には少し疲れていた。
レストランのドアを開けると部長が迎えてくれた。

「あ、いらっしやい、みんなもう来てるよ」

「こんにちは、部長」

「もう部長じゃないってー。なら、なんて呼べばいいかわかるよね
」？」

「うっ……。」

「ち、千秋って呼べばいいんすか？」

「わかってるじゃない！」

「こんにちは！！」

「うわっ！」

「い、いらっしやい、美香ちゃん」

美香はオレの後ろから大声であいさつをした。いきなりでかなり
びっくりしたぞ！

「誠二、行こう！」

オレの手を引いて中に入ろうとする美香。

「お、おい！すいません、またあとで！」

「まったねー」

なんだなんだ？勇介置きっぱだぞ？

結局そのままみんなの中に紛れ込んだかたちになった。

レストランの中は吹奏楽部全員が入ってもまだ余裕がありそうな
くらいに広くて、大きく丸いテーブルにバイキング形式で料理が並
べられていた。

「うわー、おいしそうー」

美香は料理を見てさっそく品定めを始めている。

「ったく、さっきのは一体なんなんだよ？」

「見て、誠二。これおいしそうじゃない？」

「聞いちゃいねー。いいけどさ、別に。」

「まだ食うなよ？」

「え？ダメかな？」

「さすがだな」

「え？何が？」

「いや、別に」

なんとなく恥ずかしくなってしまうんだ。

「ふーん…。あ、私ペット（トランペット）の先輩のそこ行ってくるね」

「ああ、ゆっくり話してこいよ」

オレ達パーカッションには三年生はいないけれど、他のパートにはだいたい引退する三年生がいるからな。オレは三年生で親しいのは部長くらいしかいないし…。

「せーいじー！」

この声は…。

「どうも」

「なにー？元気ないなあ。そっか、私がいなくなるのが寂しいんだよねー！」

部長…じゃないんだっけ。

寂しくないなんてことはないけど、そう言ったらまた面倒臭そうだしなあ。

「素敵なレストランですね」

「でしょー？ちよつとした有名店なんだよ」

「へー、部長は卒業したらこの店継ぐんですか？」

「……………」

あつ…………。すました顔して…。

「千秋は卒業したらこの店継ぐんですか？」

「うーん、呼び捨てなのに敬語っておかしいと思わない？」

「…………卒業したらこの店継ぐんですか？」

「ゆずらないね、誠二」

…………いつも思ってたけどなんの意味があるんだろうっね？

「ち、千秋は卒業したらこの店継ぐの？」

いや、上級生にタメ口なんて気色悪いぞ。オレには無理だ。

「私はそんなつもりはないよ。進学希望だしね。なあに？気になる？わたしと誠二の将来」

…わからない、この人の思考回路が。

「別に気にならないので失礼します」

「えーん、誠二のいけずう」

不思議な人だ。

でも、部長のおかげで楽しかったです。

恥ずかしいから口には出せないけど。

「ありがとう、私も楽しかったよ」

完璧な読心術！？

やっぱ怖えよ、部長。

「椿くん」

ん？相田さんだ。

「楽しんでる？」

「まあね」

どうなんだ？オレは楽しんでるのか？

「三年生が引退したら寂しくなるよね」

「そうだね……って、ははっ」

「え？何かおかしいこと言ったかな？」

思わず笑ってしまった。だって…。

「いや、会ったばかりの相田さんからは想像も出来ない言葉だなんて。変わったよね、相田さん」

以前、あんまり人と話さなかった時の相田さんは寂しいなんて絶対思わなかっただろう。

「……うん。だってそれは……椿くんが」

「誠二！」

紗耶香の声だ。

相田さんの後ろから歩み寄って来ている。

「どうした？紗耶香」

「理恵先輩が呼んでる」

「理恵先輩？ああ、わかった。あつ、相田さん、何か言いかけてなかつた？」

「ううん、いいの」

相田さんは少しだけ微笑んで答えた。

「めぐ！あつちにあるケーキがすごくおいしいんだ！行こ！」

「あつ、紗耶香ちゃん！つ、椿くん、またね」

本当に紗耶香は相田さんにべったりだな。

それにしても理恵先輩か。何か用事か？

どこに理恵先輩がいるか紗耶香に聞きそびれたオレは、しばらく探しまわってやっと見つけた。

理恵先輩とアリサ先輩が楽しそうに話していた。

「あつ！誠二くん遅い！何してたの！」

「す、すいません。どこにいるか探してて……」

「ま、いいけど。早くこつち来て飲みなさい！」

えらいテンション高いけどまさか……。

二人の周りを見ると、ビールの空き缶がいくつも転がっていた。

「はやく〜飲む〜」

「あつははは！飲みなさいーい！」

うっ、酒くさ！

おいおい、いくら無礼講だからって酒はさすがにマズイだろ。

「あらー？椿くん」

うわ！な、奈美先生もいるじゃないか！やばいやばいやばい！どうするどうする！

「ほらー！椿くんも飲みなさいーい！」

……あんたか、犯人は。どこに生徒に酒を飲ませる教師がいる！？

「さすがに酒はダメでしょ！」

「いいのよ！ほらあ！」

「ちよっ！先生！」

んぐっんぐっ……。

にげえ!!! って何これ？

無理やりビールを飲まされたと思ったんだけど、酒の匂いがしない。

あれ？

「アリサ先輩、何飲んでるんですか？」

「ん〜？これらよ〜」

渡された空き缶を見てみると…。

ノンアルコールビールと書いてある。

じゃあこの酒臭さとビールの空き缶って…。

「まだまだまだまだ飲むわよ〜ん!!!」

全部奈美先生かよ。

じゃあ理恵先輩もアリサ先輩も雰囲気と酒の匂いで酔っぱらってるってか？

どれだけ酒弱いんだよ。

オレも飲んだことないし簡単に酔うものかもしれないけど。

楽しんでるみたいならいいか。

良い子のみんな、お酒は二十歳を過ぎてから！

でもノンアルコールだったってビールはビールだよな？未成年が飲んでいいの？そこんどこどうよ。

「誠二くん誠二くん、ちよっと」

「なんですか？」

理恵先輩に手招きされる。

「うーん！かわいいー!!」

「むがっ！ちよっ！理恵せんっ…ぱっ…」

いきなり抱き締められてオレの顔が理恵先輩の胸の谷間に…。

なんて最高なっ！いやっ！苦しい！

「く…くる…し…い」

「いやーん、暴れないでーん」

し、死ぬ…。

「ちよっと！何してるんですか!」

ガバツ！
ぶはっ！

誰だか知らないけど助けてくれて……み、美香……。
美香が鬼の形相で立っている。

「せ、誠……な、何をしてるの？」

こ、拳が震えてるぞ、美香。

「お、落ち着け。これは理恵先輩が無理やり……」

「えー？喜んでたでしょ？」

「そういうこと言わないでください！」

まったく……。

お？おおお……。

み、美香が怒っている。これほどに怒りを露わにする美香を見た
ことがないかもしれない。

「誠……ど、どういうこと？」

こ、怖い……。怖すぎる！

「ご、ごめんなさい！」

謝るんだ！とにかく謝るんだ！

「ごめんなさいってなによ！やっぱりうれしかったんじゃない！誠
二のバカーー！！！」

美香はそう叫んでどこかに走り去ってしまった。

オレ達三人はその様子をおっけにとられて見ていた。

「理恵先輩……」

「ご、ごめんね？悪ふざけが過ぎちゃった……かな」

「オレは美香を探しに行きますから理恵先輩も後で謝ってください
ね！」

「う、うん」

「でも……」

「え？」

「ありがとうございます！」

「……ふえ？」

オレはそれだけ言ってその場を去った。

「つじくんのえっちい〜」

「またしてあげちゃおうかな…」

はあっ…はあっ…。

くそ！美香のやつどこに行ったんだ？

店内を探しまわってみたけれど美香の姿はなかった。
帰った？

いや、一応送別会なんだし、帰ったりするようなやつじゃない。
いったいどこに…？

そこでオレは二階のバルコニーへの階段を見つけた。

オレは階段を駆け上がりバルコニーへの扉を開けた。

外はもう薄暗くて周りによく見えなかった。

よく見ると人影が見え、近づいてみると後ろ姿で美香を確認出来た。周りに美香以外の人はいない。

夜風に美香の髪がなびいている。

「美香…」

「……………」

あー…どうすりゃいいんだ？

「あれは理恵先輩が無理やりやったんだって」

「ふんっ！」

「なあー、悪かったってー」

ん？

悪かった？

どうして？

別に美香が怒ることじゃないんじゃないか？

付き合ってるわけじゃないんだし、ただの幼馴染だろう？

「っていうか、別にオレ悪くないよな？美香が怒るわけもわかんないし」

「えっ！そ、それは……」

「だよな。じゃあもういいだろ？」

「うううう……ダメ！」

「はあ？じゃあどうすりゃいいんだよ」

「……一発殴らせて」

殴る！？そ、そんなに怒ってたのか？

「まあ、それで美香の気が済むなら……や、やれよ」

「うん、じゃあ目つぶって。顔見たまんまじゃ殴れないから」

「お、おう」

そんなに思いつきり殴るつもりなのか？

オレは言われた通りに目をつぶる。

「じゃあいくよ」

「おう！」

力が入り、歯を食いしばる。

美香が近寄る足音が聞こえて、そして……

「ん！？」

不意に唇に柔らかいものが触れた。

目を開けると、美香の顔がすぐ近くにあった。

「み、みみみ美香！？な、何を……！？」

「……勝ったよね？」

「え？」

「これで理恵先輩に勝ったよね？」

「な、何の勝負してるんだよ！」

「別に！それと、私のファーストキスだからね」

「なっ……！」

「クスツ……顔真っ赤。さ、戻らないとみんなが心配するよ？」

「え？あ、おう」

美香の機嫌はそれで直って、何事もなかったように一人で会場へと戻って行った。

ドキドキドキ……。。

「こ、こんな私ですけど、よろしく願います!」
わーーーーー!!!!!!

みんな歓声を上げて理恵先輩が部長になったことを迎えた。

「えへへ…」

理恵先輩もまんざらじゃない様子だった。

「じゃあめでたく新部長も決まったところで今日はここまで!遅いから気をつけて帰るのよ?部活は明日いつも通りにあるからね!」
今は…もう八時か。

送別会っていうか、ただのパーティーだったな。

でも、いろいろ楽しかった。

千秋部長がいなくなるのはなんだかんだでやっぱり寂しい。
本当にありがとうございました。

「誠二、帰ろう」

「お、おう」

美香は相変わらず何もなかったかのように…。
帰り道でも特にあのことに触れることもなく、送別会のことを話しながら帰った。

この日から。

オレは美香をただの幼馴染としてだけではなく、少しずつ一人の女の子として意識するようになっていった。

海

「誠二、海だ、海に行くぞ」

「……いきなり何だ？」

コンクールが終わり、吹奏楽部も新体制となり、午前中は部活、午後は遊びの日々が続いていた。

今日もいつも通りに部活を終えて、オレの部屋で勇介とゲームしてたんだが…。

何を思い立ったのか、急に黙り込んで出たセリフがこれだ。

「こつやって灼熱の太陽に焼かれるのを避けて家の中でゲームするのもいい。しかし！夏休みらしいことを何一つやっていないと思わないか？」

「朝から部活してるだろ？授業だつてないし」

「つまらん！何てつまらない奴なんだ、誠二！夏と言えば海だろ！海だ！そうだ！海なんだ！」

「まあ、間違いじゃないけど…」

「そうだろう？かと言って男同士で海に行ったって何が楽しい？夏だぞ？水着だぞ？」

こいつが言いたいことはわかった。

「つまりは誰か女子を誘って海に行きたい、と」

「その通りだ！」

そんな指をズバツと差されて言われてもな…。

「誘って行けばいいだろ？」

「問題がある」

「あ？」

「すでにみんなから変態のレッテルを貼られているオレの誘いなんて受けるわけないじゃないか！」

「な、泣くな、自業自得だろ」

なるほど、つまり…。

「オレに誘えと？」

「理解が早くて助かる」

「ずばり面倒だ。しかし、オレも男なんだ！」

「全力を尽くそう、勇介。次の部活が休みの日でいいな？」

「お願いします！！」

全力で頭を下げる勇介に優越感を感じた。

それからオレは連絡先がわかる女子に片っ端からメールした。

そして待つこと十分。

返事が。

キターーーーーー！！

……………。

「勇介、無理だと」

「くっ…！」

ちなみに今のメールは理恵先輩。用事があるみたいだ。

そしてまたすぐに返事が。

キターーーーーー！！

「勇介、美香がOKだそうだ」

「それは確定フラグだろ」

まあそうだな。

そのあと返ってくる返事はどれもNO。

もしかオレも勇介のように変態的な目で見られているのかと不安になったが…。

「決まったぞ」

「おう！」

結局は身近な美香と紗耶香と相田さんの五人で行くことになった。

「ただし条件付きだ」

「え？」

「海に着いたらお前だけ別行動しろだと、紗耶香から」

「くくく、行ってしまえばこっちのもんよ」

「勇介の目つきが危ない。
やはりお前は変態なんだな。」

そして次の休みの日。

夏だ！

海だ！！

水着だ！！！！

海にやってきた。

場所は少し遠いけれど歩いて行ける海水浴場。

ピークは過ぎたのか思ったほど人は多くなかった。

オレと勇介はすでに着替えて女子三人を待っている。

「た、楽しみだな、誠二」

勇介は鼻息を荒くして三人の水着姿を今か今かと待ち望んでいる。
ま、少なくともオレもちよつとだけ楽しみにしている。

ちよ、ちよつとだけなんだからね！

「お待たせ」

！！！！！！

……………おおお。

水着だ、水着の美女が三人…。

美香は白いビキニだった。

知ってはいるが改めて見てもスタイルが良くてバランスがとれている。オレたちの前で水着になるのは初めてじゃないためか堂々としている。

紗耶香は赤いビキニ。

胸はそんなに大きくないがスラッとしてスタイリッシュだ。

すでに勇介に威嚇行動中。

そして相田さん。

水色のワンピースなんだが制服の上からでは良くわからなかった、

たわわな胸が際立っている。すごいボリュームだ。恥ずかしそうにもじもじしている。

「や、やっぱり恥ずかしい…そんなに見ないで…」

ぐはぁっ！

は、反則だぜ、相田さん。

「ちよつと誠二、なに恵ちゃんばっかりジロジロ見てんのよ、いやらしい」

いやいや、美香だって十分ナイスボディですよ。

「美香もよく見せてくれ」

「えっ？そ、そんな…誠二…」

恥ずかしそうにうつむく美香。

うーん……。

オレは美香をじっくりと眺めたあと、相田さんの方へ歩み寄った。

「え？え？」

相田さんは何事かとうろたえている。オレは相田さんの手を取って…。

「相田さんの勝ちだ！」

相田さんの右手を高々と上げた。

すると、みるみるうちに美香の顔が真っ赤になる。

「せ、誠二……！」

「うわー！ははは！逃げろー！」

オレはその場からダッシュで逃げ出した。

「あっ！待ちなさい！」

はははっ！

元陸上部のオレについてこれるかな？

「逃げるなー！！」

そう言われて黙って待つもんか！

さすがオレ！

美香の姿がどんどん遠ざかって行く。

「うおっ！じんばぶえー！」

ズシャツ！

…ああそうさ、転んだんだ。

「誠二……！！！」

終わった…。

さよなら、オレの海…。

「きゃっ！」

ズシャツ。

お？

美香まで転んだみたいだ。

チャーンズ。

「はっははは！さらば！」

「ふえっ………」

あ、あら？

「ふええええん！誠二のバカー！ふええええん！」

美香は起き上がったもののその場に座り込んで泣き出してしまった。

うん…。

しょうがないな。

オレはこのまま泣いている美香を放置するなんて出来ずに歩み寄って行く。

「うええええん………」

「お、おい、美香。泣くなよ。悪かったから」

そう言つて手を差し伸べると…。

ガシッ！

！！！！！！！！

「捕まえた！」

「なっ！？き、汚いぞ美香！！！」

美香はウソ泣きだったんだ。

まんまとそれにだまされたオレは美香にしつかりと手を掴まれてしまった。

「覚悟してね」

「なんだ？何をする気なんだ！？」

「そつだなあ、とりあえず埋めちゃおうかな」
埋める！？

聞き間違いか？

美香がそんなことするわけがない！

「スコップ借りてこなくちゃ」

どうやら美香は本気らしい…。

「はっ！離せっ！」

「あっ！暴れるな誠二！紗耶香ちゃん！」

「はい！」

紗耶香！？

助っ人を呼ぶとは予想外！

「何？美香ちゃん」

「誠二を埋めちゃうから押さえるの手伝って！」

「了解！」

紗耶香はにんまり笑って近寄って来る。

「紗耶香！来るな！」

「うるさいわよ！」

二人がかりでオレを押さえ込もうとしてくる。

オレだつてこのまま黙って埋められるのを待つわけがない。

「うおおおお！」

必死で二人に抵抗する。

「きゃっ！あつ…あんだどこ触ってんのよ！こつなつたら…勇介！
」

勇介？ばかな、勇介が紗耶香の美香の味方をするわけがないだろ
う。

「はいはいつと」

えっ？勇介！？

「変態、誠二を押さえてなさい」

「御意」

「てめえっ！勇介！」

勇介がしつかりとオレを押さえつける。

性格はなよなよしてるくせに体格はいいもんだからオレは身動きが出来なくなる。

「すまん誠二。だが、お前は間違っちゃいなかった」

「あんたも埋まりなさい！！」

ドカツ！

「ぐぼえっ！」

余計な一言を言ってしまった勇介に紗耶香の回し蹴りがクリーンヒットした。

そして勇介は夢の世界へと旅立って行った。

ん？

二人の注意が勇介に向いている今なら…。

「さらば！」

「あっ！」

「あっ！」

オレは現役陸上部さながらのスタートダッシュで走り去った。

「あーあ…逃げられちゃった」

「どうせならこいつで憂さ晴らししちゃおうか」

「そうだね」

オレは遠くからその様子をうかがっていた。

勇介は二人の手によって本当に砂の中に埋められてしまった。

安らかに眠れ、勇介。

それからも遠くから様子を恐る恐るうかがっていると…。

「誠二ー！もういいから一緒に遊ぼうよー！」

美香が手招きしながらオレを呼んでいる。

本当か？信用していいのか？

オレはゆっくりと美香の近くまでやってきた。

だがそれでもオレの中の警戒アラームは鳴ったままだ。

「美香、わ、悪かったよ」

「うん」

美香はにっこりと笑ってくれた。

どうやらこの笑顔に裏はなさそうだ。

「私はいいんだけど…」

え？

「ふんっ！」

ドカツ！

「ぐほあ！」

紗耶香がオレに右ボディーブローの不意打ちを浴びせた。

「な、なにをする！」

「どさくさに紛れて変なところ触ったお返しよ！」

オレは胃の中の物をお返しするところだったぜ、紗耶香。

せめてこの手に感触が残っているならがよかったものを…。いや

いや何を言っている。

その後は四人でビーチバレーをすることになった。

チームはオレと美香、紗耶香と相田さん。当然っちゃ当然か。

前にも言ったがオレは球技が苦手だ。もう一度言おう、球技が苦手だ。

「うおりゃああ！」

バシッ！

「うおっ！」

バシッ！

「誠二！！ちゃんと受けてよ！」

紗耶香のスパイクはオレの正面にきたが受け切れなかった。

「す、すまん」

いやいや、紗耶香の打つスパイクには常人には取れない強烈なス

ピンがかけられている…はず。

そしてまた紗耶香のスパイクが。

「うりゃあー！」

バシッ！

「うげっ！」

「またもや受けきれないオレ。」

「あっははは！点取り放題ね！」

紗耶香が気持ちよさそうに高笑いしている。

「誠二」

美香が頬を膨らませている。

「そう睨まれてもなあ…」

取れないものは取れん！

「じゃあ私が受けるから誠二がトス上げてよ」

「おう！」

そしてまたまた紗耶香のスパイク。相田さんはただ立って紗耶香にトスを上げているだけだ。

「うりゃあ！」

バシッ！

「誠二！」

バシッ！

美香が華麗に紗耶香のスパイクを受けてオレにボールがやってきた。

さらに言おう。

オレは球技が苦手だ。

そりゃ、トーーーーース…。

「ぎゃっ！」

バスン…。

オレはボールをスカして顔面に受けてしまった。

「あっははは！なにそれ！ヘディングで上げるつもり？」

紗耶香が腹を抱えて笑っている。

「誠二、かつこ悪い…」

美香もあきれたようにオレを見ていた。

ぐすん…。

お、男の子だつて泣いちゃうんだからね！

「ちよつと二人とも！」

そこで相田さんがオレに駆け寄ってきた。

「誰にでも苦手なことはあるよ。ひどいこと言ったらダメだよ。大丈夫？ 椿くん」

ああ……。

「天使だ……。相田さん、オレは今日天使に出会ってしまったよ」

まさに相田さんの優しさは天使のようだ。

「すごーい！ 天使に会ったなんてすごいね！ 私も会ってみたいなあ」

「……へ？」

マジか？ マジで言ってるのか？ 相田さん。

……嫌な予感がする。

「……ぷっ……ふっ……」

「……ふぐっ……くっ……」

見えるぞ……。

背後だが笑いをこらえている二人が！

「笑いたきゃ笑え」

いや、むしろ笑ってくれ！

「……くっ……せ、誠二、どんな天使だったの？」

「……ぶっ……！……わ……私も聞きたいわ」

「二人の悪魔をしかつてくれる心優しい天使だよ」

「……埋めるよ？」

埋めることから離れられんのか！

また二人に対して警戒する。

「紗耶香ちゃん、おなか空いちゃった」

あ、相田さん、なんてマイペースなんだ。

「めぐ……。そんだね。誠二、何か買ってきて」

「何でオレが」

「埋めるよ？」

美香…。

「オレは優しい美香が好きだな…」

「え！？あ、わ、私も行つてあげる！」

優しい美香と一緒に昼食の買出しに行つてくれておまけに荷物まで持つてくれた。

それから相田さんが用意してきたパラソルの下で昼食を済ませた。勇介は顔以外埋められていたので、顔をそばにおにぎりを置いてやった。

「さあ、行くぞー！！！」

紗耶香は我先にと海へ駆けていく。

「紗耶香ちゃん、待つてー！」

相田さんは紗耶香の後を追つて走つて行く。水玉の浮き輪を抱えて…。

に、似合い過ぎてるよ、相田さん。

「ね、ねえ、あれ…」

美香も相田さんの姿を見て苦笑いしている。

「ああ、すばらしい」

「……表現おかしくない？誠二」

「い、いや…ほらっ、乗り遅れたぞ！」

美香がじとじとした目で見ていたのでなんとなくごまかして海に向かった。

そしてしばらく海で遊んでいるときに事件が起こった。

「めぐ！？めぐがいない！」

紗耶香が突然叫んだ。

「なんだ？どうした？」

オレは何事かと紗耶香に尋ねる。

紗耶香は取り乱して言った。

「誠二！めぐ！めぐ見なかった！？いつの間にかいなくなつて！」

「お、おい、落ち着け！」

相田さん？

まさか浮き輪持ってたから流されたなんてことはないよな!?

「めぐー!めぐー!どー!どー!」

紗耶香は必死に相田さんと呼んでいた。

「誠二、どうしたの?」

異変に気がついた美香が近くに来た。

「相田さんがいなくなっただんだ!オレはビーチを探してくる!美香は紗耶香をどうにかしてくれ!」

「えっ!?!ちよつと...!」

美香の制止も聞かずにオレは砂浜の方へ駆け出した。

浮き輪を持っているから目立つはず。

「相田さん!」

声を出しながら探すけど返事はないし、もちろん相田さんの姿を確認することは出来なかった。

くそっ!

まさか本当に流され...いや、よく探すんだ!

そつだ!勇介!

「勇介!お前、相田さん見なかったか!」

「見てないっていつか首すら動かせない」

「そつか!」

「ちよ!待ってくれ!」

オレは勇介の叫びを無視して砂浜の周りにある林の方へ行ってみた。

確かこつちには公衆トイレがあつたはず。

単にトイレならいいんだけど。

そうあつて欲しいと願いながらトイレの方へ急いだ。

「相田さん!」

「きゃああ!」

「あつ!すいません!」

普通そうなるだろ!

オレはそのまま女子トイレの方へと入ってしまった。

見知らぬお姉さんと対面してしまったんだ。

そしてトイレの外に出てキョロキョロと周りを見てみると、さっきのお姉さんが出てきた。

「あつ！あなたさっきの！」

目の仇のように睨みつけながらオレを指差した。

「さつきはすいません！あの！水玉の浮き輪を持った子見てませんか？」

「え？ああ、さっきの子かしら。なんかあっちの民宿の方に誰かと行っただけだよ」

「え！？誰と！？」

「あら、知り合いじゃなかったのかしら」

民宿？

まさか誰かに連れて行かれたのか！？

「あ、ありがとうございます！」

オレはお姉さんが指差していた方向へ急いだ。

マズイぞマズイぞマズイぞ！

万が一のことがあったら…！

急げ！

急げ！！

急げ！！！！

全力で走るとそう遠くないところで民宿が見えた。

オレは勢いよく民宿の入り口を開けた！

「すいません！すいませーん！！」

はあつ、はあつ、はあつ…。

「はいはい、どちらさまですか？」

中からは人の良さそうなおばさんがエプロンで手を拭きながら出てきた。

「ここに水玉の浮き輪を持った子が来ませんでしたか！？」

「ああ、あの子の知り合いかい。ちよつと待っててね。理恵ー！ちよつと来てー！」

ん？理恵？まさかな。

「なーにー？あれ？」

「理恵先輩！？」

奥から面倒臭そうに理恵先輩が出てきた。間違いなく理恵先輩だ。

「誠二くんも来ちゃった」

「理恵先輩、今日は用事があつたんじゃ……」

「そうだよ、ここの民宿のお手伝い。私のおばさんがやってるところだから」

「そうだったんですか……。あつ、相田さん来てます？」

「うん、呼んで来るね」

よかった。

理恵先輩が連れて来たのか。

オレはほっと胸をなでおろしていると相田さんが出てきた。

おいしそうにアイスを食べている。

「あつ、椿くん。もう来たん」

「相田さん！！どうして何も言わずに来たの！みんなすごく心配してたんだよ！！探し回って！！」

オレはつい大声で怒鳴ってしまった。

「あつ……」

相田さんはしゅんとうつむく。

「ちよ、ちよつと誠二くん」

「みんなを呼んでくる」

オレはそれだけ言ってみんなを呼びに行くために民宿を出た。

「怒られちゃった……」

「だ、大丈夫だよ。ちゃんと説明するから。誠二くんも話しくらい聞いてくれてもいいのにな」

「どうしよう……椿くんに嫌われたら……私……」

「え？め、恵ちゃん？」

オレは早く二人に伝えないと思いきやまた走って二人の元に向かっ

ていた。

そして遊んでいたところまで戻ってくると…。

「あははは！」

「それー！！！」

「やったな〜」

あれ？

「アリサ先輩！」

「つじく〜ん、やっほ〜」

いざ戻ってみると二人はアリサ先輩と楽しそうに遊んでいた。

「どうして？」

「理恵のとこの〜手伝い〜。めぐめぐが来てること〜伝えに来た〜」

…………… あ〜〜〜、やっちまった。

どつりで相田さんも理恵先輩も落ち着いてるわけだ。

理恵先輩、何か言いかけてたよな。

一方的に怒鳴っちまったな…。

「誠二、めぐは見つけたの？」

「ああ、行くか？」

「うん！」

とにかく相田さんに会ったら謝ろう。

オレたちは民宿へとやってきた。

「あつ、誠二くん」

まず理恵先輩が迎えてくれた。

「あの、相田さんは？」

「裏庭にいるよ。さつきは…」

「行ってきます」

それに理恵先輩はにこつと笑って返した。

オレは裏庭へと向かった。

相田さんは縁側で元気がなさそうにうつむいていた。

「あ、相田さん…」

「あつ、椿くん…さつきは

「

「さつきはごめん！」

「え？」

「話しも聞かないで一方的に怒鳴って…。もっと落ち着いてれば…」

「…ううん。私も一度戻るべきだったし…」

相田さんは少しだけ笑って言った。

「でも、ごめん」

「椿くん、もう怒ってない？」

「え？怒るところか申し訳なくて…」

「うっ…。」

「よかったあ…」

「うわっ、なんて顔して笑うんだ。」

相田さんの安心した笑顔はすごく眩しかった。

一瞬、時が止まったかのように立ち尽くしていた。

「椿くん？」

「えっ！あ、み、みんな来てるよ！」

「うん！」

そして二人でみんなのところへ向かった。

「めぐー！心配したんだよー！」

「ごめんね、紗耶香ちゃん」

紗耶香は相田さんに飛びついていていた。

「理恵先輩、さつきは…」

「誠二くん、アイス食べる？」

理恵先輩は笑ってアイスクャンデーを差し出した。

「…はい！」

オレもそのことを理解してアイスを口にはおぼった。

美香は理恵先輩から話しを聞いたらしく、「ドジ」と、一言笑っ

て言っていた。

「理恵ー！あとはいいから遊んできなさい！」

「ありがとうー！！」

理恵先輩は勢いよく返事して…。

「と、いうわけで……レッツゴー!!」
それからは理恵先輩とアリサ先輩を交えて遊んだ。

「あゝ…疲れた〜」

「ガキみたいにはしゃいでたな、紗耶香」

「なによ、文句あんの？」

今は海水浴場を出てもう帰っているところだ。

理恵先輩とアリサ先輩は今日は民宿に泊まるみたいだった。

「誠二も人のこと言えないでしょ？」

「お前と紗耶香から逃げてただけだっつーの」

美香と紗耶香は何かといたずらしてくるからな。勇介だってひどい目に。

ん？

勇介…、勇介！

「勇介忘れてきた！」

「オレはここにいる！」

うおっ！

背後から忍び寄っていた影。

「ど、どうやって出てきたんだ？」

あれじゃ身動き取れなかったはず。

「ライフセイバーの人に文字通り命を救ってもらった。もちろん、友達に埋められたなんて言っていない」

それは己のプライドからか？オレたちをかばったか？

「かくれんぼだと言っておいた！」

…さすがに無理な言い訳だろう、勇介。

天然のサウナでシェイプアップした勇介は帰りも誰にも相手にされず一人歩いていた。

「っ、椿くん」

「あ、なに？相田さん」

なにかもじもじしている相田さん。

「あ、あのさ、明日こっちで夏祭りあるんだよね？」
そうなんだ。

明日は柳ヶ浦町の年に一度の夏祭り。

この辺では上がる花火の数が多くて人が集まり賑わう。

「よ、よかつたらさ、その……夏祭り、い、一緒に行かない？」

「うん、いいよ」

「ほ、ホント!？」

「美香も行くし、みんなで行こう」

「あ……う、うん。みんなで行こう……」

ん？急に元気なくしてどうしたんだ？変なこと言ったか？

それから紗耶香とも明日の夏祭りの約束をしてその日は別れた。

ちよつと疲れた一日だったけれど楽しかったな。

明日は夏祭り。

一年に一度のお楽しみだ。

今年は相田さんと紗耶香も一緒に楽しくなりそうだな。

夏祭り

海に行った翌日。

今日は柳ヶ浦町の夏祭りだ。

会場は海の近くの広場。

毎年いろんな出店が出て多くの人で賑わう。

昨日の海の帰り際に相田さんと海に行く約束をした。

毎年、美香と一緒にに行っているから美香も一緒だ。紗耶香も一緒に行く予定になっていた。

当然夏祭りは夜からなんだが…。

「何の用だ？」

「なによ、何か用事がないと来ちゃいけないわけ？ただの暇つぶしよ。めぐは用事あるみたいだし」

突然、紗耶香が家にやってきたんだ。

人は常にあらゆる事態に対処するようにあらかじめ予想して動くと聞いたことがあるが、このことは全くの予想外な出来事だった。

「裏はなんだ？」

「疑い深いわね、ただの暇つぶしって言うてるでしょ」

紗耶香のことだ、何か企んでいるに違いないとふんだんだが…。

「暑いんだから、早く家にあげなさいよ」

人の家に突然来たあげくにこの言い草、大した奴だな。

オレも暇していたし、特に断る理由も見つからなかったので紗耶香を招き入れることに。

当然のように母さんはまたうるさくいろいろ聞いてきたが、全否定してやった。

紗耶香とどうこうなるなんて考えただけで先が思いやられるぞ。

「で、何するんだ？」

とりあえず部屋に来たんだがもちろん何も用意していない。

「なんでもいいわよ、とにかく暇がつぶせばいいの」

「…ゲームでもするか？」

と言うか、オレの部屋にはゲームくらいしかおもしろいものはない。紗耶香と二人でトランプなんてしてもなあ。

「いいわよ、あれやりましょ。太鼓のなんとかってやつ」

「太鼓の鉄人な、いいのか？オレうまいぞ？」

「私だつてパーカッションやってるんだから、そんな大差ないですよ」

ふふん、目に物見せてくれる。

その強気がいつまで持つかな？

そして太鼓の鉄人の準備をしていざ対戦してみた。

ドドドンドドドンドドドンドン！！

…あ、危なかった。

なんとか勝ちましたものの僅差だったんだ。

「まあ初めてにしちゃ上出来じゃない。さ、次いくわよ」

初めてだと！？

冗談じゃない！オレがこの曲をここまで極めるのにどれだけかっただと思ってる！

こもまままではアリサ先輩に続き紗耶香にまで鉄人のプライドを粉々に砕かれてしまう。

「な、なあ紗耶香。もっと楽しいことしないか？」

オレはにこやかに聞いてみた。

「楽しいこと？……あ、あんたまさか……！！」

そうだなあ、ゲームしかないし、他に紗耶香も出来てなおかつオレが紗耶香を屈服させられるもの……。

ん？

「どうした？紗耶香」

紗耶香はどうしてしまったのか部屋の隅で体をすぼめてうずくまっていた。

「い、いや……、来ないで……！！」

な、何事だ！？

紗耶香はオレを恐怖の対象を見るような目で見て、肩を抱いて震えていた。

「お、おい、何を言っている?」

「襲わないで…!」

理解不能な発言。

まさか、楽しいことしようって言ったからそのことを…。

「さ、紗耶香?楽しいことってというのは別に…」

「いやー!来ないで変態!」

「誠二!?!」

おっ!

ナイスタイミング美香!

さあ、この誤解を解いてくれ。

「紗耶香ちゃん?ど、どうしたの?」

「み、美香ちゃん…。助かった!誠二が私を襲おうと!」

おいおい!

美香にまで誤解されるようなことは言うな!

「み、美香。勘違いするなよ?」

そう言うものの美香がオレを見る目が軽蔑のまなざしへと変わる。「誠二ってそんな人だったんだ。……見損なつた。女の子を襲うと最低。紗耶香ちゃん、私の家行こう。すぐ近くだから」

な、なんだ?なにがどうなっている!?

「う、うん。ありがとう」

「あっ!おい、待て」

止めるのも聞かずに行ってしまった。

ホントに全くの予想外な出来事だ!

オレか?オレが悪いのか?

否ー!!

……まあでも、美香に任せておけば大丈夫だろ。

「紗耶香ちゃん、何があつたの？」

「誠二とゲームしてたら急に笑って楽しいことしようって。あれは何かごまかしてる顔だった」

「ゲーム？何のゲームしてたの？」

「あれだよ、太鼓の鉄人」

「…勝つたの？」

「ううん、初めてだったし。でももう少しで勝てたと思う」

「初めて…ってそれは誠二に言った？」

「え？うん」

「あー…じゃあたぶん、誠二はそのゲームで負けたくなかつたんだと思うな。太鼓の鉄人には自信持ってたし…」

「でも、笑ってごまかしてたような…」

「負けず嫌いだから、しかも自信持つてるゲームで負けたくないから気付かれないように笑ってごまかしてたんじゃないかな」

「え？えっ！あつ、や、やだ、私ったら…」

「きゃー！かわいい！紗耶香ちゃんもそんな顔するんだね！誠二のここに行こう？何とも思っていないはずだから」

「でも…恥ずかしい」

「大丈夫だよ、さ、行こう」

「う、うん」

「…そろそろかな。」

「誠二」

ほら。

おそらくは美香が誤解を解いてくれたはずだ。

まずは美香が部屋に入ってきて、その後ろにこそこそと紗耶香がついて来ていた。

「紗耶香、何を考えてた？」

「えっ！？あ…いや…その…」
「なんだと!？」

紗耶香は顔を真っ赤にしてうつむいた。
オレは不覚にも一瞬かわいいと思ってしまったんだ。
しかし…。

同時にこのままいじめてやろうという気持ちが芽生えた。

「さあ、何を考えていたのか教えてくれ、わけがわからないんだ」
「うう…。」

「誠二！いじわるしないの！」
「美香よ…。」

「美香も話しくらい落ち着いて聞いてくれたらよかったのに…」

「うっ…そ、それは…」

くくくっ、たーのしいっ!

そうか、オレはSだったんだな。

「も、もういいじゃない！せっかく紗耶香ちゃんもいるんだし何かして遊ぼうよ！」

まあいいだろう、このまま続けていたら紗耶香の仕返しが怖そうだからな。

それから夕方まで三人でトランプやらボードゲームやらして遊んでいた。

すると…。

ピンポーン!

誰かが来たようだ。

「誠二！お客さんよー！女の子ー！」
「女の子？」

あ、相田さんかな？

母さんに部屋にあげるように伝えた。

「こ、こんにちは」

部屋に挨拶をしながら入ってきた相田さんはなんと浴衣姿だった。
「めぐー！かわいい!！」

「えへへ…ど、どうかな？椿くん
いや…これは…」

「すごく似合ってるよ！かわいい！」

「へへ…」

裾の方に大きなひまわりが描かれた水色の浴衣がよく似合っていた。

普段は下ろしている髪も束ね上げていて、女らしさが際立っていた。

少し照れた表情がまたかわいい。

「わ、私も！」

美香は相田さんの姿を見てすぐさま部屋を飛び出して行った。

相田さんの姿を見て着替えに行ったんだろう。

「あれ？美香ちゃんは？」

「着替えに行ったんだと思うよ。会場に行く途中だから後で呼びに行けばいいよ」

それから美香の代わりに相田さんが加わりトランプをしていた。

時間もいい具合に過ぎてそろそろ向かおうということになり、三人で美香を呼びに行った。

会場までの途中で言っても美香の家はすぐ近く。

特に話しをするわけもなく、美香の家に着いた。

ピンポン。

「はい」

美香の家から出てきたのは美香のお母さんだ。

オレの母さんから口撃くちげきを受けた本人。

「こんにちは、美香は準備出来ました？」

「あら誠二くん。もう少しかかるかな。入って待ってる？」

「すごく優しい人なんだ。」

美香をあんなにしつかり育てたんだから。

「いえ、ここで待ってますよ」

「そう。ところで、いつ美香と結婚するの？」

「け、結婚!?!」

相田さんと紗耶香は声をあげて驚いていた。

「おばさん、そんな子供の時の話しなんて…」

「あら、誠二くんだったら全然OKよ!ふふふ…、美香の様子見てくるわね」

そうやっておばさんは家の中へ戻って行った。

それを見計らったかのように。

「つ、椿くん、美香ちゃんと結婚しちゃうの?」

相田さんが少し不安そうに聞いてくる。

「子供の頃に言っただけだよ。よくある話しでしょ?」

「う、うん…」

なぜかこの時の相田さんは悲しそうな顔を見せた。

「おまたせ!ごめんね!」

美香が慌しく出てきた。

「ど、どう?」

顔を赤らめて尋ねてくる。

赤い浴衣で所々に小さい白い花が描かれていた。

相田さんに負けじ劣らず似合っている。美香もチャームポイントのヘアピンを外して髪を結っていた。

「よく似合うよ。ばっちりだ」

「あはっ」

「あーあ、私も浴衣着てくればよかった」

紗耶香が残念そうに嘆く。

いまさらだからな。オレだって普段着だし。

しかし、浴衣姿を見ると夏祭りって雰囲気だな。美香だって毎年着てるわけじゃないからこういうのもいいよな。

「さ、行くか」

「あれ?変態は?」

紗耶香が勇介のことを気にするなんて珍しいな。

「言っただけだったな、勇介は去年からおじさんがやってる出店を手

伝ってるんだ。もう向こうにいるはず」

と、いうわけだ。

勇介はおじさんがやっている焼きそば屋を手伝っている。

手伝いを始める前は毎年美香と勇介と三人で祭りに行っていた。

「じゃ、問題なしね、行きましょ」

おう、紗耶香は問題である変態勇介を排除する予定だったのか？

会場までの道のりでは、美香と相田さんのサンダルのカランカランという音が風情を漂わせていた。

周りも浴衣姿の人が多くて、この雰囲気だけでも十分に祭りを満喫している気分になる。

会場に着くともう人は多かった。

「やっぱ人が多いなあ」

出店の間の細い通路をとこ狭しと人が歩いていった。

祭りの独特の雰囲気、音に気持ちが高まる。

「花火はどのあたりに見えるの？」

紗耶香が聞いてくる。

「実はとっておきの場所があるんだ。花火の時間が近づいたら案内してやるよ。それよりはくれるなよ？お前と相田さんは特に」

二人はこの辺の地理に詳しくないからな。それにこの人の多さ。いったんはぐれたら合流するのは至難だ。

「わかったわ」

「うん」

二人の了解も得たし、まずは…。

「どうする？」

来ることしか考えてなかったからなあ。

「誠二、あれで勝負よ。今日のケリを付けるわよ」

「勝負事好きなんだね、二人とも」

紗耶香が指差したのは金魚掬いだった。

夏祭りの定番だな。

「望むところだ」

ふふん、この祭りの金魚掬いは毎年同じ人が開いている。コツはわかってるんだ。悪く思うなよ、紗耶香。

「おじさん二人！」

「はいよ！」

さっそく勝負開始だ。

「掬った金魚の数で勝負よ」

「おう」

よーい…。

始めい！

「よっ、ほっ、はっ」

「そりゃっ、ほいつ、よっし」

ぐぬぬ、紗耶香の奴、やるな。

オレと変わらないペースで掬い上げている。

負けん！

紗耶香に負けるとより一層悔しいんだ！

「うおおおおお！！」

「うりゃああああ！！」

ざわざわ…。

ざわざわ…。

「恥ずかしいね、恵ちゃん」

「そ、そうだね」

「向こう行こうか」

「うん」

いつの間にかオレと紗耶香の周りには見物人がたくさん集まっていた。

オレも紗耶香もそんなことには気が付かずに勝負に集中していた。

……………。

「あっ！」

紗耶香の掬いが破けた。

ふふん、もらったな、この勝負。

「あー！ー！ー！」

オ、オレもやっちまった。

ここまでか、この勝負。

結果は…？

一匹、二匹、三匹……。

二人で一匹ずつ確認しながら数えていく。

そして…！

「そ、そんな…」

オレが一匹負けていた…。

「やった！勝ったわ！悔しいでしょ？悔しいって言うてみなさいよ」

く、くっそー！

ここぞとばかりに勝ち誇りやがって！

「いやー！兄ちゃんもよくやったぞ！」

え？

「いい勝負だった！」

「ねえちゃんやるなあー！」

「才能の無駄遣い…！」

いつの間にかヤジウマが集まってきていて勝負の一部始終を見られていたようだ。

オレと紗耶香の名勝負に歓声を贈っていた。

は、恥ずい…。

紗耶香の方を見ると紗耶香も顔を真っ赤にさせていた。

（紗耶香！）

（うん！）

オレ達は小声で合図して…。

「逃げるー！！」

一目散にその場を走り去った。

そういえば美香と相田さんがいない。

…逃げたな。

しばらく走り回っていると美香と相田さんを見つけた。今思えば

よくこんな人が多い中で見つけられたもんだ。

二人はわたがしをおいしそうに頬張っていた。

「はあっ…はあっ…」

「あれ？誠二。勝負はどうだったの？」

美香がオレに気が付き金魚掬いの結果を聞いてくる。

「負けた…オレは負けたんだ。しかも公衆の面前で」

がつくりと肩を落とす。

「勝った！私は勝ったんだ！」

くそ、いつまでも…。

「あ…はは。白熱した戦いみたいだったみたいだね。誠二もそんなにがつくりしなくても。たかが金魚掬いでしょ？」

「たかが金魚掬い。されど金魚掬いなんだよ」

「そ、そうなんだ」

いや、何の勝負にしる紗耶香に負けるのは悔しい。

「めぐ、ちよつと小腹空いちゃったな。何か食べない？」

「うん。何にする？」

紗耶香と相田さんがそんな話しをしていた。

「それなら勇介のところにっこうぜ。なかなかうまい焼きそば作ってるから」

オレの意見に紗耶香は嫌そうだったが、相田さんが乗ってくれたおかげで行くことになった。

事前に勇介から出店の場所は聞いていたから…。

確かこっちの方だって言ってたよな。

勇介からの情報を頼りに狭苦しい通路を歩いて行く。

あ、あった。

そして少し歩いたところで勇介のいるやきそば屋台を見つけた。

「美香も食うか？」

「うん」

「じゃあ四人分だな、買ってくるよ」

オレは個数を確認して勇介の出店に来た。

「よ、勇介」

「お、誠二。らっしやい！焼きそばか？」

「ああ、四人分くれ。お前のおごりで」

「は？ふざけんな！」

「はあ…、せつかくかわいい美香と相田さんの浴衣姿を拝ませてやろうと思つて来たのに…」

「そろー…」。

「よ、四人分でいいのか？」

「単純な奴め。」

「急ぎで頼む。紗耶香が腹を空かせてるから」

「任せろい！」

「うん、来年もこの手でタダ焼きそばを食べよう。」

「オレは勇介が焼きそばを作っている間に美香と相田さん呼びに行つた。」

「美香、相田さん、ちょっと来てくれない？」

「何？」

「え？私も？」

「うん、相田さんも。っていうか特に相田さん」

「相田さんは頭の上にハテナマークを浮かべながらもついて来た。」

「美香も特に気にした様子もなく後をついてきている。」

「戻るともう焼きそばは出来上がる様子だ。」

「出来たか？勇介」

「おう！ほれ、四人分」

「ほう、なかなかさばけてるじゃないか。女のこととなるとさすが一生懸命だな。」

「せ、誠二。で？」

「おう、美香！相田さん！」

「オレは後ろで待っていた二人を呼んだ。」

「ちよつと？何？」

「あ、こんばんは。堀川くん」

美香は少し面倒くさそうに、相田さんは律儀にも勇介にあいさつをしている。

「どうだ？勇介」

「おお…すばらしい…！」

勇介は感嘆の声を上げている。

「じゃ、もういいな」

「お、おい待てよ！もっとこうさあ、似合ってる？とかそういうお決まりのことがあるじゃないか！」

「お前につき、ないな。焼きそばサンキュー！」

オレたち三人は無事に焼きそばをゲットして紗耶香の元へ帰ってきた。

「誠二、私たちをダシに使ったね？」

「え？ダシ？」

「い、いや、はははっ。勇介が二人を見たがってたしき。かわいい二人だから」

「そ、そんな、かわいいだなんて」

「恵ちゃん、そそのかされたらダメだよ」

「え？」

「い、いいじゃないか。タダで焼きそば手に入ったんだし」

「それに…特に恵ちゃんに来て欲しいってどういうことなのかな？」
うっ、なぜそんなことをいちいち覚えているんだ。

「さ、紗耶香！焼きそば！」

ここは紗耶香を使って回避だ！

とりあえずは焼きそばが冷える前に食べようということで、割かし人が少なくして落ち着ける場所へ移動した。

「椿くん、花火が見えるとおきの場所って？」

「ああ、あの丘の上だよ。あんまり人がいなくて水中花火もきれいに見えるんだ。毎年あそこで見てるんだ。なあ、美香」

「うん、そうだよ。全部の花火がきれに見えるんだ」

「そっか、毎年…」

相田さんはまた少し悲しそうな顔を見せた。

「へー！楽しみだわ！わざわざこっちまで来たんだからしょっぱい花火なら許さないわよ？」

「オレに花火の文句を言うなよ」

そんなことを話しながら焼きそばを食べていた。

その花火がよく見える丘は少し離れたところにあるからそろそろ移動しようと思いを浮かせた。

人ごみをかき分けながら前に進んで行く。

……………。

な、なんだ？

やけに逆方向へ歩く人が多い。進むのが困難なくらいに。

「な、なんなんだ？」

「今日は有名人が来てて向こうでイベントやってるって。誠二知らなかったの？」

美香がそう教えてくれた。

そんなこと知らなかったな。それならこの人の多さにも納得がいく。

「紗耶香、相田さん、はぐれないようについてきて！」

「ええ」

「う、うん。きゃっ！……………あっ！つつ、椿く」

ん？何か聞こえたような……………。

え？

相田さん？

「紗耶香！相田さんは！？」

「え？め、めぐ！？」

くそ！はぐれた！

よりによってこんなに人が多い中で！

携帯……………！

プルルルルル……………プルルルルル……………。

出ない……………。

くそ、気付かないのか!?

「美香! 紗耶香を連れて丘のところ! オレは相田さんを探してそ
ちに行くから!」

オレはそれだけ言って駆け出した。

どこだ?

どこにいる?

「相田さーん! 相田さーん!」

大声を出してはみるが人ごみにかき消されてしまう。
探し回るしかないか。

それから出店が並んでいるところ、焼きそばを食べた場所を探し
たが相田さんは見つからなかった。

ドンツ!

「いってえな!」

「す、すみません!」

くっそ、こんなに人がいる中で相田さんを探し出すなんて…。

「はあっ、はあっ」

オレはとりあえず人ごみを避けて出店の外側にやってきた。

息を整えながら歩いてみる。

すると見覚えがある浴衣を着た女の子が木の幹にうずくまってい
るのを見つけた。

「相田さん!」

オレのその声にその女の子は顔を上げ、オレに気がついてこっち
に走り出した。

「椿くん!」

よかった。

無事みたいだな。

オレは安心して大きく息を吐き出した。

ところが、相田さんの走る勢いは止まる様子を見せない。

「椿くん!」

「うわっ! あ、相田…さん?」

そのままの勢いでオレに抱きついてきたんだ。

「あ、あの…」

「こ、怖かったよお！うわああああん！」

あっ…。

そうか。

全然知らない場所で一人ぼっちになって…ホントに怖かったんだろうな。

相田さん…。

相田さんの髪の毛からほのかにシャンプーのいい香りが漂ってくる。

「こ、こんな時ってどうすればいいんだ？」

優しく肩を抱いてやればいいのか？

いや、でも、そんなことされたら嫌がるかも知れないし…。このまま気の済むまでこうさせておくか…。

そう思っただけで立っていたんだけど相田さんは全然離れる様子を見せない。

オレも冷静になってだんだんと周りの視線が気になってくる。

「あ、相田さん、みんな見てるよ？」

オレがそう言つとスツと身を起こした。

「ごめんなさい、もう大丈夫」

相田さんは笑いながらそう言った。

「ごめん、オレがよく見てれば…」

「ううん。……… 椿くん、また助けてくれたね」

え？

「またつて？」

「最初はその時…。だから今の私がいる」

あの時って…？

「椿くん、あ、あの…私、椿くんのこと」

ドーーーーーッ！！！！

あっ、花火だ。

もうそんな時間か。

「キレイ……」

相田さんは暗い夜空を明るく照らす花火をじっと見つめていた。

「美香と紗耶香はもう丘の上にいるはずだから、行こうか？」

「……もう少し、このままでも……いい？」

「え？ああ、別にいいけど」

「ありがとう……誠二くん」

え？

「相田さん、何て……？」

「……」

相田さんはじーっと花火を見つめていた。

その顔はとても満足そうな笑顔だった。

オレもその笑顔を見て少しだけ嬉しくなり、一緒に夏の夜空を見上げていた。

花火が水中花火に変わって、丘の方がよく見えるからと美香と紗耶香の元に向かった。

相田さんは変わらずずっと笑顔だった。

花火のおかげか歩く人並みも穏やかになっていて目的の丘にはすんなりと着いた。

「あ、めぐ！大丈夫だった！？怪我とかしてない！？」

紗耶香が相田さんを見るなり心配そうに駆け寄ってきた。

「うん、誠二くんが見つけてくれたから」

「えっ……恵……ちゃん？」

美香は何かに驚いたように声を上げた。

「美香、遅くなって悪かったな。いろいろ探し回ってやっと見つけたさ。それから」

「誠二！」

「うん？」

「花火だよ……」

ドーーーーー！

その花火を見つめる美香の表情は相田さんとは対照的で寂しそう、いや、少し悲しそうな表情だった。

オレはそれ以上声をかけることが出来ずに、二人ただ黙って夜空を見上げていた。

時折、美香の方を見ても、美香は本当に花火を見ているかわからないように、ぼーっと、ただ夜空を見上げているように見えた。

「めぐ、上機嫌だね」

「そんなことないよ、花火、キレイだよね」

この花火が終わりを迎えると同時に、夏祭りも終わりを迎えた。

花火が終わると美香の表情はいつも通りに戻り、「あつっーい、蚊に咬まれたよー」なんて悪態をついていた。

このとき美香が何を考えていたのかわからない。ただ、翌日からいつもの日常が戻ってきた。

そして変わったのは相田さんがオレを名前で呼ぶようになったこと。

何がそうさせたのかはわからないが、悪い気分じゃないことは確かだ。

じゃあオレも名前で呼ぼうかなんて思ったりもしたけど、なんか照れくさくて結局「相田さん」のままだ。

オレはその後、学生の宿命とも言える夏休みの宿題に追われて、長い、いろんなことがあった夏休みの終わりを迎えた。

吹奏楽コンクール、海、夏祭り。

いつもは美香と勇介と三人だった。

今年は新しい仲間と。

来年もまた…。

こんな関係がいつまでも続けばいいなと思っていた高校生活最初の夏。

体育祭

夏休みも終わり、オレの高校生活は二期へと移り変わった。

まだまだ外は暑くて海の涼しさが恋しくなる。

夏休みの間、顔を合わせなかった同級生たちは変わらないやつもいれば、どれだけ遊びに行ったんだってくらい、真っ黒に日焼けしているやつもいた。「久しぶり」と声を掛け合うのがどこか気恥かしい。

そんな新鮮な感じが感じられる二期で、まず初めの大きなイベントが体育祭だ。

定期テストじゃ泣き目を見るオレだけど、元陸上部って意地で頑張らないとな。

体育祭ではもちろんいろんな種目がある。

100m走、400mリレー、1500m走、障害物競争や玉転がしなんかもある。

組み分けは各学年のクラスで割り当てられる。

一年、二年、三年の一组は紅組、二組は青組、そんな感じで一年から三年まで協力し合って競うんだ。

これだと美香と勇介、紗耶香とも敵同士になるな。

紗耶香にだけは負けられん。

まあでも、体を動かすことは好きだし、純粹に楽しんでいこうと思っ。

その体育祭でオレが出場する種目は100m走、二人三脚、借り物競走だ。

この種目が決まってから、実はこそそ走り込みなんてこともしていた。走ることはやっぱり負けたくないからな。

こんなオレでも中学の時は体育祭ではヒーローだったんだぜ？

そして二人三脚は男女ペアで組まなくちゃならない。そのお相手は相田さん。どうも相田さんは運動が苦手らしいからな、オレが頑

張らないと。

借り物競走は運だろ。

体育祭前日はみんなでテントを張ったり、グラウンドの整備や飾り付けや道具の準備など一日慌ただしかった。

天気は予報では晴れ。雲一つない青空が広がるんだそう。体育祭日和ってやつだな。

そして体育祭当日。

学校へは指定のジャージで登校する。これだけでも特別な感じがするんだよな。

全校生徒がグラウンドに集まり長々と校長の話を聞く。

お決まりのことなんだがこれがないと何でも始められないのかね。そして前年の優勝組の代表の人が選手宣誓をして体育祭が幕を開けた。

その最初の種目である100m走。

赤組の一年であるオレが先陣切って幸先いいスタートをきりたいもんだ。

「誠二、ここで勝負な」

なんと、勇介と同じグループだったんだ。

「お前が100mでオレと勝負？オレが元陸上部のエースだってこと忘れたか？」

「そんなの過去の話しだね！ほれ、何か賭けようか？」

なにがこれほど勇介の自信をかき立ててるのか。

「じゃ、負けた方が一日奴隷な。…くつくつく…」

どれ、目に物みせてくれる。

「や、やっぱやめようかな…」

「いまさら引くなよ、勇介」

一日せいぜいこき使ってやるうか。

そしていよいよ勝負の時はやってくる。

もちろん負ける気なんてさらさらない。勇介専用の秘策もある。

『位置について…よい…』
バンツ！

「あっ！水着の美女！」

「なに！？」

勇介はオレが叫ぶとまんまと周りを見渡しスタートで大きく遅れをとった。

はっははは！

ってかマジでだまされるとは思わなかったが。

オレは勇介との勝負もさることながら、他の人にもある程度の差をつけて一着でゴールした。ふっふふ、走りこみの成果だな。

勇介は結局ドベだ。

「ちつくしょー！」

勇介はかなり悔しがっている。

ふふふ、勝負は時に非情なものなり。

「水着の美女見逃した！」

「そっちかよ！」

アホだ：ほんまもんのアホだ。ある意味平和だな。

勇介は最後までキョロキョロとしながら自分の組へと戻って行った。

勝負のこと完全に忘れてるな、あいつ。すっかり一日働いてもらうけどな。

それから自分の出番まで応援をしていた。

同じ組の先輩では千秋部長がいたんだ。

走りながらこっちに手なんか振ってたよ。それでいて一着。やっぱり不思議な人だぜ、部長。あえてすごいとは言わないぞ。

今のところうちの組は成績優秀だ。

「せ、誠二くん」

「ん？相田さん、どうしたの？」

相田さんがもじもじしながら話しかけてきた。

「いい感じだよね」

オレたち赤組の成績のことか？

「そうだね、このままなら優勝かな」

「あつ…」

そのオレの言葉になぜかダメージを受けていた。

「え？なに？」

「わ、私、運動苦手だからこのままだと二人三脚失敗しそうだと思う…。だ、だから練習したいなって…」

なるほど、このいい流れを断ち切ってしまうかも知れないっていうのが怖いんだな。

「いいよ、向こうの方でやろうか」

「う、うん！」

そしてテントの裏の方でオレたちは二人三脚の練習を始めた。

オレが右で相田さんが左。まずは足を固定してつと…。

「じゃあいくよ」

オレはそう言って相田さんの肩に腕を回した。

「ひゃあつ！」

相田さんはすぐくびっくりしてしまった。

「こらーーーーー！！！」

うわっ！

なんだよ…。

「って紗耶香！」

紗耶香が遠くから勢い良く走ってきていた。

「誠ーーーーー！」

このままドロップキックでも喰らいそうな勢いだな。

「めぐから離れなさい！」

目の前にやってくるなりそんなことを言い放った。

「離れるつたつてなあ、二人三脚の練習してんだよ」

「そんなの本番だけでいいでしょ！」

紗耶香はふーッふーッと鼻息を荒くして威嚇していた。

「めぐも！本番だけでいいよね？」

「わ、私は練習したいな」

「うっ……、め、めぐがそう言うなら……。誠一！めぐに変なことを
んじゃないわよ！」

「しねえよ！」

紗耶香は言いたいことだけ言っ行ってしまった。

「相田さん、大丈夫？」

「う、うん。大丈夫だから、練習しよ」

よし、今度はいけそうだな。

そしてまた相田さんの肩に腕を回した。

また少しピクンと力が入ったのがわかった。

「相田さん？」

「だ、大丈夫だよ」

「じゃあ、まずはオレが左足、相田さんが右足から、いくよ？」

「う、うん」

よし、いっちにい、いっちにい、いっちにい、いっちにい……。

うん、ちゃんと出来るじゃん。

タイミングはバッチリだった。

「じゃあ少しペースあげるよ」

「えっ！？ちよ、ちよっと……」

それ、いっちに、いっちに、いっちに、いっちに、いっちに……。

まだもう少しいけそうだな。

「はあっ、はあっ……」

「もう少しあげるよ？」

「は、はあっ……！、え？」

いちに、いちに、いちに、いちに、いちに……！

いちに、いちに、いちに、いちに、いちに……！

「はあっ……！だ、だめ……！誠一く……！」

「いちに、いち……うわっ！」

ドスンッ！

あいたたた……。

ペース上げ過ぎたか…な…。

サー…。

オレは全身の血の気が引くのを感じた。

「いたた…あっ…」

「い、いや…こ…これは…」

二人三脚の練習だから当然二人とも転んでしまったんだけど、オレの左手が相田さんの豊満な胸に…。オレは頭がてんぱって固まってしまっていた。

「……誠二くん…手…」

「…ごっ、ごっごっごめん！」

慌てて手をどかす。

「……………」

ど、どうすればいいんだ？な、なんとか…。

「えっち…」

相田さんがいたずらそうな顔で見ながら言った。

「い、いや、あの…こ、これはですね…」

「ふふ…。誠二くん、いきなりペース上げすぎだよ」

「う、うん！決して大きかったなんて思ってないから！」

カアアアア…！

オレは「……………」！何を言ってるんだ……………！！

相田さんは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

「ごっ！ごめんごめんごめん！ホントごめん！」

「……もう…誠二くん…つてば…いいよ」

オレが慌てていると相田さんは顔を上げてニコツと笑ってくれた。

ほっ…。

お、怒ってはいないみたいだな。

「でも…」

うっ…。

な、なんだ？

「今度はゆっくり、ペースアップしてね？」

借り物競争は途中に置いてある紙に書いてあるものを誰かから借りてきて、ゴールで待っている奈美先生がそれを認めてゴールになる。

つまり奈美先生がノーと言えばまたやり直した。

借りるものは慎重に選ばないとな。

そして…。

『位置について…よい…』

バンッ！

ダーツシュ！

オレは見事なスタートを切ってトップで紙が置いてあるところまでやってきた。

ここだ。

変なもの引くなよ？

オレはいくつか並んでいる紙の中で一番右端に置いてあった紙を取り、中を確認した。

さあ、何だ！

……………。

これはなんだ！？

中には”美少女”と書いてあった。

なんじゃこりゃ！

美少女だと！？誰がこんなことを！

ぐぐ…、嘆いている暇はないな。

他の生徒はすでにあちこちに走り始めていた。

美少女…美少女…美少女…。

そ、そうだ！

なんとというひらめき！

オレはある人物を探して走り始めた。

そして…。

「美香！」

美香のもとへやってきたんだ。

「なに？」

「うっ、やっぱり機嫌悪いな。」

「美香！美香が必要なんだ！一緒に来てくれないか？」

「そう言っただけは借り物が書いてある紙を見せた。」

「えっ、こ、これ…。わ、私でいいの？」

「何言ってるんだ。美香以外いないだろう。」

「そ、そんな…。誠二…。い、急ごう！」

そしてオレは美香を連れてゴールへ向かった。

「はい、椿くんゴール！さーて、中身はなにかなー？」

奈美先生が確認する。

「ふ〜ん…」

「な、なんですか」

奈美先生はニヤリとしながらこっちを見ていた。

「ま、川口さんなら文句なしの美少女ね」

「そんな、先生ったら」

美香は両手を頬に当ててくねくねしている。

「うむ、美香の機嫌も直ったようだな。一件落着ー！」

機嫌が直るところか上機嫌になった美香はそのままオレの組までついて来てしまった。

そこで一人場違いなことに気づき、慌てて自陣へと戻っていった。

「誠二くん、よかったね。美香ちゃんと仲直りしたんだね」

「う、うん。まあ」

その後もいろんな種目や応援合戦なんてこともあった。

オレの出番は終わってしまったのであとは応援に専念だ。

序盤はいい感じだったんだけどな、後半からは紗耶香がいる緑組が追い上げてきていた。

そして体育祭の全種目が終了して結果発表。

結果は…。

『緑組の優勝です』

あーあ…、優勝出来なかったか。

でもま、オレは全部トップだったしね、一応満足。
なんだけど…。

「あーはっはっは！また私の勝ちね！」

「紗耶香、オレはお前に負けたわけじゃない、緑組に負けたんだ」

「負けたいいわけもよろしいこと！勝ちも勝ちよ！」

ぐぐぐ…、そこまで言われるとイラツとくるぜ。

なにはともあれ、これで今年の体育祭は終わりを迎えた。

今日はいい汗をかいたぜ。

天気もよかつたし。

中学の時とはまた変わった感じで楽しめた。

次のイベントは文化祭だ。

季節は秋に変わる。

文化祭

体育祭が終わり、平穏な日常を過ごしながら季節は秋。

少しだけ肌寒くなって、みんな制服の衣替えも済んでいた。

三年生が抜けた吹奏楽部は理恵先輩が部長としてみんなをよくまとめていた。

練習中にもオレ達パーカッションだけじゃなくて、他のパートにも気を配ってたりする。いつも忙しそうに動きまわっていた。それでも充実しているんだろう、前よりも楽しそうに部活をしている。

さて、そんな吹奏楽部なんだが、ただ今文化祭に向けて練習中なんだ。

文化祭ともなれば当然、オレたち文化部に活躍の場がまわってくることになる。

オレ達、吹奏楽部の文化祭での出番は文化祭閉会式の直前にある。体育館のステージで演奏したあとそのまま閉会式が行われて、そこで生徒会が歌を歌うらしいんだ。そこでの伴奏もオレ達がやるってわけだ。

ステージで演奏する曲は四曲。

吹奏楽曲三曲に、生徒会が歌うj・pop一曲の合計四曲。

文化祭の前にテストもあるし、クラスでの催し事も用意しなくちゃならない。クラスの方の準備もあるから練習時間っていうのはあんまりないんだ。だから結構頑張らないといけない。

放課後はクラスの準備もさることながら、文化祭の曲練習にも励んでいた。

でも今は美香と紗耶香で文化祭のクラスの出し物について話しているところなんだ。

「誠二、あんたんとこのクラスなにをするの?」

「オレたちはお化け屋敷だよ」

「えっ、お、お化け屋敷?」

美香はおばけとかそういうった類が苦手なんだ。

「おう、美香、お前も来いよ」

「う、うん、い、行けたら行こうかな」

ふふふ、こつこつやつなら脅かしがいがあるってもんだ。

「紗耶香のそこは？」

「うちは焼きそば屋よ、ベターでしょ」

「それも言うならお化け屋敷だってベターだろ。美香のそこは？」

「え？う、うち？うちはー…コ…コスプレ…」

なに？

「何だつて？」

「コ、コスプレ喫茶！！」

コスプレ喫茶……よくある話しっちゃよくある話しなんだが美香がコスプレか…。

「ぷぷぷつ、か、必ず見に来るからな」

「い、いい！来なくていい！」

そんなに顔を赤くされたらますますいじりたくなってくるじゃないか。

「はい！みんなおしゃべりはそれくらいにして練習練習！保護者の人たちだつてくるんだから下手なところ見せらんないよ！」

理恵先輩が部長らしく仕事をしている。

「そうだよなー、四曲とかコンクールの時よりか曲数多いんだし、しつかり練習しないとな。」

オレのクラスでは、吹奏楽部であるオレと相田さんはクラスの準備をある程度免除されていた。放課後の部活に大体の時間を使えるように。担任が吹奏楽部顧問の奈美先生っていうのもあるんだけど、他のクラスはわからないな。

「誠二くん」

いつものように練習をしようつてとここで相田さんがやってきた。

「何？相田さん」

「あのね、さっきまで教室にいたんだけど、誠二くんにはお化け屋

敷の最後で脅かし役をやってもらいたいんだって。ただ叫ぶだけでいいって。私は受付だって」

「脅かし役で叫ぶだけ…?」

「きつと私たちが部活いそがしいから気を使ってくれたんだね」

そ、そうなのか？脅かし役なんて誰もやりたがらないからじゃないのか？叫ぶだけって、驚いてくれなかったらかなり恥ずかしい思いをすることになるんだぞ？

「わかったよ、ありがとう。ところで、相田さんはもう曲は出来るようになった?」

「え?うん、曲の方は大丈夫だよ」

「さすがだね」

「だって…私にはフルートしかないんだもん…」

相田さんは少し寂しそうにそう言った。中学の時のこと、忘れるなんて簡単には出来ないだろうしな。これも事情を知っているオレの前だからこそ見せられる表情だろうけれど…。

「そんな…そんな寂しいこと言うなよ。何かあったらオレが守るって言ったじゃん」

「え?」

「あつ、い、いや、ほら、紗耶香だっているし、美香や勇介だって、もうフルートだけだなんて思わなくてもいいでしょ?」

またオレは毎度毎度変なことを…。

「うん!」

でも、ま、相田さんがこんな顔で笑ってくれるんなら悪い気はないか。

「じゃあね、誠二くん。練習頑張って!」

「うん、ありがとう」

笑って練習に行く相田さんを見送った。

あの笑った顔にはいつも赤面させられるよな…。

さーて、練習練習!

「オレが守るって言ったじゃん」なんて、よくそんな恥ずかしい

ことがさらつと言えるわね」

「うわ！さ、紗耶香！」

み、見られてた！聞かれてたのか！？な、なんてことだ…！

「誠二、はつきりさせときたいんだけど、あんたってめぐのこと好きなの？」

「…は？」

いきなり何を言ってるんだ…？相田さんのことを…好き？オレが…？…なんだろう、そうなのかな？はつきり違つて言えないよな。でも、好きっていうのは…。

「わからない」

「そう…、じゃあ美香ちゃんのこととは？」

「はあ？」

ますますわけがわからん。何で紗耶香が美香のことを？美香のことなんて…好き…じゃないよな？でも…あの送別会の時から、オレは今までとは違った目で美香を見ていた気がする。けど、それも好きっていうのとは…。

「わからない」

「またわからない…か。誠二、もし誰かから告白されたりしたらどうするの？」

告白…か。あんまり聞きたくないキーワードだな。

「紗耶香、あんまりそういう話しはしたくないんだ」

しばらく考えてなかったけど、あいつ、どうしてんのかな？泣かせたつきりろくに話さないまま違う高校に行ってしまったもんな。オレのこと、恨んでるかな？

「誠二？」

「ああ、わりい。何だっけ？」

「私が思うに二人とも…別にいいわ。ボケっとしてないでさっさと練習しなさいよ」

「お前が話しかけてきたんだろうが！」

「ああん？」

「いえ、すいません」

負けた…紗耶香の鋭い眼光に。この目は骨の髄まで食らい尽くしてやるっていう獣の目だったぜ。

クラスの準備もある程度こなし、部活の練習もこなし、涉の要点メモでテストも一夜漬けでこなし、文化祭当日がやってきた。

文化祭は二日間に亘り行われる。吹奏楽部の出番は二日目の最後だから、今日の文化祭一日目はクラスのお化け屋敷に専念だ。

「どう？私怖いでしょ？」

「相田さんが？はっははは！全然！かわいいくらいだよ」

受付の相田さんは長い髪をワックスで濡れた髪のようにして、白い着物を着てそれらしく見せていた。だがしかしあの相田さんだ。どれだけ雰囲気を出したところでかわいさに揺るぎがない。

「か、かわいいだなんて」

オレはというと、ボロボロのシャツを着てフランケンシュタインのかぶり物をしていた。前が見づらくってしょうがないけど、誰かわからないから思いつきり脅かせるってもんだ。恥ずかしさも半減だな。そもそも脅かし役が恥ずかしがってちゃね。

「じゃあオレは持ち場につくから。相田さんも受付しっかりね」

「う、うん！頑張ってるね！」

相田さんはご機嫌だ。ずいぶんとにこやかなお化け屋敷の受付だな。今からお化け屋敷に入ろうってする人たちを和ませるんじゃないの？

お化け屋敷っていつでも所詮は教室の中で高校生が手作りで作ったもの。たかが知れてるってもんだけど、一生懸命準備してそれなりにらしくはなっていた。暗幕で真っ暗にすることはもちろん、誰が持ってきたかわからないけれど、大きなスピーカーで効果音を鳴らしていた。ギミックだって暗闇だから荒は目立たない。

そして最後の最後に待つオレの絶叫。

ふふふ…楽しみだ。最初の餌食は誰かな？

コツコツコツ…。

教室の中を歩く足音が近づいてくる。

コソツと覗いてみると男女カップルのようだ。お化け屋敷ではありがちな、女子が男子の腕を掴んで歩いてきている。

もうすぐ…。

来たっ！

「がああああああああ！！」

オレはカップルが近づいて来たところに物陰から叫び声とともに襲いかかった。

「うわあ！」

「きゃあ！」

カップルは驚きの声を上げて、出口へと走って逃げて行った。
大成功！！

あのリアクション…、楽しいじゃないか！

「あれ反則だよね」

「うん、マジびびった」

外からさっきのカップルであろう声が聞こえてくる。

そうだろうそうだろう、反則的に驚いただろう。

「でも、ずっと守ってくれたよね。…かつこよかったよ」

「よ、よせよ。ほら、行くぞ」

…なんだこれは？

あれか？恐怖でドキドキすると恋してドキドキしているのと錯覚してしまうという吊り橋なんとかってやつか？

…良いことをしたな、オレ。

結構人気があるのか、その後もどんどん人がやってきた。

「がああああああ！！」

「きゃあ！」

「うおっ！」

だいたいは二人組でやってくる。全部カップルってわけじゃないけど、大体が男女ペアか女同士で来ていた。

楽しそうに話しながらやってきたやつらも、オレの手により恐怖のどん底に堕ちて行くわけだ。それと同時に恋に落ちていたりもする。

今年の文化祭でここのお化け屋敷に来た男女は結ばれるという伝説が出来たり出来なかったり。

ん？

初めて一人で来たやつがいるな。物好きか、気が強いやつか。それでもこのオレの手にかかれば…。

「がああああああ！！」

「出たわね誠二！きゃあああああ！！」

「ぐほあ！！！」

ぐはあっ！だ、誰だ、思いっきりボディーパーをかました奴は。かなり効いたぜ。

「あら、ごめんなさい。びっくりしてつい手が出ちゃったわ」

さ、紗耶香…。

「い、いきなり何しやがる！」

オレはフランケンシュタインの頭を取って紗耶香を睨みつける。

「あら、誠二だったの。謝って損したわ」

出たわね誠二とか言っておきながら何を言うか！

明らかにオレを狙ってきやがったな。

「じゃあね」

あっさりと紗耶香は行ってしまった。

何をしに来たんだ。ただオレを殴るためだけに来たな、あいつ。

どつと疲れが来たぜ。

あいたたた…。

外はどんな感じなんだ？

「あ、誠二くん。紗耶香ちゃん来たでしょ？」

「うん、一発殴られた」

「最後で誠二くんが待ってるって言ったから…」

えー…。

「お化け屋敷の中身話したらだめだよ、相田さん」

「あ、そっか。わかった」

本当にわかったんだろうか。

「椿くん、休憩していいよ」

クラスの子が休憩していいと言ったのでちょっと他のクラスを覗いてみることにした。

少し腹が減ったしな、紗耶香のときの焼きそばでも食いに行くか。オレは紗耶香の教室へ向かった。

廊下にはおいしそうな匂いが漂っていた。

中に入ると紗耶香のクラスの人たちがエプロン姿で忙しそうに動いていた。

なかなか賑わっているじゃないか。

「あ、誠二」

紗耶香がオレに気がついたらしく声をかけてきた。

「焼きそば一つくれ」

「了解、そこに座って待ってて。焼きそば一つ！」

紗耶香が料理している生徒に注文を伝えて、オレは近くの空いている席に座らされ待つことに。

ジュージューと焼きそばを料理する音が聞こえてくる。

「賑わってるじゃないか」

「今年は食べ物出してるそこそんなに多くないみたいだしね」

少し待つと紙皿に盛りつけられた焼きそばを持ってきてくれた。

さっそくいただいてみる。

もぐもぐ……。

おっ、うまい。

「なかなかうまいな」

「当たり前よ、私がみんなに教えたんだもの」

なんだと!?

聞き間違いか?

「紗耶香、もう一度言ってくれないか」

「私がみんなに教えたの！」

…なんと。

この焼きそばを紗耶香が指導しただと？

「冗談…」

「は？」

「い、いや、うまいなー！」

殺気がにじみ出てるぞ、紗耶香。

「ふん！」

でもしかし、少しだけ照れくさそうにしている。

「料理なんて、似合わないこと出来たんだな」

「あんた…一言多いのよ。あとでまたあんたとこ行くわよ？」

そ、それは勘弁してくれ！

紗耶香のお手製焼きそばで腹を満たして次は美香のクラスへ。

噂のコスプレ喫茶だな。

メイド喫茶とか聞いたことがあるが、近くにないから行ったことはない。それに近いものがあるんだろうと少しだけ期待して美香のクラスの教室の前へ。

ここも賑わっている。

さーて、美香のコスプレ姿を拝まないとな。

ガラララ…。

「いらっしやいま…せ…」

教室のドアを開くと元気よく営業スマイルで美香が迎えてくれたんだけど、オレの顔を見るなり美香が固まった。

美香はスタイルも良くかつかわいい。そんな美香が似合うコスプレなんて決まっている。

もちろんメイドだ。

教室のドアを開け迎えてくれたのは、メイド服姿の美香だったんだ。

「ぶぶつ、に、似合ってるじゃないか」

「せ、誠…」

みるみるうちに顔を真っ赤にさせてうつむく美香。
その様子がたまらなくおもしろい。

「どうした、早く席に案内してくれよ」

「こ、こちらです」

オレと顔を合わせようとせず、そのまま空いている席に案内された。

そしてメニューを渡された。

「こ、ご注文は…」

「メガネだ」

「え？」

「その姿でメガネをかけた美香が見たい」

「……コーヒーですね。少々お待ち下さい」

「……………」

さらっとスルーしやがった。

そしてすぐさまコーヒーを持ってきた。

「お待たせしました！」

ガチャンッ！

おっ、怒らせてしまったみたいだ。

「み、美香、そう怒るなって」

そう言いながらコーヒーを一口…。

!!!!!!

「につがつ！美香、さ、砂糖！」

「我慢して飲むんだね！ふん！」

美香はそのまま濃いブラックコーヒーを置いて別のお客のところへ行ってしまった。オレが甘党なのを知っている美香が…完全な仕返しだな。

このまま残すと後でまた何か言われるかも知れないと思い我慢してコーヒーをすすっていると…。

なんだあれは…？

教室の端の方に巨大なぬいぐるみが置いてある。

ぬいぐるみ？

い、いや、動いている。

あれは某有名ゲームの最初に登場する雑魚敵のス イム…。
ぴよんぴよんとび跳ねながらこちらへ向かってくる。

そして目の前までやってきた。

ス イムが仲間になりたそうにこちらを見ている。

まさか…。

「勇介…か？」

そいつはその質問にぴよんぴよんとび跳ねて答えた。

喋れないのか？

「無様だな、勇介」

オレのその一言に勇介は体当たりをしてきた。

もちろんぬいぐるみだし、柔らかいし、そんなに痛くはない。

しかし、ゲームの中ではお互いに攻撃し合うんだ。

これからはずっとオレのターン！

身動きがろくに取れない勇介を教室中、思う存分転がしてやった。

オレは経験値1を手に入れた！

さーで、経験値も手に入ったことだし、午後の絶叫もまた頑張ろうか。

そして自分の教室へと戻り、また持ち場についた。

オレがいない間は代わりの人がやってたみたいだけど、誰だろう？お礼しなくちゃな。

おっ、さっそく獲物が…。

「がああああああああ！！」

「きゃあー！」

「きゃあああ！！」

ふふふ、不意ながら紗耶香お手製焼きそばで体力もばっちりだな。

さー、次は…。

「がああああああ！！」

「……………」

あ…？

「一人で叫んでバツカみたい！いーっだ！」

「やられた…。美香だ。思いつきりバカにされた。」

「さっきのお返しをしに来たな。」

「オレはこの上ない恥ずかしさがこみ上げてきた。幸い、フランケンシュタインのマスクのおかげで真っ赤な顔は見られないで済んだけれど。」

「濃いブラックコーヒーにこの仕打ち。倍返しじゃないか。」

「やーい、バカ誠二ー！」

「そんなことを言いながら美香は去って行った。」

「オレはその姿を茫然と見送っていた。」

「あのお…」

「は、はい！」

「やべっ！次の人だ！」

「す、すみません。もう一度最初っから来てもらえますか？」

「こうして文化祭一日目は終了した。」

「文化祭だからって部活が休みになるわけでもなく、明日へ向けての最終確認の曲合わせが行われた。この日の部活はさすがにしんどかったかな。」

「文化祭二日目。」

「二日目は午前中は一日目と同じように。午後からは体育館へ移動して演劇部の演劇や吹奏楽部の公演がある。」

「がああああああ！！」

「うわっ！」

「きゃあ！」

「ふふ…今日もいい感じだ。」

「誰しもがオレの絶叫には驚きの声を上げていた。」

「言ってしまうえばお化け屋敷とか関係ないよな。突然人が叫びなが」

ら現れたら誰だつて驚くよな。

次は誰かな？

「がああああああ！！」

「あ、誠二くんだ」

「つじくくん。がああ」

……………おっ？

「理恵先輩…アリサ先輩…」

「そんなマスク取りなよ」

理恵先輩に無理やりフランケンシュタインのマスクを取られてしまった。

「やっぱり素顔の方がいいよ」

「ちよつ、理恵先輩、返してくださいよ。っていうか何でオレだと？」

「恵ちゃんが教えてくれたよ？」

相田さん…。お化け屋敷の中身は話さないでって言ったのに…。

「はああ…」

「何ため息ついてるの。ほら、お姉さんの胸へ飛び込んでおいで」

理恵先輩は両手を広げてそう言った。

「な、何を言ってるんですか」
「そうよ。誠二は私のような大人の胸の方がいいはずよ。さ、おいで」

理恵先輩とアリサ先輩の後ろから音もなく静かに千秋先輩が現れた。

「千秋先輩、ちよつと待っていてくださいね」

オレはフランケンシュタインのマスクを理恵先輩から返してもらい…。

「がああああああ！！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「誠二くん、それはちょっと無理があると思うな」

「同感よ、誠二」

「ば〜か〜」

「そ、そんなに言わなくても！こっちだってウケ狙いだっつのに。」

「で、誠二。どっちの胸にする？」

「胸的には私の方がお・と・な、だよ」

「なんだ？さつきからこの二人は一体何を言ってるんだ？」

「さあっ！」

「決めて！誠二くん！」

「うう〜…こっつなっつら。」

「すみません！」

「むぎゅっ。」

「ほわ〜？」

「あっ」

「誠二くん、そ、それは…」

「オレは覚悟を決めてアリサ先輩の胸へと飛び込んだ。」

「マスクのおかげで感触は全然かんじないけど。」

「なにしゃがんだごるああ！！」

「バキッ！」

「ぐぼえ！」

「な、なんだ！？何事だ！？アリサ先輩が右ストレートだと！？し

かも強烈！！」

「おらあ！！！」

「ドカツ！」

「ぎゃっ！ア、アリサ先輩！？」

「こ、今度はソバット！？」

「アリサはね、自分がそんなことされるの許せないんだよね…」

「そ、それにしたって普段はあんなにおっとりしてるアリサ先輩が

こんなに豹変…。」

「ふーっ！ふーっ！」

こ、怖え…。

「ほら、アリサ。どーどーどー」

「ふーっ、ふー…ほわー？」

ほっ。い、いつものアリサ先輩に戻った。

「つじくくん、いたずらがくすぎるぞ〜」

「す、すいません」

「いいよ〜。でもお〜…今度やったら…許さねえからな…」

「は、はい！」

影の支配者はアリサ先輩だったんだ！実は裏でこの学校を牛耳っていたり成績がトップっていうのも圧力をかけたりして…。

「それはないから安心しなよ」

千秋先輩は読心術使うし…。

「先輩”はいらないわよ”

ほら、怖いよ吹奏楽部。

「り、理恵先輩にはどんな特殊能力が？」

「ほえ？」

そんなこんなあることないこと話して三人は帰って行った。
やっぱりあの中でもアリサ先輩だ。絶対に怒らせないようにしよ
う。

一瞬で疲れたな〜。

あっ、そうだ、相田さん。

オレは相田さんがいる受付に向かった。

「相田さん」

「あ、誠二くん。お疲れ様」

「お化け屋敷の中身話したらダメって言ったでしょ？」

「え？誠二くんはどこ？って聞かれたから最後って…」

うん、確かに中身というか、オレの居場所だな。

「とにかく今度誰か来たら中のことやオレがどこにいるかとか教え
たらダメだよ？」

「うん、わかった」

今度はもう大丈夫だろ。

そう思って安心して持ち場び戻ったけれど、これ以降知り合いが来ることはなかった。

そして午後。

クラスごとの催しを終わり、演劇部が体育館で演劇を披露している間、オレたち吹奏楽部は部室から楽器を運んでいた。

部室から体育館への道のりは長く、何往復もする間に少し肌寒い中でも汗をかいていた。

「よいつしょ」

持ちにくいんだよなー、譜面台。数もあるし。

「手伝うよ、誠二くん」

「ありがとう、相田さん」

心優しい相田さんが手伝ってくれという。

二人で譜面台をかかえて体育館まで歩いていく。

「お化け屋敷、成功だったね」

「うん、もう喉がからから」

「ふふふ…頑張ってたもんね、誠二くん」

「でも、実はなかなか楽しんでたんだ。みんなのリアクションとかさ」

「うん、外に出てきた人はみんな誠二くんのとこびっくりしたって話してたもん」

そんな、何気ない会話を交わしながら…。

楽器を全て運び終える頃には演劇部の演劇も終わり、オレたちの出番がやってきた。

ステージへ急いで楽器を運び入れ、準備完了。

ステージの幕が上がリ、指揮者の奈美先生が会場へ一礼した。生徒たちはもちろん、保護者の人たちもこの演奏を聞く。

軽いチューニングの後、奈美先生の指揮棒が振り下ろされた。

一曲目、二曲目と滞りなく演奏は進んでいく。

でも三曲目、ふと会場へ目を向けると何人かの生徒が寝ているのを見つけた。

オレはそれに軽い苛立ちを感じた。聞いてほしいんだ。そして、三曲目でオレがシンバルを鳴らす時…。

シャーーン!!!

この曲では大きすぎる音を鳴らした。

うつ…。

それに対して奈美先生がオレを睨む、そして紗耶香、理恵先輩も同じだ。

その音で寝ていた生徒が目を覚ましこっちに目を向けた。

やっちゃいけないことだった。だけど…。

三曲目も終わり、ステージの幕が下りる。会場からは拍手が巻き起こった。

「ちよつと誠二くん、さっきのはどういうつもり？」

幕が下りきると理恵先輩がそう言うてきた。

「すみません。寝てる人を見つけて、ちよつとイラッときちゃって

…

「もう…」

オレの言葉にため息をついてやれやれと首を振った。

「仕方ないよ。誠二くんだってこっちにいなかったら寝てたかもしれないよ？興味ない人からすればつまらない音楽かもしれないし」

「はい…すみません」

そうだよな。オレだって吹奏楽部に入ってたから同じことしてたのかも。みんな好きで聞いているわけじゃないんだよな。

「でもま、周りが見えるくらい余裕は出てきたってことか」

「あつ…」

そっか、オレ…知らないうちに…。

「でも、もう二度とこんなことしたらダメだからね。指揮に集中するように！会場は気にしない！」

「はい」

紗耶香はその様子を見ていたからか何も言っていなかった。
奈美先生からは軽く説教されたくらいだった。

反省、だな。みんなの演奏をぶち壊したことにもなるんだな。もう二度とこんなことはしたらいけない。

しばらくすると、生徒会の人たちがオレたちの前に立った。

『ただ今より柳ヶ浦高校文化祭、閉会式を行います』

そして、生徒会長や校長からの話しがあって、最後の歌だ。

オレたちの伴奏に合わせて生徒会が歌う。生徒会の人たちはステージの上で照れくさそうに歌を歌っていた。

閉会式も無事に終わり、今年の文化祭、オレたち一年にとって最初の文化祭の幕を閉じた。

この後はクラスの片付けだったんだけど、まずは楽器を部室へと戻すことからだった。

楽器を片付け終わり教室へ戻ると、もうすっかりいつも通りの見慣れた教室になっていた。準備にはさんざん時間がかかったのに、こういうのって片付けるとなるとすぐだよな。それが少しだけ寂しく感じた。

「みんな、二日間お疲れ様！この後生徒会がグラウンドで後夜祭を予定してるみたいだから行ってみるといいわ。参加は自由だけど」
後夜祭か、みんな行くのかな？今日は部活もないみたいだし。

SHRが終わり、クラスメートはそれぞれ教室をあとにしていた。

「せ、誠二くん」

「あ、相田さん」

「あのさ、よ、よかつたら後夜祭……」

え？後夜祭？相田さんは行くのか。誘われてるのかな？

「めぐー……！！」

「このやかましい声は……」。

「あ、紗耶香ちゃん」

「ね、めぐ、後夜祭りこう！生徒会がなんかやるみたいだよ！ほらっ！」

「えっ！あつ！ちよつと…！」

紗耶香が無理矢理相田さんを後夜祭へ連れて行ってしまった。どうするか…、追いかけた方がいいのかな？

「誠二」

そんなことを考えていると美香が教室へやってきた。

「後夜祭行くの？」

「どうしようかって考えてたところだよ」

「じゃあ帰ろうよ、なんでもカップルだらけみたいだし」

「げっ、そうなのか？そりゃ場違いだな。んじゃ、帰るか」

「うん！」

相田さんもカップルだらけってわかったらオレとなんて気まずいだろうし。紗耶香がいるからいいよな。

校門を出てグラウンドの方へ目を向けると結構人が多くて賑わっているようだった。

その様子を尻目に文化祭のことなどを美香と話しながら帰った。

後夜祭では…。

「なーんか、カップルだらけだね、めぐ」

「うん……」

「……元気がないね、どうしたの？」

「え？な、何でもないよ」

「ふーん……。ね、めぐってさ、もしかして誠二のこと好きなの？」

「えっ！？そ、そそ、そんなこと…！」

「あつははは！焦りすぎ！めぐったら！」

「もう、紗耶香ちゃん……。…うん。そう…なんだ。私、誠二くんのこと…好きなんだ」

「うん……」

「誠二くんは私のヒーローなの。今の私があるのは誠二くんのおかげ。気がついたら目で追ってた」

「めぐ……」

「今の私にとって誠二くんが全て。誠二くんの声が、笑顔が私を元気にしてくれる。それに、か、かっこいいし」

「最後のは納得いかないけど、私はめぐを応援するよ。でも、これじゃあ美香ちゃんとライバルだね」

「え？み、美香ちゃんど？」

「うん、たぶん…ううん、間違いなく美香ちゃんも誠二のことが好きだと思う」

「……それなら…私は…」

「めぐ…自分の気持ちは大事にしないとダメだよ。たとえば美香ちゃんとライバルになったってさ」

「でも、私は…美香ちゃんと仲良くしていきたい」

「仲良く…か。めぐは美香ちゃんと誠二が付き合うことになったら美香ちゃんとは仲良く出来ないの？」

「え？そ、そんなことないよ！大事な友達だし」

「それと同じだと思うな。美香ちゃんだって良い子だし、逆でも一緒だと思う」

「……………」

「自分の気持ち押さえつけてたりなんかしたら一生後悔すると思うよ、私は」

「うん…そうだね、そうだよね。ありがとう、紗耶香ちゃん」

「めぐのこと振ったりしたら誠二なんてぶつとばしちゃうんだから！」

「ふふ、頼もしいなあ」

「なんか私たち場違いだね、フォークダンスとか始まったし。帰ろうか」

「うん！」

後夜祭ではこんなことがあっていったんだ。

オレがこのことを知るのもう少し先の話だった。

「それにしても似合ってたぞ、美香のメイド姿」

「誠二！は、恥ずかしかつたんだからね！」

帰り道、美香は恥ずかしそうに顔を赤らめていた。

「可愛かったけどなあ」

「も、もう。おだてたって何にも出ないからね」

似合ってたのも事実だし可愛いつても本音だ。

そんなことを考えていたら文化祭の前、部室での紗耶香との会話が頭の中をよぎった。

美香のこと…好きかどうか…って…。

「ん？誠二、どうしたの？」

「な、なんでもない！」

「変な誠二」

ダメだ、変に意識したら。

急にそんなこと言われたって分かるわけないじゃないか！ずっと一緒に過ごしてきたんだぞ？今さら…。

「ねえ誠二」

「ん？」

美香が少し真剣な眼差しでオレを見つめる。

「まだ…その…優花^{ゆか}ちゃんのこと、気にしてる？」

「……………」

優花か…。中学のときの少しばかりの彼女だった女の子。

「まだ気にしてるんだ」

「そう…だな」

優花のことを考えると、最後に見たあの泣き顔が鮮明に蘇ってくるんだ。今はどうしてるのかわからない。オレのこと忘れてしまったのか？それなら気が楽に…って、オレがこんなこと思い続ける限りは楽にはならないか。

「優花ちゃんとは別の高校に行ったんだよ？もういいんじゃない？そろそろ…前に進んだって」

「そう思うんだけどな。あの時のあいつの顔、まだ思い出すんだ」

「そっか…」

気にかけてくれる美香には申し訳ないな。いつまでこんなんだろ
うな、オレ。

「でも！」

「え？」

「でも……もっと……もっと周りを……私を……」

「美香？」

「ううん、なんでもない。さ、帰ろう」

「あ、お、おう」

美香がこの時何を言おうとしていたのか、その時のオレにはわからなかった。

ただ何かをぐっところえているみたいだった。美香は何かを我慢する時には両手を後ろに隠す癖があった。それがその時だったんだ。オレはそれがわかっていたんだけれど、その時に口から出る言葉はなかった。

美香はあんまり自分の弱いところを人に見せないから、オレもそのことは黙ってたんだ。

そして季節はまた変化を見せ始めて、冬の空気が流れだしていた。

再会

「うっ、もうだいぶ寒くなってきたねー」

「もつと着こめよ。十二月だぞ？」

「家の中は暖かったもん」

「子供かよ」

そう、もうカレンダーは十二月。冬だ。

今、美香と一緒に柳ヶ浦町商店街に買い物に来てるんだ。吹奏楽部の部室をクリスマススツリー仕様に飾り付けをするための飾りを買いに。

街中はクリスマススムード一色。ところどころにクリスマスツリーが飾られて、いろんなところからクリスマスソングが聞こえてくる。子供じゃないけど、なんだかワクワクしてくるよな。この雰囲気は好きなんだ。

街中には子供連れの家族やカップルで賑わっていた。理恵先輩からの部長命令で今日の休みに買い物してくるようにと言われたんだ。

オレなんて部屋とかクリスマスで飾り付けなんてしたことないから美香にいろいろ聞こうと思って一緒に来た。

美香はすんなり引き受けてくれた。

それにしても…。

「美香ー、スカート短すぎないか？だから寒いんだよ」

ただの買い物だっていうのに気合い入れて来てるよなー。

「女心がわかってないなー、どんな時だっておしゃれはしたいの」

「そんな、誰が見るわけでもないのに」

「ほんつと、誠二ってば昔っからそう。女心が何一つわかってない」

え？な、なんか怒らせた？

美香は口を尖らせてそっぽを向いてしまった。

「そ、そういえば、さすがにクリスマスが近づいてカップルばっか

だよな」

いたるところに手を繋いだり、腕を組んだりして歩いているカッブルが目にとまった。

「じ、じゃあ私たちも便乗して、う、腕とか組んだりしてみる？」

「えー、やだよ、恥ずかしいよ」

「あ……ふんっつだ！」

「え？あ、おい！」

美香は腹を立てて一人で先につかつかと歩いて行ってしまった。

オレは美香に対して恥ずかしいと思ったただけなんだけどな……。

何にせよ追いかけないと。一人で買物なんて出来ないし。

そうして美香のあとを追いかけてようと走り出すと……。

ドンツ！

いてっ！しまった！誰かにぶつかった！

「すいません、大丈夫ですか？」

「いたた……もう……」

ぶつかったのは同じ年くらいの女の人だった。ちょっと化粧は濃いくらいだけどなかなかわい。

女の人が持っていたバックや荷物が散乱してしまったので拾いあげた。

「ホント、すいません」

そう言いながら荷物を返す。

「あなた！気をつけてよね！……って、あれ？」

さあ今から文句の嵐を受けようかって時にその人はオレの顔を見て考え込んだ。

そして閃いたようにポントと手を叩いた。

「誠二くん！誠二くんだよね！？」

「え？」

そう言われてオレはしばし考えた。こんな子オレの知り合いにいたのだろうか？記憶の中を探っていると、にわか過去の映像と一致するものがある。

口元にあるほくろに見覚えが…。

！！！！

「まさか…優花？」

「なーにー？気がつかなかったの？冷たいなー、昔の彼女の顔覚え
てないなんて」

「い、いや、印象がずいぶん違ったから」

昔、オレが知っている優花は少しおとなしそうな感じで、化粧な
んて全然しそうでないくらいの子だったんだ。

「ふふーん、かわいくなつたでしょ」

「あ、ああ」

まるで別の人物と話しているかのようだった。

少し頭の中を整理しないといけないかもしれない…。

あれは…。

「あ、あの…よ、よかつたら私と付き合ってくださいませんか？」

中学三年の夏。

突然、非常階段に呼び出されて告白された。

それが優花だった。初めて告白された。

それまではあんまり話したこともなく、ただのクラスメート。そ
れだけだった。

その時のことはあんまりはつきり思い出せない。その告白に対し
てオレはOKの返事を出した。

優花のことを好きだったわけじゃない。ただ、なんとなく、かわ
いかったし、嬉しかったから。

その告白された日に一緒に帰った。

会話もあまりないまま、ただ黙って歩いて帰った。話題が見つか
らなかった。

そして「また学校で」と言っただけで別れた。

その日も次の日も一緒に帰った。

優花はいろいろ話そうと頑張っていたんだと思う。本当はおとな

しい子だったんだ。

いろいろ聞いてきたし、友達のことなんかもよく話していた。でも、オレは何も聞かなかった。

優花のことを知りたいと思わなかったんだ。その場の雰囲気告白を受けて、結局はこうだ。付き合ったら好きになるんだなって、当然のように思ってた。

そして付き合い始めてから一週間後。

「ごめん…。やっぱりオレ…付き合いえない。別れよう」

「そ、そんな…！じゃ、じゃあどうして…！」

彼女はオレの目の前で思いつきり泣いた。

そしてオレは逃げ出したんだ。その場から。彼女の泣き顔を見続けることが出来なかったんだ。だから、逃げた。

ひどく傷つけた。

泣かせてしまった。

軽はずみに告白なんて受けたから。

ぬか喜びさせてしまった。

なんとなく付き合ってしまったから。

次の日から、優花と目を合わせることが出来なかった。

最後にはつきりと見た優花の顔は大粒の涙をこぼす泣き顔だったんだ。

その泣き顔だけは今もはつきりと覚えている。

それから恋愛というのが怖くなってしまったんだ。

「誠二くん、かつこよくなかったねー。ね、どっか遊びに行こうよ！」

「え？いや、オレ連れがいるから」

「ふーん、彼女？」

「違うけど…」

「じゃあいいじゃん！私、この前彼氏と別れて今フリーなんだよね」

そうやってオレの腕を掴んで無理矢理連れて行こうとした。

「優花、変わったな」

オレのその一言に優花は不機嫌に返した。

「私は変わってなんかない。少しの間付き合っただけでわかったよ
うな事言わないで」

「あの時、泣いてたよな」

「あの時は…だって…」

優花は顔を曇らせた。

やっぱり気にしてたのかな。

「あの時は…悪かった…」

「え？何？うつそ、マジな顔して、まさかまだ気にしてたの？」

「え…？」

優花は信じられないといった顔で驚いたあと笑った。

「あつははは！どんだけよ、いつの話しだと思ってるの？誠二くん。
マジびっくりしたんだけど」

「おま…だつてさっき…」

暗い顔してたから、てっきり気にしてるものだと…。

「悪いと思ってるならさ、今から私に付き合つてよ。ね、いいでし
よ？」

そうやってまたオレの腕を掴んだ。

「ほらほら、早く〜」

「止めてくれ！」

オレは強引に優花の手を振りほどいた。

「な、何よ…」

「やっぱり変わったよ、優花」

「あつ！ちよつと…！」

「じゃあな、人待たせてるんだ」

オレは優花の方を振り向くことはなく、美香のあとを追い始めた。

「誠二くんは…変わらないね」

優花のその言葉に振り向いた時にはもう優花の姿はなかった。

「優花…」

オレはずっと優花っていう幻影から逃げていたのかもしれない。もっと早く優花と向き合っていれば…。いや、それもオレの勝手な都合だな。

オレの中に居た優花はもういなかった。

昔の優花と今の優花、どっちが本当の優花なんてわからないけれど、オレは正直ほっとしてしまっていた。

優花が気にしていなくてよかった。そんなことを考えている自分がイヤになった。優花を傷つけたことには変わりないんだ。

でも…。

「美香！」

商店街の中にあるショップピングビルの前に美香は立っていた。

「誠二！何で追いかけてこないの！？電話しても出ないし！」

「わarii…気がつかなかった…」

「……誠二？」

オレの様子に美香はすぐに気がつく。

「偶然…優花に会ったんだ」

「え？優花って…あの優花ちゃん？」

「ああ」

「……そうなんだ」

少しだけ、肩の荷が下りた気がした。

「なーんか、すっきりしたって顔してるね」

「ん、まあな」

「優花ちゃん、元気してた？」

「ああ。最初は誰かわからなかったな。別人みたいだったよ」

「へー…」

「なあ、美香」

「ん？」

「オレさ、少しだけだけど、前に進めるような気がするよ」

「…そっか！……ね、早く買い物済ませて遊ぼうよ！」

「ん、そうだな！」

「誠二は荷物持ちとご飯おごりだからね！」

「は！？何でだよ！？」

「私を一人で待たせた罰！男なんだから文句言わないの。さー、いっぱい買っぞー」

「ほ、ほどほどにしてくれよ？」

本当に少しだけだけれど、すっきりした。

でも、忘れてはいけないんだ。優花がどう思っているかと、多分オレは一生あの時逃げ出した事は忘れないと思う。

そしてもう人を傷つけない。

オレも、あんな思いはしたくない。

だけど、少しずつでも前に進むんだ。

クリスマス

季節はすっかり冬になって、街中は白い雪化粧に包まれることもあった。もうコートとマフラー無しには外も歩けなくらいに寒い。そして今日はクリスマス。

あれから部屋もクリスマスムード一色になって、みんなも自然と笑顔になっていた。

去年までのクリスマスは、オレか美香か勇介の誰かの家で小さなクリスマスパーティーをして過ごしていた。でも、今年は送別会が行われた千秋先輩のレストランでクリスマスパーティーをやるらしいんだ。三年生も特別参加。オレも特別な用事なんてないからもちろん参加する。にぎやかなクリスマスになりそうだ。

「お待たせ」

「おう」

毎度の事ながら美香と勇介も一緒にクリスマスパーティーに向かう。

一応パーティーだから美香は少しばかりおめかししていた。うっすら化粧もしているし、普段は見ることもない高そうなコートに白いマフラーを巻いていた。クリスマスを意識してかコートの中には赤いドレスを着ていた。

オレは普段着とそんなに変わらないかな。少しは考えたけれど。

「変じゃないかな？」

「いや、いい感じだと思うぞ」

「へへっ…、勇介は？」

「まだみただけど」

勇介は何やってるんだ？約束の時間はもう過ぎてるってのに。

「おーい！！」

はぁ、やっと来やがった……って。

「わ、悪いな、二人とも」

勇介が息を切らしながらやってきたんだけど…。

「なんだ？その格好は？」

「タキシードだ、知らないのか？」

「そんなことを聞いてるんじゃない！」

何を考えてるんだこいつ。知り合いしか来ない部活のパーティーにタキシードだと？

「かつこいいだろ」

「勇介、確認するがその格好で行くんだよな？」

「そうだけど？」

いや、本人がそう言ってるんだから余計なことは言うまい。

どうなるか見ものでもあるしな。

「ねー、早く行こうよー」

「あ、ああ」

千秋先輩のレストランまでは徒歩で行くんだけどいかんせん、勇介の野郎が目立ちすぎる。周りからはクスクスと笑い声まで聞こえてきていた。オレと美香は他人のふりしていたんだけど、勇介は全く気にしている様子もなかった。出来るだけ距離を置いて歩いていったんだが。

「おーい、誠二、美香。待てよー！」

「な、名前を呼ぶな！」

そんなこんなでパーティー会場までやってきた。レストランの入り口には”柳ヶ浦高校吹奏楽部様”と張り紙がしてあったな。

時間的にはまだ夕方だけど外はもう薄暗かった。

「こんばんはー」

おお…。レストランの中には中央に大きいクリスマスツリーが飾られていて、店内もこれでもかというほど飾り付けしてあった。そしてクリスマスツリーの周りには、またバイキング形式で豪華な料理がいくつも並べられてあった。

「あ、いらっしやい。誠二、美香ちゃん、と、その他」

この前と同じように千秋先輩が迎えてくれた。

「その他ってなんすか！」

「勇介が当然のようにつつこみを入れる。」

「もうだいたいみんな集まってるから。時間になるまで待つてね」
「どうやら千秋先輩には勇介の声は届かないようだ。」

「周りを見るとやっぱりクリスマスだけあって、みんなおしゃれしてきていた。勇介みたいな人はいなかったけどな。」

「どうだ、勇介。自分だけ違うっていうのがわかったか？」

「ああ……」

「今さら気がついたって遅いけどな。」

「オレが一番かつこいいいな？」

「……貫き通すお前はある意味かつこいいよ。」

「みんな注目ー！」

「おっ、もうみんなそろったのかな？」

「えー、今日は奈美先生がお・と・な、の事情でパーティーには参加されてないので、代わりに私が挨拶するよー！」

「そう言ったのは理恵先輩だ。」

「奈美先生は大人の事情……デートだな！」

「今日はまた元部長の村田先輩がこんなに素敵な場を用意してくれました！今年最後の思い出を作りましょう！食べて、飲んで、騒ぐうー！えー、それじゃあみなさん、グラスを手に取ってー……」

「理恵先輩、初めっからテンション高いなあ。」

「メリークリスマス！」

『メリークリスマス……！！！！』

「一斉に乾杯してパーティーが始まった。」

「この前同様、パーティーっていつでもみんなと話したりして騒ぐだけなんだ。」

「誠二」

「ん？どうした、美香？」

「忘れないうちに渡しとこうって思ってさ。はい。クリスマスプレゼント」

そうやって美香から小さな袋を渡された。

実は美香とは毎年クリスマス마스プレゼントの交換をしているんだ。今年ももちろん用意してきている。

「サンキュー、開けていいか？」

「クスツ、毎年同じこと聞くよね」

「ははっ」

美香からもらった小さな袋を開けると携帯ストラップが入っていた。小さいパワーストーンがついていた。

「おおっ、シャレてるな」

「気に入ったみたいでよかった」

「じゃあオレも。ほら」

そうやってオレもポケットに忍ばせておいた小さな袋を渡した。

「うん、ありがと」

毎年のことだからもうわかってたんだ。

美香もさっそく開けていた。

「あ、あれ？」

「ははっ、考えてたことは一緒だったな」

オレが美香に用意していたプレゼントも携帯ストラップだったんだ。ハンドメイドで作られた赤いミサンガのようなストラップだ。

そんなに高い物は買えないしな。

「うわあ、かわいい！ありがと、誠二！大事にするね！」

「おおっ」

毎年素直に喜んでくれるからあげたこっちもうれしい。

お互いにプレゼントし合ったストラップをさっそくつけた。

「せーいーじーくん！」

「あ、理恵先輩、アリサ先輩」

「じゃあ私ペットの先輩のとこ行ってくるね！」

美香は自分のパートの先輩のところに行き話したようだ。

「お邪魔だったかなー？」

「いえ、そんな」

「つじく〜ん、クリスマスプレゼント〜」

「えっ！ホントですか！？ありがとうございます！」

なんとアリサ先輩がクリスマスプレゼントをくれたんだ！持った感じでは少し重量があって固い。紙袋にラッピングされていた。

「あけてみて〜」

「あ、はい！」

何かな〜？

オレは期待に胸を膨らませて紙袋を開けようとした…が、包装がしっかりしていてきれいに開けきれない。

「気にしないで〜やぶいて〜」

本当に頑丈な包装だったからオレは遠慮なく力を入れて破いた。

これは…本？

「なっ！？なんですかこれは！？」

”女体大全集”と表表紙に書いてある本だったんだ。

「つじくんに〜ぴったりの〜ほん〜」

「あ、あのですねえ！」

「あん？」

「…い、いえ…」

こええ、文化祭で見たアリサ先輩だ！絶対逃げられないし勝てねえ…。

それよりもこんな本自分で買ったのか？オレはそれが知りたい。

「私からもあるんだよー」

理恵先輩がにこやかに包みを見せた。

アリサ先輩がこうだったんだ…理恵先輩だつて変な…。

「はい、どうぞ」

これは…写真のアルバムか？何の写真…。

「…理恵先輩、これはいつたい何なんでしょう？」

「やだなあ、言わせないですよ。私の胸の写真だよー。寂しくなったら見てね。水着姿もあるんだから！」

中にはいろんな衣装を着ている理恵先輩の胸のアップの写真ばか

りが貼ってあった。

オレは…オレはいつたいたいどんな奴だと思われているんだ！？変態か…変態だと思われているんじゃないのか？

「オレにどうしろと？」

「嬉しくないの？好きでしょ？私の胸」

「嬉しいもなにも…」

「そっかあ、感動したのかあ」

「なぜ！？」

そもそも一男子に自分の胸の写真集をプレゼントするってどうなの！？

「大事にしてね！」

「え！？ちよつと！」

「しっかりお勉強するんだよ」

「これ…！」

どうすんだよ…、二人は行ってしまったし、アリサ先輩からもらった本だって包装やぶいたから裸だし…。バックなんて持つてないし。美香に預けることだって、オレがこんな本持つてるなんて思ったら何て思われるか…。まさか、やぶかせるためにあんなに包装を固く？ありえるな…。

「どうしたの？誠二」

「うわあ！…あ、なんだ、千秋先輩か」

「なんだとは何よ、クリスマスプレゼント作ってきたのにあげないわよ？」

「クリスマスプレゼント…」

一番の曲者がこの千秋先輩であるのは間違いない。どうせろくでもないものなんだろうけど。

作ってきたって言ったか？…いやいや理恵先輩のような件もある。

「あ、ありがとございます」

かといって「いりません」なんて言えるわけないしな。

「じゃあはい、これ。クリスマスプレゼント。頑張って誠二のため

に編んだんだあ」

千秋先輩からは少し大きめな袋を渡された。ラッピングもキレイにしてある。

「な、なんか開けるのもつたいないですね」

「えー、ちゃんとここで開けてよー」

「は、はい……」

なんだろうか……。オレの体は開けるなど危険信号を出している。ガサゴソ……。

こ、これは……！

「どうかな？ けっこう自信作なんだけど……」

中を開けると真っ赤な手編みのマフラーだった。

まともなプレゼントだ……！

「あ、ありがとうございます……！」

「そ、そんなに涙するほど喜んでくれたら嬉しいなあ……ははっ……」

「さっそく巻いてみますね……！」

すごいな、このマフラー！ 丁寧に編み込まれててすごくあったかい。こんなにいい先輩を疑うなんて……。すいません！ 千秋先輩！

「千秋でいいっていうのにい……」

読心術だけはやめて欲しいけど……。

「あれ？ このマフラー、けっこう……いや、だいぶ長いですね」

今年の流行ってやつなのか？ マフラーの長さはずいぶん長くて全部巻くと肩が重くなりそうだった。

「うふふ……こうするんだよ……！」

「えっ！ うわっ……！」

千秋先輩はマフラーの余っている部分を自分で巻いてオレに寄り添ってきた。

「ふふふ、暖かいね、誠二」

「ち、千秋先輩……」

顔……顔が近いつす……。

「ねえ、キス……しちゃうおっか……」

はわわわわ…！

ななな、何を言ってるんだ？キス？接吻ってことか？そっだよな！

「や、やめてください！」

「興味あるくせに…。そんな本まで持ってたさ」
「！！！！」

「こっ、これはっ、アリサ先輩が…！」

「赤くなっちゃって、かわいい。誠…ちゅ…」
「うっ…うっ…」

「ご、ごめんなさい！」

ドンツ！

「あんっ！もう…！」

オレは力づくで千秋先輩を振り払って逃げた！

はあっ…はあっ…なんなんだ、まったく。あの先輩たちといると
るくなことがないよな。

の、喉渴いたあ。

「あなた、何してんの？料理があるんだから暴れないでよ」

「さ、紗耶香！何か飲み物くれ！」

オレが逃げてきたところには紗耶香が立っていた。

まさかこいつもクリスマスプレゼントなんて…。

「さ、紗耶香、クリスマスプレゼントとかあるのか？」

「はあ？何であんたなんかにはい、飲み物。これでクリスマスプ
レゼント！」

「お、サンキュー」

そっだよな、紗耶香がクリスマスプレゼントなんて…うっ…。

「ぶへえ！！な、何飲ませやがった！？」

何なんだ！このくそ苦い飲み物は！？

「なにつてー、これだけど？」

” 激マズ！濃縮青汁！”

いや、パッケージに激マズなんて書くなよ…ってそんなことどう
でもいい！

「お前…こんなものいつも飲んでるのか？」

紗耶香は当たり前のようにこれを渡したけど。

「は？まつさかー！」

……オレの扱いはもはや勇介以下なのかもしれない…。

「あんた、そういえばめぐが探してたわよ」

「え？相田さん？何の用？」

「知らないわよ。さっきは入り口の方にいたけど」

「ん、わかった。行ってみる。あ、それ、ちょっと飲んでみるよ」

「いやーよ、さつさと行きなさい」

オレは紗耶香に急かされて相田さんを探しにレストランの入り口の方へ向かった。

「めぐ…ちゃんと渡せるのかな？」

相田さん…どこだ？

入口っていつたらこの辺だよな。

あつ。

「相田さん！」

「あ、せ、誠二くん」

相田さんは入口の側の壁に寄り掛かっていた。

「紗耶香から探してたって聞いて」

「う、うん。あの…こ、これ！」

「あつ…」

「メ、メリークリスマス…」

なんと相田さんもクリスマスプレゼントを用意してくれていたんだ。でも、相田さんもどっか抜けてるところあるからな…なんだろう？

「ありがとう！開けていいかな？」

「う、うん」

オレはさつそく相田さんからもらった小さな紙袋を開けた。

中身は…手袋だった。

「誠二くん、手袋持ってないみたいだったから。頑張って編んだんだ」

て、手編み！部長の手編みマフラーとはわけが違う。やっとまともなプレゼントだ！

「大事にするよ！」

「よかつたあ」

「でも…オレ何も用意してきてないな…」

「い、いいよ、そんなの。私が勝手に作ったんだから」

「うーん…」

何か、何かないかな？

「じゃあさ…」

「うん、何？」

「こ、今度…一日私に付き合ってくれない…かな？」

「え？」

「い、イヤならいいんだよ…全然…。よかつたら…だから…」

「そんなことなら全然いいよ、今度の部活が休みの日でもいい？」

「ほ、ホント！？ありがとう！約束したからね！」

満面の笑顔で相田さんはオレの目の前から去って行った。

喜んでくれていたみたいだけど、何するんだろ？美香みたいに荷物持ちか？いやいや、相田さんがそんなことさせるわけないしな。

ま、休みに間違つて予定入れないようにしないと。

なんか、今年はたくさんプレゼントもらったな。

まあ、まともなやつは美香と相田さんからのだけだけど。先輩たちにも何かお礼しないといけないかな？

それからレストランのスタッフの人に紙袋をもらって、アリサ先輩と理恵先輩からのプレゼントを隠しながらいろんな人と話をしてりして過ごした。

途中で千秋先輩主催のビンゴ大会があつたんだけど、何にも商品は当たらなかつた。商品ははずれのくだらないものからコンポとかそんな豪華賞品もあつたな。

「みんな！まだまだ楽しみたいところなんだけど、もう時間も遅くなつてきたからパーティーはここまで」

「みんな！まだまだ楽しみたいところなんだけど、もう時間も遅くなつてきたからパーティーはここまで」

八時つて、もうそんな時間なんだ。あつという間だったな。

「みんな良いお年を！メリークリスマス！」

これで今年のクリスマスパーティーは終わった。

外に出ると、いつの間にか雪が降っていて辺り一面を真っ白く染めていた。

ホワイトクリスマスだ。

「うわぁー、素敵ー」

美香がそう感動の声を上げる。

「勇介は？」

「さあ、まだ中にいるみたいだけど」

「待つか……」

「先に帰ろうよ、どうせ誰か女の子追いかけてるんでしょ」

「あつ、お、おい！転ぶぞ！」

「あつははー！」

美香は我先にと白く染まった町に飛び出して行った。

「ったく」

ま、この辺じゃこんなに雪が積もるなんて珍しいし、はしゃぐ気持ちはわかるけどな。

「誠——！早くー！」

美香の呼ぶ声に答えてオレも美香のところへ急いだ。

白い雪が周りの光を反射して夜でも明るかった。

「気をつけるよ、滑るかもしれないから」

「はーい！」

子供みたいにはしゃいじゃってさ。

「何？その荷物？」

美香はオレが抱えていた紙袋を見て言った。

「ああこれな。あまり人前には出せないクリスマスプレゼントだ」

「ふーん、その手袋は？」

「これは相田さんがくれたんだ」

「そ、そうなんだ」

「まともなプレゼントは美香と相田さんだけだったな。まったくあの先輩たちは…」

ん？

「美香？」

「えっ！？あ、うん、何？」

「どうした？ぼーっとして」

美香はぼーっと下を見たまま歩いていた。オレの話しも聞いてなかったみたいだ。

「な、何でもない！あっ！見て誠一！雪だるまが飾ってある！」

美香はどこか慌てているように見えた。住宅街の家の前に作られた雪だるまを見て駆け寄って行く。

「おい、走ると危ない…」

「きゃっ！」

「あぶな…！」

ドンッ！

いてて…。いわんこっちゃんない。

美香が転びそうになったからオレはとっさに美香の下敷きになるように滑り込んだ。

「大丈夫か？」

「……………」

結果転んでしまったわけなんだけど、オレの上に美香が覆いかぶさる形になっていた。

美香はそのまま全然動く気配を見せない。

「み、美香？」

顔…顔が近いです…。いい匂いがします…。

オレの心臓はバクバクと激しく動いていた。

「足…」

「え？」

「足くじいちゃった…」

「なんだ…。と、とりあえずどいてくれ」

じゃないとオレが変になりそうだ！

オレは美香の体を起こして立ち上がった。

ふう…まだ心臓がバクバクいつてるよ…。そんなことより美香の足…。

「大丈夫か？」

「うーん、ちよつと痛いな」

「どうしようか…。」

「仕方ないかな。」

「しょうがない、ほら」

「え？な、何？」

「何じゃねえよ、早くおんぶされよ、置いていくぞ？」

オレはしゃがんでおんぶする体勢を整えた。

「そんな…恥ずかしいよ…。」

美香は顔を赤くして言った。

「誰も見てないって。早くしろよ、オレまで恥ずかしくなるじゃんか」

「う、うん…。」

そして美香をおんぶして歩き出した。

軽いな…。

やっぱり美香だって女の子なんだよな。幼馴染で…。

「大丈夫？誠二」

「ああ、平気だ」

「誠二…たくましくなったね」

「お前は重くなったな」

「なっ！？いい！もういい！降りる！」

「ははっ、冗談だって」

「うう…首絞めるよ？」

「や、やめとけよ？」

こんな冗談言い合えるのも美香だけだよな。

「ねえ誠二」

「ん？」

「少しは前に進めた？」

優花のことか…。

「さあな」

「”さあな”、か。ちょっと前の誠二からは絶対に返ってこない答えだね」

「そうか？」

「そうだよ。ホントにすっきりしたんだね」

「……どうだかな」

前と比べればそうなのかもしれない。優花っていう幻影がオレの中からいなくなったことは確かなんだ。でも、まだ恋愛に臆病になつてる自分がいるのがわかる。あの日の優花の泣き顔だけは忘れられないから。

オレはたぶん…二人の女の子に惹かれてるんだと思う。

一人は昔っから一緒だった気の許せる女の子。もう一人は笑顔が素敵な優しい女の子。

でも、オレは今が心地いい。

美香がいて勇介がいて、相田さんがいて紗耶香がいて、先輩たちがいて…。オレはこの毎日が楽しい。いつまでもみんなとこんな関係が続けばいいなと思う。

みんなが笑い合って楽しく過ごせたら…。

美香をおぶりながらそんなことを思っていた。

デート？

クリスマスが終わり、もうすぐで年が明ける。部活ももう年末年始の休みに入っていた。

そして今日はクリスマスパーティーでの相田さんとの約束を果たす日なんだ。

今日は柳ヶ浦町商店街の公園の噴水前で待ち合わせしている。待ち合わせの時間は午前十一時。そして今は午前十時半。

オレはすでに待ち合わせ場所で待っていた。

なんなんだろうな、美香と一緒に遊びに行ったりするのは違って朝からそわそわしていた。

でも三十分も早くなんて…寒い…。

「誠二くん？」

「え？あ、相田さん」

寒くて肩をさすっていると後ろから相田さんが声を掛けて来た。

相田さんは声を掛けたにも関わらず驚いていた。

「早いね、相田さん」

「誠二くんこそ。わ、私は…その…早く…会いたかったから…」

え？早く会いたかった？そう言ったのか？

「相田さん、今なんて？」

「え！？は、早く遊びたかったからって！や、約束は一日なんだし」

ああ、そういうことか。

それにしても今日の相田さんはかわいい。いや、いつもかわいいんだけどね。

うつすら化粧をされていてなんだか大人っぽく見えた。

「あ、その手袋…」

相田さんがオレの手を見て言った。

「使わせてもらってるよ。すごくあったかい」

「うん！……へへ…」

「ところで、今日は何するの？」

「えっ、あ、あの…特に…決めてない…」

「え？何か用事があったんじゃないのか？そういえばさつき遊ぶって…。」

「じゃあ…とりあえずアーケード行こうか。ここじゃ寒いし」

「うん！」

それからオレと相田さんはアーケードに向かって並んで歩き出した。

美香以外の女の子と二人でここに来るのって初めてだな。新鮮だ。

相田さんは笑顔でオレの横を歩いてた。うん、悪くない！

どうなんだろう、これってやっぱり周りから見るとカップルに見えるのかな？美香と歩いてた時もそうか。でも、やっぱり違うんだよな。

「ごめんね、誠二くん。私遊べるところとか詳しくなくて…」

「そんな。今日は相田さんに付き合う約束なんだからオレのことは気にしないで相田さんが行きたいところに行つていいよ」

「それじゃあ誠二くんが疲れるだけだもん。誠二くんも何かしたいことあつたら言つてね？」

「うん…わかった！」

それからしばらく話しながらアーケードの中を歩いていた。相田さんはここに来るのは初めてなんだろうか、きよるきよるしながら歩いていた。

「相田さん、ここは初めて？」

「うん」

「今日はここに来たかったの？」

「そうじゃないけど、誠二くんの家に近いところがいいかなって、オレに気を使つてたのか…。」

「あ…イヤだった？誠二くんなんていつも来てるだろうし…」

「そ、そんなことないよ！実は地元だからこそあんまり来ないってのもあるしさ。オレもこの前久しぶりに来たところだったし」

「そっか。あ、あそこ寄っていい？」

相田さんはそう言いながら雑貨屋を指差した。

雑貨か…女の子ってそういうもの好きなんだよな。

もちろんオレは了解してその雑貨屋に向かった。

中にはいろんな小物や本、生活雑貨やキャラクター商品などが所狭しと並べられてあった。

「うわあ、これかわいいよね？」

相田さんが手に取って見ていたものはカエルの形をした弁当箱。

ちよつと弁当箱にしては大きいかかっていうくらいの大きさだった。大きい目にまでおかずを入れられるようになっていた。

「そ、そうだね」

かわいいって言えばかわいいけどあんまり実用的じゃないような気が…。いやいや、そんな現実的なこと言ったら全然面白くないよな。

相田さんはいろいろと興味深そうに見まわっていた。シャレている物よりもかわいい物をよく見ていたな。

そして何かの本をじゅつと立ち読みしていた。

「誠二くん、誕生日いつ？」

「え？六月二十二日だよ」

「……………」

「何読んでるの？」

「えっ、あ、あの…これは…」

相田さんが立っている目の前にはいろんな相性占いの本が並べられてあった。

まさか…オレとの相性を見てたのかな。いや、それを話題にしよっつてことかも。

「相田さんの誕生日は？」

「し、七月十七日だよ」

ふーん、どれどれ？

「あっ、その本は…」

オレも一冊の本を手にとって相性を調べてみた。

えーと、オレと相田さんの相性は…。

「九十パーセント。相性いいね、オレたち」

「え…えっちだね…。誠二くん」

え、エッチ！？何のこと…？

この本って…。

” 身体の相性誕生日占い ”

「なっ！」

なんて本を置いてるんだ！だいたい誕生日なんかで身体の相性なんてわかんのかよ！

「あ、相田さん。これは間違えて…」

「私たち、相性いいんだあ…そっかあ…ふうくん…」

相田さんは目をトロロンとさせて何かつぶやいている。

「あの、相田さん？」

「うふふふ…」

いかん、相田さんがどっかに行ってしまった！なんだ！？変なスイッチが入ってしまったている！

「あ、相田さん！そういえばお腹空かない？」

「お腹…？あ…空いたかも…」

「ち、ちよつと早いけどお昼にしようか？」

「うん、いいよ」

よかった…相田さんが戻ってきたみたいで…。

「お昼、何にする？」

「誠二くんが決めていいよ」

うっ…。

オレに振られたか…。オレは前にも言ったように偏食がひどいからこんなときは大体人に任せて、その行ったところで食べれるものを食べてたんだ。

「オレ…好き嫌い激しいよ？」

「えー…たとえば？」

「生もの、魚介、野菜全般！」

「……………」

あー…さすがにひかれたか？

「あっははは！なにそれー！誠二くんお子様だね！おっかしー！」
相田さんは腹を抱えて涙目で笑い出した。

「い、いや…だって…」

「うふつ、かわいいところもあるんだね。誠二くんが食べれるものがあるところがいいよ、私は好き嫌いそんなにないから」

「じゃあ…ファミレスでもいい？」

「うん！」

相田さんは笑顔で頷いてくれた。相田さんがあんなに笑ったところなんて初めて見たかも。

かわいかったな…。

「誠二くん、顔真つ赤だよ。恥ずかしかった？」

「い、いや…」

まーたやったな、オレ。

「ふふふ、行こう？」

「う、うん」

からかわれてもイヤな気分はせず、近くのファミレスに向かった。ファミレスに入るとカップルや家族連れで賑わっていた。もう年末始の休みに入ってるから人が思ったよりも多く、スタッフの人たちは忙しそうに動いていた。

席に案内され、メニューを開く。

「うわあ、どれもおいしそう」

「決まったら教えてね」

「誠二くんと同じものでいいよ」

そりゃ困ったな。オレが食べれるのなんてそう多くないし…。

「ハンバーグ定食でいい？」

オレは一番無難なメニューに決めた。

「うん！いいよ」

そしてベルでスタッフを呼び注文する。

しばらく相田さんと話しているうちに注文したハンバーグ定食を持ってスタッフがやってきた。

「お待たせしました」

目の前にハンバーグ定食が置かれる。

美香以外の女の子と外食も初めてのことだ。

「いただきまーす」

相田さんはここにこしながらハンバーグにナイフを入れていく。なんか、いちいちかわいいよな。

「や、やだよ誠二くん。あんまり食べてるとこ見ないで…」

ぐっはあ！

いい！いいね！

恥ずかしそうにそう言う相田さんを見て心の中でガッツポーズを決めた。

ハンバーグ定食、オレが食べれるのはハンバーグとご飯くらいなもので、添え物のニンジンとかは食べれない。

「あー、残してるー」

「うっ…」

「いいよ、私が食べてあげる」

そう言っただけで相田さんはオレが残したものをパクツと口にほおり入れた。なんだか子供扱いされてるようで少しだけ恥ずかしくなってしまうんだ。

「ふふふ、誠二くんはお子様だねー」

「そ、そんなこと言わないでくれよ」

「あははっ、恥ずかしいんだ？」

そうやって意地悪そうに言う相田さんにオレは何も返すことが出来なかった。

「こ、これからどうしようか？」

オレはたまらずに話題を変えた。

「えー…うーん…誠二くんは何かしたいことない？」

「オレ…?」

そうだなあ、二人とも楽しめることがいいよなあ。

ボウリング：相田さんは運動苦手だし…。カラオケ：なんか今日は乗り気がしないな。シヨッピング：相田さんがオレに気を使うだけかも。映画：今何が上映させてるんだ？ゲームセンター：ん？いいんじゃないか？

「ゲーセンでも行く?」

「ゲームセンターかあ…」

ダメかな？

「うん！行こう!」

相田さんも考えたあとに快く了解してくれたのでゲーセンに行くことに。

「ここは出すから」

レジでオレが会計を済ませようとしていた。

「え？ダメだよ。私も払う」

「ほら、クリスマスプレゼントのお礼ってことで」

「それは今日の…」

「ね?」

「…うん、わかった。じゃあごちそうさま、誠二君」

相田さんは申し訳なさそうに笑っていた。

ファミレスの外に出て再びアーケードの中を肩を並べて歩く。温まった体も外に出るとあつという間に冷え切ってしまう。

寒さも後押ししてオレと相田さんは少しだけ急ぎ足でゲーセンへ向かった。

ゲーセンの中は冬休みだけあってオレたちと同じ年頃の人たちが多く遊んでいた。中は結構広いにその人の多さのせいもあって窮屈に感じられる。

「誠二くん、あれやって」

入口のすぐそばに置いてあったのはオレが得意としているゲーム、”太鼓の鉄人”だ。

「一緒にやろうか」

「私こういうの苦手だから見てるよ」

一人でやるのか…。まあいい、久しぶりの実戦で腕がなるぜ。オレはコインを入れ、もっとも得意としている曲を選んだ。

「相田さん、これのルールわかる？」

「うん、誠二くんの家でも見てたし」

なら大丈夫だな、さあ、かつこいいところを見せないと…！

ゲームが始まりオレは順調にリズムを叩いていく。

ドンドンドンドンカカカッドン！

フツ、決まったな。

「すごーい！一度もミスしてない！」

当たり前だよ相田さん、オレはこの曲を見なくても叩ける程練習したんだぜ。

「ほら、次は相田さんの番」

「え！？わ、私？うーん…」

「せっかくなんだし」

「…うん、じゃあ一回だけ」

「よっし、有名な曲もいくつかあるからわかるのを選んだ方がやりやすいよ」

「うん。それじゃあ…」

相田さんがそこで選んだ曲はクラシックの曲だった。そうだよな、J・POPの曲よりもクラシックとかの方がわかるんだ。

相田さんは少し不安そうな顔でゲームが始まるのを待っていた。

そして

ドン！ドン！カッ！ドン！

うまいうまい！いい感じ！

あっ、ミスった！

…そうそう、リズムに乗って。

カッカッドン！

「うっ、だめ、やっぱり出来ないよ」

「あははっ、いい感じだったよ、相田さん」

「そうかなあ？でも、パークッションって難しいんだね」

「はは、また違うもんだよ」

「ううん、誠二くんってすごいね」

「相田さんに褒められるなんて光荣だな」

「うーん、なんか楽しくなってきたな。」

「じゃあコインゲームでもやるっか。二人で出来るし」

「うん！」

それからいくつかのコインゲーム、クイズゲームやリズムゲームをして遊んだ。

うまくいかなくってほっぺたを膨らませたり、うまく出来た時なんかはとび跳ねてはしゃいだり、相田さんのことを見ているだけでも楽しかった。

「あっ、ねえねえ誠二くん。あれかわいくない？」

「え？」

相田さんはクレインゲームのコーナーでカエルのぬいぐるみを見て言った。

またカエルか…。

「相田さんってカエル好きなの？」

「そういうわけじゃないんだけどあれは目がかわいいなって」

そうなんだ。よし、それなら。

「じゃ、頑張ってみますか！」

「誠二くん取れるの？」

「ま、見ててよ」

自信はある。ひっかけやすそうだし。そう…あの目のあたりに…。

チャリ〜ン

ウイ〜ン…。

ここでストップ。

ウイ〜ン…。

ここだ！

オレは狙いを定めてクレーンを止めた。
さあさあ。

よし、いける！

あっ！

隣のぬいぐるみまで巻き込んでしまった。

くそっ、これじゃあ落ちてしまう。

…あれ？

「あっ！すごい！二つ持ち上げた！」

な、なんかラッキーだがそのままいけ！落ちるなよ。

そのまま…そのまま…。

ゴトゴトン…。

「誠二くんすごい！一度に二つも取っちゃった！」

「あ…はは、はい、相田さん」

ま、まあ狙って二つ取ったわけじゃないことは黙っておこう。

「ありがとう！じゃあ、もう一つのこれは誠二くんの！今日の記念だね」

「う、うん」

カエル他に取れたぬいぐるみはオタマジャクシのぬいぐるみだ
つたんだ。

相田さんと初めてのゲーセン記念はオタマジャクシでした。

正直、かわいくない…。

「あ、あのさ、誠二くん」

「なに？」

「き、記念ついでにさ、あれ…一緒に撮らない？」

「なっ！？」

相田さんが指差した先にはプリクラブースがあった。

あれは男女ペアなら恋人でしか入れないとされる聖域…。

「プ…プリクラ撮るの？」

「やっぱリイヤ…かな？」

うっ…。

そんなに潤んだ目で見ないでくれ！

「い、嫌じゃないんだけど、恥ずかしいし、よくわからないし…」
「私が全部するから…ね？」

はあ…相田さんがここまでお願いすることなんてないだろうし…。

「う、うん…」

「やったあ！じゃあ行こう！」

「うっ、うわ…っ！」

オレが返事をするやいなや相田さんはオレの手を勢い良く引っぱってプリクラまで連れてきた。

「うーん…」

何やら悩んでいるみたいだ。

「どうしたの？」

「どのプリクラにしようかなーって」

たしかにいくつか並んでるけどそんな悩むほど違うもんなのか？
どれでも一緒のような気がするんだけど。

「これにしよう、誠二くん」

「あ、うん」

そして相田さんが決めたプリクラの中に入った。

「私に任せてね。えーっと、背景がこれで…明るさはこれくらい…
あと…」

設定…なんだろうか。相田さんはてきばきと操作している。

この狭い空間がなんとも気恥かしいんだよな。

「よし！じゃ、じゃあ誠二くん、撮るよ」

「うん。…え！？うえ！？相田さん！？」

「さ、最近はこうやって撮るのが流行りなんだよ？あはは…」

相田さんはオレのすぐ隣に座って腕を組んできた。体の半身びつたりくっついてる。

「えっ、でも…」

「誠二くん、カメラ見て」

「あ、う、うん！」

パシヤッ!

「じゃあ今度は立ってアップで」

「は、はい!」

もちろん腕は組んだまま…。

パシヤッ!

「もう一枚!」

「り、了解!」

パシヤッ!

「最後、また座って」

「は、はいはい!」

パシヤッ!

お、終わりか?

『らくがきコーナーに移動してね、らくがきコーナーに移動してね』

「誠二くん、お疲れ様。私がらくがきするから誠二くんは座って待

ってて?」

「う、うん」

お、終わったあ…。

一気に疲れたよ…。

らくがきは相田さんがしてくれるそうなのでオレは近くのベンチに座って待つことに。

プリクラ自体久しぶりなのに、それも初めて一緒に遊びに来た女の子と撮るなんてさ。まったく驚いたね。

「お待たせ、誠二くん」

「あ、終わったんだ。見せて?」

「うん…えーと…ダメ」

「え?なんで?」

「あの…ね…う、写りが悪かったからあんまり見られたくないんだ。ごめんなさい」

「えー…っ。まあ、いいけど」

けっこうオレ頑張っただけだなあ。でも女の子なら写りとか気

にするだろうし、仕方ないか。

「ごめんね」

「いいよ、写りが悪いんだったらまた今度撮ればいいし」

「え？また？」

「うん。え？何か変なこと言った？」

「ううん！また撮ろうね！」

相田さんは嬉しそうに笑っていた。そうとう好きなんだろうな、プリクラ。

でも、いまさらだけど見せられないくらい写りが悪いってどこまで悪いんだよ。

ゲーセンの外に出ると、もう辺りは真っ暗だった。時間はまだ夕方なんだけど。

アーケードの中はもうお正月のイルミネーションが飾られていて、電球で作られた門松なんかさすがよかった。

あんまり遅くなったら相田さんの親が心配するだろうし、そろそろ帰らないとかな。それに相田さんは地元に戻れば一人だし、危ないからな。

「相田さん、暗くなってるしそろそろ帰ろうか？」

「えっ……………」

「…相田さん？」

「……………うん、そうだね」

相田さんは今までの笑顔がウソのように寂しそうな顔を見せた。

「誠二くん、今日はありがとう。すごく楽しかったよ！」

「うん、オレも」

「…へへ…。じゃあ私帰るね！」

「あ、バス停まで送っていくよ」

「…ううん、大丈夫」

「でも…」

「……………これ以上一緒に居たら帰りたくなっちゃうから…」

「え？」

なんて？小声でよく聞こえなかったけど。顔を伏せて表情もわからない。

「うっん！じゃあ！」

相田さんは一度笑ってバス停の方へ駆けだした。

「あっ……」

相田さんの後ろ姿を見送っていると、クルツとこっちを振り返った。

そして大きく手を振ってまた駆けだした。

「クスツ……なんだよ……」

オレは相田さんの姿が見えなくなるまでその場で見送り、自宅へと歩き出した。

アーケードの中を通ると今まで隣で歩いていた相田さんがふと恋しくなった。すれ違う人たちの笑い声で余計に寂しく感じる。

「なんだかなー」

オレは一人つぶやいてアーケードを抜けて行った。

一人で歩く道のりはなぜかいつも以上に寂しく感じて、ついつい自分の隣に目を向けてしまう。

それが年が明ける前の冬。

ちらほらと雪が降ってきて、真新しい手袋が暖かった。

初詣

新年、明けましておめでとうございます。

わたくし椿誠二は無事に新しい年を迎えることが出来ました。

ただ今の時刻は午前五時。

そして今居るところは近所の神社。

そう、初詣に来てるんだ。

毎年、美香、勇介、渉の四人で来てたんだけど、今年は渉はパソコン部の先輩たちと初売りに行くそうなのでいない。今一緒にいるのは美香と勇介なんだ。あとで紗耶香と相田さんもこっちまで来るみたい。

「毎年のことながら人が多いよねー」

ホントに。この街にはこんなに人がいたのかっていうくらいの人
が初詣に来ている。

「誠二くん」

「あ、明けましておめでとう、相田さん」

「あけおめ、誠二」

「おう、明けましておめでとう、紗耶香」

二人が合流した。

「おめでたくないわよ、何でこんな早起きしてわざわざこっちに来
て…」

「紗・耶・香・ちゃ〜ん？」

「あ〜〜！早起きって三文の徳っていうしね！」

「そうそう、紗耶香ちゃんもみんなと初詣行きたいって言ってたし
ね」

「は…はは…」

何やら相田さんと紗耶香が微妙なやりとりをしている。ここまでは
紗耶香のお父さんに送ってもらったらしい。

「二人とも明けましておめでとう」

美香も続けて新年のあいさつをした。

「明けましておめでとう。美香ちゃん」

「明けましておめでとう」

女三人、見事な晴着ってわけじゃなくて残念ながら普段着だ。

「さて、初詣済ませちゃおうか」

「おーい、オレは今年も忘れられてるのか？」

勇介の扱いは今年も変わらずってことで。

ま、これでみんな新年のあいさつも済んだことだし、初詣を済ませますか。

長い初詣待ちの列にみんなで並んだ。

それでも思ってたより時間はかからずに三十分程度でオレたちの順番はまわってきた。

チャリ〜ン

お賽銭を入れて今年の願い事をする。

オレの願い事は…世界平和。

なんてことじゃなく、”みんなといつまでもこの楽しい関係が続きますように”…と願い事をした。

かっこつけて、なんて言われるかもしれないけど正直な気持ちなんだ。

美香も多分みんなのこととか願い事してるんじゃないかな。そんなやつだから。

相田さんはどうだろう？よくわからないな。

紗耶香は相田さんのことか？

勇介は…。

「さーて、初詣も済んだし、おみくじでも引きに行こうか！」

紗耶香はやっと終わったっていう感じで背伸びを言った。

「おう。でも、あいつまだ願い事してるぞ？」

勇介だけいつまでもずつと手を合わせたまま境内に立っていた。オレたちのあとにも何人かの参拝客が済ませているのに。

「ほっときましょう。いちいち待ってられないわよ」

相変わらず冷たいよな、紗耶香は。

「賛成」

「わ、私も」

おう、美香と相田さんまで。

「はあ…一応伝えてくる」

ま、全員一致だからな。

そしてオレは人ごみをかきわけ勇介のもとへ。途中、周りの人たちに迷惑がられながら進んで行った。

「おーい、オレらおみくじ引きに行くからな」

「……………」

聞いているのか聞こえてないのか。

「伝えたからな」

オレはそのままみんなのところへ戻った。

ずいぶん熱心だな、あいつ。どうせろくでもないこと願ってるんだろ。ま、女関係だな。

神社には売店があつて今年の干支の絵馬やお守り、おみくじが売られていた。

やっぱり賑わつててここも順番待ちだった。

「あーもう、さっさと進んでよ」

紗耶香はそんな悪態つきながら待っていた。

「まあまあ紗耶香ちゃん。こんなのもお正月らしいよ」
それを相田さんがなだめる。

よく見る光景だった。ホントにいいコンビだよな、この二人って。

「本当に仲良いよね、紗耶香ちゃんと恵ちゃん」

「そうだな」

それを見ていた美香が微笑みながらそう言った。

こんな、何気ないことなんだけどこれが心地良い。

「置いてくなんてひでえぞー」

「あんたがいつまでも突っ立ってるからでしょ！」

それに勇介が加わる。

「だってよー、今年一年の願い事だぜ？いくらでもあるだろ？」

「欲張る奴の願いなんて叶えてくれないさ」

「うっせー誠二。お前は何願い事したんだよ」

「お、教えるかって」

「ははーん、お前だって変な願い事してんだろ？オレと同じさ！」

お前、変な願い事してたのか…。

オレのなんて恥ずかしくて言えるかっての。勇介とは違う意味でね。

「ほら二人とも、もうすぐだよ」

売店の順番が回って来ていろいろ見てたけど、後ろで待ってる人が気になって結局おみくじだけ買うことにした。

全員おみくじを買って少し人ごみを離れた。

そしてそれぞれ自分をおみくじを確認する。

オレは……中吉！

ま、まあまあだな。初めてだ、今まではずっと大吉だったからこ
ういうのって全部大吉なんだと思ってた。

「みんなどうだった？」

「「大吉！」「」

おうっ。

女性陣三人が声を揃えて言った。そんなもんだよなー。

「誠二は？」

「ん、中吉」

「ぷっ、中途半端ね」

「なんだと紗耶香！吉は吉だ！」

「でも私の勝ちー」

何でも勝負かよ…。

ん？

「勇介、お前は？」

勇介は一人肩を落としていた。

「聞くな、わかるだろ？」

「まさか…きよ…」

「こいつは驚いた！凶なんて引いたの初めて見たぜ！」

「ぷっ…ゆ、勇介…いい、良いことだってあるさ…ぷぷっ…」

「く…笑いたきゃ笑え！」

「ぷっ…ぶあっははは！」

「てめえー！！！」

「ははははは！！！」

神様！新年早々ありがとう！

オレは勇介に追いかけて人ごみに紛れるように逃げ回った。

そして

残された三人は…。

「もっつ、ほんつとあの二人は昔っからああなんだから」

「あの…み…美香ちゃん」

「何？恵ちゃん」

「あっ！めぐ、私知り合い見つけたから挨拶してくるね！」

「紗耶香ちゃん…うん。行ってらっしゃい」

「じゃあ後でね、美香ちゃん」

「うん」

「……………」

「えっと…恵ちゃん、どうしたの？」

「ちよつと聞きたいんだけど…」

…この時の二人の話しが、あとでオレを悩ませることになる。

オレは何も知らなかったんだ。

……………」

「うん…わかった。じゃあ恨みっこなしだね」

「…ごめんなさい」

「いいの。どうせ私だって…」

「はあっ…はあっ…あれ？紗耶香は？」

オレは勇介から逃げてまた戻ってきた。

「なんか知り合い見つけたって挨拶に行つたよ」

「ふーん、あれ？二人ともどうしたの？」

「な、なんでもないよ！」

「あはは…堀川くんは？」

「ん、人ごみの中に消え去つたよ」

なんとなく二人の雰囲気の違いだけは気がついた。だけど、その時には気にも留めなかったんだ。この時に聞いていれば…。いや、何も変わらなかっただろう。

それから紗耶香と勇介も戻って来て今からどうしようかと話していた。

「あつれー？みんなお揃いだ！」

「ホントだ〜」

え？

「あ、理恵先輩、アリサ先輩、明けましておめでと〜ございます」

「あけおめ〜」

「おめでとー！みんなもう初詣済んだの？」

「はい、みんな済ませましたよ」

「じゃあ私たちも済ませてくるからそのあとみんなで遊ぼうよ！」

「オレは別に構わないですけど…」

「めぐと私は帰りはバスだから時間あるわよ」

「私もいいですよ。どうせ勇介も暇でしょ？」

「オレは予定があろうとこちらを優先する」

みんな大丈夫みたいだな。

「決まりですかね」

「じゃあ誠二くん家行こう！」

「何でオレん家！？」

「近いし、行ったことあるし」

「はあ…いいですけど…」

「じゃ、早いとこ済ませてくるから！」

理恵先輩とアリサ先輩はどうやってか本当にすぐ戻って来てみん

なでオレの家に向かった。

正月らしい遊びなんて何一つせず、みんな話してゲームして、いつか見た光景だった。

新しい年が始まり、気持ちも少し新鮮なものになった。

オレにとってはこの年が生涯で一番の思い出になった年かもしれない。

バレンタインデー

年が明けて、部活も学校も始まりいつもと変わらない日々が戻って来た。久しぶりに足を運んだ教室では、みんなお決まりの新年のあいさつを交わし合っていた。

そして一月ほど経って、校内には何やらいつもと違う空気が流れていた。

男子も女子もそわそわと浮足立った様子でほんの少しの緊張感が漂っている。

特に女子は自然に振る舞いながらも今か今かとその時をうかがっている様子だ。

今日はバレンタインデー。

オレは昔から美香からだけは毎年チョコレートをもたらっていた。多分今年もくれるだろう。もうお約束って感じだな。たまに他の子からももらうことだってあったけれど、まあ義理チョコだな。本命ならちよつと困ってしまうし。

その日はとどころで女子が男子にチョコレートを渡す姿が目についた。でも大体は軽い感じで、義理チョコなんだろうけど。本命なら一目につくようなところじゃあげないよな。

こんな少しいつもと違った一日。

オレにとつても今日この日は忘れられないものとなった。

オレが初詣の神社で神様にした願い事……。神様ってのはやっぱりないもんだなって思った。それともオレの願いなんて叶うもんじゃないなかつたのかな？

でも…。

「はい、誠二。義理チョコよ」

放課後、いつものように部活に出ていると紗耶香がバレンタインチョコをくれた。まさか紗耶香から義理とはいえ、もらうとは思ってなかったからビックリだ。

「お、サンキュー！」

「お返しは倍返しだからね」

…やっぱ返そうかな。

「私からもあるよー」

「わたしも」

なんと理恵先輩とアリサ先輩からももらったんだ。

「ありがとうございます！」

「お返し期待してるからねー」

「期待してる」

こんなんばつかかよ…。

でも、もらえることに悪い気はしないしね。

「お返して…クッキーでいいんですね？」

「それは誠二さんの気持ち次第でしょー。その結果によって今後の対応が変わるけどねー！」

恐ろしい…。

何を期待しているんだ、この人たちは。

それからは普通に部活をこなしていった。多分、美香は帰りにチ

ヨコくれるんだろうな。

もう部活も終わりの時間を迎えそうだ。

「誠二、あんた最近ちゃんと練習してんの？」

みんな楽器を片付けてもう帰る準備をしている時に紗耶香がそんなことを言ってきた。

「なんだよいきなり」

「別に。なんとなく気合いが足りない気がただけよ。今からちょっと基礎練見せてみなさいよ」

「はあ！？今から！？」

「今からよ」

勘弁してくれよ。もうみんな帰り始めてるんだぜ？

「なー、明日でもいいだろ？」

「いいからやんなさい、少しでいいから」

「んー…どこ？」

「そうね、ここやってみて」

紗耶香はそう言っただけでスコアブックを広げた。

オレは言われた通りにしてみせた。

「どうだよ？」

「ん、ちよつとリズムおかしいわよ」

そうは思えないんだけどな、ちゃんとメトロノームに合わせてや
ってるんだし。

「もう一度」

「うへえー…」

それからまたやらされて、それを何度か繰り返した。

もう周りには数人しか残っていなかった。

「おい、まだやんのか？」

「もういいわ、じゃ、片付けてから帰ってね」

「あ、おい！」

紗耶香はさつさと練習場を出て行った。

なんなんだよまったく…。何度しても変わらなかったじゃんか。

そういえば美香の姿を見ていない。いつもなら呼びに来るんだけ
ど…。

「誠二くん」

「相田さん、まだ残ってたんだ。紗耶香はさつき帰ったよ」

「うん…。あ、あの…ちよつといいかな？」

いつもなら紗耶香と一緒に帰っている相田さんが紗耶香と入れ替
わりのようにやってきた。もしかしてバレンタインチョコくれるの
かな？

「うん、何？」

「ここじゃちよつと…」

ちよつぱりそうだ。相田さんは恥ずかしがりなところがあるからな。

オレは相田さんに連れられて部屋へとやってきた。もうみんな楽
器は片付けてしまっていて誰もいない。

部室で相田さんと向かい合わせに立っている。相田さんは恥ずかしそうにうつむいたままだ。

そして意を決したかのように紙袋を前に差し出した。

「あ、あの、これ…バレンタインチョココレート」

「あ、ありがとうございます！相田さん！」

「て、手作りなんだ」

「ホントに！？ありがとうございます」

やっぱり相田さんならなら紗耶香たちからもらったものよりありがたさが違うよな！。

オレはそんなのん気な事を考えていたんだ。

「……」

「本命…だから…」

「え？」

「な、なんだって？」

「誠二くん…私…私…！」

「あ、相田さん？」

「な、なんだなんだなんだ！？」

「わたし…っ！誠二くんが好き…大好き！」

「えっ…あ、相田さん？なにを…」

「誠二くんは私を救ってくれた。誠二くんは私を叱ってくれた。誠二くんは私を守ってくれるって言うてくれた！」

「……」

「ずっと守っていて欲しい。ずっとそばで支えてて欲しい。ずっと

…誠二くんに甘えていたい…」

「うん…うん…」

「私はもう…誠二くんがいないとダメなんだ。誠二くんの笑顔が、声が私を救ってくれる。私は誠二くんがいたから笑ってられる。いつの間にか好きになってた。誠二くんばかりを見てた。誠二くんが私の中にいた。…私は…誠二くんのそばに居たいの…」

「……」

「だから…私を誠二くんの彼女にして下さい。私を…隣に居させてください」

「……………」
「わけが…わからない…」

頭が真つ白だ…。

ただ…目の前で涙を浮かべながら話している相田さんを見つめることしか出来なかった…。

「……………」

「……………」

「…ごめんなさい。急にこんなこと…」

「……………」

何か話さないとって思うけれど、何も言葉が浮かんで来なかった。

「あの…返事は一ヶ月後の今日、ホワイトデーに下さい…」

え？どうして…。確かに今すぐになんて答えきれないけれど。

これって…告白なんだよな…。

「わ、私…これで帰るね。どんな答えでも私は受け入れるから…」

もし、私を選んでくれたとしても…後悔…ないようにね…」

え？選ぶ？後悔って…。

「じゃあ、誠二くん。美香ちゃんが待ってるよ」

え…？

「ちよつと待つ…」

相田さんを引きとめる間もなく、相田さんは逃げるように去って行った。

美香…？

美香が待ってる？

オレは頭の中が整理出来ないまま校門までやってきた。

「美香…？」

そこには美香が一人待っていた。他の生徒は帰ってしまったのかもういない。

外はもう暗く、近くに寄らないと顔もよく見えなかった。

「誠二…待ってたよ。帰ろう?」

「お、おう」

相田さんが言ったように美香が待っていた。オレは美香の顔を見ることが出来なかった。

それから、特に会話もないまま帰り道を歩いていった。

風が強くて震えてしまうくらい寒かった。それはよく覚えている。

「誠二、ちょっとあそこ寄って行こうか」

美香がそう言ったのは帰り道にある公園。この時間にはもう誰もいない。

そして公園のベンチに二人で腰かけた。

「恵ちゃんから…告白されたでしょ?」

「え!?なんで…!?!」

美香の口から思ってもいなかった一言が放たれた。思わず動揺してしまふ

「初詣の時に恵ちゃんと話しをしたの。誠二に告白するって」

「なんでわざわざ…」

「フェアにいきたいんだって。人が良すぎるよね?」

「なんのこと…」

「いったい何の話しをしてるんだ?」

「相変わらずだね…。私も…私も誠二のことが好きなの」

「!!!!」

「ずっと…誠二のことだけを見てきた…。小さい時から当たり前のように一緒に過ごして来たもんね。わかんなかったでしょ?」

美香がずっと思ってきた人って…。

「美香…。ごめん、オレ今まで…」

「いいんだよ。何度も誠二に気持ち伝えようって思ってたけど、優花ちゃんのことがあるのわかってたし。それに、誠二は私のことただの幼馴染としか見てなかったもんね」

「そんなことは…」

あの…キスされた時までは確かにそうだったな。なんであの時に

気がつかなかった？

「とにかく！私は誠二のことがずっと好きだったの！」

「美香…」

美香はこちらを見ずに声を大きく言った。

「恵ちゃんは誠二がどっちを選んだとしても私と仲良くしていたいって言ったの。私もじゃあうらみっこなしだねって…。誠二にとっては勝手なことかもしれないけど、恵ちゃんは決意したみたいだったから」

…そんなことが…。勝手だよ、二人とも…。

「でも…私は幼馴染としてじゃなくて誠二の彼女として隣に居たい」
「……………」

「私も…恵ちゃんも覚悟は出来てる。誠二がどんな答えを出そうとね。それに、たとえ恵ちゃんを選んだとしても、私は誠二と今まで通りの関係で居たい」

どちらか…選ぶしかないのか？

「聞いたと思うけど、返事はホワイトデーに欲しいの」

「ああ…」

一ヶ月後…それが長いのか短いかわからない。

だけど、それまでに答えを出さないといけないのか。

「ごめんね、誠二。いきなりだったよね？でも…私も前に進みたいの」

美香も…？

「それと、順番逆になっちゃったけど、これ、バレンタインチョコリート。今までだって本命だったけど、今度のは特別だよ」

「あ…ありがとな」

そうやって小さな箱を受け取った。

「また来年も…私に誠二のための本命チョコを作らせて…」

もし来年、オレの隣に相田さんが居たならチョコリートはくれな
いだろう。

…美香が震えている。

多分この寒さのせいじゃないんだ。いつも通りの表情でいつも通りの話し方だったけれど、きつと、逃げ出したいくらいの気持ちだったんだろっな。

オレが過去にとらわれていて…美香も前に進めなかったんだ…。

「美香：今まで辛かったんだろ？ごめんな…」

「ふえっ…誠…グスツ…そんなこと言わないで…。ほら、先に帰ってよ」

「美香…」

「ほら早く！女の子の泣き顔見るなんて意地が悪いよ？」

「……………」

オレは美香を残して公園をあとにした。

オレは…どうしたらいい？

また傷つけてしまうんじゃないのか？

いや、必ずどちらかが悲しい思いをするんだ…。

わからない。

わからないよ…。

このままみんなで楽しく過ごすことって出来ないのかな？

美香と、相田さんと、みんなで…。

家に帰ってもそんなことばかり考えていた。

いくら考えても答えは出なかった。

相田さんの思い、美香の思い。

どちらもオレにとっては重過ぎるものだったんだ。

その日の夜は…眠れなかった。

苦悩

オレは…どうすればいいんだ？

バレンタインデーからオレはずっとこの自問自答を繰り返していた。

やっぱりいくら考えても答えは出ない。

あれから美香は相田さんに気を使ってか、オレと登下校はしていない。

二人はいつも通りに話しているみたいだけど、オレは相田さん、美香、二人とまともに話すことが出来なかった。

「誠二くん、最近変だね。どうしたの？悩み事？」

「涉…」

やっぱり周りの人にもわかってしまっただな。気をつけようとは思っただけだ。

「ああ…ちよつとな…」

「僕でよければ相談乗るけどね」

「あ…いや…いいよ。サンキュ」

涉に相談したってな…。でも確かに誰かに話しを聞いてもらいたい気持ちもある。

「ま、元気出してよ。誠二くんらしくもない。こんな時って産みの親を頼ってみるっていうのもいいんじゃない？」

母さん…か。そうだな、たまにはいいか。…いやいや、こういった話題には喜んで食らいついてきてちやかかれそうだ。

同じクラスの相田さんがすごく遠く感じる。

どうしても意識してしまって目を向けることが出来ない。

「はあ…」

ため息だつて自然に出てしまうんだ。

毎日の部活も行きたくなくなっていた。あんなに楽しかったのに、美香と相田さんもいるから気まずくてしょうがない。

「誠二……」

紗耶香が心配そうに声を掛けてくる。紗耶香はもちろん相田さんから事情は聞いている。

「紗耶香：オレは……」

「私は何も言えないわ……」

……そうだよな、紗耶香は相田さんを応援してるんだろうし。

「でも、結局決めるのはあんなだから」

それもわかってるんだ。わかっているはずだけど……怖いんだ。

自分で答えを出すのが。

そのせいで人が傷ついてしまうのが。

「なにになに……?」

オレと紗耶香のやりとりを興味深そうにアリサ先輩が聞いてきた。

「アリサ先輩、どうやっても答えが出ない問題があるんですけど、

そんな時どうすればいいと思いますか?」

「う……ん……答えが出ないんなら……答えは……ないんじゃない?」

答えはない……か。

初めっからそうなのかもな。

「ありがとうございます」

「いえいえ……」

アリサ先輩は首をかしげていたが、それ以上何も聞いてくることはなかった。

答えがないにしても答えは出さないといけない。ホワイトデーまでには。

「椿くん、ちょっといいかしら」

「え? あ、はい」

突然、奈美先生から呼び出された。

奈美先生がオレを呼ぶなんて珍しいことだった。

練習場の外で立ち話。

「何か悩み事?」

「え?」

「上の空で全然練習が手についてないようだけど？」

「あ…すいません…」

それだけしか言えなかった。告白されたから悩んでるなんて部活には関係ないもんな。

「何かあれば相談に乗るわよ？悩んでる生徒の相談に乗るのも教師の役目なんだから」

でも…。

「…何でもいいんですか？」

「ええ、もちろん」

いい…のかな？

「ここじゃちよつと…」

オレと奈美先生が話している姿は何かと目立ってしまう。

「じゃあ部室にでも行きましようか」

「はい…」

それから練習中は誰も使わない部室へと移動した。

部室に入ると奈美先生は椅子に座り、両肘を机について手を組み顎を乗せた。なぜだか尋問されるような気分だったな。

「えーと、それで？」

「はい…。えつと…実は恋愛事で悩んでまして…」

「うんうん」

聞いてくれるみたいだ。というか非常に興味深そうに目を輝かせた。

大丈夫なんだろうな？

「最近…同時に二人の女の子に告白されて…どうしようかと…」

「相田さんと川口さんね？」

「なっ!？」

「ふふんっ」

奈美先生は得意気に鼻を鳴らしていた。

「見てればわかるわよ」

どうしてこの部には…いや、オレが鈍いだけなのか？

「で、どうするの？」

「それがわからなくて…」

「何がわからないの？」

「え？」

「何がって…」。

「オレが一人を選べば残されたもう一人が傷ついてしまう…から…。どうしたらいいか」

「優しいのね。椿くんは」

「そんなこと…。オレのせいで人が傷つくことがイヤなだけです」

「ふーん、逃げてるんだ」

「……………」

「逃げてる…？逃げてるって…オレは本当に傷つけないだけなんだ。」

「椿くん自信がイヤな思いをしたくないから」

「そんな…！」

「そんなことはない！」

「もし、あなたが二人の気持ちをどちらも受け入れなかったらどうなるかしら？」

「え？さ、さあ。わかりません」

「多分…また同じ繰り返しになるでしょうね。お互いにダメだったってわかったら」

「また…繰り返し…」。

「そしてあなたはまた傷つける」

「……………」

「そんなことって…」。

「でも、オレは何も答えることが出来なかった。」

「それとも二人が他の誰かを好きになるのを待ってる？私が思うに椿くんが悩んでるのは本当はどちらかを好きだから」

「え？」

「他に好きな人がいるならそんなに悩まないはず」

「……………」

「でもあなたはその答えを出すのが怖い。傷つけて、傷つくから優花の泣き顔が頭の中に浮かんだ。」

目の前で泣き崩れた優花。それに耐えきれなくなって逃げ出したオレ。あんな思い…したくない。

「椿くんは誰かに告白したことあるの？」

「…ないです」

「でしょうね」

「どうしてですか？」

「もし、あなたが誰かに告白するとして、フラれることは考えない？必ずうまくいくと思う？」

オレが告白するとして…？

断られることは考えるに決まってるだろ。

「考えますよ」

「そうでしょ？相田さん、川口さんだってそうよ。覚悟はしてるのよ。ましてや同時に告白なんてね」

「……………」

そう…言ってた。覚悟はしてるって。受け入れるって。

「覚悟してないのは椿くん、あなた」

「え？」

「傷つける覚悟」

「傷つける…覚悟…」

「そう。二人は勇気を出したわ。なら椿くんは？このまま逃げ続けるの？」

「オレは…」

「クスツ…。そうね、あとは椿くん次第よ」

奈美先生は軽くウインクしてそう言った。

「……………」

ガタン…。

「私にはこれくらいしか言えないわ。ごめんなさい」

奈美先生すうーっと大きく息を吸って席を立って部室を出て行くとした。

オレはその場を動くことが出来なかった。

「そうそう、もうすぐ卒業式でしょ？先輩を見送る時くらいはしゃきつとしないさね？」

「あ…はい。先生、ありがとうございます」

「部活はちゃんとこなすことー！」

奈美先生は笑って部室を出て行った。

覚悟…か。

オレにはオレの……。

それから部活に戻りいつも通りに部活をこなした。紗耶香も誰も何も聞かずにいてくれた。

そして部活が終わり、今日も一人で校門を出る。

毎日通る道。だけど一人で通る道はなんとも寂しく感じられる。

「おーい！」

「ん？」

後ろから勇介が走りながら近づいて来ていた。

こいつはいつも寄り道をしていて、あまり一緒に帰ることはなかったんだけど。

「よー！最近一人だな！たまにはオレが付き合ってやるよ！」

「はあ…相変わらず何も悩みがなさそうでいいよな」

「お前は最近おかしいよな、いつつも一人だしよ。美香とケンカでもしたか？」

「そんなんならまだいいんだけどな」

勇介にも話しておかないといけないかな…。

「実は…告白されたんだよ」

「へえ、誰に？」

「…美香と相田さん」

「な、なに！お前ってやつは美女二人も！なんて羨ましい！」

はあ…やっぱこいつに話すところなるか…。

「で、美香と付き合うんだろ？あいつ、昔っからお前のこと好きだったもんな」

「！！！！」

「お前…知ってたのか…！？」

オレは思わず立ち止まって聞いてしまった。

「ふん…実は前に美香に告白したことがあーる！ま、お前の事が好きだからって断られたけどな。お前ならしゃあないかって思ったよ」

「……………」

こいつ…案外強かったんだな。

近くに居たのに全然気がつかなかった。そんな素振りなんてまったく見せなかったもんな。それとも、やっぱりオレが鈍いだけだったのかな。

それから家の近くまでいろいろ話しながら帰って来た。

「じゃ、美香のこと大事にしてやれよ」

「あ、ああ」

…悩んでること、言えなかったな。

「はあ…」

ため息をつきながら家に入り、制服を着たままベッドに倒れ込んだ。

あんまり何も考えたくなかった。

でも、否応なしにいろんなことが頭の中をよぎる。

相田さんと出会ってから今までのこと、美香と過ごして来た今までのこと。そして二人の告白。奈美先生の言葉。勇介の言葉。

頭が痛いくらいにぐるぐるぐるぐるいろんなことが巡っていた。

「誠二ー！夕飯食べなさいー！」

「はい…」

母さんからお呼びがかかり一階へ下りて行く。

こここのところあんまり食欲だつてないんだ。

今日の献立はすきやき。

オレの気分とは裏腹にずいぶん豪華だな。

「あんだ、学校でいじめられてるの？」

「はあ!？」

オレがあまり箸をつけないことに対して母さんが言った一言がこれだ。

「そんなんじゃないし」

「なっさけない顔しちゃってさ!」

「うっさい」

「あらま!母親に向かってそんな口の利き方するなんて!」
「やっぱり母さんには言うまい。」

絶対に変な答えが返ってくるに違いないからな。

「あんだ…自分の気持ちに正直に答えを出しなさい」

「ぶっ!？」

な、何をいきなり核心をつくことを…。

「私にあんたの母親よ？」

恐ろしい。オレにもその読心スキルは備わっているのかぜひ試したいもんだ。

でも自分の気持ちに正直にか…。

確かにそうなのかもな。

ありがとう母さん。口に出して言うのは恥ずかしいから心の中で礼を言うよ。

「どういたしまして」

…無心だ。

この人の前で何も考えてはいけない。

オレはその日、少しだけ早目に眠りにつくことが出来た。

ホワイトデー

昨日から眠れなかった。

一晩中考えていた。

朝、いつものように学校へ登校する。

そして、いつものようにクラスメートへ挨拶していつも通りに授業を受ける。

そんないつも通りの一日でもオレには違っていた。

授業の内容は頭に入らない。

クラスメートの言葉も右から左へと通り過ぎて行く。

オレの頭の中は今日のホワイトデーの放課後のことだといっぱいだっただ。

今日は相田さん、美香、二人に返事をする日。

放課後の部活のあと、相田さんはこの教室、美香は部室で待つという。久しぶりに美香とまともに会話した内容がこれだった。

オレは考えて自分なりの答えを出した。

考えて…か。いや、初めっから答えは出ていたのかもしれない。

でも、オレがこの一ヶ月考えていたのは傷つけ、傷つくことばかりじゃなくて、彼女の覚悟を信じてみよう。二人の覚悟を信じてみよう。きつとまたみんな笑い合えるって、そう思ってきた。

今日のホワイトデーでは男子が女子にバレンタインデーのお返しをする姿が至る所で見られた。バレンタインデーに見た光景の逆バージョンだな。

オレは昼休みになるとあてもなく校内を歩きまわった。何をやるわけでもなく、ただ、ぼーっと歩いていただけだった。じーっとしてられなかったんだ。

一人の女の子の泣き顔を思い浮かべると、ものすごく胸が痛い。それをぬぐい去るように歩き回った。

いまだに逃げ出したい気持ちもないわけじゃない。

でも時間をもらった。その時間でオレは覚悟した。

大きくこれまでの日常を変えることになるんだろう、そのことも。

「紗耶香、これ、お返しな」

「ん、変なもんじゃないでしょうね？」

きちんとバレンタインチョコをくれた人にはお返しを用意してきた。
ていた。

部活で紗耶香にそれを渡した。

「いらぬなら返せよ」

「やーよ。……誠二、あんた……」

「大丈夫だ、ちゃんとする」

「そう……」

紗耶香はそれ以上何も聞かなかった。不安そうな目でオレを見ていた。紗耶香にとってもオレが出した答えは重要なんだろう。

「心配すんな、曲がりくねってオレは紗耶香が好きだなんてことはないから」

「は……はあ！？ふざけないでよ！」

「お、まんざらでもなさそうじゃん」

紗耶香が顔を赤らめて反応していたから。

「……ぶつとばすわよ？」

「おーこわっ」

「覚悟してっ！」

つとオレは紗耶香に腕を掴まれた。

「……誠二……」

「な、なんだよ」

「今日はそんなに寒くないわよ？」

「寒いっつーの」

「震えるほど？」

「……うっせーな」

紗耶香は掴んだ腕を放したため息をついた。

「ま、めぐに免じて勘弁してあげるわ。めぐに会うのにポコポコの

顔じゃあね」

「お前…、どれだけ殴るつもりだったんだよ…」

「そのだけ口が利ければ上等ね」

オレは震えが止まらなかったんだ。

この部活のあとを想像してしまつて。

でも、それは体の話で、オレの頭の中は不思議なほど冷静だつた。心の底では怖かつたのかもしれないけれど。

冗談も言えた。

去勢を張っていただけかもしれない。

刻一刻と迫るその時におびえながら。

………

「じゃあね、誠二くん。お返しありがとう!」

「いえ、お疲れ様でした」

「ばいばい、つじくくん」

部活も終わりを迎えた。

オレは一度部室をあとにして人がいなくなるのを待った。

それは相田さんが教室へ向かう時間でもあつた。

そしてしばらく待ったあと、オレは動き出す。

パンツ!

両手で自分の頬を叩き気合を入れる。

半端な気持ちじゃ何も言えそうになかつたから。

オレは廊下を歩いている。

彼女が待つ場所に向かつて。

一步一步確かに向かつていた。

そして…。

「待たせたかな?」

「…誠二…」

オレがやって来たのは美香の待つ部室だつた。

か細い声でオレの名前を呼んだ美香は、オレが来てもなお不安そうなお顔をしていた。

「……………」

美香からは何の言葉も出てこなかった。

オレからの言葉を待っているのか…。

オレは静かに話します。

「これ…バレンタインのお返し。チョコ、うまかったぞ」

「クスツ…ありがと」

美香はオレが渡した紙袋をそつと自分の後ろへ回した。

やっぱりうまく言葉が出てこない…。

「美香…オレは…」

「……………」

「オレは自分に正直に答えを出した。どちらか一人に悲しい思いをさせる覚悟もしてきた…」

「うん…」

…

…

…

……………」

「美香…ごめん。オレは相田さんのところに行くよ」

「……………」

「返事はオレがやって来た方になってたみたいだけど…美香には謝りたかった…」

「……………」

「今まで…ごめん。今までオレが美香を立ち止まらせてしまったこと…。長い間、想っていてくれてたのに気持ちに答えられなかったこと…ごめん…」

「……………」

「オレは…相田さんが好きだ。相田さんのところに行くよ。ホントに…ごめん」

「…謝らないで？」

美香が…口を開いた…。

「私…なんとなくこうなるんじゃないかって思ってたんだ…。誠二のことは今だって私が一番良くわかってるつもりだから」

「美香…」

「だからかな…。誠二が目の前に来ても不安は消えなかった。なんとなく…私…フラレるんだなって思ったんだ」

「ごめん…」

「だから…謝らないで？誠二は何も悪いことはしてないの。私は誠二が前に進めたことがうれしい。それに、これで私も前に進めるんだよ？」

「み…美香…」

「クスツ…泣かないでよ。泣きたいのはこっちなんだからさ」

「え！？あつ…」

「気付かなかった…。オレの目からは涙が自然と流れていたんだ。恵ちゃんのところに行つてあげなよ。待ってるよ？涙は拭いて。笑顔で好きって言つてあげてよ」

……………

「み、みがあゝ…ごめんな！本当に、ごめ…んな…！」
涙が止まらなかった。

オレは泣いて謝っていた。

「誠二も…辛いんだよね？苦しいんだよね？…ほら、顔上げて…」
美香はオレの涙を拭ってくれた。

美香はオレなんかよりずっとずっと辛いんだろう…泣きたいんだろ…。

それなのに…オレが泣いてちゃダメだ。

「グスツ…美香、オレ行くよ」

「…うん！」

そして最後に今までで最高の笑顔を見せてくれた。

美香…。

今まで想つてくれて…本当にありがとう。

オレは美香の前から走り去り、相田さんが待つ教室へと向かった。
「誠二……うっ……誠二……誠二……ああ……！……うっく……誠二……」

美香は誰もいなくなった教室で堪えきれなくて泣いていた……。

「うっ……えぐっ……私も……前に進まなくちゃ……。笑顔で……また二人に
会おう……」

……

……

……

……

はあっ……。

はあっ……はあっ……。

息を切らしながら教室までの廊下を走る。

……

ガララ……！

オレは自分の教室までたどり着きドアを開けた。

教室の窓側の一番後ろの席で彼女ま待っていた。教室の電気もつ
けずに、外灯から差し込むわずかな光だけが相田さんを照らしてい
た。

「誠二くん……もう来ないと思ってた……」

オレは息を整えて落ち着くまで待った。

頭の中は冷静でまっすぐに相田さんを見ていた。

「美香に……会って来た……」

「えっ……。そっか……」

相田さんはうつむき悲しい表情を浮かべた。

「どうしても……相田さんに会う前に謝りたかったんだ。今までのこ
と……それに今回のこと……」

「えっ……？……」

相田さんは顔を上げ、何を言ってるの？といった顔でオレを見て
いた。

オレは視線を反らさずにまっすぐに見つめて言った。

「オレは…相田さん、君が好きだ。初めて会った時から惹かれていたのかもしれない。オレでよかったら、隣に居てくれないかな？守らせてくれないかな？甘えて…くれないかな？」

「えっ…？…えっ？」

オレはもう一度、大きく息を吸い込んで…。

「もう一度言うよ。今なら自信持つてはつきり言えるから。オレは相田さんが好きだ…好きなんだ！」

「……………！」

相田さんは両手で口元を押さえて涙を零し始めた。

「せ…誠二くん…！」

オレは相田さんに近づいて流れる涙を拭った。

小さく震えていた…。

「誠二くん…怖かったの！本当はすごく怖かったの！」

「うん…」

「今日まですごく不安で…覚悟してたけどすごく怖くて…！怖かった…！」

よくわかるよ…その気持ち。

「もう安心していいよ。オレは相田さんの隣に居るから。どこにも行かないから」

「ふえ…ふえ…！…！」

相田さんは泣きながらオレの胸に飛び込んで来た。

もついいんだよな…。

オレは自然に抱きしめた。

…

…

…

「誠二くん、暖かい…」

「相田さんも暖かいよ？」

この腕の中のぬくもりはずっと大事にしよう…。

「オレは…相田さんの笑顔をずっと見ていたと思った。ずっとそれを守ってあげたいって思ったんだ。相田さんの笑顔のそばに居たいって」

「誠二くん…」

「だから、いつまでも笑っていていようね？」

「うん！」

相田さんはさっそくとびつきりのかわいい笑顔を見せてくれた。

「それぞれ！可愛いよ、相田さん」

「えへへ…。ねえ誠二くん。私、誠二くんの彼女なんだよね？」

「うん…そうなるよね」

「じ、じゃあさ、私のこと『相田さん』じゃなくて名前で呼んで欲しいな」

恵…でいいのかな？なんか照れくさいよな。

「恵…って呼べばいい？」

「うーん…『めぐ』…って呼んで欲しいな」

めぐ…か。相田さんがそう言うなら。

「めぐ…」

「えへへ…よろしい！」

か、かわいい！

こんな子がオレの彼女なんだな。

…いいよな？

ギョツ。

「あつ…。誠二くん…」

まためぐを抱きしめた。

………

オレの初めての恋だった。

めぐの暖かな表情を見た時から恋に落ちてたのかもしれない。

美香にあんな悲しい思いをさせたうえでオレたちがいる。

…絶対に大事にしよう。

改めてそう思ったんだ。

「みんなとはうまくやっていけるかなあ…？」
不意に呟いてしまった。

「…後悔してない？」
不安そうな顔でめぐが聞いてくる。

ああ…心配させちゃったな。

「してないよ。オレはめぐが好きだよ。ただ、これからもみんなと変わらない日常があつのかなって少し不安になって。めぐが一番大事だけどみんなとも仲良くしていきたいから」

「美香ちゃん…だね」

それだけじゃない。

勇介は美香と付き合うつて思い込んでたし、紗耶香もめぐとこれまで通りに接してくれるんだろうか？

そんなことを考えていた。

初めてだったから、嬉しい気持ちと先の不安も消せはしなかった。

「めんな、いい人たちだよ…」

そうだな…そうだよな…。

きっと大丈夫だよな。

「めぐ…そろそろ帰らないとダメだろ？遅くなるよ」

「え…あの…私は…。…うん、帰ろう」

何か言いかけた。

その時はそれくらいしか思わなかった。

それからめぐをバス停まで送って行った。

オレは帰り道、今日の出来事を一人想い浮かべていた。

幼馴染の気持ちに答えられなかったこと。別れたあとでおそらく流したであろう涙。今まで美香がどんな気持ちで過ごしてきたんだろう。今さらだけど、それを思わずにはいられなかった。

……

家に帰り夕食を食べる。

「誠二、今度彼女連れて来なさいね」

…もうこんなことも慣れたな。

「今度ね」

「予想通りの答えね。楽しみにしてるわよ」

これも母さんの想定内なのか。

「かわいくていい子だからあんまりからかうなよ？」

こんな会話をした。

それも初めてのことだった。

夕食も済ませ自分の部屋へ。

今日の出来事を思い返してベッドに潜り込む。

その日は久しぶりにぐっすり眠った。

友達

めぐと付き合うことになった翌日。

今日は土曜日。

いつも通りに部活へ。

オレは話さなくちゃならない。

部活の途中、紗耶香に話しかける。

「紗耶香」

「誠二、話しはめぐから聞いたわ。すごく喜んでた。お礼を言っわ。ありがとう」

「紗耶香」。

「でも。私はまだまだあんたをめぐにふさわしい男なんて思ってないからね！めぐを泣かせたら許さないんだから！」

「はははっ…オレは大事にするよ。泣かせたりなんか、悲しませたりなんかしない」

「な、なによ。そんなに言われたら何も言えないじゃない」

「紗耶香：オレは決めたんだから。」

「でも誠二。美香ちゃんとは大丈夫なの？」

「ん…ああ…今日はまだ話してない」

「紗耶香は全部わかってたんだよな。」

「頑張りなさいよ？」

「みんないつも通りに過ごせるように…」。

「それがオレとめぐの本当のスタートなんだ。」

「勇介」。

「勇介に話しをしよう。」

練習中だったけど勇介を探す。決心が鈍らないうちに話しておきたかった。

「あっ…勇介がこっちに向かってくる。」

「おう誠二！奈美先生見てないか？呼んで来いって言われてな」

「いや、こつちには来てないぞ。……勇介、少しだけ時間あるか？」
「何だ？改まつて。まさか……！お前美香と初体験を……！？」

「うーん、バカなんだけど今日はつつこむわけにもいかないし。」

「そのことなんだけどな……」

「お、おう……」

勇介は生唾をぐくりと飲み込んでオレの話しに耳を傾けていた。

「勇介……オレは美香と付き合ってない」

「……は？なんだって？」

「オレはめ……相田さんと付き合うことにしたんだ」

「……どうなる？」

「……なんでだ？」

「……自分に正直に答えを出した。オレは相田さんが好きなんだ」

「て、てめえ……！」

勇介がオレの胸倉を掴んで怒鳴る。

「美香がお前のことをどんだけ前から好きだったかわかってんのか

！お前だったからオレは……オレは……」

勇介に力がなくなっていく。

「……すまない……」

「謝って済むことじゃねえんだよ……」

「オレは……美香の気持ちを受け止めた。ずっと辛い思いをさせてたのもわかってる。だからって自分の気持ちに嘘ついて美香を選んでも、余計に辛い思いをさせるんだ」

「……そんなんじやオレは納得しねえ！」

「……美香は……笑ってた。オレは何度も謝ったよ。だけど、謝るなって言われた。美香は最初っからわかってた。オレが相田さんを選ぶこと。……確かにオレは美香を傷つけた。そのうえで相田さんを選んだんだ。……オレの覚悟だ。お前にもわかって欲しい。友達でいたんだ」

「……誠二、後悔すんなよ？」

「勇介…?」

「オレが美香を奪つても後悔すんなよ?絶対に振り向かせてお前でも見たことのないような笑顔にしてみせるからな!」

勇介…

「ふふっ…お前は無理だよ」

「なんだとこのやるー!!」

その後、勇介に散々追い回された。勇介は、きっとわかってくれたんだと思う。

オレの覚悟と美香の気持ち。

勇介はその後パートの先輩に用事を忘れていたことをこっぴどく怒られていた。

同じパートの美香もそれを見て笑っていた。

「誠二くん!何さぼってんの!」

やっば!

オレの理恵先輩に怒られちまう!

急いでパークションのところに戻った。

「ちよーっとうまくなってきたからって調子に乗ってるみたいだね

え、誠二くん」

理恵先輩が意地悪そうな顔でそう言ってくる。

「いや、あの…すいません!」

何をされるかわかったもんじゃなくからとにかくオレは謝った。

「あんまりおふざけが過ぎると私の胸で窒息させちゃうよ?」

それは…ぜひ!!

いやいや…オレにはもうめぐっていい彼女がいるんだからそういうことはもう止めてもらわないと。

「理恵先輩。オレ彼女出来たんで、もうそういうこと止めてください」

「えっ…!えー…!!」

あーもう!うるさいな!そんなに驚かなくてもいいのに。

「誰?誰?美香ちゃん?」

「…相田さんです」

また美香か…。

「恵ちゃんかあ…」

何？その残念そうな感じ。

「私は美香ちゃん応援してたからなあ。幼馴染キャラだし。いじつててかわいかったもんな。でも…よかったね！誠二くん！」

一応祝福してくれてるのか？それは。

「でも私が恋しくなったらいつでもいいからね！」

だから何でそうなるんだよ！

「つじくん～えっちいだから～めぐめぐ～危険～」

……………

まだそんなことまでは…いや…うん…まだだよ。

どうやら先輩たちは何も変わらないでいてくれるみたいだ。

よかった…。

「あ…誠二くん…」

そこにめぐがやってきた。

「きゃー！！恵ちゃん恵ちゃん！ちよっと来て！」

「な…なんですか？」

うーん…頑張れめぐ！

めぐは理恵先輩とアリサ先輩に連れて行かれてしまった。

質問攻めに合うんだろうなあ。

……………

「恵ちゃん、もう誠二くんとキスした？」

「そっ、そんな…！まだ昨日のことですし…」

「あーん！かわいい！ね、恵ちゃんからしちゃいなよあ？」

「つじくん～えっちいだから～きをつけて～」

「た、確かに…えっちいですね」

「え！なにになに！？何かあったの！？」

「占いで…身体の相性いいねって…」

「せ、誠二くんったら大胆ー！恵ちゃん、心構えはしといた方がいい

いかもね」

「そ、そんな…私はまだ…」

「勢いよ。恵ちゃん」

「や…先輩やだぁー!!」

「あんっ！逃げられた。恵ちゃんかわいいー！」

………

ん？めぐが戻って来た。顔真っ赤だな。あれは相当いじられたみ
だいな。

「せ…誠二くん、い…勢いなんてイヤだよ？」

「え？何言つて…つてちよつとめぐ！」

…走って行ってしまった。何か用事があつて来たんじゃないのか？

「うふふふ…」

先輩たちも戻ってきた。

「理恵先輩、何言つたんですか？」

「うふふ…誠二くんって大胆なんだね！」

はあ？何の話してたんだ？

「誠二くん、最初は雰囲気とムードが大事だから。あとは…勢いよ

！」

い、一体何を言っている!？

「あんた、めぐを泣かせたら許さないからね」

紗耶香！今のでわかるのか!？

たぶん、男のオレには分かりえない内容なんだろう…。

それからもういろいろ聞かれながら部活は終わりを迎えようとして
いた。

「誠二くん!!」

めぐ…そういえばさつき用事があるみたいだったもんな。

「誠二くん、この後時間ある？」

「うん、大丈夫」

めぐは急に真剣な表情になった。

「二人で美香ちゃんと話しに行かない？」

「……………」

大丈夫なんだろうか？オレたちの姿を見せて。

「けじめつけないの」

「そっか…けじめか…」

「うん！行こう！」

ちゃんと見てもらおう。

美香にとって酷なことだろうけれど。

美香を信じて。

そして部活も終わって二人で美香のところへ。

美香がいつも楽器の手入れをする場所がある。

…そこに美香は居た。

「美香！」

「……誠二」

めぐも一緒にいる。

オレの隣に立っている。

「美香ちゃん…あの…」

やっぱり…恨みっこなしっていつてもな…。

「恵ちゃん、誠二が泣かせるようなことしたら遠慮なく言ってね？」

誠二なんて殴り倒しちゃうんだから！」

「え……………」

美香は笑顔だった。

「恵ちゃん、私は誠二のこと大好きだった。だから私の分まで誠二

のこと好きでいてあげてね？」

「あ……………美香…ちゃん……………」

めぐは涙を浮かべて美香を見つめていた。

「誠二も！恵ちゃんのこと大事にしてあげるんだよ？」

「わ、わかつてるよ！」

美香の表情に曇りはなかった。

「私も…前に進むから」

「…うっ…うえっ…美香ちゃん…」

めぐは堪えきれず泣けてきた。

「美香”でいいよ！友達だからね！私も”めぐ”って呼んでいい？」

その言葉にめぐの表情が明るくなった。

「…うん！」

満面の笑みで返すめぐ。

「ふふ…めぐは眩しいな。誠二も！ずっと友達だよ！」

「…これからもよろしくな？」

「うん！」

笑い合った…。

そしてオレとめぐは部室をあとにした。

変わらない…関係でいれそうだった。変わったのは帰りが別々になったこと。オレはめぐをバス停まで送ってから帰る。

友達だけど、今までとは違うんだ。

オレと美香は別々に歩き始めた…。

卒業

そのまた翌日。

今日は卒業式だ。というのも、部室で行われる吹奏楽部員だけの卒業式。

今日は日曜日で学校は休み。

学校の卒業式自体は三月一日に行われた。

柳ヶ浦高校では卒業生とその保護者だけで卒業式が行われる。卒業式の時是在校生は休みになる。

それでも先輩達との別れを惜しむ生徒は卒業生に会いに学校へ出て来るんだ。

それが余計に卒業生の涙を誘うようだった。

オレももちろん千秋先輩たちを送りに行ったんだけど、ちょうど悩んでる時だったから笑顔で送り出すことが出来なかったんだ。

今日は卒業生がこの町に居て集まれる最後の日。

進学や就職で町を離れる先輩が半分以上いる。

千秋先輩もその一人だった。

今日はもう部室にみんな集まっている。

「千秋先輩、卒業おめでとうございます。この前は言えなかったから」

千秋先輩に声をかける。

「ありがとう、誠二。聞いたよ、恵ちゃんとのこと」

どこからそんな話しが…千秋先輩は久しぶりの学校のはずなのに…。

「みんな知ってると思うよ？」

「…千秋先輩、今度読心術を教えてくださいませんか？」

生まれ持った特殊能力なのか？千秋先輩も母さんも。

「誠二は全てが透けて見えるよ」

怖い…怖いです…。

「誠二くん」

「噂をすれば…ね」

めぐがやって来た。

「恵ちゃん聞いたよー。いっぱい誠二に愛してもらったよ?」

「そんな…愛してもらったなんて…」

めぐはそう言いながらも横目でちらつとオレを見る。

「あ、愛してるよ」

「え…やだ…誠二くん」

は、恥ずかしい…。

「見てることちまで恥ずかしくなってくるよ。目の前でイチャイチャしないの!」

「す、すいません」

あ、ハモった。

「はぁ…お似合いだね」

その後も三人で少し話していた。

「みんな、そろってる?」

奈美先生だ。スーツを来てビシツとしている。

先生にも今回はお世話になったな。

「それでは、今から吹奏楽部卒業式を始めます」

これでホントに先輩たちとは最後なんだな。

「卒業テープ、授与」

今までみんな演奏してきた曲がMDに録音されていて、それを奈美先生が一人一人に一言添えて渡して行く。

笑顔で受け取る先輩もいれば涙して受け取る先輩もいた。

そして全員に卒業テープが渡された。

「それじゃあ卒業生代表で村田千秋さん。挨拶をお願いしますわ」

やっぱりここは千秋先輩だよな。

「私たちは今年無事に柳ヶ浦高校を卒業しました。この三年間いろんなことがあったけど、みんなと過ごした吹奏楽部での思いでは一生心に残ることだと思います。みんなと笑い合った日々、みんなで

一緒に演奏した曲：悔しかったコンクール、全てが大切な思い出です。全てを心に刻んで私たちは旅立ちます。みんなとの出会いがこの三年間をすばらしいものにしてくれました。みんなありがとう…。そして、さようなら」

千秋先輩の最後の言葉は全て笑顔で話していた。

笑ってお別れだ。

一生会えないわけじゃない。

「村田さん、ありがとう」

奈美先生がそう言うと、千秋先輩は一礼して席に戻った。

「最後になるけど、卒業生に私とみんなからの演奏を贈ります。しっかりと心に刻んで下さい」

そして卒業生に最後の演奏を贈る。

演奏する曲はコンクールで演奏した二曲。

みんなで頑張って作り上げた曲。努力した日々、悔しかった思い出が詰まった曲。先輩たちが最後に演奏した曲を贈る。

演奏が終わると、卒業生の先輩たちはいつ鳴り止むかわからない程の拍手をしてくれた。

……………

そして。

『ご卒業、おめでとうございます！』

在校生の部員が声を合わせて卒業生に言葉を贈った。

これにより、吹奏楽部の卒業式は終わりを迎えた。

卒業生の中には、もう明日この町を離れる先輩もいる。

そんな先輩は準備もあるため、名残惜しそうに部室をあとにしていた。

千秋先輩は少し離れた大学に進学することになっている。出発は明日。

校門まで見送り、オレたちはいろんな話をした。

その中で千秋先輩がオレに抱きついて強引にキスしようとしていたけど、めぐが全力でそれを阻止していた。

「いくら今日が最後だからってダメですー！」

「いいじゃないのー、最後まで。減るもんじゃないんだから。ねー、誠二？」

オレに話しを振らないでくれよ。

「…めぐがイヤがることはしません」

その一言に余計に強引にキスしようとしていたが、奈美先生も含めみんなに止められていた。

でも最後はみんな笑い合っつて千秋先輩を送り出した。

きつとみんなの笑顔が千秋先輩の中に残ったことと思う。

卒業…おめでとございます。

初デート

先輩達を送りだしてから最初の休日、今日はめぐとデートなんだ。クリスマスの時も遊んだけど、オレの中では今日が初デートだ。いつもより気合いを入れてオシャレをしている。朝からなんだか落ち着かなくてそわそわしていた。

彼女とのデート…生まれて初めての事だからな。

家を出る時、母さんに「初めては優しくするのよ」なんて言われたけど無視して家を出て来た。

今日のデートはこの前と同じ街中デート。この前と違うのは彼女と並んで歩くこと。どんな感じなのかは想像出来なかった。

待ち合わせは午前十時、同じ公園の噴水でこの前よりも少し早い時間。

そして、今は午前九時ちょうど。

……

だって緊張して早く起きたし、家に居ても落ち着かなかったからどうしよう…めぐにメールしてみようかな…。いやいや、せつかな男だと思われたくないし。

うーん…。

「せ、誠二くん？何してるの？」

うわ！め、めぐ！？何してるのって…。

オレはさっきから携帯を握りしめて噴水の周りをグルグル歩いていた。

「いつから見えた？」

「うーん…五分くらい前かな。声掛けようとしたら噴水の周り歩き始めたから見えたよ」

…五分もうじうじしてたオレを見られていたのか…。

「何か観察してたの？」

めぐ、かわいいよ。

「いや…それにしても早いね」

「き、緊張しちゃって早く起きたから…」
めぐが恥ずかしそうにうつむいて言う。

「実はオレもそうなんだ」

「そ、そうなの？なんか可笑しいね！」
それにしても今日のめぐは一段とかわい。

だんだん暖かくなってきてコートはもう着ていない。白いシャツに少し茶色いジャケットを着ていてジーンズを穿いていた。少し化粧もしていて大人っぽく見えて違う雰囲気だけどそれがまたいい！

「めぐ…かわいいよ」

「は、恥ずかしいよ。もう…」
たまらないなあ…。

「時間早いけど行こうか？」

「うん！」

そうやってアーケードの方に歩き出したところだった。

「あ、待って！誠二くん！」

めぐはオレを引きとめてオレの左手を取り、自分の右手で握った。

「えへへ…行こ！」

なんか…いいなあこういうの！

そのまま手を繋いで歩いて行く。

このままいつまでも手を取り歩いて行きたい。そう思った。

ただ歩いているだけでも楽しい。

別に何もしなくても、めぐと手を繋いで歩いて、話して、それだけでも十分だった。

「誠二くん、またあそこ寄っていい？」

この前にも行った雑貨屋だった。

「うん、行こう」

まだこの前見た身体の相性占いの本あるかな？

オレは中に入るとその本を探してみた。

……あった。

全く同じ場所に並べられていた。

今度はめぐが見ていたであろう、隣に並べてある恋人相性占いの本を見る。

オレとめぐは…。

八十五パーセント…。

まずまずだな。っていうか身体の相性より低いってどうよ…。

「あつ…その本見てたんだ」

「相性いいね、オレたち」

「…ど、どっちの？」

「いやいや、この本見てるじゃん。」

「どっちって？こつちだよ？」

「そう言って手に持っっている本を見せる。」

「っていうかどっちって恋人以外の何の相性？」

「分かっているけどわざと聞いてみる。」

「え…そ…それは…。もう！誠二くんの意地悪！」

「意地悪って…何のこと？」

「楽しいかも…！」

「もう！知らない！」

「えっ！？あ…。」

めぐは怒ってどこかに行ってしまった。

調子に乗りすぎたかな…。

ちゃんと謝ろう。初デートでいきなりケンカなんてしたくないし。

どこに行った？店の中にはいるはずだけど…。

しばらく店内を見回っているとめぐを見つけた。

「めぐー！」

めぐはオレの方を見たけどすぐに視線を反らした。

「めぐ、悪かったよ、そんなに怒らないでくれよ」

「知らない」

「どうしたら許してくれる？」

「そうだな…私のお願ひ一つ聞いてくれたら許してあげるよ」

お願い？なんだろう？めぐのことだから何か変なお願いかもな…。

「い、いいよ。何でも聞くから許してくれよ」

「じゃあ、いいよ！」

そうやってめぐはまたいつもの笑顔に戻った。

「めぐの怒った顔初めて見たけど、怒った顔もかわいかったな」

「そ、そんなこと言ったって誤魔化されないからね」

そう言いつつもめぐは恥ずかしそうに顔を伏せていた。

「それで、お願いって？」

「またプリクラ撮ろう？」

うつ…プリクラか。相変わらず苦手なんだよな。

「わかったよ、じゃああとでまたゲームセンター行こうな」

「うん！」

やっぱり嬉しそうなめぐがいいな…。

その後しばらく店内を見て回っていた。

「ねえ誠二くん」

ん？

「なに？」

「この携帯ストラップかわいいと思わない？」

めぐはそう言って一つのストラップを手に取りオレの目の前に下げた。

「うん、かわいいと思うよ」

「じゃあお揃いでストラップつけようよ！」

「ああ、もちろん…あつ…！」

自分の携帯を取り出した時に、オレがつけているストラップが美香からもらった物だと思い出した。

「めぐ、ごめん。このストラップさ、美香からクリスマスプレゼントにもらったんだ。イヤなら外すけどつけててもいいかな？大事にしたいんだ」

「……いいよ。じゃあお揃いは別のものにしよう！」

美香がくれた最後のプレゼントなんだ。大事にしたい。

「ごめんな、めぐ」

「いいよ、美香ちゃん。誠二くんにとっても私にとっても大事な友達だもん」

めぐははにかんだ笑顔で答えてくれた。分かってくれてるみたいでよかった。

その後、何かお揃いで物が欲しいと探していたけど、結局また今度ということになった。

「少し早いけど、お昼にしようか」

「そうだな、早く起きたからお腹空いたな…」

「誠二くんが食べたいものでいいよ!」

食べたいものか…。むしろオレにとっては食べられるものだな。好き嫌い治さないと。

「めぐは好き嫌くないの?」

「見た目がグロテスクなものはダメかな」
めぐらしいな。

それから近くにあったパスタ料理屋に入った。

デートなんだから少しでもオシャレな感じにしようかと思ってさ。

オレは嫌いなものが入っていないペペロンチーノ、めぐはシーフードパスタだ。オレには絶対無理なパスタだな。

料理が運ばれてくる。

「誠二くん、こんな美味しいの食べれないなんて人生の半分は損してるよ?」

その言葉、もうイヤというほどみんなからも聞いたよ…。

「でも、そんな問題、めぐと出会えたことで帳消しだよ」

好き嫌いとは何の関係もないけど…。

「む…そうだね」

納得したね、納得しちゃうんだね。

そしてパスタを食べ終えて店をあとにした。

食事はオレのおごりだ。

「誠二くん、デザートは?」

「ん…何食べたい？」

「ケーキ！」

子供みたいに目を輝かせて言った。

少し離れたところに有名なケーキ屋があるのでそこに連れて行く。途中でめぐは「ケーキ ケーキ」とホントに子供みたいだった。高校生なんだけとその様子が違和感なく見えたのがなんともめぐらしい。

「うわぁ、人が多いね」

「ここ、結構有名みたいなんだ。初めて来たけど」

「ところで誠二くんケーキって大丈夫なの？男の人って甘い物苦手なイメージがあるから」

「甘い物好きだよ。コーヒーも甘いやつじゃないと飲めないし」

「ふふ…本当に誠二くんはお子様だね」

子供になつてめぐに甘えたいよ。

メニューを眺めて、オレはティラミスとコーヒーに決めた。

「めぐ、決まった？」

「うん！これがいい！」

ん…超巨大パフェ…。

まあありがちだよな。

値段は…四千元！？

「ほ…本当にこれにするの？」

「うん。だつてほら…」

めぐが指差したところを見ると、”二十分以内に食べたらタダ”と書いてあった。自信あるんだろうな。

そして超巨大パフェを注文すると店員さんが驚いたように確認してきた。あんまり挑戦する人はいないみたいだな。

「楽しみだね！誠二くん！」

「ケーキ食べたかったんじゃないの？」

「だつて気になるんだもん」

いいんだけど食べきれなかったら四千元だよ？財布の中身を確認

したい…。

でも…そんな心配は無用だった。

オレが注文したケーキとコーヒーが届いた。さすがに超巨大なもののは時間がかかるようだ。

「先にいいよ、誠二くん」

そう言われたので先に頂くことにした。

ケーキはさすがに有名なだけあっておいしかった。オレはあっさり食べ終わりコーヒーを飲んでいるところでパフェが届いた。

めぐが…めぐが消えちゃったよ。

テーブルを挟んで向かい合って座ってたんだけど、運ばれてきたパフェでめぐが見えなくなってしまった。いや、これ四千円でも安いんじゃないの？普通のサイズの十倍…いや、もっとあるか？中身は全部のデザートが入ってるんじゃないかって言う程ぎっしり詰まっていた。

「めぐ、どうするの？これ？」

「え？食べるよ？」

めぐは本当に「何言ってるの？」みたいな顔で当然のように言った。

「それでは今から二十分間です。よゝい、スタート！」

店員さんの掛け声でめぐは食べ始めた。そんなにスピードは早くないけど、ペースはおちることなく進んで行く。オレは見ているだけで胸やけしそうだった。

そんなに小さい体によく入るなあ。

うわっ！もう半分…！まだ五分しか経ってないよ？

あらら、店員さんもびっくりしているご様子で。初めてなんだろうな、ここまで平気で食べる人。

あ、ペース落ちてきた。でももうちょっと！

頑張れめぐ！ここまでできたら応援しないと！

ほら！もう少し！

よしっ！よしっ！よしっ！

やった！完食だ！

「店員さん、間に合いました？」

オレは時間を確認してみた。

「じゅ、十五分で完食です…」

早っ！めぐは大丈夫なのか？

「あゝ、おいしかったあ」

平気そうだ。

「よく入るなあ。さっきお昼済ませたばかりなのに」

「甘い物は別腹なんだよ？誠二くん知らないの？」

いや、確かにそう言うけど入る腹は一緒だから。例え別でも無理でしょ。

「そんなに食べてよく太らないなあ」

「いつもこんなに食べてるわけじゃないよあ」

その後、店員さんに写真を、と頼まれていたけれど、めぐは恥ずかしかって断った。

「そろそろ行こうか」

「プリクラに？」

うっ…ついにきたか…。

「とりあえずゲームセンターだな」

そしてこの前のゲームセンターに。

その途中も手を繋いで歩く。まだ慣れなくて照れくさいけど幸せな気分だった。

そしてゲームセンターのプリクラへ。

うーん…やっぱりこの空間がなんとも…。

もうめぐとも二回目だから幾分かはマシだけど、それでも落ち着かなかった。

「誠二くん、もう恋人同士なんだから…」

めぐはそう言って背中からオレを抱きしめる形になる。

「めぐ、恥ずかしいよ…」

「えへへ…」

パシャッ！

そのポーズで一枚目。

「今度は誠二くんがして？」

逆になり二枚目。

心臓がバクバク激しい…！背中を通してめぐにわかつちやうよ！
オレの胸がめぐの背中にぴったりとくっついていてから心臓の鼓動が伝わる。

「誠二くん…すごくドキドキしてるね…」

だってこんなに近くにめぐが…それに二人っきりの空間…。

シャンプーの匂いがいい香りだし。

「でも…私もなんだよ？」

そう言って顔を真っ赤にして振り向き照れくさそうな笑顔を見せた。

顔が近いよ…。

さらに心臓の鼓動が高まる。

「誠二くん…」

めぐは上目使いでオレを見る。

「めぐ…」

めぐが体を傾けてオレの方を向く。

「誠二くん…」

めぐが目を閉じる…。

そして…。

キスをしたんだ…。

「ん……………」

めぐが小さくもらす。

頭が真っ白だった。

何も考えずに自然とキスをした。

そして抱きしめていた。

その間がどれくらいの間だったかはわからない。何も考えられなかった。

「誠二くん…。嬉しい…」

「めぐ…」

そうやってまたきつく抱きしめる。

「あつ…。えへへ…。誠二くん大好き」

そうしてまたキスをした。

「めぐの唇、柔らかい…」

「な、なんかえっちだよ？誠二くん」

その言葉にカアツつと顔が真っ赤になるのを感じた。

「そ、そうだ！プリクラは？」

オレは慌てて誤魔化した。

「あつ…。撮影終わっちゃったみたい」

そっか…。なんかイチャイチャしてただけだったな。

撮影ブースを出てらくがきコーナーへ。今回もめぐにまかせっきりだ。オレはまた近くのベンチに腰掛けて待っていた。

キス…。しちやったな。

めぐが愛しいよ。

大好きだ。

「お待たせ！」

めぐが戻って来た。今度は出来上がったプリクラを見せてもらう。この前は見せてもらってないしな。

「なっ…！」

四種類のプリクラが出来上がっていて、二種類はお互いに背中から抱きしめているプリクラ。あとの二種類はキスしているプリクラだった。

らくがきには”初デート”とか、”初キス”なんて書いてあった。

「はい！誠二くんの分！」

めぐは備え付けてあったハサミで切り取り、半分を渡してくれた。オレは渡されたプリクラをじゅっつと見つめていた。

「二人の初デート記念だね！」

そう言っつてめぐは笑いかける。

「うん。めぐ…好きだよ」

めぐは顔を赤くして微笑んだ。

「誠二くん…あと、これ…」

「ん？」

めぐは何かをオレに差し出した。

「これって…」

それはこの前二人で撮ったプリクラだった。らくがきには”私の大好きな人”と書いてあった。

「もう見せられるから」

だからあの時は見せてくれなかったのか。

「ふふ…めぐはかわいいな」

その後はまた二人でゲームをした。めぐがムキになっている姿が可笑しくて笑ってしまった。

…

……

「あはは！あー遊んだ遊んだ！」

外はいつの間にか薄暗くなっていた。

もう帰らないとダメなのかな？

もつと一緒に居たい。

そんな雰囲気を感じたのかめぐはうつむいている。

「誠二くん、少し歩かない？」

「うん…」

そうして、歩いて待ち合わせ場所だった公園までやって来た。

もうだいぶ暗くなってきている。

公園まで来る間はある程度会話はなかった。

二人ともこの後離れなくちゃならないことが分かっていたから。

ベンチに座った。

バス停は公園のすぐ近くだった。

「もう暗いね」

「うん…」

また学校で会える。

そう思っけれどやっぱり寂しい。

「誠二くん。プリクラ、携帯に貼って？それでお揃いにしよ？」
「そっか、そうだな。」

「うん」

そうやって同じプリクラを携帯に貼った。

「えへへ……。嬉しいな。誠二くんと同じ」

そう言いながらオレの肩に寄りかかってきた。

「少し…寒いな」

「じゃあ…」

オレはめぐの肩に腕をまわして自分の方へ寄せた。

……………

しばらくの沈黙…。

「帰らなくていいの？その…めぐの親は何も言わないの？」

「私…親いないんだ」

えっ!?!?

そういえば前に何か言いかけてたけどこの事だったのかな？

「ごめん…」

「ううん、いないっていうか、正しくは家に居ないの。結構有名な奏者だからあちこち飛び回ってて。だから家ではほとんど一人なんだ。兄弟もいないし」

「そうだったのか…。」

「でも、誠二くんの親が心配するでしょ？そろそろ帰らないと…ね」

「うちの親はあんまり…」

「…じゃあ、もう少しこうしていい？」

「ああ、いいよ」

それから他愛のない話しをしたりして時間が過ぎていった。

「めぐ、今度家に遊びに来ない？母さんにも紹介したいし」

「えっ！もうお母さんに…？き、気が早いよ、誠二くん」

「……彼女としてね？」

「あつ！そ、そうだよね！あはは……」

…まさか結婚とか考えてたりするの？

「じ、じゃあ今度お邪魔しようかな。でも迷惑じゃないかな？」

「大丈夫だよ」

「…なんか、誠二くんが”大丈夫”って言ったら安心するな」

まあ、母さんがいろいろうるさいだろうけど…。

「…そろそろ帰ろうか。あんまり遅くなるとバス下りてからが危ないからさ」

「…うん」

立ち上がりバス停まで送ろうとする。

「…誠二くん」

めぐがオレの服の裾を引っばっていた。なにやらモジモジしている。

「どうしたの？」

上目使いでオレを見ている。

「キス…して？」

ぐっはあー！！

モジモジしながらの上目使いでのそのセリフがこんなに強烈だとは！

「…じゃあ、目つぶって？」

………

「んっ……」

そして今日三回目のキスをした。

「えへへ……大好き」

それからバス停まで送りめぐは帰って行った。

今日はいろんなことがあった。

めぐの怒った顔も見だし、めぐの異次元の胃袋にも驚いた。プリクラも撮って、そして、キスしたんだ。

今日のことを思い返しながら家に帰っていた。

「ただいま」

「遅かったじゃない。…その様子じゃまだみたいね」
何のことだよ。

夕食中もいろいろ聞かれたけど、今度連れてくるって言って黙らせた。

部屋に行つて今日撮ったプリクラを眺める。

まいったな…。

顔が自然にほころんでしまう。

こんな気持ち、初めてだな。

これが恋なんだな。

めぐと付き合うまでは苦しくてたまらなかつた。いろんなことが切なくて、苦しくて…。悩みに悩んで…。

でも、今はそれ以上に愛しくて…。

美香が居て、勇介が居て、みんなが居たから今のオレとめぐがある。

そんな気がしたんだ。

新学年

時は移り四月。

桜も見事に咲いて、見る者の心を奪っていた。

そんな季節、オレたちは二年生になった。

あれからめぐとは何度かデートを重ねて、自然に抱きしめたりキスするようになっていた。めぐとは楽しい日々を過ごしていたんだ。オレたちが使っていた教室は一年生に譲り渡して二階の教室に移った。

めぐとは嬉しいことにまだ同じクラスになることが出来て、それに紗耶香が加わった。オレたちは二組だ。

勇介は一組。美香と渉は五組だった。

勇介は美香を振り向かせると言ったものの、新たに入学してくる新生に淡い期待をしているみたいだった。紗耶香は相変わらず。渉はオタク度が上がっている気がした。

美香は心なしか大人っぽくなった気がする。ふっきれたからだろうか？変わらずにヘアピンはしていて、オレが贈ったストラップもまだつけていた。

オレたちの担任は奈美先生だ。一つ歳をとったからか「結婚しなきゃ」と、いつも呟いている。オレとめぐのことも当然知っていて、春休みの部活中は「イチャイチャしない！」ってよく怒られてた。

また一年が始まる。

今年はどうな学校生活になるんだろう。

今年からは先輩になるんだ。

普通の学校生活でも部活でも後輩を引っばっていかなくちゃならない。

新しい出会い。

それがまた待ってるんだな。

吹奏楽部にはどんな子が入部するんだろう、今から楽しみだ。

理恵先輩たちも今年は卒業。別れは必ずやってくる。吹奏楽部での活動が一緒に出来るのも短くて今年の夏まで。そう考えるとあんまり一緒に過ごす時間はないんだな。

「誠二くん」

「ああ、めぐ。今日もかわいいよ。」

「めぐ、また同じクラスでよかった」

「うん！それだけが心配だったから安心しちゃった。誠二くんのおかげにいれるから」

「オレもそう思うよ。いつでも一緒がいいな。」

「ちよつと！なに朝からラブラブしてんの？今年は私もいるんだからね！」

「紗耶香もいるからな、楽しくなりそうだ。」

入学式は昨日、新入生だけで行われた。オレたちはその前の日に始業式。今日は授業と部活動紹介だ。午後からは体育館へ移動する。そして放課後は部活。今日から一週間、新入生が見学に来る。いっぱい部員が入ってくればいいよな。

.....

そして放課後。

めぐと一緒に部活へ行く。もう新入生はいるのかな？

「どんな子が入部するんだろうね？」

「なんにしろ、オレたちがしっかりしないとな」

「後輩に手出しちゃダメだよ？」

「オレが好きなのは後にも先にもめぐだけさ」

「そ、それってプロポー……」

「ちよつとお二人とも。いつでもどこでもラブラブするのはどうかと思うけど？」

「さ、紗耶香……！」

「紗耶香ちゃん、あはは……」

「めぐが全然かまってくれなくなっちゃったー！誠二ー！あんたのせいなんだからね！」

「そんなこと言われてもなあ……」

「紗耶香ちゃん、ごめんね?」

「めぐは悪くないんだよ?悪いのは全部誠二なんだから!」
どうしてそうなる?

「でもな紗耶香。オレとめぐは愛し合ってるんだ」

「あーん!誠二くん!」

「それをやめなさいって言うてるの!あーあ、私もいい人見つけよ
うかなあ」

ほほう、紗耶香が。

「良い奴を紹介するぞ」

「勇介とか言ったらこの場で殴り倒すわよ?」

「……………」

オレが紹介出来るのは奴くらいなんだけど……。

「…覚悟はいい?」

うっ……。

「めぐ……」

「誠二くんかわいい 紗耶香ちゃん、止めてあげて?」

「はあー、もう付き合ってるんじゃないわよ」

そう言っつて紗耶香は首を振りながら行ってしまった。

その後が続いてオレたちも部室に向かった。

そして部室に着くと……。

新入生の見学の子が何人かいる。やっぱり女子ばかりだな。

とりあえずはめぐと別れてパート練習へ。

「つじくくん。今日は一曲演奏するみたい」

去年も先輩たちの演奏聞いたもんな。

「はい、もうすぐにやるんですか?」

「先生、来てから」

そりゃそうだよな。

「理恵先輩は?」

姿が見えないけど……。

「理恵先輩は各パートを回って新入生に声をかけてるわよ」

紗耶香が教えてくれる。なら基礎連でもして待つか。

それから程なくして奈美先生が来た。部員のみんなも集まってきた。

「みんな揃ったわね。新入生のみんなに一曲披露するから気合い入れてね！」

新入生が後ろの方に並んでいる。

奈美先生の右手に握られた指揮棒が振り下ろされる。

）　　）　　：

パチパチパチパチパチ……

演奏が終わって見学していた新入生から拍手が漏れた。

「じゃあこれからは各パートに分かれて練習するから新入生のみんなは自由に見学していつてね」

それから各パートに散って行った。

新入生もそれぞれ分かれていく。パーカッションには誰か来るかな？

………

「先輩！」

………

「先輩！誠二先輩！」

え？オレ？

誰かが「先輩」って呼んでるは聞こえてたけど、まさか自分のことだとは思わなかった。そういえばもう先輩なんだよな。

オレは呼ばれた方を見た。

「…誰かな？会ったことある？」

呼ばれた方を振り返ると一人の女子生徒がいた。小柄で肩の下まで伸びているくせ毛を揺らしながらオレを見上げていた。まだ小学生のような幼い顔立ちに大きな目が目立っていた。

ん…なかなかかわいいな。でもどこかで会ったっけ？この子はオレのこと知っているみたいだけど…。

「ひどいなあー！覚えてないなんて、亜美傷ついちゃいますよー？」
あみ？網？あみ。

……………！

「お前！あの新城亜美か！？」

「思い出してくれました？確かに髪の毛伸びたからわからなかったかも」

オレのことを先輩と呼んだのは新城亜美。中学の時、陸上部のマネージャーをやっていた。何を隠そう、オレが告白された相手でもある。断ったけど、その後も好きだって言い寄って来る子だった。中学の時にはもう慣れてしまっただけで、ハイハイって流す程度だったんだが…。

亜美も近くのこの高校に来たんだろう。

「お前、陸上部は？」

「誠二先輩が吹奏楽部にいるって聞いたから来ました」

「お前なあ、いい加減オレを追いかけるの止めるよ」

「亜美は誠二先輩の近くに居たいんですっ！」

もつめぐがいるのに…。

「あのなら…オレには」

そう言いかけた時だった。

「誠二、誰？知り合いの子？」

「ああ、紗耶香。中学の時の後輩で新城亜美」

「ふーん…。よろしく、新城さん。私は春日紗耶香。誠二と同じパークッションよ」

紗耶香はまるで品定めをするかのように亜美を見ていた。

「初めまして、新城亜美です。一つ聞きたいんですけど、春日先輩は誠二先輩と付き合ってるんですか？」

な、何を聞く！いきなり！

「はあー？何で私が誠二なんかと。それに誠二には彼女がいるわ」

誠二なんかとはなんだ！

「えっ！？……で、でも亜美は諦めませんか！」

「何？新城さんは誠二のこと好きなの？」

「はい！大好きです！」

「そ、そんなに堂々と言われたらさすががしいわね」

中学の時に亜美が男子生徒数人にかまれているところを助けて、それで告白されてからずっとこんな感じだ。

「でも残念ね。誠二と彼女のめぐは誰が見ても、いつ見てもムカつくくらいにラブラブよ」

紗耶香は意地悪そうに言う。別にそこまで言わなくたっていいのに。

「めぐ先輩ですか……。でも恋は障害があるほど燃えるものです！絶対に誠二先輩を振り向かせてみせます！」

「…ポ、ポジティブなんだね。が、頑張ってる」

おお、あの紗耶香が引いている。普段、意地悪ばかりする紗耶香には亜美の明るさが眩し過ぎるのか。

「誠二、何か一発殴りたくなったわ」

「な、なんだよ！何も変なこと考えてないぞ！」

「考えてたのね。ふんっ！」

あーあー、後が怖いな！

「誠二先輩。亜美、この部に入部しますね。もちろん同じ楽器で何だと！？」

「い、いや、入部するのは歓迎するけど、パートはいろいろ見て決めた方がいいと思うぞ？」

「誠二先輩と一緒にいいんです！」

「あみゅ〜歓迎〜」

「で、でもアリサ先輩。人には向き不向きってもんが…」

「あーん？」

おう…怖いアリサ先輩も久しぶりだな。

「あ…いや…歓迎するよ」

「ありがとございます！明日も来ますね！」

そして亜美はにこやかに挨拶して帰って行った。

はぁー…、疲れるな。悪い子じゃないんだけど…。

「せいぜいめぐとケンカしないことね。泣かせたら許さないからね

…」

に、睨むな睨むな！

「はぁー…大変大変」

理恵先輩が戻って来た。またみんなの様子を見に行っていたらしい。

「ここには見学の子来た？」

理恵先輩が期待を込めて聞いてくる。

「つじくんが一人つかまえた」

「ん、やるじゃない！誠二くん！」

そうじゃないんだけど、まあいいか。知り合いだから気を使わないでいいかもしれないし。

それから何人かパークッションを見学に来たけれど、反応はいまいちだった。

「誠二くん、そっち終わった？」

めぐ…ああ癒される。

「めぐー！聞いてー！今日誠二のこと大好きって子が来たの！亜美って子だったんだけど」

な、なぜわざわざそんなことを！紗耶香！

「えっ…そうなの？誠二くん…？」

うわぁ、泣きそう…。

「めぐー、前に告白されたただだよ。心配しなくても大丈夫だから」

「…うん。誠二くんが大丈夫って言うなら大丈夫。信じてるよ」

「大丈夫。さあ帰ろう」

そしてめぐと一緒に部室もあとにした。

……

「…ち、ちょっとお！私もいるんだからねー！ー！ー！ー！」

紗耶香の叫びは、赤く染まった桜の花びらが舞う夕焼け空に溶けていった…。

そしてその帰り道。

「誠二くん、亜美っていう子、どんな子なの？」

やっぱり気になるんだな…。

「明るくていい子だよ。入部するって言ってた」

「そっか…」

何とか…してあげたいな。

「……めぐ！」

「えっ？なに……んっ……」

オレは一応周りに人がいないことを確認してからめぐにキスをした。

「…いきなりびっくりしちゃうよ。誠二くん」

「ごめん。でも安心してよ。めぐだけだから、好きなのは。絶対に大丈夫だからさ」

めぐはにっこりと笑った。

「ふふふ…ありがとう。今度は私からいきなりキスしちゃうから覚悟しててね？」

うん、ずっとめぐと一緒にいよう…。

部屋

進級してからもう二週間。

あれから亜美は本当に毎日来てパークションの練習をした。理恵先輩がそれを見てなのか、亜美は正式に入部したあとパークションのメンバーになった。

毎日毎日アプローチされて、毎日毎日それを見ためぐをなだめる日々だった。

「さすがに疲れるなあ」

ぼそつと一人呟く。

今日は土曜日。

部活は午前中で終わる日だ。

新入部員は二十人。なんと全員女子。勇介はそりゃあ喜んでたな。一人お気に入りの子がいるらしい。美香は同じパートなのに…。

「誠二せんぱい!」

…ふうっ…。

「なんだ?」

「今日の午後のご予定は?」

「デート」

「明日のお休みは?」

「デート」

「じゃあ来週は?」

……………

「だああああ!何度も言うけどオレはめぐと付き合ってるの!」
「知ってます」

「……………うん、知ってるな」

「それを承知で遊びに行きたいんじゃないですかー!いいじゃないですか、たまには違う女の子と」

毎日これだ…。

「めぐが嫌がることはしない！」

「じゃあめぐ先輩の許しがあればいいんですね？」

「は？何言ってるの？」

「お前バカか？めぐが許すわけないじゃん」

「あー！バカつて言った！わかんないですよ？言ってみないと」

「あんたたちも毎日飽きないわねー」

紗耶香がつつこんでくる。これも毎日だ。

「亜美ちゃん、誠二くんを振り向かせるにはやっぱり大人の魅力がないと。誠二くんは私の胸が好きなんだよ？」

「つじくん〜えつちいだから〜」

前々から思っていたけど、先輩たちは本気でそう思ってるんだろうか？だが、アリサ先輩の言葉は否定しない！

「やっぱり、誠二先輩も大きな方がいいんですね…」

亜美の胸はお世辞にも大きくはない。

「そ、そんなことはないぞ。形さえよければ」

「えつちい〜」

「私は形もいいからね」

「誠二、変態よ。めぐが危ないわ」

ぐっ…亜美をかばおうとして余計なことを口に出してしまった。

「誠二先輩。か、形…確かめてもいいですよ？」

亜美まで！顔を赤らめないで！いかんぞ！オレがだんだんと変態に！

「亜美、例えだ」

「苦しい言いわけね、誠二」

ぐぬぬぬ…紗耶香め！

「オレはめぐの彼氏だぞ？親友の彼氏なんだからもつと優しくしてくれても！」

「だから調教してるんじゃない」

調教？あれか？犬にお手を仕込むみたいなあれか？

「お前のはただのいじめだ」

「そうかもね」

いや、そこ否定して下さいよ。

「ところで誠二くん。今日のデートは何するの？」

理恵先輩が興味深そうに聞いてくる。

「今日は …… ただの買い物に付き合うだけですよ」

本当は違うけど。本当のこと言ったらうるさそうだし。

「ふーん…」

オレの様子を見てか、半信半疑で相槌を打っていた。

本当は今日めぐが家に来る。母さんにめぐを紹介する約束を今日果たすんだ。母さんには昨日連れて来るって話した。

めぐは緊張してたけどな。

もうすぐ今日の部活も終わり。オレは楽しみにしていた。

…

……

……

そして…。

「めぐ、行こうか？」

「は…ひゃい！」

固まってる…そんなに緊張しなくてもいいのに。

もうオレの家の前まで来ていた。

先輩たちの尾行を撒いて、ここに来るまでは新入生の話しなんかで盛り上がっていた。でも、家に近づくにつれ、だんだんめぐの口数が減ってきて今は固まってる状態だ。

オレも母さんに初めて彼女を紹介するから少し緊張してるけど。

「ただいまー」

ドタドタドタ…!

あーあー、そんなに急いで出て来なくてもいいのに。

「誠二！おかえり！その子ね！」

母さんはそう言っつてめぐをじい〜っと思つめる。

「ひゃっ、あ、相田、めぐ、恵です！ふっ、ふっつか者ですが、よよ

「よよろしくお願いします！」

めぐは思いつきり最敬礼をした。

あゝあゝ…。

「恵ちゃんね。顔を上げて？」

動じてない！？」

「誠二の母です。愚息ですけど、こちらこそどうぞよろしく願います」

母さんはそう言って玄関先で話すめぐに対し、膝をついて礼をした。

「ひゃあああ！お母さん、そ、そんな！顔を上げてください！」

「お母さん…。そう呼んでもらっていいわ。さ、上がって？」

オレは一人妙に冷静に見ていた。今の流れがわからない。だけど何かが成り立っていたような気がする。

そして、とりあえずリビングへ。

母さんがいろいろと聞いていたけれど、めぐはうまく答え切れなかった。そしてだんだん話しが変な方向に向かい出したので、無理矢理話を切ってオレの部屋に来た。

「誠二くん、私って変な子だって思われちゃったかなあ？」

めぐが泣きそうに聞いてくる。

「大丈夫、母さんも変だから」

「…そうだね、私もお母さんも変ならいいよね？」

納得…したな…。

それから何をしようかなーなんて考えていると母さんからお呼びがかかった。

「誠二ー！お茶とお菓子ー！取りに来てー！」

オレは渋々階段を下りて母さんの元に。

「はい。母さんは今から長い買い物に行くから。夕方までは帰って来ないわ。それとこれ…。大事に使うのよ？」

母さんから渡された物を見る。

こ、これは！ゴムで出来たオレの分身を逃さない安全装置じゃな

いか！

「か、母さん！」

「いいーい？誠二。無理矢理はダメよ？それと、ちゃんとつけるのよ？」

何で母さんにこんな貰わなくちゃならないんだ！息子にやる方もやる方だよ！

「じゃあ！うまくやるのよ！」

「ちょ、ちよつと」

母さんは言いたい事だけ行って行ってしまった。

どうすんだよこれ…。こんな渡されたら意識しちゃうじゃんか！い、いや、平常心平常心…。

うーん、一応持つておこう…。うん、あるにこしたことはないな。多分使わないだろうけど一応ね！

何か落ち着かないままお茶とお菓子を持って自分の部屋に戻った。

「せ、誠二くん。お母さん何か言ってなかった？」

「大丈夫だよ。母さん出掛けたし」

「そ、そうなんだ。少しほっとしたかな」

おかげで二人つきりなただけだね。

「…じゃあ、二人つきり？」

「……………！」

「そ、そうだよ」

「……………」

なんか気まずいな。思えば完全に二人つきりなんて初めてだもんな。

「……………」

「……………」

あつー…どうしよう…。

「そ、そういえば初めてこの部屋に来てからちよつど一年くらいだね！変わってないね」

そっか…めぐと出会ってもう一年か…。そして付き合いだして一

ヶ月。

「一年経つの早かったなあ」

「そうだね。誠二くんところなるなんて思わなかった」

「オレも…。誰かを好きになるなんて思わなかったよ」

「こんなに素晴らしいものなんて思わなかったんだよな。」

「初詣の時に…誠二くんの前の事、美香ちゃんから聞いたんだ」

「そっか…聞いてたんだ」

「聞いた時にはダメなんだろうなって思ったけど、もう自分の気持ち抑え切れなかったんだ」

「めぐ…」

「一人になつたら誠二くんのことばかり考えてて…。誠二くんに告白してから一ヶ月の間も怖くてたまらなかったな」

「…今は？」

「幸せだよ！誠二くんによかった。誠二くんに出会えてよかった。」

「…誠二くんじゃないと、ダメだったんだ」

「めぐ…」

オレはめぐを抱きしめた。

「いつまでも…この誠二くんのぬくもりを感じていたい…。大好きだよ」

……………

オレは黙ってキスをした。

「誠二くん…。わ…わたし……………」

めぐ、めぐ？

めぐが顔を赤らめてオレを見て、めぐが顔を近づけて来る。

そして、また自然にキスをしたんだ。

でも今度は…。

何度か軽いキスをして…そして深くて甘い…長いキスだったんだ。

「……………んっ……………あっ……………」

めぐの甘い吐息がかかる。

頭が真っ白で…わけがわからなかった。感覚がどこかへ飛んで行

ってしまったっていた。

「……んっ……誠二……くんっ……好き！大好き……！」

長いキスが終わっても、めぐはまた求めてきた。

ダメだよ、これ以上は我慢出来なくなる……。

「んっ……めぐっ……！」

オレは無理矢理めぐを引き離した。

「……あっ……誠二……くん……？」

「これ以上は……オレ……我慢出来る……自信ない……」

めぐは少し驚いた顔をしてすぐになっこりと優しく笑った。

そしてまた……深くて激しいキスをしてきた。

「んっ……」

め……めぐ……！？

「……誠二くん……」

……いいのか？

ずっとドキドキしっぱなしだった。

オレはそっと……めぐの胸に触れた。

「んっ……はあっ……」

少しキスが止まったけれど、そのままめぐはキスを続けた。

……ダメだ……もう……。

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

「……ふふふ、誠二くんってやっぱりエッチだったんだね」

「めぐのせいだよ。ごめん…痛くなかった？」

めくと初体験…しちゃったんだ。

「ん…少しジンジンする。でも誠二くん優しかったよ？誠二くんをいっぱい感じられたよ？」

すごく暖かい笑みを浮かべてくれる。

「めぐ…。でもめぐは意外とエッチだったんだな」

めぐはその言葉に顔を真っ赤にさせた。

「そ、そんなことないよ！でも、誠二くんには触れていたい」

そつと、まためぐを抱きしめた。まだお互いに直接肌と肌が触れ合う。

「あつたかい…」

「めぐも…」

しばらくそのまま抱き合っていた。

……………

「そろそろ送ろうか？多分、もうすぐ母さん帰って来ると思うし」

「うん…」

毎回寂しい顔をするめぐを見るのは辛いな。

「いつもそんな顔しないで。またすぐに会えるから」

「うん…。ねえ誠二くん」

「ん？」

「後悔してない？私とこんなことになって」

「何で後悔するんだよ。オレは嬉しいよ、めぐと一つになれて。その…また、しよう？」

めぐは顔をまた赤く染めて少しはにかんで笑った。

「もう…えっち」

そして服を着てめぐを送って行った。

途中、歩きにくそうだったけれど、めぐは大丈夫だと言っていた。めぐをバスが行ってしまいうまで見送ったあと家に帰ると、母さんが帰って来ていた。

「誠二、男になったみたいね」

母さんは何もかもお見通しだった。ある意味、理解ある母親かな。母さんはそれ以上何も言わなかった。拍子抜けしたけれど、そのままた夕飯を済ませて自分の部屋へ。

.....

めぐ、柔らかかったな...。

いたらぬ妄想にふけ込み眠りについた。

めぐの事がもっと愛おしくなった。会えない時間が心苦しい。多分、めぐも同じことを考えてるんだろう。そうであって欲しいな。

新城亜美

「せーんばい！」

「何だ？同じ事なら聞き飽きたぞ？」

「楽譜のここの読み方がわからないんですけど…」

「ああ、そこは…」

今は部活中。亜美が楽譜の内容を訪ねてくる。

パーカッションの一年生は亜美一人。オレは先輩なんだから後輩に教えるのは当たり前だ。

亜美もオレと同じで、楽器を演奏することはこの部に入部するま
でなかったみたいで、日々、悪戦苦闘を重ねていた。

吹奏楽コンクールが今年も迫っていた。

亜美は今年はお出ないけど、亜美が三年生になった時は一人になる。
その時のためにもしっかりと教えておかないと。

「　　だな。しっかりとやれよ？」

「はい！」

亜美は吹奏楽部を好きになってくれているんだろうか？持ち前の
明るさでみんなとはうまくやっているみたいだけど。

「亜美…吹奏楽部は好きになったか？」

「はい！誠二先輩がいますから！」

はぁ…：こつだもんなぁ。

「もしオレが違う部に入部してたらどうしてたんだよ？」

「その部に入部しますよ？」

当然のように言うよな…。

「曲はみんなが一つにならないと出来上がらない。オレがどうのじ
やなくて、この部自体はどうなんだよ？」

「うーん…好きですよ？先輩たちみんなおもしろいし」

「吹奏楽は？」

「まだ…わからないですね。今まであんまりこういう曲聞いたこと

ないですし。それに楽器なんて全然やったことなかったし」
「それもそうか。」

「練習とか楽しいか？みんなの演奏とか聞いてどう思う？」

「練習は新しいことだから楽しいですよ！演奏は聞いてもあんまり
わかんないですけど」

「そっか。オレはお前に吹奏楽自体を好きになって欲しいな。オレ
がいなくても」

「誠二先輩いなかったら亜美ダメです！」

「こりやこのまま話しても同じことの繰り返しだな。」

「まあ、練習頑張れ！」

「はい！」

ガララッ…。

そこで練習場のドアを誰かが開けた。

「あ、誠二。理恵先輩は？」

美香が理恵先輩を訪ねて来た。

「多分、奈美先生のとこだと思うけど…」

「ふーん、わかった。ってあれ？亜美ちゃん、なに私の顔じーっと
見てるの？何か変？」

その美香の言葉につられて亜美を見ると美香を凝視していた。

「美香先輩は…誠二先輩のこと好きじゃないんですか？」

「な、なにをまたいきなり！」

「紗耶香もアリサ先輩もいるんだぞ！？」

「ふえ？」

美香はあっけらかんとして亜美とオレを見ていた。

「お前！いきなり何言い出すんだよ！」

「…聞いてみただけです」

「それにしただって」

亜美を叱ろうとあいたその時だった。

「好きだよ」

え？

「お、おい、美香…?」

「幼馴染でかけがえのない親友だよ」

美香…。

「美香先輩、亜美が聞いてるのは男として誠二先ば」

「私はフラレたの」

亜美の言葉を遮るように美香が言った。

「……………」

「私は誠二のことがずっと好きだったよ。でもフラレたの。今は幼馴染で親友。それだけだよ」

「あ…あの…美香…」

オレは何て言ったらいいかわからなかった。紗耶香もアリサ先輩もいて…。二人ともそのやりとりに黙って目を向けていたから。

「ただの諦めじゃないんですか?」

亜美…今何て言った?

「お前…!今のは許せな」

「誠二!いいの!」

オレが亜美に歩み寄ろうとした時に美香が制止した。

「亜美ちゃん、私は前に進んだの。諦めって思われたらそれまでだけど、誠二も前に進めた。誠二を目に進ませてくれたのはめぐなんだよ」

「やっぱり諦めたんじゃないんですか」

ぐっ…!亜美…!

「そうかもね。でもね、亜美ちゃん。誰も同じ場所には留まらないの。私はずっと同じところにいたけどやっと前に進めたんだ。誠二のおかげ、めぐのおかげでね?」

美香はオレを見て笑って言った。

「私にはわかりません。私はフラレても誠二先輩が大好きです」

気持ちはあるがたいんだけどなあ。

「亜美ちゃんのそういうところは羨ましいな。でも、いつか前に進む時が来るよ。先輩として亜美ちゃんに言っておくね」

なんか、美香は本当に大人になったよなあ。

「むう~~~~」

亜美はわからないといった顔をして唸っている。

「せんぱい〜かっこいい〜」

「アリサ先輩、からかわないで下さいよ。亜美ちゃん、誠二をあんまり困らせないでね？」

「むう~~~~」

亜美は変わらず唸っている。

「美香、ごめんな？後で言っておくから」

「いいよ。間違いじゃないもん。じゃあね」

そして美香は出て行った。

ふうっ…。

「亜美、美香の気持ちも知らないで勝手なこと言うな」

「ただ、知りたかっただけです。いつも誠二先輩と美香先輩と一緒に居たから」

「いつも一緒に居たからこそ、オレはずっと美香を傷つけて来たんだ。それは忘れない。美香は笑ってたけど、無理してたと思うぞ。自惚れじゃないけどさ」

「誠二先輩は…私のこと…迷惑…ですか？」

うっ…涙目で見るのは卑怯だよな。

「いや…あのな…」

「誠二、はつきり言わないとこの子も美香ちゃんが言ってたような前に進めないんじゃないの？」

紗耶香…そうだけ…。

「あのな、亜美」

「はい…」

その涙目を止めてくれよ…。

「オレは何度も言ってるけどめぐが好きなんだ。これからもその気持ちは変わらないと思う。だからいつまでもオレを追いかけるんじゃないよ。やなくて前に進めよ」

「…だーから！その誠二先輩の気持ちを亜美に振り向かせてみせます！」

「へ？」

「だって、諦めるかどうかなんてその人次第ですよ？」

え？うん、まあそうだな」

「誠二、これからも大変ね。亜美ちゃんもいつまで経っても恋愛出来ないよ？」

「誠二先輩以外ないですう！」

美香はオレを気遣い過ぎて前に進めなかつたんだもんな。オレの前のことを知らない亜美にはそもそも関係なかつたのかな？

「はあ…っ」

先輩たるもの、後輩にも苦労する…か。

吹奏楽コンクール

今年の吹奏楽コンクールももう間近だ。

今年は三年生が多いから期待しているらしい。経験者が多いならそれだけ有利だしな。

気合い入れないと。

「誠二くん、コンクールの曲はどう?」

今はめぐをバス停まで送っているところだ。

「去年の曲ほどプレッシャーは感じないけど、やっぱり難しいからもっと練習しないとだな」

「そうだね、私も頑張らないと」

とは言ってるものの、めぐは完璧に曲をこなしていた。

「めぐはいつからフルートを?」

「わかんない。物心ついた時にはもう握ってた。

めぐは舌を出して笑って言う。

「でも、相当努力したんだろ?」

「お父さんもお母さんも厳しい人だったから。あんまり家にはいなかったけど」

めぐは少し顔を暗くした。寂しかったんだろうな…。そして寂しい表情でも笑って言った。

「一人の時はいつもフルートの練習してた。うまく出来れば褒めてくれたから」

「めぐ…寂しかったんだろ?」

「少し…ね。でも、今は誠二くんがいるから」

満面の笑顔を向けてくる。

「オレはずっとそばにいるから」

「うん!」

めぐのずっとそばに居て歩いて行ける。

その時はそう思っていた。

「誠二くん、また明日ね」

バスが来てめぐは帰って行った。バスが見えなくなるまで見送る。それももうごく当たり前の事…だったんだ…。当たり前前。

……………

「誠二！今年はやるわよ！」

「おう！当然だ！紗耶香！」

今日はコンクール当日。

去年と同じ会場。同じ顔ぶれの人もいる。

また、来たな。

「誠二くん大丈夫？緊張してない？」

「緊張してないことはないけどね。めぐは？」

「緊張するよ。何度人前で演奏しても」

めぐは今まで何度かソロコンクールに出ていたらしい。口ではこう言うものの落ち着いていた。

「誠二…緊張するぜ…」

勇介は今年が初舞台。当然だろうな。

「がらじゃないぞ。いつも通りにやればいい」

「な、なんか大人の意見だな…やるしかないけど」

「大丈夫だ。お前なら会場から笑いを取ることが出来る」

「お笑いステージじゃねえ！」

「勇介、その意気だ！」

本当に笑いを取ってくれたならオレはお前を一生尊敬しよう。

「誠二くん、今年は私たち最後だけど、そんな事気にしないでいつも通りにね」

「気にしない」

理恵先輩もアリサ先輩もそう言うけれど、このコンクールへの思い入れは相当あるはずだ。オレも来年はそうなるんだろうな。

「せ、誠二先輩。緊張しますう」

「しつかりみんなを見守っててくれよな」
亜美だつて緊張するだろう。

「誠二、頑張ろうね！」

「美香も。なっ！」

互いに声を掛け合いステージへの準備をする。

「みんな、ここまで来たらやるだけよ！よろしく頼むわね！」

「……はい……！」

最後に奈美先生がみんなに喝を入れた。

………

『次のプログラムは柳ヶ浦高校です』

ステージへ移動する。

それぞれの位置に着き軽いチューニングをする。

そして静まりかえる……。

この瞬間の緊張感が何とも言えない。

きつとこの一瞬の間に、先輩たちの脳裏には今までの吹奏楽部での出来事が思い返されてるんだと思う。その思いと努力の日々がここで試されるんだ。

………

奈美先生の指揮棒が振り下ろされる。

課題曲

今年の課題曲は優雅な曲。めぐの技術が光る。静かに、時に盛大なこの曲は完璧に演奏出来たと思った。

自由曲

華やかで軽快な曲。オレたちパーカッションがしつかりリズムを刻む。曲の波を創る。

課題曲も自由曲もいつも通りに、むしろそれ以上にいい演奏だったと思う。

やっぱりみんなの気持ちが込もっていた。

「みんなお疲れ様！最高の演奏だったわ！」

奈美先生が激励の言葉をみんなに掛ける。

「誠二くん、お疲れ様」

「お〜っ〜」

「お疲れ様でした。あとは結果ですね。会場から見守ってます」

理恵先輩が部長としてステージで表彰を受ける。

今年は表彰まで時間がある。昼食を挟んでからもまだ時間があつた。

「誠二くん、少し外に行かない？」

めぐからの誘いだ。

「ああ、ご飯でも食べに行こうか」

表彰までは各自自由行動になっていた。オレとめぐは近くのレストランにお昼を食べに行くことにしたんだ。

「ボロネーゼ二つ」

「はい、かしこまりました」

レストランまで来たオレたちは食事を注文した。

「今日の演奏はどうだった？誠二くん」

「うまくやれたと思うよ。めぐは？」

「私もいつも通りだったと思うよ。代表、なりたいね」

「うん、先輩たちの思いが叶うといいな」

「…それはそうと誠二くん。こんなときに不謹慎なんだけど…」

「ん、何？」

「こ、今度家に泊まりに来ない？ほら、うちの親はいないからさ。

む、無理ならいいんだけど…」

めぐの家にお泊まり…。

行くっきゃないだろ！

「絶対行く！」

「…誠二くん、変なこと考えてない？」

「え？ぜ、全然！」

「目がニヤニヤしてたよ。えっちなこと考えてたでしょ？」

そんなことないない…。

「お泊まりの時はそんなことばかりじゃだよ？少しだけ、ね？」
何かあの時以来めぐは変わったなあ。

「めぐはやっぱりえっちいだなあ」

「そ、そんなこと…な、ないわけじゃ…ない…けど…」
照れためぐがかわいすぎる！

…いかんいかん、今はコンクール中だったな。

「楽しみにしておくよ」

「私も。誠二さんと一緒に寝て一緒に起きるって幸せだろうなあ…」

あつ、めぐがどっかに行ってしまう。

「お待たせしました」

ナイス！？タイミング！

「めぐ！ほら、料理来たよ！」

「えっ！あ…。い、いただきます」

それから食事を済ませて会場に戻った。

「つじくくん。こっち」

会場の席を取ってくれたみたいだ。

「すみません。…そろそろですね」

「あと〜五校〜残ってる〜」

あと五つか。このまま聞いておこう。

「誠二先輩、うちの高校はどうなんですか？」

「結果を聞くまではわからないな。亜美も気になるか？」

「だって先輩たち一生懸命練習してたし。それに今日のステージは感動しました。ここで聞いてて、先輩たちの気持ちが伝わってきて

…」

「それが審査員の人にも届いているといいな」

一生懸命練習してきた。

その結果がもうすぐ出る。

『以上で全てのプログラムが終了しました。続きまして表彰と代表

校の発表に移ります』

準備のために少し時間が空く。

この間は嫌いだ。心臓が破裂しそうになる。

『お待たせいたしました。表彰に移らせていただきます』
いよいよか…。

オレたちは今年の演奏順が早かったため、表彰は初めの方にある。

『 高校、銀賞』

パチパチパチパチ…。

『 高校、金賞』

「きゃあああああああ！！」

金賞の高校は喜びに打ち震える。

『 柳ヶ浦高校、金賞』

「きゃあああああああ！！」

よし！最低条件はクリアした！

「誠二先輩！すごい！やりましたね！」

まだ…終わってないんだよ。

「確かに嬉しい。けどまだなんだ」

オレは妙に冷静だった。去年の千秋先輩と紗耶香の涙は忘れられ
なかつたから。

「誠二、なるようになるんだから素直に喜びなさいよ」

「…そうだな」

あれこれ身構えてももう決まってるんだ。今は金賞ということ
素直に嬉しく思おう。

『 高校

次々に高校の名前が呼ばれていく。その中には去年の代表校も
ちろんあった。さすがに四校全て金賞だった。

『 高校、銀賞。以上で表彰を終わります。続いて地域代表校を
発表いたします』

ドクン…ドクン…ドクン…

『柳ヶ浦高校』

…へ？

あっさりとうちの学校の名前が呼ばれた。

「きゃあああああああああ！！！」

…やった！やった！！！！！！！！

「やった！！！！！！！！」

え？

り、理恵先輩？

理恵先輩がステージの上で大声で歓喜の声を上げていた。

会場からは拍手とともに笑い声も上がった。

理恵先輩は恥ずかしそうにうつむいていた。だけど最後まで笑っていたんだ。

よかったな…。

「よかった…」

紗耶香も少し目元を潤ませながら喜んでいた。

「誠二先輩！すごいんですか！？これってすごいことなんですか！？」

「すごいことだ！ほらっ！喜べ！」

みんなが喜びを共にしていたんだ。

「みんな！やったわね！次のコンクールは二週間後よ！また一緒に頑張りましょう！」

「……はい！！！！」

二週間後…それに通れば全国なんだな。

「誠二くん、お泊まりは先に延びちゃったね」

めぐが意地悪そうな笑みを浮かべて話しかけて来た。

「ははは…そうだね。でも、よかったよな」

「うん！」

そして学校へ帰ってきてきて解散となった。

その後二週間、みっちり練習してコンクールに挑んだ。
結果は全国には行けなかったけど金賞と十分な結果だった。
そして理恵先輩たちも吹奏楽部とお別れになる。
また、新しい吹奏楽部のスタートだ。

お泊まり

コンクールの二日後、理恵先輩たちの送別会が行われた。同じ千秋先輩の家のレストランを貸し切っていた。

また去年みたいに八チャメチャで、オレは最後だからと理恵先輩に追いかけてまわされる始末。それを美香と紗耶香が必死に止めて、めぐがオレを守ってくれたりしていた。

アリサ先輩が何故か怖いアリサ先輩に急変して、オレが説教受けたり、勇介は人が信じられなくなるほどの仕打ちを受けていた。

奈美先生は相変わらず酒に溺れて、亜美はオレに酒を飲ませて寝込みを襲うつもりだったらしい。

愛理先輩はめぐの楽譜を捨てたことをめぐに打ち明けて謝っていた。めぐは気にしてないみたいだったけれど。

落ち着いてからはめぐとお泊まりの計画を立てながら料理を楽しんだ。

最後はやっぱり理恵先輩からの言葉で終わった。終始笑顔でオレたちと先生に感謝の言葉を贈っていた。

そして次期部長。

それには美香が指名された。美香は驚きつつもしっかりと挨拶をして意気込んでいた。部長発表は毎年恒例のサプライズになりそうだった。

そして送別会も終わり、終わりと新しい始まりを迎える。

その三日後。夏休みがもう終わりかけの日。今はお昼過ぎだ。

まだまだ暑くて外を出歩くのには気が引ける。でも…！

ついにめぐの家にお泊まりする日がやってきた！

家を出る時、母さんに「あれは自分の小遣いで買いなさい」と言われた。もちろん準備していくつもりだ。そ、それが目的じゃないからね！

とりあえずコンビニであれを購入して、めぐが待つ隣町の緑ヶ丘町まで移動した。バスに揺られ、今日の出来事を予想しながらめぐの元に向かう。

『次は緑ヶ丘団地前。緑ヶ丘団地前』

すでにバス停にはめぐが待っていた。

「こんにちは！誠二くん！わざわざごめんね？」

何をおっしゃいますか。これくらいでめぐと一夜を共に出来るなら何度でも。

「めぐこそ。こんな暑い中で待たせてゴメンな？」

「全然平気！さっそく行こう？途中で晩御飯のお買い物するね？」

晩御飯のお買い物？

「めぐが作ってくれるの？」

「うん！結構得意なんだよ？」

それは楽しみだな。

「何作ってくれるの？」

「何がいい？特に決めてなかったから誠二くんの好きなものでいいよ」

いきなりだったから困るなあ。そうだな…。

「決まらないならとりあえずスーパーに行こうか？そこに行けば何か食べたいって思うかも」

そうだな、とりあえず行ってみるか。

そうやって歩き出して数分、すぐにスーパーに着いた。

店内を二人で見回る。

「えへへ、こうやって食材選びに歩いてると一緒に暮らしてるみたいだね」

一緒に暮らすっていうのはどんなんだろう。好きな人とずっと居れるって幸せだよな。ふっ、前はこんなこと考えもなかった。

しばらく店内を歩き回って、今日は唐揚げを作ってもらうことにした。めぐはいろいろ買っていたけど何の材料なのかはわからない。

得意料理の材料みたいだけど。

スーパーをあとにしてめぐの家に向かう。

バス停からスーパーの距離くらいで荷物もあり、少し汗ばんできた。

「誠二くん、ここだよ」

ん、どうやら着いたみたいだな。

……

「めぐ、この目の前の家？」

「そうだけど、どうしたの？」

「いや…で、でかいな…。オレの家の倍、いや、それ以上か…？」

「さ、入ろう？」

「う、うん」

オレは目の前のめぐの家の圧倒されながら急かされるように入っていた。

「お邪魔します」

おお…中も立派なもので。

「遠慮しないでくつろいでね。今日は二人つきりだから」

「いやー、なんか落ち着かないな。リビングだって広いし、それに見合う大きなテレビ。オレの家に置いたら邪魔になるよ。所々に装飾品もあってどれも高そうだった。」

「めぐの部屋は？」

「二階なんだけど、少し片付けるからここで待っててね？」

女の子だからな。ここは大人しく待っていよう。

ん？

あれは…家族の写真か…？

飾られていた写真を手に取って見た。

真ん中がめぐで左がお父さん、右がお母さんかな。めぐはお母さん似だな。

きれいな人だ。

「お母さん、美人でしょ？」

「うわっ！」

「めぐー、驚かさないでくれよ」

「お父さんもお母さんも普段はすごく優しいけど、フルートのはすっごく厳しかったんだ」

写真でもすごく優しそうだな。

「私の部屋に来る？」

ああ、そうか。片付け終わったんだな。

めぐに連れられて二階のめぐの部屋へ。

「どうぞ、誠二くん」

想像通り広いな。ベッドがあつてそれでも十分なスペースがある。そんなに物は多くなくてテレビとコンポと机。それと部屋の中心のテーブルがあつた。中は水色を基調としたコーディネートがされていた。

「めぐは水色好きなんだな。そういえば、水着も浴衣も水色だったっけ」

「そっだよー！」

それにしてもいい匂いだな。めぐの匂いか。

「き、今日はここで一緒に寝ようね」

「オレはこの辺に寝ていいの？」

「やだなあ、一緒にだよ。ベッドで」

おうっ、そうか！そっだよな！

めぐのベッドは二人でちょうどいいくらい大きさだった。

「今、えっちなこと考えてたでしょ？」

「そんなことないって！そういうめぐの方こそ」

「えーっ、考えてないのお？」

めぐは意地悪く残念そうな顔で見る。

や、やたらと挑戦的じゃないか。

よーし…。

オレはめぐを強引に抱き寄せてキスをした。

「……………んっ……………んっ……………」

やばい…早くも限界…。

「め…めぐっ！」

そうやってめぐに襲いかかるうとした時…。

「残念、また後だね。夕飯の支度しないと」

めぐに止められてお預けをくらった子供のようだった。

う…どうするよ、この中途半端な感じ…。なんかいいように遊ばれた感じだよな。

そして部屋に放置…。

ん、これは…！

物色タイムじゃないのか？めぐもあの時居たしな。

でも女の子の部屋を不用意にあさくるなんて…。

う…ん…。

あ、アルバムくらいいいだろ。

少し部屋を見て回ると、机の上に小学校と中学校の卒業アルバムがあった。

まずは小学校の時から…。

えーと、めぐは…っと。

これか！か、かわいい！抱っこしたくなってしまっようだ！どの写真もよく笑ってるな。

さて次は中学校…。

あ……。

そっか…中学の時は…。

めぐの写真は笑っているものもあつたけど、全く表情のない写真もあつた。別人と言われても納得してしまうような…。集合写真でも無表情で影があるような感じだった。

「そんな私を変えてくれたのは誠二くんなんだよ」

！

「めぐ…ごめん、勝手に…。オレはそんなたいしたもんじゃないだろ」

「う…ん、私にとっては誠二くんが全て」

面と向かって言われると照れるよな…。

「ふふふ…その写真、隣が紗耶香ちゃんだよ」

そう言われて見ると確かに。写真は無邪気に笑ってるのに今は邪気だらけだよ。

「もうご飯の準備済んだの？」

「まだ途中だよ。お肉に味付けしてるところ。もうお腹空いちちゃった？」

「まだ大丈夫。期待してるよ。何か手伝うことある？」

最初に聞くべきだったかな。

「ううん、大丈夫。誠二くんはゆっくりしてて？そろそろまた準備に行ってくるね。でも、あんまりいろいろ見ちゃだよ？」

「だ、大丈夫だよ」

「ホントかなあ。変なことしたら後でお仕置きだからね？」

お仕置き…。めぐのお仕置きなんてかわいいもんだろ。

「ホントに大丈夫だよ」

めぐは最後まで疑いの目で料理を仕上げに行った。

さして…。

ダメだと言われたらいろいろ見たくなくなっちゃうよね。

どこから…。

「誠二くん」

ビクッ！

「は…ははは…」

「やっぱり一緒に来て！下でじっとしてなさい！」

仕方なくリビングでテレビを見ていることに。

めぐは鼻歌なんか歌いながら料理をしている。同棲とかしたらこんなのかなあなんて考えながら待っていた。

……

……

ヒマだ…。

テレビも面白いのやってないし…。

いたずらしよう！

オレは思いつきでめぐにそりりと近づき…。

ガバツ！

そして勢いよく料理をしているめぐの後ろから抱きついた。

「きゃっ！」

ふふふ…。

「せ〜い〜じ〜く〜ん〜！」

ぷぷぷっ！怒っても全然怖くないよ、めぐ。

「何笑ってるの！ごはん作ってあげないよ？」

それは困る。

「ごめんごめん。めぐの後ろ姿があまりに愛しくて、つい…」

「むう〜〜〜」

「ご飯は？」

「もうすぐ出来るけど…すぐ食べる？」

少し早い気もするけど…。

「そうしようかな。早くめぐの作った料理食べたいし」

「じゃあもう少しだけ待っててね」

言われた通りに椅子に座ってめぐの料理風景を眺めながら待っていた。

「お待たせしちゃったね。はいどうぞ」

目の前のテーブルには炊きたての白ご飯と唐揚げと味噌汁、それに肉じゃがが用意されていた。

「す、すごいね」

「いつも自分でご飯作ってるから。これくらい出来ないよ」

さっそくいただきます

「いただきます」

モグモグ…。

ん…うまい…。

「おいしい。おいしいよ、めぐー！」

「えへへ…よかった。誠二くんの口に合ったみたいで
いや、ホントにうまいなあ。」

「めぐはいいお嫁さんになるだろうな」

「せ、誠二くんは私みたいなお嫁さんがいたら幸せ？」

「そりゃあそうさ」

お嫁さんか…めぐとなら結婚したいな。子供の戯言かもしれないけど。

「私は誠二くんとなら…」

「え？」

「な、なんでもないよ！冷めないうちに食べてね？お風呂の準備してくるから！」

そんなに焦らなくても食べてからでいいのに。

それにしても肉じゃがも唐揚げもご飯によく合うなあ。箸は止まることなくキレイに食べ終えた。

めぐも戻ってきて二人で話しながら夕食を終えた。

「片付けくらいやるよ。今度はめぐがゆっくりしてて」

「じゃあお言葉に甘えちゃおうかな」

それから洗い物をしていると、外はだんだんと薄暗くなってきていた。

めぐはお風呂の様子を見に行っていた。

「~~~~」

鼻歌が聞こえてくる。

「ご機嫌だなあ。」

「ふう…」

洗い物が終わって一息つく。

「誠二くん、ありがとう。お風呂はどうする？」

慣れない洗い物で少し疲れたし汗も流したいしな。

「お風呂借りようかな」

「うん！お先にいいよ！」

めぐに浴室まで案内される。

……

おお！足が伸ばせる！

それじゃ、お先に失礼して…。

ポチャン…。

うーん、気持ちいい…。うちの風呂は窮屈だから余計に気持ちいいや。

「誠二くーん、湯加減はどう？」

「いい湯加減だよー！」

いちいち優しいな、めぐは。

ガタン…！

！

「めめめめめぐ！？」

めぐが浴室にタオルを巻いて入って来た！オレは突然のことに動揺が隠せない。

「なっ、何してるの！？」

「ふふ…背中流してあげるね」

「いや…あの…」

タオル一枚って…まともに見れないよ。そりゃあタオルの中身は見たことあるけどさ。

「ふふふ…誠二くん、この中が気になるの？」

「気になら…ないわけじゃないけど…」

「じゃあ…」

バツ！

うわっ！

めぐは勢いよくタオルをはぎ取った。

「……………」

ん？

「残念でした」

めぐは意地悪そうに言う。タオルの下は水着だった。

「今年は海とか行けなかったからね。去年と同じ水着だけど」

その姿は一年前の海で遊んだめぐの姿だった。

「あの時に初めて誠二くんに叱られたんだよね」

「あの時はオレも悪かったから」

「ふふふ…、背中流してあげる」

そう言われ湯船を出て背中をめぐに向ける。そしてめぐは背中を洗い始めた。

「大きいね、誠二くんの背中。さすが元陸上部」

「そうかなあ」

ピッ。

「め、めぐっ!?!」

突然めぐがオレの背中を抱きしめてきた。めぐの豊かな胸が背中に当たる。

うっ…。

「ずっと…この大きい背中で私を守っててね？」

……

「…うん」

わざとじゃないんだよな…。

「あ…せ、誠二くん…」

ん？うわわわわ！

「あっ…！いやっ…これはちがっ…」

「人が真面目に話してたのに…」

めぐは頬を膨らませてオレを睨んだ。

「こ、こればかりは条件反射で…」

ね、わかるよね!?

「もう…仕方ないなあ…」

「め、めぐ!?!ちよっ…」

…

……

……

……

.....

.....

.....

.....

.....

「めぐのせいだからな」

今は一緒に湯船につかっている。お互い何もつけずに。

「私はそんなつもりはなかったもん」

とりあえずここでしちゃったわけで……。

「のぼせちゃっつよ？出ようか」

「そうだね」

二人で浴室を出てリビングへ。

「誠二くん、何か冷たいもの飲む？」

これは……あれだ、例のやつだ。

「コーヒー牛乳」

「あ、はい」

あるんだ……。しかも瓶入りの。

ゴクゴク……。

「ぶはぁー！」

やっぱり風呂上がりはこれだよな！

「なんかベタなことしてるね」

「めぐ、そう言うけどな、風呂上がりのコーヒー牛乳は……」

それから長々と風呂上がりにコーヒー牛乳の素晴らしさを語った。

「う、うん。よくわかったよ」

めぐの経験値が一上がった。

それにしても風呂上がりのめぐはまた一段といいな。

普段見ることの出来ないパジャマ姿で少し濡れた髪が色っぽい。

「何見てるの？」

「いいなあと思って」

「変なのー」

それからは一緒にテレビも見て話したりしていた。

クイズ番組で一緒に考えたり、ドラマを見てあーだこーだ言ったり、バラエティを見て一緒に笑ったり。何気ないことなんだけどすごく幸せだったんだ。

「ふあゝあ……」

欠伸が出てしまった。

もうだいぶ遅くなってきたな。

「ふふ…誠二くん眠そうだね」

「…少しね」

めぐは眠くないのかな？

「誠二くんと一緒にご飯食べてお風呂入って、こうしてテレビ見て笑い合ったり。今はすごく幸せなの」

「…オレもさつき同じこと考えてた」

こんな日常が当たり前になってくれたらいいなあと思う。

「だから、眠るのがもったいなくて」

めぐは寂しげな表情で言う。

こんなことなんて滅多にないだろうし…。こんな日々が毎日ならめぐだっていつも笑って…。

そうだ…そうだよ…。

「めぐ…。まだ先のことだけど、オレはこういう日常を当たり前にしたい」

「誠二…くん？」

オレは…めぐと…。

「一緒に暮らそう」

「…あつ……………ひつ……………ひつく……………」

少し驚いたあと、めぐがボロボロ泣き出してしまった。

「オ、オレ何か変なこと言ったかな？」

「グスン……………違うの。…嬉しいの」

嬉しいから？

「泣くことないだろ？それにまだ先の話しだよ？」

「ううん、それでも嬉しい……」

「こりゃあオレあゝ頑張らないとな。」

「あはっ……グスン……ごめんね。寝ようか？」

めぐはホントに嬉しそうな顔で言った。

そしてめぐの部屋へ。

さっそく二人でベッドに潜り込んだ。ベッドの中ではめぐがオレに寄り添うように身を寄せていた。

「今日は、こうして寝ていい？」

「いいよ」

オレはめぐの髪を撫でる。

「誠二くん、大好きだよ」

「オレも……」

その後の言葉はキスで返した。

「えへっ……おやすみなさい。誠二くん」

「おやすみ。めぐ」

……

それからすぐにめぐはオレの隣で寝息をたて始めた。安心していいのか安らかな寝顔だった。

この隣で眠る人をずっと笑顔にさせていたい。笑顔を絶やさないように、このままずっとめぐのそばに居たいよ。

オレはめぐの寝顔を眺めながら眠りについた。

翌朝。

「ん……」

朝か……

めぐ……？

隣に寝ていためぐが居ない。

まだ寝ぼけたまま目をこすりながらリビングに下りる。

「あ、おはよう。朝ごはん食べるよね？」

リビングにはトーストの焼ける匂いとコンソメスープのいい香りが漂っていた。

「早いね」

「誠二くんも。もっとゆっくり寝ててよかったんだよ?」

「めぐがいなかったから」

「探しに来たんだ? 誠二くんかわいい!」

ん、まあそういうことにしとくか。

「顔洗って着替えて来るよ」

オレは顔を洗って寝ぐせを直して着替えてリビングに戻った。

「朝ごはん出来てるよ」

戻るとテーブルにはトーストロースープが並べられていた。

「ありがとう。毎日こんな生活してるの?」

「そうだよ?」

「大変じゃない?」

「もう慣れっこだよ」

口ではそう言うけどやっぱり大変だよな。

「一緒に暮したら、全部一緒にしよう」

「うん! …えへへ…」

その笑顔のためなら何でも出来る気がする。

めぐと一緒に朝食を済ませて片付けはオレがした。

そしてとりあえず帰る準備をする。

そして片付けが落ち着いてから少し話している時…。

突然だった。

ガチャツ…。

玄関の方からドアが開く音が聞こえた。

「えっ! う、うそっ!?!」

「な、何? どうした?」

めぐがいきなり慌て出した。

「どど、どどしよう!」

「だからどうしたの?」

「この慌てようは尋常じゃない。」

「お、お父さんとお母さんだ」

「な、なんですと!?! めぐのお父様とお母様!?!」

「恵!?! いるのか!?!」

「お、お父様だ!」

「いきないこういうのは困る!」

「恵!?! ん? 君は誰かな?」

「お父様とご対面だ!」

「は、初めまして! 椿誠二といいます! め、恵さんとお付き合いさせていただけます!」

「なっ! なんだとっ! そうなのか!?! 恵!?!」

「う!?! うん。帰りは明日じゃなかったの?」

「公演が指揮者のおかげで一日中止になったんだよ」

「見た目は優しそうな人なんだけど!?!」。

「あらあら、どうしたの? 騒がしいわね!?! あら? あなたは?」

「今度はお母様とご対面だ! 優しそうで気品があるな。」

「めぐちゃん、彼氏の方かしら?」

「椿誠二です! 恵さんとお付き合いさせていただいています」

「あら、かわいいわね。めぐちゃんが羨ましいわ」

「なんだこの人?」

「コホンツ! その!?! 君たちは付き合い合っつてどのくらいなのかな?」

「えつと!?! 半年くらいです」

「半年!?! な、ならばもう!?!」

「あなた! いろいろ詮索は無用ですよ」

「いや、しかしだな!?!」

「な、なんか思ったよりあっけらかんとしてるな。もっといろいろ厳しいと思っただけだ。」

「普段はこんなだよ。音楽のこととなれば厳しいの」

「そうだよな。仕事が音楽ですつと家を空けるくらいだし。」

「でもね、椿くん!?! だったかしら。めぐちゃんは!?! いいえ、やっぱり」

りいいわ」

「なんだ？めぐは？」

「めぐ、何かあるの？」

「ううん、わからないけど…」

めぐに聞いてみたけど何も心当たりはないみたいだ。

「椿くん、ちよつと恵に話があるんだが…。今日はお引き取り願えないだろうか？」

え…。話して…。？そんなに大事な話なのか？

「いいかな？」

「あつ…はい…。わかりました。失礼します。めぐ、またな」

「あつ…うん…またね」

「ごめんなさいね、椿くん」

オレはめぐに見送られてめぐの家をあとにした。

…いったい何だったんだろう。

……

……

……

・めぐの家では…。

「何？お父さん。帰って来て急に」

「恵、来年の春に私たちとフランスに来るんだ」

「えっ…な、なんで…？」

「向こうで知り合ったフルートの人にお前のことを話したら興味が
あるらしくてな。ぜひお前の面倒を見たいらしい」

「そ…そんなのお母さんでいいじゃない！」

「私たちはいつも飛び回っているのよ？あなたには一流の奏者にな
ってもらいたい。しっかりと勉強してもらいたいのよ」

「でも学校は！？どれくらい行くの！？」

「学校は…辞めてから行くのよ。期間はわからないわ。でも一年や
二年じゃ済まないのはわかるわね？」

「そんな…。そんなの…絶対イヤだよ！」

「それはさっきの椿くんがいるからか？」

「そ、それは……」

「まあいい。よく考えるんだ。だがお前が何と言おうと連れて行くつもりだ。向こうには知り合いもいる。不自由はさせない」

「イヤ……イヤだよ……」

「あと半年と少し。めぐちゃん、今を十分に楽しみなさい」

「昨日の……事なのに……一緒に……暮らそう……って……」

そんなことがあったなんてオレが知るのはまだ先のことだったんだ……。

修学旅行

めぐの家に泊まりに行った翌日。

めぐの話しを聞いたら叱られただけだったらしい。そりゃ一人娘が男を泊めたら怒られるよね。

でも、泊まりに行った日、めぐに会ってから何かが変わった。変な違和感があったんだ。なんて言ったらいいかわからないけれど、めぐは何か今を愛しむようなそんな感じだった。今までより積極的に会いたいと言ってきたり、別れの際には泣きそうになったり。焦っているようにも見えた。

新学期になってからの体育祭でもいつもオレについて回っていた。文化祭でもオレのそばを離れなかった。

「めぐ、ここ最近ずっとどうしたんだ？」

「なにが？」

「なんていうか…前より寂しがりになったっていうか…」

「それだけ誠二さんと一緒にいたいのに」

今は修学旅行のバスの中。隣同士に座っていて通路を挟んで紗耶香がいた。

修学旅行のメインはスキーと観光。新幹線で旅行先まで来てスキー場までバスで向かっていた。

「相変わらず仲のいいことこの上ないわね」

紗耶香が嫌味つたらしく言うてくる。

仲がいいのはいいんだけど何か違うんだよな。紗耶香は何もわからないのか？

しばらくバスに揺られているとスキー場へ着いた。スキー場にはホテルも併設してあってここには三泊四日の予定だった。

今日はこのままホテルに泊まり、スキーは明日からだ。

ホテルの部屋は四人部屋で男女は別棟。

唯一食事をする部屋だけは一緒になる。浴場も一ヶ所なので顔を

合わせるかもしれない。

部屋には普通に話す程度のクラスメート三人と一緒にだった。

今日この後は夕食と風呂を済ませて寝るだけだ。

修学旅行で困るのは食事。オレの好き嫌いが最大限に発揮される時なんだ。

「はあー、憂鬱……」

一人ぼやきながら食事が容易されている大宴会場へ。このときは学年全員が集まる。

「よう誠二。お前にとっては苦痛な時間だな」

「嫌いなものは食べてくれよ、勇介」

「やーだよ。神に感謝しながら味わって食べるんだな」

くっそー！ここぞとばかりにニヤニヤしゃがって！

「私が誠二の嫌いなものと変えてあげるよ。席近いし」

美香のクラスの女子とうちのクラスの男子は席が近い。

「さすが美香は優しいな」

「でも何でも食べれるようにならないとめぐが料理するとき困るよ？」

うっ…：そう言われたら返す言葉がない。

「大丈夫だよ。誠二くんの好みはわかってるつもりだから」

「めぐー、甘やかしたらダメだよー」

「少しずつ、ね？誠二くん」

「う、うん」

あれからめぐは異様に優しくなった。逆に気を使うくらいに。

とりあえず今回は美香にお世話になるか。

夕食は半分以上がうけつけけないものだった。美香にはかなりお世話になってしまった。

風呂に入る時間はクラス別に分かれている。

「あっ」

浴場に向かっているときにめぐと一緒にになった。

「誠二くん、消灯時間までどっかでお話できないかな？」

「エントランスの方だと自由に行き来できるみたいけど」
「そっか、じゃあ後で」
そして銃路を済ませ部屋で就寝準備をしてエントランスに向かった。

めぐはまだ来ていないみたいだ。

「あら、あんた何してんの？」

紗耶香がやってきた。風呂上りの紗耶香はなんとなく色っぽい…。む、いかんいかん、よりによって紗耶香なんか…。

「めぐを待つてるんだよ」

「はあー、あんたたちはいつでもどこでも…」

「お前、最近そればかりだな」

「あんたたちは目に余り過ぎるのよ。少しは周りの目を気にしなさい」

「そんなこと言ったって…」

「あ、紗耶香ちゃん」

ここにめぐが登場だ。

「めぐー！たまには私とも遊ぼうよー！」

「部屋は一緒だろ？」

「あんたは黙ってなさい！」

うおー、顔つきがオレとめぐじゃ全然違う。

「紗耶香ちゃん…ちよっといい？」

「うん！なにになにー？」

「あっちでいいかな？」

「え？…うん、いいよー！」

なんだろ？オレに聞かれたら困る話しか？…気になるけど女の子同士の話しに詮索は…。

「えー…！…！」

な、なんだ！？

あれは紗耶香の声だな。

「ごめんね、誠二くん」

めぐだけ戻ってきた。紗耶香が帰って行くのが見えたけど…何か泣いてた？

「めぐ、紗耶香は？」

「お友達のところに行ったよ」

「何か泣いてたように見えたけど？」

めぐは少し驚いた顔をした。

「……気のせい…じゃないかな？」

「でも…」

確かに泣いてた。涙が見えた。目にゴミ…ってこと？

「それよりスキー楽しみだね！誠二くんしたことある？」

「あ、ああそうだな。やったことないから楽しみだよ。めぐは滑れるのかなあ？」

「失礼しちゃうなあ。私はスキーしたことあるもん」

そんな何気ない会話をしていると消灯点呼の時間になった。

「そろそろ部屋に戻らないとな」

「うん…」

また…。そんな悲しい顔をして…。

「明日はすぐに会えるよ。ね？」

「キス…して？」

おおぅ…毎度毎度その目には参るよ。

必殺の上目使いだ。

「ん…」

周りに誰もいないことを確認してオレはキスをした。

「えへへ…また明日ね」

「うん、おやすみ。めぐ」

こうして一日目の夜は過ぎていった。

「あっ…めぐ。おかえり」

「さつきはごめんね？紗耶香ちゃん」

「…誠二には？」

「まだ…。怖いんだ…。今ね、私はすごく幸せ。誠二くんに話したら…誠二くん優しいから、きつと気を使い過ぎちゃって今の私たちがなくなっっちゃうんじゃないかって…」

「めぐ…でも…」

「みんなとこうしていられるのもこの二年生の間だけ。誠二くんとも。私は普通になりたい」

「うん…」

「もう少しだけでいいから、今はこのまま…」

「めぐ…私…イヤだよ。めぐと離れたくない」

「私もだよ…紗耶香ちゃん。でも逃げられないの。来年の春には向こうに…」

「う…うう…めぐ…グスン…」

「誠二くんには私から話すから黙っててくれる？」

「…うん…」

「ありがとう。紗耶香ちゃん」

二日目

外には白い雪が降って…はいなかった。

スキー場は半分は自然の雪で半分は人口の雪だった。

「みんな集まってるかしら？インストラクターの人の話しをよく聞いてから行動してね？くれぐれも勝手な行動しないように！」

奈美先生が注意を促す。

クラスの中でも細かい班に分かれてインストラクターの話しを聞いてから練習する。

「誠二、この靴歩きにくいっいたらありやしないな」

勇介が近くに居た。

「全くだ。お前の歩き方はさらに変だ。いや、変態だ」

「なにい〜！」

勇介がとつてかかろうとした。

「ごらー！そこ！勝手に動くなー！」

ぶぶつ、怒られてやんの。

「誠二くん、お、重いよ」

わたるが歩いているだけでひーひー言っている。

「まだ板もつけてないのに。しっかりしろよ」

「誠二くんと一緒にしないでよ」

「ほらっ！手貸せよ」

「えっ…誠二くん…」

お、おいおい渉。なぜ頬を赤く染める？

「誠二ー！早く来いよー！」

「わ、悪い渉！クラスメートが呼んでいる！オレは行かなければならない！」

「あっ！待つてよー！」

すまん！オレにはめぐがいるんだ！いや、そもそも男には興味はない。

「足！折れるー！」

あの叫び声は勇介だな。

おお…足が変な方向に…。

「あー、折れるかと思っただー」

えっ！折れてないの？明らかに逆に曲がってたよね！？

オレは勇介のそばに寄って行く。

「お前、大丈夫だったのか？」

「おお、間接外れたけど戻した」

この変態が！妙な特技持つてるな。

トンツ…。

勇介が立ち上がったのでオレはそつと背中を押してみた。

「ちよっ！おまつ！誠二ー！オレはまだ止まれなああああああ…

…！」

勇介は流星のごとく流れていった。
グッ！

勇介の班のメンバーからグッドサインをもらった。良いことをしたな。実にすがすがしい。

「誠二いいいいいい！！」

うおっ！

勇介が上から滑って突進してきた。リフトを使ったかな？
ひよいつ！

オレは軽やかに身をかわす。

「あっ！ちくしょおおおおお……！！」

さらば勇介。無事ならまた会おう。

「誠二、滑れるようになった？」

「ぼちぼちな」

美香が華麗に滑って来てオレの横に止まった。

「さすがに経験者は違うなあ」

「誠二もすぐだよ。運動神経だけはいいんだし」

「だけって言うな。見てろよ、すぐに追いつくからな」

「ふふふ、頑張ってるね」

美香はまた華麗に滑って行った。

うん、美しい。

「誠二くん、美香ちゃんに見とれてる」

「め、めぐ！違うよ、参考になるなあって」

あくまでも滑っている姿が美しいだけだ、うん。

「誠二。めぐを泣かせたら本当にぶん殴るからね」

「おいおい、怖いぞ紗耶香」

二人とも滑れるみたいだな。

「わかった？」

「な、なんだよ。怖いつて」

「ふんっ！めぐ、先に行ってるね！」

「あっ……うん」

紗耶香は滑って行った。

「どう？誠二くん」

「まだどうしても腰が引けちゃうんだよ」

「ふふふ、怖がらないで。余計に転んじゃうから。早く一緒に滑ろう？気持ちいいよ」

ああ、めぐ。このゲレンデに二人の愛の軌跡を。

「そこ！イチャイチャしない！」

ビクッ！

「奈美先生……」

「なあってね。先生は羨ましいわ、君たちのこと。私もこのゲレンデで素敵な出会いを……」

そう言いながら滑り去って行ってしまった。

…彼氏と別れたな。いつかは大人の事情とか言ってたし。オレとめぐの事はもうみんなが知っている。

「ほらっ、誠二くん。ハの字」

その後、めぐに教えてもらって二日目のスキーは終了した。

ホテルに戻って夕食はまた美香にお世話になった。

そして風呂を済ませまためぐと待ち合わせだった。

「また待たせちゃってごめんね」

「いいよ、紗耶香たちはよかったの？」

「うん、大丈夫。誠二くんと少しでも長く居たいから」

嬉しいこと言ってくれるな。

また話しをして、別れ際にはキスをして。

それが当たり前だった。めぐがそばにいることは当たり前だと思っただ。

三日目

午前中には大体滑れるようになってきた。

今日は雪がよく降っている。一面銀世界だ。

「キレイ……」

今はめぐと滑っていた。リフトで上に登っているとこらだ。

「オレたちが住んでるところじゃ見れない景色だもんなー。まためぐとスキーしに來たいな」

「……………」

「めぐ？」

「…うん…。そうだね！また来よう！」

一瞬すごく悲しそうな表情をした気がした。

「…ねえ誠二くん」

「ん？」

「もし私がどこか…」

そこまで言っただけもってしまった。

「何？」

「…ううん、何でもない。あつ、もう着きそう。山がキレイだね」

「え？ああホント。壮大な景色だな」

上に着くと、めぐに急かされて滑った。

さすがにまだめぐにはついていけなくて、オレのペースに合わせてもらっていた。

オレは滑ることに一生懸命だったことと爽快感でリフトでのことは頭には残っていなかった。

その夜も前日、前々日と同じように過ごした。

四日目

今日は午前中はスキー。午後からは観光のために少し離れた街に移動する。観光と言ってもみんなは買い物目的だった。

スキー場から三時間ほどバスに揺られて次のホテルに着いた。

街の観光は明日の一日だけだ。自由行動になっていた。

ホテルは今までと同じ部屋割り。ただ男女はフロアが別になっているだけで同じ棟だった。

夕食はめぐにお世話になった。

風呂を済ませたあと、今度は多少目に付くけど階段の踊り場めぐと話していた。

明日はめぐと観光デートをする予定なんだ。

街の中心にある繁華街を回る。一応ちよつとしたレポートを提出しないといけないので観光名所を見てからだ。

「明日は楽しみ。やっと誠二さんと二人っきりでデート出来るもん」「オレも楽しみだな。ちゃっちゃつと観光済ませて遊ぼう」

時間も決められていたために、効率良く回れるルートなんかを話している时就寝時間になった。

「じゃあ明日ね」

「うん、おやすみなさい。誠二くん」

そしてその夜は更けていった。

五日目

朝は全員が一旦集合してから自由行動となった。

「行こっ！誠二くん！」

「よし！行こっ！」

それから午前中はバスでいろんな観光名所を回っていた。

「うわぁ、すごい！」

「写真じゃ見たことあるけど実際この目で見るとすごいな。いいもんだね、こういうのも」

「うん、ホントすごい！」

感動してしまった。こういうのって歴史やその背景を知っていたらもっと感慨深いものになるんだろうな。

「誠二くん、これ……」
ん？

『よく当たる！恋愛おみくじ！』

なんだこの場違いなものは……。こっつて古いお寺なだけかな……。やる？」

えー、なんか胡散臭いなー。

でも、めぐがどうしてもやりたそうだったので仕方なく引いてみることに。

ウィーン……。

ん、出て来た。

二人の名前を機械い入力して、二人の今と未来を占うという内容だった。そうそう、こんな機械がこんなところにあることが間違ってるよね。

どれどれ…。

『あなたたちの幸せは今が絶頂期です。この後大きな困難が待ち受けているかも知れませんが、あなたたちがお互いを信じることでさらなる幸せが訪れるでしょう』

案外、当たってる？

「お互いを信じて…」

「めぐ？」

めぐは考え込むように結果の紙を見つめていた。

「大きな困難だって。何なんだろうな」

「……………」

「めぐ、どうした？」

「えっ…あ…誠二くんが浮気でもするんじゃないの？」

めぐが気がついたかのようにじとーっとオレを見て言った。

「そんなことしない！オレはめぐ一筋！」

「その大袈裟な否定の仕方が怪しい…」

「めぐ！怒るぞ？」

「あははは！ごめんね、行こう？」

ん、ん…なんか調子狂うな！

それからはバスで繁華街へ移動した。

「うわー、人が多いねー」

確かに。制服姿が少し恥ずかしい。修学旅行丸出したもんな。

そんな人の気も知らずにめぐは「うわー！うわー！」とキョロキ

ョロしている。

恥ずかしいよー。

「やっぱりこういうの買わないとね」

ん？ご当地キーホルダー…。

定番だな。

とりあえずめぐと同じものを買った。

「ここでもしか買えないんだよ。しかもお揃い。えへへ……」
嬉しそうなめぐがかわいい。よかったな。

「あれも……」

うっん、そうだよな。ご当地プリクラ。もうプリクラにも慣れっ
じや。

「もっと近くに、誠二くん」

この気恥かしさだけはね……。

近くに寄ったポーズにキスしたプリクラ。もうオレたちの定番に
なっている。らくがきもいつものようにめぐ担当。

「はい！誠二くんの分！」

段々とプリクラが増えていく。それと共にオレたちの思い出も増
えていつてるんだな。

その後も買い物や名物を食べたりなんかして過ごした。

「もう戻らないとダメだね」

「うん、急がないと。ほら、走ろう！」

オレはめぐの手を引いてバス停まで急いだ。

……

「はあっ……はあっ……待って……誠二く……」

「あっ……ごめん！」

急ぎ過ぎたか……。

「ゴメンゴメン。まだ間に合いそうだから歩いて行こうか。荷物貸
して？」

「はあっ……うん、ありがと……」

ゆっくり、めぐに合わせて。

「もう置いて行かないでね？」

「うん、ごめん」

少し歩くとバス停に着いた。

「少し疲れちゃった」

無理矢理走らせちゃったからな……。

バスの停留所でめぐはオレに寄り掛かって座っている。こういうのが一目を気にしろってことかな？

「めぐ…みんな見てるよ？」

「…ダメ？」

う…また必殺の上目使いか。

わざとじゃないんだろ？うな。

「人の目があるからさ。制服だし」

「……うん」

…泣きそう。

あーっもう！弱いなオレ。

そっつめぐの方に手を回す。

「…ありがとう」

”ありがとう”…か。

なんだろ？、不思議な感覚だ。

ホテルに戻って食事と風呂を済ませ、また階段の踊り場に向かった。

今日は帰る準備をしないといけないので、早目に部屋に戻るつもりだった。そのことも含めてめぐと話していた。

「もう終わっちゃうね、修学旅行」

「そうだな。まためぐとの思い出が作れたよ。帰ったらまたいつもの毎日だね」

「いつもの…」

最近のめぐは時折悲しい顔をする。今だっつてそうだ。

「何か最近悩み事あるの？オレに話せないこと？」

「なんでもないよ。修学旅行が終わっちゃうのが寂しいだけだよ」

「でもさ、帰ったら帰ったでいっぱい楽しいことあるし、また時間がある時なんかはさ、二人で旅行なんか…いいよね！」

「………」

「めぐ？」

「……せ…せい…じ…くん」

！

めぐがいきなり泣き出してしまった。一瞬何かしてしまったものかと思っただけど、何も思い当たらない。

「ご、ごめん！何か変なこと言っただかな？」

「ううん…違うの。…ゴメンね、今日はもう戻るね」

「あっ！ちよつとめ」

めぐは逃げるように部屋に戻って行った。

あの涙の訳はなんなんだろう。

……

わからない。

「めぐ、何してるの？…げっ！今日撮ったの？プリクラ。キスしてるし…」

「紗耶香ちゃん…。そうだよ。まだまだいっぱいあるよ。こっちは初デートの時で、これは…まだ付き合う…前に…撮った…グスン…やつ…で…グスッ…こっちは…グスッ…」

「めぐ…」

「紗耶香ちゃん！私！わた…し…！やっぱりイヤだよ…！みんなと…せ…誠二さんと離れたく…離れたく…ないよ…」

「…うう…めぐ…」

「どうしても…今が幸せであればある程辛いよ。誠二くんの前で泣いちゃいそうになる。私、心配かけてる」

「まだ…言えないの？」

「何度も言おうとしたけど言えなくて。変わっちゃうのが嫌なの」

「誠二は…ああ見えて優しいからきつとわかってくれるよ」

「それでも…誠二さんと普通に話したい。誠二くんの普通の笑顔が見ていたい。優しいからずっと笑っててくれると思うけど…それは多分ホントの笑顔じゃないんだ…」

「めぐ…。めぐも誠二も…かわいそうだよ…」

修学旅行最終日

今日はもう帰るだけだ。バスで移動して新幹線で。

みんな今回の思い出話しをしていた。もちろんオレとめぐ、紗耶香も例外じゃない。

「あんたたちのプリクラ見たわよ」

「なっ！め、めぐ！？」

「えへへへ、ごめんね？」

うう、恥ずかしい。

結局、昨日の涙の訳を聞く機会がないまま車内で話しをしていた。めぐは元気そうだったし、もう泣き顔なんて見たくないから聞かないことにしたんだ。この時、聞いていたらどうにかしてたのかもしれない。どうにもならなかったことかもしれないけど。

「まああれね、いつまでもお似合いのカップルでいることね」

おう？

「な、なんだよ紗耶香。昨日の夕食には頭がおかしくなるようなものはなかったぞ？」

「いっぺん本気でもいっつきりぶん殴るわよ？」

「あははは…はは…」

変わってない。何も変わってないようでよかった。

「あはは！誠二くん腰引けるよ？」

「いや、だって見た？今の顔」

「顔が何か？」

「い、いえ！何でもありません！いつでも見目麗しゅう」

「バカにしてるわね！絶対バカにしてるわね！バス降りたら覚悟しなさい！」

こんなことが、何気ないことはすごく愛しく思える時が来るなんて思ってもいなかったんだ。

進路

修学旅行も終わり二学期ももうすぐ終わりを迎える。

教室の外は雪。多く積もる程の雪じゃないけれどキレイな景色が眺められた。

去年、めぐからクリスマスプレゼントにもらった手袋が大活躍だ。今年はちゃんとプレゼントしないと。そう思って随分前から小遣いを少しずつ貯めていた。それでも大した物は贈れないけれど。

ところで、今日は進路相談。

将来のこと。と言ってももうあと一年と少し先のこと。そろそろはつきり決めないといけない。オレは何も決まっていなかった。

「椿くん、どうするの？何かしたいこととかないの？」

今は奈美先生と進路の話をしているところだ。

「特にまだ…」

「せめて進学か就職くらいは決めなさい。そうしないと、進学なら今からでも勉強するの遅いくらいよ？」

「はあ…」

「もう…もつと危機感持つて。じゃないと相田さんと釣り合わないわよ？」

めぐ…めぐはどうするんだ？

「め…相田さんは進路決まってるんですか？」

「まだ聞いてないわよ。聞いてても言わない。そういうことは本人に聞きなさい」

そっだよな。後で聞いてみよう。

放課後

部活も終わり、バス停へめぐを送っている。

「めぐ、進路どうするの？」

「えっ!?!」

「そんなに驚かなくても…」

「ご、ごめんね。私は…まだ決めてないよ」
めぐも決まってるのか。

「オレもなんだ。めぐは頭良いからまだまだ大丈夫なんだろうな」
「そ、そうだよ！私、頭良いし！」

「……………」
「あ、ごめん…」

むう、頭が良いっていいよなあ。

「はあー、どうするかなあ」

「……………」
でも、めぐって…。

「でも、めぐはフルート奏者とか目指さないの？」

「えっ…うん。先々は…そうなるかな」

「…じゃあ楽団とかに入ったらあちこち行ったりとかも？」

「……………」
「うん」

やっぱり…そうだよな。イヤだな。めぐと離れるの。

「そうになったら…寂しいな」

「……………」
「うん」

オレはめぐみたいに楽団に入ったりとか、そういうのは目指せない。いつでも一緒に居たいっていうのは贅沢なんだろうか？

「でも、頑張つて。小さい頃からずっと頑張つて来たんだからそれを目指さなくちゃ」

「誠二くんは…それでいいの？」

「え？」

「私がいつもどっか行っちゃったりしてて…」

「そりゃイヤだよ。でも…。」

「めぐの大事な将来なんだから…仕方ないよ」

出来るならずっと一緒に居たいっていうのは正直な気持ちだけけれど。こればかりはな。

「私は……………」

ん？

「めぐ?」

めぐは顔を伏せて…震えているようにも見えた。

「私は誠二くんに止めて欲しい!私はどこかに行っちゃうのなら!それを止めて欲しい!」

めぐは胸に手を当てて涙を浮かべながら急に怒鳴るように言った。

「ど…どうしたんだよ。いきなり」

でも、その表情はとても真剣だった。

「ご、ごめんなさい。今日はここでいいよ。バイバイ、誠二くん」

「えっ、ちよっとどうしたの!?!」

めぐは走って行ってしまった。

なんなんだよ、わけわかんね!。

「あら、誠二。めぐは?」

紗耶香。今帰りか…。

「先に帰った」

「ケンカ?」

「知らないよ。急に怒鳴るようにして帰って行ったから」

「…あんだ、めぐに何言ったの?」

何って…何だろう?

「わからん、オレが知りたい」

「めぐが理由もなく怒るわけじゃない」

そうなんだよな!。でも怒ってるってわけじゃなさそうだったし。

「怒ったっていうか、なんか止めて欲しいみたいに言われた」

「何を?」

「何を…。。めぐがめぐの両親みたいにもどこかに飛び回るのを、かな?」

「……………」

紗耶香のやつ、考え込んでるな。

「何かわかるか?」

「…さあ。わからないわ。でも、仲直りすることね。悔しいけど、めぐにとってはあんだが全てなんだから。何よりもあんだのことな

んだから」

そう言われると何も言えない。めぐにも同じこと言われたし。

「また明日からいつも通りにしてればいいのよ。何も言わないで」

「…わかったよ」

いつも通りに。めぐの笑った顔を見たいな。

「サンキュー紗耶香。なんとなくすつきりしたよ」

「最後までめぐのそばに居てあげて」

え？

「なんだって？」

「そばに居てあげてって」

「あ、ああ、当たり前だろ」

「…ホントに…あんただけなんだから。…じゃあね」

「おう、またな」

そして紗耶香と別れた。

明日からいつも通りにまためぐと話そう。めぐもいつも通りに話してくれると思う。きつと。

それにしても進路かー。

どうしよう。頭痛いなー。

「よおー誠二！今帰りか？珍しいな」

いつもと帰る時間が違うから勇介に会った。

「まあな」

「元気ねえなー、ケンカか？」

なーんか、勇介に言われるとムカつくぜ。

「進路で悩んでんだよ。お前どうするんだ？」

「風の往くままオレも流れて行くさ」

「かつこいいこと言ってるけどどうせ決まってるないんだろ？」

「オレはおじさんの屋台を手伝うつもりだ。全国のいろんな祭りに行くから転々とするだろうな」

な、なに！勇介には先が決まっているのか！？

勇介ですら…。

くそつ、なんだか負けた気分だぜ。

その後、勇介がめぐとの事を聞いてきたので、勇介にとって夢のような話しをしてやった。

勇介は泣いて悔しがっていた。もちろん詳しい話しはしてないよ？

「ただいまー」

「おかえりなさい。今日は早いわね。イチヤイチャしてこなかったの？」

母親が息子に向かってイチヤイチャとか言うな！

「今日は進路相談で帰りは別だったんだよ」

ちよつと悔しいから見栄を張ってみる。

「進路ねえ、あんたバカだからねえ」

ぐっ…また息子に向かってそんなことを。

「恵ちゃんのおうちお金持ちなんでしょ？婿養子にでもなったら？」

「バカ言うな」

「んま！親に向かってバカなんていつからそんな子に！」

オレはあんたに育ててもらった。

「オレは結構真面目に悩んでるんだよ」

「私も真面目に言ってるわ」

もういい、疲れる。

いろいろ済ませて部屋に入る。

めぐにメールしよう。

『今日のごめんね。また学校で』

返事は…。

『私こそ。また明日ね！』

大丈夫そうだな。

進路はおいおい考えていこう。焦っても仕方ないし。

今のオレじゃ将来のめぐと釣り合い取れないだろうなあ。

頑張らないとな。

めぐがどんな気持ちであんなことを言ったか。

オレは自分のことばかりで何もわかっていなかった。
めぐがどんな気持ちでオレの目の前に立っていたのか。
めぐがどんな気持ちでオレに笑顔を向けてくれたのか。
めぐがどんな気持ちで二人の将来の話しを聞いていたのか。
めぐは…強かったんだ…。

クリスマスプレゼント

今年もクリスマスがやってきた。

吹奏楽部でのクリスマススパーパーティーはなかった。

去年はホワイトクリスマスだったけど、今年は雲一つない晴れ空。夜は星がキレイに見られそうだった。

めぐとのクリスマスデート。何日も前から約束していた。そしてめぐの家にお泊まり。

今日の約束は夕方から。デートと言っても少し有名なレストランで大人ぶってクリスマスディナーだ。そこまで豪華な食事じゃないけれど、高校生のオレたちには十分だった。

泊まりだからめぐの住む緑ヶ丘町で待ち合わせ。今はめぐを待ち合わせ場所で待っているところだ。晴れてるけどなんせ真冬なもんだから寒い。早く来ないかなあ。

もちろんプレゼントも用意している。少しだけ奮発して買ったものだ。クリスマスくらい…ね。

「誠二くん、お待たせ。ゴメンね。寒かったでしょ？」

めぐが息を切らせてやってきた。それでも待ち合わせ時間よりは早い。

「早く来ないかなあって思ってたら来た。まだ早いけど早く会えて嬉しいよ」

「いつも誠二くん待たせてはっかりだから」

「ははは…まだ予約の時間まで少しあるけどどうしようか？」

「そうだねー。荷物、家に置きに行く？」

「あ、そうするかな。実はこの荷物でレストランに入るの少し恥ずかしいなって思ってた」

「ふふふ…行こ？」

めぐの家とも往復でちょうどいい時間かな？

それから荷物を置いてレストランに向かった。

日が暮れるのは早いもので、レストランに着く頃には辺りは暗くなっていた。

メニューはクリスマスのカップル限定ディナーコース。なるだけ食べれるものが多いやつを選んだつもりだ。それでも半分くらいだけどね。

「あーあ、もつたない」

う〜…めぐ〜…。

「私だってそんなに食べきれないよお」

そんなこと言っても手伝ってくれるのがめぐだった。だって、まともに食べれたのはメインディッシュのフィレステーキくらい。

その他は食べれるやつだけ。

ごめんよ〜めぐ。

「誠二くんは自分の子供に好き嫌いしちゃダメって言えないね」

「そこはパパは食べなくてもいいんだよって教えれば…」

「そんなのダメだよお。私がちゃんとさせるもん」

私がつて…。それってオレたちの子供のこと？

「それってー…オレたちの子供？」

「えっ…あっ！……………あの……………その……………」

自然に話していたみたいで、話してた内容に気がついてモジモジしていた。

「ずっと…一緒に居るなら自然にそうなるよ。めぐといずれ別れるとかそういうつもりなんてもちろんないし、死ぬまでだって一緒に居たいよ」

「そ、それ…」

オレはそう思ってる。

「将来的には…け…結婚…も…？」

そうだな…。

「…うん。そう思ってる。ちゃんと仕事して自分にもっと自信がついたらちゃんとプロポーズしたいな」

「……………嬉しい……………」

めぐは涙を浮かべて微笑んでいた。

人生の目標…かな。

めぐと一つになって幸せに。

「そろそろ出ようか」

レストランを出て、めぐの家に向かう途中で外灯が途切れるとキレイな星空が見えた。

「すごいな。星空に吸い込まれそう」

「なーんか、ロマンチックだね」

満天の星空の下を手を繋いで帰った。自分の分も作っていたのかお揃いの手袋だった。

「ずっと手袋使ってくれてるんだね」

「ボロボロびなるまでは使うよ。ボロボロになったらまた作って欲しいな」

「じゃあ毎年作るのかな」

そう言って笑う顔が無邪気でかわいかった。

「それもいいかもな。オレたちが一緒に居る分だけ手袋の数も増えるんだ」

「あはは！そのうちしまえなくなっちゃうよ？」

「それだけ一緒に居た証だよ」

そんなことを話しているうちにめぐの家に着いた。

「誠二くん、ちょっと待って？」
ん？

「誠二くん、おかえりなさい」

「あつ…」

めぐは先に入って玄関のドアを開けて出迎えてくれた。

「へへ…ただいま」

一緒に暮らせば毎日こうやってめぐが迎えてくれるのかな。

家に入ると、めぐは部屋を暖かくして風呂の準備をしに行った。

さてと…プレゼントの用意を。

荷物の中に忍ばせておいた。渡すのは…風呂に入ったあとがいい

かな？

「お風呂ももうすぐ準備出来るよ！」

「ああ、ありがとう」

用意したプレゼントをまた荷物に戻して風呂を済ませた。そしてお決まりのコーヒー牛乳。続いてめぐが済ませた。今回は部屋でじつくりと…ね！

「ふうー、あつたまるー」

やっぱりめぐの風呂上がりはいいなあ。

「部屋暖めてくるね」

今度は自分の部屋を暖めに行った。

今のうちに…。

「もう少し待っててね」

めぐが戻ってきた。今こそ渡そう。

「めぐ、これ…クリスマスプレゼント」

そうやって小さい箱を渡す。

「あつ、ありがとう！」

去年はデートがプレゼントだったからな。

「開けていい？」

「うん」

めぐは丁寧に箱を開く。

「なんだろう…。…あつ…」

箱の中身を少し眺めていた。そしてそれをゆっくりと身に付けた。「えへへ…似合う？」

めぐの左手の薬指にはシンプルなシルバーリングがはめられている。

「うん。とっても。気に入った？」

「誠二くんからもらった物だもん。もちろんだよ」

よかった。

でも、もう一つ驚かせたい事が…。

「実は…オレのもあるんだ」

オレは今まで見えないように隠していた左手をスツと差しだした。
「ペアリング…。そんなにいいやつじゃないんだけどさ」

めくはすごく驚いた顔をして、すぐに笑顔でオレに抱きついてきた。
「嬉しうい」

「学校じゃさすがに外さないとダメだけど、二人で居る時くらいはね」

「うん！誠二くん大好き！」

「リングの裏見てみて」

オレがそう言うつとめくはリングを外して覗きこんだ。

「め……………ぐ……………み……………？」

「こつちには誠二つて彫つてあるんだ。オレたちだけのペアリングだよ」

「すこい…素敵……………」

うつとりとした目でリングを眺めていた。

「例え私たちがどんなに離れたつて…これがあれば大丈夫だよね？」

「え？あ、ああ大丈夫だよ」

また…少し悲しそうな目だ。

「だよね。…誠二くん、少し待つててね」

そう言つて二階へ上がつて行つた。

プレゼント、喜んでもらえてよかつた。実は渡したくてウズウズしてたんだよな。

「誠二くん、これは私からだよ」

二階から戻つて来たためくから小さい箱をもらった。
なんだろうな。

「開けるよ？」

「うん」

ガサガサ…。

これは…。

チョーカーだ。クロスが掛けられていてその上に小さなコンパク

トがついている。それを開けると二人のプリクラが貼ってあった。

「ありがとう。大事にするよ。これならいつでもめぐと一緒にだな」

「うん。寂しくなったらそれ見て思い出してね」

めぐはハニカんだ笑顔を見せた。

寂しいだなんて、めぐがそばに居れば寂しくなんてないさ。

めぐを抱きしめてそのままめぐの部屋へ。

部屋は十分に暖まっていた。

「誠二くん、しょ？」

えっ！そんないきなり…！

めぐは目を潤ませてオレを見ていた。

そして激しくキスを求めてきた。

「ん……はっ……ちよっ……めぐっ…！」

驚いたこともあってめぐを引き離れた。

「めぐ、どうしたの？」

「イヤ…なの？」

イヤなんてもちろんそんなことはないけれど。

「私のこと…何度でも、いっぱい愛して…」

そう言っただけオレを見つめるめぐに何も言えなかった。

そして、何度も愛し合った。

…

…

…

…

…

…

…

…

…

…

「んっ…めぐ、めぐ。もう限界…」

「う、うん。ごめんね」

ホントに何度も何度も行為を重ねた。

「年明けくらいにお父さんたちが帰ってくるの。しばらく居るみたいで、こんな時間があんまりないかもしれないから」

そうだったんだ…。

「今度は…ちゃんと挨拶しようかな」

「……うん……」

でも、会ってただの挨拶…ならよかったんだけどな。

別れの現実

クリスマスが過ぎて冬休みに入り、もう年明けを迎えた。

今日は初詣。

めぐと勇介と美香と紗耶香。五人で初詣に来ている。

めぐの両親は今日帰って来るみたいで、めぐは早く帰らないといけないらしい。しばらくは寂しくなるのかな…。

チャリン…。

お賽銭を入れて参拝を済ませる。願い事はもちろんめぐとのこと。ずっと一緒に居られるようにとお願ひした。みんながそれぞれ願ひ事をしていた。

そんな時、勇介の顔がにやけていた。しばらく様子を眺めていると、目を瞑ったまま笑ったりにやついたりしている。

こいつ…お参りしながら妄想の世界に旅立ったな。

勇介をそのままに、めぐと美香と紗耶香をそっつと連れ出した。

勇介は動くことなく一人立ちつくしていた。

「ほつといておみくじ引きに行きましょ」

紗耶香が言うがみんな特に異論なくおみくじへ。

内容は気にしないけど新年一発目の運試し！

カランカラン…。

…大吉！

みんなも大吉。書いてある内容も同じだった。そんなもんだよね。

「誠二ー！ー！」

現実に戻って来たか勇介。

「見ろ！末吉だ！」

自慢気に見せて来た。

「ププツ…よ、よかったじゃないか勇介」

「去年は凶だったからな。ランクアップだ！」

お前の大吉は何年後だろうな。

「誠二くん」

「ん、何？」

めぐが深刻な表情で呼んだ。

「あの…話しておきたいことがあるんだけど…」

「…何？」

真面目な話しななんだろうな。目が真剣だ。

まさか…子供…！？いや、ちゃんと…。

「わ、私ね、今年の春」

「みんな！明けておめでとう！」

「あけおめ〜」

「あつ、明けておめでとうございませう」

理恵先輩とアリサ先輩だ。

「……………」

「みんなもう参拝済んだ？」

「みんな済ませましたよ」

「じゃあ久しぶりにみんなで遊ばない？」

「あ…はい…オレはいいですけど…めぐ」

ピリリリリ…！

めぐの携帯が鳴った。

「もしもし…あ…うん……わかった…」

どうしたんだ？

「理恵先輩ごめんなさい。両親が迎えに来ちゃったみたいで、帰ら

ないと…」

「え〜！そうなの！？じゃあ誠二くんも？」

「いえ、誠二くんは…」

「じゃあ誠二くんはいいよね！たまにはいいじゃない！」

「あ…はい…」

めぐ…何か話そうとしてたけど…。

「誠二くん、ゴメンね。行かないと」

「うん…またね」

そしてめぐは帰って行った。

その後、新学期になるまでめぐには会えなかった。話しかけてたことも直接話したいみたいで電話やメールでも話してはくれなかった。

何か：言いようのない不安が駆け巡っていた。

日は経ち、新学期。

オレはやつとめぐに会えると心躍らせて学校に向かった。

でもその影で不安も付きまとっていた。

学校に着いて急いで教室へ。もうめぐは来てるはずだ。

教室に入るとめぐの姿はなく、紗耶香が一人で机に突っ伏せていた。

「紗耶香、おはよう。めぐは？」

「職員室よ」

「ふーん、新学期早々何か用事なのかな？」

「……あんだ、何も聞いてないの？」

「何ってなんだよ？」

「そう……。私の口から言うことじゃないわ。誠……。お願いだからめぐを責めないで……！」

「は？一体何の話だよ？」

「……………」

な、何だよ！？」

紗耶香はすごく辛そうな顔をしていた。

「おい！紗耶香！」

めぐが話しておかないとって言ってたことか？

不安が駆け巡った。

何だよ、何なんだよ一体！

「みんな！明けておめでとう！席に着いてー！」

奈美先生がやってきた。めぐはまだ来てないぞ？

「新年明けておめでたいところなんだけど、みんなには非常に残念

なお話があります。相田さん

ガララ…。

めぐ！？何してるんだ！？

ドクン…ドクン…。

なんなんだよ…。

「この春、相田恵さんが学校を辞めることになりました。そして音楽の勉強のためにフランスに行くことになりました。みんなとはこの二年生の間までになるけど、それまでたくさん相田さんとの思い出を作ってたね」

……………えっ?…。

「相田さん」

「はい…。えっと…私はこの柳ヶ浦高校ともうすぐお別れになります。みんなとも。今まで仲良くしてくれたみんな、本当にありがとうございます。ありがとうございました。そして、残り少ない間でですけどみんなとの最後の思い出を作りたいと思います。それまで…よろしくお願いします」

な…なんだ?めぐは何を言ってるんだ?

みんなはめぐに何か声を掛けてたけど全然耳に入らなかった。

めぐはオレに視線を合わせようとしなかった。

わけがわからない。何が起こってるんだ?みんな何を騒いでる?

紗耶香…。紗耶香は?

うつむいている。紗耶香は知ってたんだよな。そんな素振りだった。

めぐがフランス?

何で?

どうして?

何でなにも知らなかった?

何で言ってくれなかった?

何で気がつかなかった?

いつ決まってた?

何も…何もわからなかった…。

めぐが変わったと感じたときがあった。もしかしてその時くらいから？

悲しい顔はこの理由から？

止めて欲しいってこの事だったのか？

”離れても大丈夫だよな？”って聞いていたのもフランスに行くから…。

思い返せばいくらでもおかしいことはあった。

めぐを責める？

…とんでもない。

何で気付いてやれなかった。

オレが二人の先のことを話すたびに悲しい思いをしてたんじゃないのか？

辛かったんじゃないのか？

オレは…。

…バカだ。

こんなことならもっと一緒に…。

「…うっ…くっ…」

涙が…。

止めないと。こんなの見せたらめぐがまた辛い思いするじゃないか！

「……………っ！……………誠……………」

紗耶香がこっちに気付いた。

見ないでくれ。

めぐにも気付かれるから。見ないで…。

でも…。

止まらないよ…。

せめてめぐから聞きたかったな…。

そうしたらオレはどうしたんだろう。

止めたのか？

オレのために残ってくれって言えたのか？

……言えないよな。

めぐの大事な将来なんだから。止めて欲しかったんだろうけれど

…。

……

その後はめぐはみんなから質問責めにあっついて話せなかった。

始業式が終わり放課後。

今日は部活はない。

「めぐ…」

「…誠二くん、ごめんなさ」

「帰ろう」

めぐの言葉を遮って帰りを急かした。

二人になりたかった。

学校を後にしてバス停までの道のり、普段は寄らない広場に寄り道する。あまり人目にはつかない。

「少し話そう」

そこに着くまで会話はなかった。

「誠二くん…ごめんなさ」

また謝ろうとしためぐを、首を横に振って止める。

「めぐ、ごめんな」

「え？」

「気がついてやれなくて。辛かっただろ？」

「あ……。せ、誠二くん……」

我慢していたのか涙をぼろぼろこぼしだした。

「ご、ごめんなさい。…ごめんなさい…！わ、わたし…！」

「うん」

聞こう…めぐの話しを。

「わがままなの…。私のわがままなの。話せなかった…。誠二くんとのその時の幸せが変わってしまいそうで…。怖くて…」

「うん」

「普通に…笑い合っていたかったの…。誠二くんに心配かけたくなかった。…ごめんなさい。私のわがままなの…」

「普通に…か。この事を聞いていたらオレは普通に笑えただろうか。離れたくない…。行きたくないよ…」

「いつまで…?」

「わからない…帰って来るのかも…」

「そんな…もう行っちゃったら会えないかもしれないってこと？」

「イヤだ…行って欲しくない。でも…」

「オレなんかのために…」

「めぐの将来が大事だよ」

「私は…誠二くんがいない将来なんて考えられない。何よりも誠二くんが私の全てなの」

「めぐ…」

「お父さんとお母さんは？」

「え？」

「いつまでいるの？」

「明後日にはまた行っちゃうけど…」

「……………オレは…」

「じゃあ、今から行こう！」

「えっ!？」

「二人で話そう!どうにかならないか」

「で、でも…」

「やれることはやる!」

「う、うん!」

「めぐの手を引いてバス停まで急いだ」

「あーっ!バスが出る!

「ちょーっと待ったああああ!」

「誠二くん!待って!」

「めぐはとりあえず置いて全力で走る」

「ドンドンドン!」

「運転手さん！待って！あと二人！」

今にも走り出そうとしていたバスを止めた。

「君！危ないぞー!!」

「すみません！乗りますから！めぐー！」

めぐは後ろに待っていた。だけど動こうとはしない。

「めぐ？早く！」

「誠二くん…行き先違う…」

なっ！？なんですと！？

………

た、確かに…。

運転手さんはジロツと睨んだ。

「す、すみませんでしたあ！」

深々とお辞儀をして謝った。

ブロロロロ…。

「めぐ〜…」

「私は待ってって言ったよ？」

………

「…ぷっ…あっはははははははははは！」

「ふふふ…あはは…ははっ…誠二くん、おかしー！」

それからすぐに緑ヶ丘町行きのバスが来た。

「急がなくてもいいからね」

「もう言うなよー」

バスに揺られて向かう。

さすがに緊張してくるな。

「誠二くん、大丈夫？」

「え？あ、ああ、大丈夫」

少し震えていたみたいでめぐがそつと膝を押さえてくれた。

バスを降りてめぐの家まで。

勢いで来たけど何を言えればいいんだ？

めぐを連れて行かないでくれって言うのか？ただの高校生の彼氏

が？どうする？

ガチャッ。

「ただいま」

「めぐちゃんおかえり…あら？あなたは…」

めぐのお母さんは笑顔でめぐを迎えたあと、オレの顔を見て少し複雑そうな顔をした。

「椿です。今日は少しお話しがあつて来ました」

「…いいわ。どうぞ、椿くん」

そしてリビングへ通された。

「恵、おかえり。ん？君は…。確か椿くんだったかな？」

「はい、少しお話しがあつてお邪魔しました」

「…まあそこに掛けてくれ」

少しため息交じりでそう言った。

「失礼します」

「母さん、コーヒーでも淹れてくれ」

ソファーにめぐと二人で腰掛ける。

「ふう…。それで？」

「あの…めぐは…いえ。恵さんはどうしてもフランスに行かないといけないんですか？」

「恵のことは普段通りに呼ぶといい」

「あ…はい」

落ち着いて聞いてくれるみたいだな。

「めぐはフランスへ？」

「そうだよ。春…三月には向こうへ連れて行く。あっちには優秀なフルートの先生が居てね、恵を見てもらうことになっている」

そうか…。

「日本じゃダメなんですか？」

「君も聞いていると思うが、私たちはいろんな場所で公演するため飛び回っていた。それが大体フランスで落ち着きそうだね。恵には今まで寂しい思いをさせてきた。そばに置いておきたい」

「え…？それじゃ…」

「正直に言おう。恵も聞きなさい。向こうへ行けば…おそろくはもう日本へは戻らないだろう」

なっ…！

「なにそれ！お父さん！そんなこと聞いてない！」

めぐも初めて聞いたのか。

怒鳴って抗議している。

「私は絶対イヤだよ！そんなの！」

オレも…二度と会えないなんて絶対イヤだ！

「それは…ひどいんじゃないですか？黙って連れて行こうなんて」

「今まで散々一人にして来たじゃない！そんなの今さらだよ！」

「それは私たちが転々として来たからだよ。子供の恵を連れまわすのはかわいそうだったからね。友達も出来なかつただろうし」

そんなことが…。でも、納得は出来ない！

「今まで寂しい思いをさせて来た分、これからかわいがってやりたい。それに恵の将来も向こうじゃ安心なんだよ。私たちの楽団に入れる」

「私は…私はそんなこと望んでない！」

「なら恵は家族よりも椿くんが大事だというのかい？」

「そ、それは…」

家族…か。めぐは今まで寂しい思いをしてきただろう。唯一無二の家族。ホントは思いつきり甘えたいはずだよな。

オレがどうこう言う問題なのか？

逆の立場ならどうする？

「椿くん、向こうでの音楽は私たちの仕事なんだよ」

フランスで仕事しないといけない。それは仕方ないよな。

だけどもめぐと離れたくない。でも…何も言えない。

「日本にはもう二度と？」

「公演があるなら来るだろうね」

めぐに会えるのはそんな時しかないのか…？

「椿くん、これは家族の問題なんだよ。わかつてはくれないだろうか？」

「……………」
「コーヒーよ。お菓子もあるからね」

めぐのお母さんがコーヒーとお菓子を持って来てくれた。

「椿くん、私たちも好きで一人娘のめぐちゃんを一人ぼっちにしてたわけじゃないのよ。たった一人の娘なんだもの」

「お母さん……」

元々…オレが入りこめる話しじゃなかったのかな…。

「椿くんには感謝してるわ。一時期めぐちゃんは塞ぎ込んでた。それを救ってくれたんでしょ？」

「救ったなんて……」

「いいえ、救ってくれたのよ。おかげでお友達もたくさん出来たみたいだし」

「……………」
「でも、私たちもめぐちゃんが大事なの」

「……はい」

「誠二くん……」

「わかつてくれる？」

わかる。それはわかるけど…離れたくないよ。

「お父さん、こっちで仕事は出来ないの？」

「契約があるんだよ、大きいね」

「……そう…なんだ……」

めぐにはそれがどういふことかわかってるみたいだ。

「……………」
「……………」

オレもめぐも言葉が出て来ない。

「せめて……」

「なんだい？」

「めぐが日本を離れるまでの間、会ってもいいですか？」

もう…オレには…。

「会うなどは言っていないよ。私たちは明後日にまた飛ぶ。そして一ヶ月後にまた戻る予定だ。それから一月の間に日本を離れる準備をして三月半ばに日本を発つ」

三月半ば…。

「それまでは自由にするといい」

「……はい」

「誠二くん……」

「椿くん、ごめんなさいね」

謝られても、なんて答えればいいのか…。

めぐのお母さんも申し訳なさそうにしている。

「今日は…帰ります」

「あっ…あの…誠二くん」

めぐもオレになんて言えばいいかわからない様子だった。

「送ってあげなさい」

そしてめぐと一緒に家をあとにした。

……

「……」

「……」

なんとか、めぐを連れて行かないで欲しかった。でも、ああ言われたら何も言えなかった。

「ごめん、オレ何も言えなかった」

「誠二くん……」

「ごめんな……」

「謝らないで。ありがとう…誠二くん」

めぐ…ありがとうって…。

「めぐ……めぐ……うっ……めぐ……うっ……くっ……」

「せ、誠二くん……うっ……グスン…誠二くん！うえ~~~~ん！誠二くん！グスッ……」

周りの目線なんか気にならずに、二人で抱きしめ合って泣いた。

目の前に別れの現実を突きつけられた。

めぐと一緒に居られるのもあと二カ月。あまりにも短すぎる。この二カ月でめぐに何が出来る。何をしてやれる？

「めぐ…オレは…」

「いつも通りの誠二くんできて？」
えっ…？

「いつも通りに話して、いつも通りの笑顔で…いつも通りに私を愛して？」

「……うん」

それがめぐの望みなら。

「最後まで…笑った顔で」

泣き顔なんか見せなくていい。いつも笑顔で、めぐと会おう。

「めぐ、ここでいいよ」

「うん。また明日ね！」

「また学校で！」

会えなくなることは考えないで、今を大事に。何気ない普通を大切に。

めぐが笑って旅立てるように。

「誠二くん！」

もう背中を向けていたオレは呼びとめられて振り返った。

「私…誠二くんに出会えて…あなたを好きになってよかった！」
笑顔で…少しだけ頑張った笑顔でめぐは言った。

「オレも…めぐを好きになってよかった！」

いつまでも…大好きだよ。

「じゃあ、またねー！」

離れたって…心は繋がってるよ。
きつと…。

変わらない二人

オレはめぐに”家族よりオレを選んでくれ”なんて言えなかった。めぐと離れなくちゃならないという事を知って数日、めぐの辛さが身に染みてわかった。いつも通りにめぐと接するのが難しい。めぐと離れるまでのカウントダウンが常に頭の中にある。確実に迫って来るその時。

めぐはずつと前からこんな気持ちだったんだろつな。

めぐは強いよ。

オレがめぐの立場だったら…きっと笑ってなんかいられなかっただろつな。

「じくん！せーいーじーくーん！」

「あ、ああごめん。なんだっけ？」

「次の休みのデートのことだよ！もう…！すっかり私を見ててよ」
残された時間は短いんだからな。めぐとの時間を大切にしないと。

「デート、どうするかなあ」

「遊園地…」

ん？

「一緒に行ったことないよね。行かない？」

「遊園地か…なるべく話題にはしたくなかったんだよな。高いところ
が苦手、いわゆる高所恐怖症というやつなんだ」

「遊園地か…」

「決定！次のデートは遊園地！もう変更なし！」

「えっ…！」

「…いいよね？」

おう、必殺の上目使い。もう絶対わかっててやってるな。

「…わかったよ。次の日曜日に」

「わーい！楽しみー！」

「はは…そんなに喜んで。かわいいな。」

「今私のことかわいいつて思ったでしょ？」

「何でわかる！？まさかめぐにも！？」

「顔に書いてあるよ！誠二くんのことは何でもわかるんだから！」

「えっへんとふんぞり返って自信たっぷりだ。」

「だから…辛い時は我慢しないで？」

「…バレバレか。」

「少しくらい…甘えてもいいかな？」

「めぐ…」

きつく抱き締める。

「このめぐもりが愛おしい。」

「苦しいよ…誠二くん」

「そう言いながらもオレを離そうとはしない。」

「ツーン…」

「涙が…」

「……………」

めぐはオレの背中にまわしていた腕の力を少し強めた。何も言わないで。

「はは…ごめん、めぐ」

「誠二くんの泣き虫」

「そんなこと言うなってー」

学校の帰り道のことだった。

家に帰ると今まで以上に寂しさを感じる。

「あんだ、大丈夫なの？」

「母さんにもめぐのことは話していた。」

「大丈夫さ」

「無理してるように見えるわよ」

「辛いこと、完全に隠せるもんじゃないよな。」

「そんな無理はしてないよ」

「嘘おっしやい。あんだが頑張って返すんなら、これ使ってもいい」

のよ?」

母さんがそう言っただけで差し出したのは通帳だった。

中身は…いつこんな貯めたんだらうというくらいに大金が預金されていた。

「こんなに…」

「あんたが小さい時からコツコツね…」

何のために?

「何かの役に立つものでしょ?」

「でも…こんな大金」

「使えないっていうなら別に無理して使わなくていいわよ。私のへそくりなんだから。父さんには内緒ね」

へそくりって領域越えてるけどな。

「いや…やっぱりいいよ」

「あらそう。でも…困ったら言いなさい」

「ああ、サンキュ」

……………

家族…か。

大事だよな。

ありがとう、母さん。

自分自身で頑張ってお金貯めて、そして胸張ってめぐりに会いに行くよ。

いつの日かきっと。

めぐとのことを夢に見ながら眠りについた。

日曜日

めぐと遊園地デートだ。

遊園地はちょっと離れたところにあるから早目の待ち合わせ。電車で移動するんだ。柳ヶ浦町からしばらく電車で揺られてたどり着く距離だ。

「誠二くん」

「めぐ、おはよ」

「また待たせちゃったね」

待ち合わせの時間にはいつも早いのにめぐよりオレは早く居て、いつもものめぐのセリフだ。

「全然。一つ早い電車で行く？」

「うん！」

実は電車の時間も約束の時間より早い時刻表を確認していた。

「えへへ…楽しみだなあ」

「めぐは、その…ジェットコースターとか好きなの？」

「大好きだよ！いっぱい乗ろうね！」

う…覚悟するしかないか。

そして遊園地へ。

「まだ早いからか人少ないな」

「うん、人気があるやつ先に行こうよ！待たないといけなくなるかもしれないし」

それはごもつとも。

でもさ、そんなアトラクションなんてやっぱり…。

「これ！」

めぐはエントランスで貰った園内地図の一部を指差して言った。

…やっぱそうだよな。

この遊園地目玉の巨大ジェットコースター。

「そ、それに乗るの？」

「うん！行く！」

そしてジェットコースターのもとへ。

おおお、高い…。

こ、これに乗るのか。真上を見上げる程高いんだぞ？こんな楽しみもんじゃないって。

「誠二くん、早くー！」

「う、うん」

予想通り人はまだ少ないからすぐに乗れた。

「……………」
「誠二くん、昇るよ！楽しみだね！」

「あ、ああ……」

ガタンガタンガタン……。

昇ってる。昇ってるよ……。このまま天国なのか？

空だ……空が近いよ……。

空がっ……！！まわっ……！！

? \$!x !!!

「うわっぎゃあああああああ……！！」

落ちるっ！上がるっ！まっ、回るー！死ぬー！！！！

「あはははははは……！」

めぐの笑い声が聞こえる気がする！

あ……！！！！！！……。

……………
「ち、ちよっと誠二くん！大丈夫！？」

「う………」

もう無理……。

「立てる？」

「うん……」

あ……。

めぐに手を貸してもらった。情けない。

「苦手なら言ってくれればよかったのに」

だってすごく楽しみにしてたから。

「高いところ、苦手なんだ」

「初めて知ったな。まだ誠二くんの知らないことあったんだね」

時間さえあればお互いのことなんてもっと分かり合えたのに……。

なんだか重い空気が流れる。

「めぐ！ほらっ！次行こう！」

「う、うん……！」

それからいろんなアトラクションを回った。

もちろんジェットコースターも。最初に乗ったやつ程大きいものじゃないけど、オレには十分過ぎるものだった。

「ちよつと休憩してあそこ行かない？」

「ん？おばけ屋敷？カップル定番の。」

「ああいいよ」

ジュースを飲んでソフトクリームを食べてお化け屋敷へ。一緒に何かを食べたり飲んだりすることすら大切な時間だった。

「ううん、ドキドキするね、誠二くん」

オレは腕に押し当てられているめぐの胸にドキドキしてるよ。

中は真っ暗でわずかな光をとよりに進んで行く。

.....

「ゴアーーーーー!!!」

「きゃあああ!!」

大きな効果音と共に上から骸骨が降ってきた。めぐがオレに抱きつく。

「.....いたずらしようかな.....」

「きゃっ!!」

ちよつとお尻を触ってみる。

「せ、誠二くん？」

「ん、何？」

なにくわぬ顔で答える。

「誠二くんじゃないの？」

「何が？」

「う、ううん。何でもない」

めぐは頭にハテナマークを浮かべて進む。

...楽しいかも。

「きゃっ!!」

今度は腰の辺りを触る。

「なに!?!」

「どうしたんだよ、さっきから」

「わかんない」

「変なめぐだな」

「うう〜」

いかんいかん、やめられない。

.....

ヒュオオオオオ.....

風の音と共に何か走り出して目の前を通り過ぎた。

「きゃあああ!!」

「大丈夫だよ、めぐ」

「う、うん」

さて...と。

そろり...

ガシッ!

あっ.....

「やっぱり誠二くんだったんだね。さっきから」

「いや、あはは...。ごめんごめん。めぐが驚く姿がかわいかったか

らっつい」

オレの手はしっかりとめぐに掴まれていた。

「つい、じゃないよ!怖かったんだからね!」

「ごめん、どうしたら許してくれる?」

「じゃあ...」

なにになに?

.....

「ぎゃあああああ!!」

お仕置きだと最初に乗ったジェットコースターにまた乗る羽目になった。

「あっはははは!誠二くんの顔おもしろかったあ!」

こっちはホント死ぬ思いなのに。

「もうダメ。絶対乗らない」

「ふふ…今度は…」

めぐに連れられてやってきたのは観覧車だった。

「この観覧車は日本一大きいんだって！」

うん、確かに大きいな。そして高い。

もう夕日が射してきそうな時間でキレイな夕日が見えるだろう。でも、ゆっくり動くのがある意味ジェットコースターよりも怖い。

「誠二くん？まさか観覧車も？」

う〜…。

「ぜ、全然平気！乗ろう！」

「ホントに？」

「大丈夫だって！さあ乗ろう！」

そして観覧車に乗り込む。

「行ってらっしゃいませ」

係員の人が声を掛ける。 ” 逝ってらっしゃいませ ” オレにはそう聞こえた。

オレとめぐを乗せた観覧車はだんだん昇って行く。

この辺まではいいんだお、この辺までは。

てっぺんの半分くらいまでやってきた。

……………

おおおお…怖え。

もうみんなちっちゃいよ。だんだん小さくなっていくよ。落ちたら死んじゃうよ。

「誠二くん、大丈夫？」

「だ、大丈夫。景色がキレイだな。ははは…」

「もう…」

めぐは小さなため息をつくど、オレの隣に移動してきた。

「うわわっ！めぐ！傾く！」

「だーいじょうぶ！」

そんなこと言っても！

うわっ！揺れる！

「誠二くん、私を見て？」
めぐ？

「な、なに？…んっ！」
いきなりキスしてきた。

「下見なかつたら怖くないよ。私を見て？」
…うん」

ありがとう、少し楽になった。

「誠二くん、今日は楽しかった。誠二くんが以外と臆病だって知っ
たし」

「だって落ちたら死ぬよ？」

「ふふ…落ちないよ。あつ…」

え？

「見て、キレイな夕陽」

ホントだ。すごい。山に沈もうとしている夕陽がはっきり見える。

「キレイだな…」

「うん…」

観覧車が回って夕陽が見えなくなるまで、ずっと二人で夕陽を眺
めていた。たった二人だけの空間だったからかも知れない。言葉は
なくてもなんか安心出来た。

「もう一周しちゃうね」

寂しそうな顔をしている。

「うん…」

「誠二くん…」

そう言っつて見つめるめぐに優しいキスをした。

「誠二くん…大好きだよ」

オレも…いつまでもずっと…。

観覧車も一周してオレたちは遊園地を出た。帰るころにはもう真
っ暗になってしまっから。

帰りの電車の中、めぐは疲れたのかオレの肩に頭を預けて眠っ
ていた。

ふふ…かわいいな。

……

めぐ…もうすぐ行ってしまっただよな。

この横で眠る彼女がいなくなってしまうなんて…。

実感が湧かない。

いまだにずっと隣に居てくれるんじゃないかって思ってるオレがいる。確実に来る別れの時にオレはどうするんだろう。その時は刻一刻と迫ってきているのに。

それまで笑っていられるかな？

変わらない二人でいられるかな？

最後はどんな顔で会えばいいんだろう？

いや、最後だなんて…。

めぐのそばに居たいよ。

「ん……。あつ、ごめん。寝ちゃってたんだね」

「おはよ。もうすぐ着くから起こそうと思ってた」

目をこすりながらめぐが起きた。

「もうすぐ着くんだ…」

「うん…」

「……………」

「……………」

「誠二くん…このまま二人でどっか行っちゃおうか…二人だけでめぐが遠くを見るような目で言う。」

オレだって…出来るならそうしたい。

「…ダメだよ。お父さんとお母さんが心配するよ」

「………言ってみただけ………」

「……………」

「……………」

『次は〽柳ヶ浦駅〽、次は〽柳ヶ浦駅〽。降り口は右側です』
着いた…。

「めぐ、行くっつ」

「……………」
めぐは一向に動こうとしない。

「めぐ！」
オレはめぐを無理矢理立たせて電車を降りた。

「……………」
めぐは電車を降りてもうつむいたまま動こうとしない。
めぐ……。

「……………ひっ……………ひっく……………」
泣いていた……。

「せ、誠二くん……。イヤだよぉ……ひっ……」

「めぐ、泣くなよ！めぐが泣いたら……オ……オレ……だって……」
共に泣いた。

今日の別れを惜しんで。

大事な一日が過ぎてしまったこと。

また一緒に居れる時間が短くなってしまったこと。

決して戻らない、進んで行くしかない時間を恨みながらその日は別れた。

変わらない二人でなんかいらなかった。

涙は抑えきれなかったんだ。

めぐが旅立つ日は確実に近づいている。

二月十四日

バレンタインデー。

去年めぐに告白された日。今年も部室の同じ場所でチョコレートを受け取った。

めぐはオレが亜美からもらった明らかな本命のバレンタインチョコを見て頬を膨らませていた。その様子が可笑しくって笑っていた。それを見ためぐもすぐに笑顔を見せてくれた。

オレが告白の返事をしたホワイトデーにはめぐはもういない。一緒に笑い合えるのもう一ヶ月もないんだ。

めぐは「浮気しちゃダメだよ」って言ってた。ははっ…いつまでの事なんだろうな。

またいつか会った時には隣に別の誰かがいるんだろうか？フランスに会いに行つて別の人がいたなんて笑えないしな。

「めぐの方こそな」

オレたちは互いにまた会えると信じてるんだ。

また、変わらない二人で…いつの日か。

会いに行くんだ。

そして。

めぐが旅立つ日はやってきた

旅立ち

「向こうに行ってもオレのこと忘れるなよ?」

「誠二くんの方こそ!浮気したらダメだからね!」

めぐが日本を発つ二日前。

めぐが発つ日は学校があるからオレは今日、めぐを見送り…というか会い来ていた。

「まだ: 私たち付き合って一年経ってないんだね」

「一年なんかほんの少しさ!いつかまた一緒になって歩いて行んだる?」

「うん!」

こんな話しをしているけれど、それがどんなに難しいことかは分かっていた。

三月一日。

理恵先輩とアリサ先輩が卒業した。

先輩たちは学校とオレたちとの別れ以上に、めぐがフランスへ行ってしまうことを悲しんでいた。

いつかまた会える。みんな口を揃えて言う。オレ自身もそう思っていた。それぞれの場所へ旅立ってもまた会える。先輩たちとだつて、めぐとだつてきつと。

「また、必ず会えるよ」

「このリングは、私たちのエンゲージリングだよね」

クリスマスに贈ったリングを見て笑つて言う。

「向こうにプリクラがあるかわからないけど、これにも新しいやつ貼らないと」

もらったチョーカーのコンパクトを手にとって言う。

「手紙、書くね」

「オレも。絶対書くから」

字、うまくならないとな。

「写真も…送るから」

「うん」

アルバム…買わないと…。

「電話も…する…から…ね…」

「…うん」

そこまで言っつてめぐは耐え切れなくなり涙を流した。

「めぐ…」

きつく…今までで一番きつくめぐを抱き締める。

「せつ…せい…誠二くん…！誠二くーん…！うわーん…！」

めぐ…めぐ…。

ホントに…お別れなんだな。

「あっ…うっ…ひっく…うわーん…！」

めぐは泣き続けた。

声が枯れてしまうような大きな声で。今まで我慢してきた分まで
思いつきり。オレの腕の中で泣き続けた。

オレも声を殺して、力を弱めて、優しくめぐを抱いて泣いた。

「うっ…ひっく…」

めぐが落ち着いてきたくらいに、優しい、出来る限りの優しいキ
スをした。

「んっ…ひっく…」

めぐも涙を流しながらキスに答えた。

そしてまた抱き締めあった。

……

「…グスン…もう、大丈夫」

「めぐ…」

めぐはオレと違ってみんなとも離れなくちゃならない。オレの何
倍も何倍も辛いだろっ。

「へへ…次に会うときはとびつきりいい女になってるからね！」

「はは…それ以上いい女になったら余計心配するって」

「誠二くんのためだよ！」

「それじゃ楽しみにしとく」

オレも胸張ってめぐに会えるような大人にならないと。

「……………」

「……………」

もう…行かないと…かな。

「めぐ、そろそろ行くよ」

「…うん」

「手紙、絶対だぞ？めぐが手紙くれないと住所わかんないんだから」

「うん…」

……………

「じゃあ…元気でやるんだよ」

「うん…」

「サヨナラは言わないから。…………またね」

「…うん！私、今までもこれからもずっと誠二くんが大好き！」

「オレだって、これからもずっと！めぐが大好きだ！」

「ふふっ…またね。誠二くん」

「また…会うその時まで…」

最後のキスをして俺はその場を走り去った。

もう笑っていられそうになかったから。

めぐが覚えているオレの最後の顔が笑顔でありますように。

元気で…。

また会う日まで。

めぐが旅立つ当日

今日、めぐが日本から旅立つんだな。

いつか会えるから大丈夫。この空が続いているところにいる限り必ず会えるから。

確か…十二時の飛行機だったよな。

もう学校でも会えないんだよな。わかっちゃいるけど。登校して、自分の席に着く。

あの、めぐの席にはもう誰もいない。寂しいな…。

「あなた、何やってんの？」

紗耶香…。

「紗耶香、おはよ」

「おはよ、じゃないわよ。めぐの見送りは？」

「二日前に会ったよ。お前も別れは済ませたのか？」

「私はとつくに。じゃなくて！何でここにいんのよ？」

「何でって。今日から平日だし、学校だろ？」

何言ってやがる。

「はぁーっ…めぐにとつてあなたが全てって言ったでしょ！最後の最後にあんたが見送り行かなくてどうすんのよ！」

最後…そんなわけない。

「最後じゃないさ、めぐにはまた会える」

必ず…。

「絶対そう言えるの？」

紗耶香がに睨む。

「ぜ…絶対だ！」

「あんたがそう言うならいいけど、後悔しても知らないからね後悔か。また会えるんだ。また…。

また……会える…よな…？

約束したんだ。信じてる。

でも…。

「本当にいいのね？」

紗耶香…。オレ…。

「はい！みんな席に着いてー！SHR始めるわよー！」
奈美先生が来てしまった。

オレ…オレは…。

「くがあるから今日は午後から」

オレは…!

ガタンツ!

「先生!」

オレは立ち上がり奈美先生の話しを遮った。

「な、何?椿くん」

「す、すみません!あの、オ、オレ…!」

「…行ってらっしゃい」

「え?」

奈美先生はにっこりと笑ってそう言った。

「椿くん、早退ね!早く帰らないとどんどん具合が悪くなるわよ!」

奈美先生…。

「あ、ありがとうございます!」

オレはすぐに荷物をまとめて教室を飛び出した。

「こら!病人なんだから走らないの!まったく…。でも…うーん!青春だわー!」

あとで紗耶香から教室の様子は聞いた。

「はっ…はっ…はっ…」

めぐが発つ空港はここからだと言ったと車で一時間はかかる。

どうする?電車?いや、直接行けないし。バスは…時間がわからないし、そう本数も多くないはず。仕方ない。

一度自宅を目指す。

「はっ…はっ…はっ…」

もっと早く!

蘇れ!陸上部だった頃のオレ!

うおおおおお…!!

ガラガラ!!

タクシーは走ってきた方向に180°。ターンを決めて豪快に走り出した。

「うわっ！わっ！わーーーーっ！」

「まだまだこれからあ！昔の血が騒ぐなあオイ！！」
「ちよっ！まっ！あぶなっ！」

車と車の間を縫うようにスイスイすり抜けて行く。

「運転手さん！ちよっ！うわっ！急ぎっのっ！安全っ！運転っ！でっ！」

「学生！急ぎの安全運転なんかねえんだよ！男がガタガタ騒ぐんじやねえ！」

男がどうのとかいう問題じゃなくて！法律上やばいんじゃないの！？

ウ~~~~~！ウ~~~~~！

『そのタクシー！今すぐ暴走運転をやめて停まりなさい！』
ほらほらほらあ！警察だつてそりや来るさ！

「学生！しっかり掴まれよ！」

「えっ！うそおおおお！！」

『タクシー！停まりなさい！！』

ホントマジヤバイって！

ウ~~~~~！ウ~~~~~！

パトカーの数増えてるし！

何で！？どうして警察とカーチェイスになるの！？

「もうすぐだぜ！学生！」

「いやあああああ！！」

さらにスピードを上げて突っ走って行く！

『タクシーー！！』

警察も意地になつてみるみたいだ。

「ご到着だっつぜい！！」

早っ！もう着いた！

「行けー！学生ー！オレはここまでだあー！！」

何これ！？何の映画！？

「か、感謝します！」

とりあえずお金だけは払って空港のロビーに走る。

「はっ…はっ…」

フランス行きは？

……

三番ロビー！あっちか！

めぐっ！どこだ！？

もしかしてもう搭乗口の方に？

いや、まだ早い。どこかにいるはずだ！

そっだ、携帯…！

『お客様のおかげになった番号は…』

くそっ！つながらない！

どこだよ…！

ロビー内をくまなく探す。

めぐ…！めぐ…！めぐ…！

……

……

……

「めぐっ！」

「誠二…くん？」

やっと見つけた…。

「めぐちゃん、私たちは先に行ってるから時間には来るのよ？あなた！」

「あ、ああ。恵、遅れるなよ？」

「う、うん」

めぐの両親は先に搭乗口に向かった。めぐのお母さんはウインクしていたかのように見えた。

「誠二くん、どうして？」

「やっぱり…最後まで見送りたくて」

「学校は？」

「早退してきた。いや、むしろさせられた」

「え？あははっ、なにそれ！。変なのー」

また、めぐの笑顔を見れた。

「あはっ、再会は意外と早かったね」

めぐは笑いながら言う。

「ははっ！そうだな！」

また話せた…。

「めぐ、オレ…」

「なーに？」

「めぐが大好きだ！高校卒業したら仕事しながらでもフランス語勉強して、お金貯めて絶対会いに行くから！」

「誠二くん…。うん！あんまり遅いとおばさんになっちゃうからね

！あんまり待たせないでね」

「ははっ、頑張らないとな」

「ちゃんと頑張ってよ？でも誠二くんっておつむは弱いもんなあ」

「なんだとー！」

「あははっ！」

今までお互い涙は見せなかった。笑顔で話してたんだ。

「頑張ってめぐに会いに行けたらその時は…」

「ん？」

「その時は結婚しよう！」

「えっ…誠二くん…。うん！絶対だよ！おばあちゃんになってからのウェディングドレスなんてイヤだからね！早くね！」

めぐは笑顔を見せつつも泣いていた。

「約束だよ」

「約束…だね」

人生の目標だ。

あと少し時間があるみたいでベンチに腰掛けて話す。

「子供はたくさん欲しいな。誠二くん頑張ってね。小学校の卒業文

集の夢叶えてよね？」

「まだ覚えてたの？人生の汚点を」

「でもそれが現実になったらスゴイよね」

確かにそうだ。それがめぐとの将来ならなおさら。

「現実にするよ」

「うん！」

二人の将来のことを話す。それがオレたちにとっての希望であり、支えだった。

二人で住む家のこと。子供が男の子なら、女の子なら。二人の家事分担。オレの好き嫌いのこと。

その二人の将来のこと全てが二人を繋ぐものだった。

「あははっ……はは………もう…行かないと……」

「……うん」

「絶対に…二人の夢、叶えようね！」

めぐは涙を流しながらも笑顔で話していた。

「約束だよ！」

オレも笑顔で……。

互いに笑って別れのキスを。

「へへ…じゃあ、行くね…」

「うん、待っててくれよ？」

「信じてるよ！」

めぐ……。

「「またね！」」

笑ってめぐと別れた。

見えなくなるまで手を振っていた。

行っちゃったな……。

めぐ……。

元気でやっていけるかな？

泣いたりしないかな？

食べ物とか大丈夫かな？

知らない土地で不安だろうな。

友達出来るかな？

めぐなら、大丈夫だろうな。

めぐ……。

「うっ……うぁー……！……めぐう……うっ……あー
ー……うぐっ……」

その日、学校には行かなかった。いや、行けなかった。
とにかく泣いた。

家に帰ってから部屋に閉じこもって。

誰にも会いたくなかった。

オレの目の前でめぐは行ってしまったんだ。

最後の、手を振って消えて行ったためぐの姿が目には焼き付いていた。

その姿を思い出してはまた涙が溢れてきた。

めぐ……。

思わず布団を抱きしめる。

あのめぐの笑顔、めぐの声、めぐの優しさ、めぐのぬくもり。

全てが目の前から消えたんだ。

オレ、また会えるまで耐えられるかな？

めぐが愛おしい。

ただただ、それだけだった。

もう……めぐはいない。

この現実を受け入れなくちゃ。

また会える日まで……。

また会えた日のことを支えに思って。

行ってらっしゃい。

めぐ。

別れの後

めぐが旅立ってから一週間が経った。

めぐと付き合って一年目の記念日。隣にめぐはいない。変わらな
いままだったなら、二人でこの記念日をお祝いしてたんだろうな。

頑張つてめぐに会いに。

そう思っていた。

だけど想像以上にめぐがいなくなったことは大きかったんだ。

何もする気が起きない。

みんなの前でうまく笑えない。

じっかんが湧かないんだ。

ひよっこりめぐが現れるんじゃないかって…。あり得ないことに
期待してめぐの影を追いかけていた。

「めぐ…」

口にするのはめぐの名前ばかり。

頭に思い浮かべるのはいつもめぐの笑顔、声、暖かさ。

気がつけば涙を流していたり…。

めぐは何してるんだろう。

携帯は通じなかった。

カパツ。

チョーカーのコンパクトを開けてプリクラを見る時間が増える。

それを見てはデートのことを思い出して笑ったり…。

いつも一緒に居た。

それが普通だった。

たくさん話して、笑い合つて…幸せだった。

隣に居るのが当たり前と思つてた。これからは居ないのが当たり
前。それが普通。

「誠二…」

帰り道は美香とたまに一緒に帰るようになった。一人になりたか

つたけど、美香が強引についてくる。

「もう一週間経ったよ？そろそろ元気だそうよ。会いに行くんでしょ？」

「……………」
「やっぱりダメなんだよ、めぐがいないと。」

「みんな心配してるよ？勇介だって、涉くんも紗耶香ちゃんも…私も」

「悪い…」

それくらいしか言えなかった。

みんなが心配して気を使ってくれてるのなんてすぐにわかった。でもなんか、それがみじめで…。かと言って強がっているわけでもなくて…。みんなが心配せてくれるのは至極当然だった。

「もうすぐ私たちも三年生だよ。そして一年後にはもう卒業だよ。そしたらめぐに会いに行けるんじゃない？」

一年後…。長いよな。めぐと付き合ってた期間より長い時間だよ。一年も…。

美香と別れて自宅へ。

「ただいま…」

「あら、おかえりなさい」

母さんも何かと気を使っている。からかわなくなっただし、優しくなった。

「めぐちゃん、うまくやってるかしらね？」

「めぐなら大丈夫さ」

「あんたも同じこと思われてるんじゃない？」

「え？」

「めぐちゃんに、あんたなら大丈夫って思われてるんじゃない？」

めぐに…？

「あんたがいつまでもそんなだったらめぐちゃんも安心出来ないわよ？」

そっか…。

「ありがとう、母さん」

少し気が楽になった。

母さんはやれやれといった感じで家事に戻った。

まだmだめぐが居ないことには慣れないだろうけど、少しずつでいい。

めぐとの約束を守るために頑張っていこう。

みんなもいる。友達がいる。

少しくらいみんなに頼ってもいいよな。めぐは一人で頑張ってるんだ。オレだってしっかりしないと。

頑張つて、前を向いて歩いて行こう。

……

その日は少しだけゆっくり眠りにつけた気がした。

「紗耶香、おはよ」

教室で紗耶香に挨拶をする。

「おはよ。なんかすつきりした顔ね」

「まあ、な」

「あんたがしつかりしないとめぐも安心しないんだから誰かさんと同じこと言うなあ。」

「ははっ、そうだな！」

めぐ、少しは笑えるようになったかな？

三年生へ

四月。

また桜が咲き乱れる季節、オレたちは三年生になった。

めぐが居ない生活にもだいぶ慣れた。でもまだ、めぐを思い泣く夜も少なくはなかった。

すっかりしろ！

自分にそう言い聞かせて学校へ行く。

美香、紗耶香、勇介、渉、みんな同じクラスになった。めぐがいれば…そう思わずにはいられなかった。

「誠二、今年はついに卒業だね」

「そうだな、卒業かー。今から言ってもしょうがないけど」

「あはは、それもそうだね」

美香が居て。

「あんだ卒業とか言う前に勉強しなさいよ」

「やるさー。頭の良い奴にはオレたちの苦勞はわからん。なあ勇介」

紗耶香が居て。

「オレをお前と一緒にするな」

「こっちこそゴメンだ」

「なにい！」

勇介が居て。

「誠二くん、これ誠二くんのために一生懸命作ったんだよ」

「な、なにこれ？」

「フィギュアだよ」

「はは…気持ちだけでもらっておくよ」

渉が居て。

(誠二くん、だーい好き！)

めぐだって…オレの中にもいつでも居るんだ。

でもやっぱり寂しい。これが本心だ。

めぐを思わない日はたった一日だってない。

二人の約束だけがオレたちを繋ぐ絆。今はそれに向かって行くだけだ。

「はい！席に着いてー！」

担任は三年連続で奈美先生。

もう何でも相談出来る。

オレの気力がない時だって話しを聞いてくれた。学校のつていうか人生の先生？大袈裟かな。

今年からは進路別に授業が分けられる。

進学と就職。

美香、紗耶香、渉は進学。

オレと勇介は就職。

オレはまだ何をしていたかなんて決まっていなかった。ただ、この町は離れたくなかった。生まれ育って、めぐと出会った場所だったから。

そういえば、めぐから初めての手紙が届いたんだ。

いろいろ大変そうだったけど元気でやっているみたいだった。フルートの先生も優しくしてくれてるみたいだ。最初はオレと同じで何も手につかなかったみたい。その様子を想像すると今すぐにでも飛んで行きたい衝動に駆られた。

最後に書いてあった”会いたい”の文字に思わず涙が流れた。

返事を…。

オレもめぐと同じ状況だったこと。クラスにみんな集まったこと。最近の出来事。めぐへの想い。

”オレも会いたい”

この一言を書く時、手が震えていた。

会いたい…。

胸が締め付けられる。今すぐ抱きしめたい。

今は叶わない思いを手紙に託す。

いつまでも二人の思いが続いていくように。

「せーんぱい！」

亜美は相変わらずだ。めぐが居ないことを良いことについてでもくつついてくる。

「これを機会に亜美と付き合っちゃいましょうよー！」

「毎日同じこと言ってる飽きないか？」

「誠二先輩が亜美とラブラブしてくれたら言わないですよー」

「ああ、めぐが恋しい」

「もー！いつもめぐめぐめぐめぐめぐって！そんなに巨乳がいいんですか！」

「そこかよ…否定はしないけど。」

「胸じゃなくてめぐの全てが好きなんだよ！笑顔、声、性格、どれをとっても亜美が勝てる要素はない！」

「むぁー！ー！そこまで言わなくなつたって！」

「それだけめぐを愛してるんだよ」

話してたら会いたくなってくるじゃないか。

「けっ！ですっ！亜美、他の人のところに行っちゃいますよ？」

「出来ればそうしてくれ」

「誠二先輩のバカー！ー！」

毎日のことだ…。嘘泣きかどうかも見抜けるぞ、亜美。

「あらあら、亜美ちゃんかわいそう」

紗耶香もやれやれといった感じだ。

「紗耶香ならオレとめぐの愛がわかるだろ？」

「はいはい。なんとでも言いなさい。それより、めぐが写真送って

きたら見せなさいよ？」

「えー！ー！どうしよっかなー」

「ふんっ！」

「ドカツ！」

「ぐぼえ！」

グーだったよね！今！キズものになつちゃうじゃんか！

「あんまり私を舐めんじやないわよ？」

「は、はい！送ってきたら必ず！」

「私の親友であることも忘れないことね！」

部室での出来事もこんな感じで前のように。

めぐが居ないこと以外は。

今年の新人部員は十三人。相変わらず女子ばかり。

亜美も先輩らしくなってくればいいけど。

美香は部長としてよく部員を仕切っていた。真面目で優しく、時には厳しく部員に当たり、みんなを引っばっていた。

「誠二ー、また亜美ちゃん泣かせたでしょ。走って行ったよ？」

「もう見慣れた場面だろ？」

美香は世話焼きでもあるから毎日亜美を慰めている。

「もうー、毎回慰める私の身にもなってるよね？」

「毎度ご苦労さまです」

「はあー、行ってきまーす」

行ってらっしゃーい。

.....

こいつらが居れば大丈夫かな？

楽しく過ごせるかな？

最後の一年間。

めぐは居ないけれど、楽しい思いでをたくさん作ろう。

そして、めぐに会った時にたくさん話そう。みんなのこと、オレのじゅ。

良い一年になるといいな。

三年生 一学期

三年生になってしばらく経った。

吹奏楽部の新入部員も部活には慣れてきているくらいだ。

オレたちパーカッションには二人の女子が加わった。

名前は山本真琴やまもとまことと荻野遥おぎのほるかちゃん。二人は中学校からの同級生らしくて仲が良かった。

二人とも未経験者で指導は亜美に一任していた。オレと紗耶香は夏のコンクールまでだから亜美に二人を任せられた。

「亜美、しっかり教えるんだぞ！」

「でも…亜美は誠二先輩が卒業しちゃったら…」

「お前は隠してるつもりだろうけど、とっくに吹奏楽好きになってるだろ？」

「えっ!？」

「隠れて練習したり、家にCD持って帰って聞いているの知ってるんだからな」

「むう…それは…」

亜美は顔を赤らめて目を反らした。

「照れるな。しっかり頼むよ。オレからの頼みだ」

「誠二先輩からの…はい!亜美頑張ります!」
「しっかりやってくれよ。」

「山本さん、荻野さん、亜美の言うこと良く聞いて頑張ってるね」

「はい!」

よしよし、良い子たちだ。

「あんたたち、誠二先輩は亜美のものだからね!」

亜美は二人を威嚇していた。

だから違うっていうのに。

「その三人!」

ビクッ!

紗耶香がいきなり大声を上げた。

「しつかり練習しないと私からがひどいわよ？」

「……は、はい！」

オレまで返事しそうになるほどの威圧感だぜ…。

「あ・ん・た・も・よ！」

バシッ！

「あでっ！」

「ふんぞり返ってないで練習しなさい！コンクールに向けて！

分かっているのに…いちいちうるさいなあ。暴力女。

「誠二。今…」

「さ、さあーて！練習練習！」

危ない危ない、紗耶香にも若干読心スキルがあるんだった。

でもホント、コンクールに向けて頑張っで行こう。

めぐは主力だったからな、吹奏楽部としてもめぐがいないのは辛

いよな。

（大丈夫だから）

一年目のコンクールの時にめぐが掛けてくれた言葉。あの一言で

ずいぶん楽になったんだよな。

懐かしいな。

まだまだ心を開きかけてた時だったもんな。

今思えば、最初の印象と全然違うな。近寄り難い雰囲気をもとっ

てて、勇気を出して話しかけたんだけど雰囲気におレが負けちゃっ

たんだよな。

はははっ、めぐは不思議な子だったもんな。

愛理先輩が起こした事件でめぐとの距離が縮まったんだよな。あ

の時には許せなかったけど、今じゃむしろ感謝。

紗耶香がどれだけめぐを大切にしていたのかもあの時に知った。

「なにぼくとしてんのよ」

「紗耶香、ずっとめぐを守ってくれてありがとな」

「な、なによ。あんたにお礼言われても意味ないでしょ」

紗耶香は頬を赤らめてそっぽを向いた。

めぐと紗耶香が一緒じゃなかったらオレはめぐと出会ってなかったのかも知れないし。

「は、早く練習しなさい！」

「わかったよ」

吹奏楽部を離れるまで一生懸命頑張りますか！

あー、今日も疲れたー。

「誠二、帰ろう」

「ああ、そうだな」

美香が呼びに来た。

一緒に校門を出る。傍から見たらカップルなんだろうな。めぐに悪いかな…。

「誠二、最近は落ち着いてきたみたいだね」

「めぐのこと？」

「そうだよ、少し前の誠二は見てられなかったもん」

美香にもだいぶ心配かけてたからな。

「心配かけてゴメンな」

「うっん。……………ねえ誠二」

「ん？」

「やっぱり…めぐを追いかけるの？」

「そう…だな。約束したんだ」

「何の？」

「えっ…いい、いろいろだよ」

人に言うのは恥ずかしいな。

「また、ずっと立ち止まったりしない？」

約束したし、オレの目標なんだ。

「今だって、前に進んでるよ」

「そっか。ならいいんだ」

心配してくれてるんだな。まだまだしっかりしないと。

美香もオレのことばかりかまってるら…。

「美香はどうなんだ？」

「え？なにが？」

「好きな人は出来たか？」

「…ううん…まだ…」

美香は顔を曇らせた。

軽率な質問だったか？

「なんか…ゴメンな」

「…誠二」

ん？

美香は立ち止まってオレを真つすぐ見つめた。

「ゴメン！」

そう叫んだのとほぼ同時にオレの唇に美香のそれが触れた。

「み、美香！？」

「ご、ごめんね…。私…ずるい女なんだ」

何が起きた？

キ…キスされた！？

「私、めぐがフランスに行っちゃうって知ってすごく悲しかった。

ホントだよ？でも…チャンスって思っちゃったの…。ごめんなさい

…」

美香はオレの顔を見ずにうつむいて話し出した。

「めぐがいなくなっちゃったら誠二が一人になるって。私が隣に居

られるって。最低だよね、私。大事な友達が遠くに行っちゃったの

に、自分のことばかり」

話しながらさらに顔を背けていった。オレの顔を見ることが出来

ないんだな。

「誠二の中にあめぐしかいないのに。わかっているのに。…ごめんな

れよ…」

オレはまだ美香を傷つけてたのか…。

ダメなやつだな…。

でも…。

「美香…。ごめん、オレはめぐが好きなんだ。ずっとこれからも」

「…改めてそう言われると…ズキツとくるなあ…」

「あつ…じ、ごめ」

そう言いかけた時に美香は首を振りながらこっちを振り向いた。

「私が悪いの。亜美ちゃんたちの前ではかっこいい事言ってたけど、結局自分に言い聞かせてただけだったんだね。もう、ホントに最後、

誠二は親友で幼馴染。変わらない…。誠二、気にしないでね？」

自分に言い聞かせるように話していた。

「帰ろう？」

「あ、ああ」

「ゴメンな…」。

めぐが好きなんだ。遠くに居るからって気持ちはかわらないよ。

家に帰ってめぐの手紙と、一緒に撮ったプリクラを眺める。

毎日の日課になっていた。

今は何してるのかな？

泣いてないかな？

やべっ、オレが泣きそう。

「めぐ…」

夜は寂しい。

毎日夢でくらい会えるよつにと眠りについてた。

ミンミンミンミン…。

「暑……」

セミが鳴き始めるくらいの季節。

学校はもう夏服で勇介にとっては学校がパラダイスになる季節だった。

「あの子スタイルいいよな」

勇介は今年入学してきた一年生の夏服姿を見て呟いていた。

「めくもなかなかだぞ」

「なんだそりゃ？自慢か？」

夏場は二人で汗をかきながら………いかんいかん。

「美香のことはどうしたんだよ？」

「あ……フラレ過ぎたよ」

勇介は遠い目をしている。

「でも、美香は何度フラレても普通に接してくれるからな。良い子だよ」

「良い子だよ。いい人と巡り合って欲しい。勇介じゃ役不足だ」

「そうかもなー」

珍しく否定しないな。

勇介は笑っていた。ホントに美香が好きなんだろうな。

「なーに男二人で遠い目してんのよ、気持ち悪い」

「さ、紗耶香……オレと付き合わないか？」

「誰が変態なんかと！」

……前言撤回。変態はただの変態だ。

でも……こいつらはみんないいやつだな。少しだけでも寂しさを紛らわせてくれる。みんながいるから今も笑っていられるんだ。

卒業を来年に迎えて……寂しいな。

みんな自分の進路に向けて頑張っている。

美香は隣町にある大学を目指して。紗耶香は遠くの大学を受けるみたいだ。渉はコンピュータの専門学校へ。勇介はおじさんのことだな。

オレはまだ具体的に決まっていはいない。

めぐは…もう目標とか立ててるのかな…。

「誠二は地元で探すんでしょ？」

「そうだな。何したいとかはないけど」

「ふふふ…めぐのためなら何でも出来るでしょ？」

「まあな」

美香とは変わらずに過ごせていた。

「美香が受ける大学、大丈夫なのか？」

結構有名な大学を受けるらしい。詳しいことは知らないけれど。

「頑張ってるよ。誠二に負けてられないから」

「オレはまだ…」

「人生の目標決まってるんでしょ？私より随分先を見てるんだもん」
ただ漠然とめぐと一緒にすること。一緒になれたとして…その後は？

…幸せな家族だよ…。

「じくじく普通の夢だよ」

「普通でもいいじゃない！お互い頑張ろうね！」

「おう！」

やっぱり普通より困難かも知れない。待っていてくれるめぐのため…。

三年生の一学期も終わり夏休み。

オレたちは最後の吹奏楽コンクールを控えていた。

このコンクールが終われば吹奏楽部ともお別れだ。最後の学年は別ればかりだよな。

「誠二先輩！何ぼくとしてるんですか！気合いが足りないですよ」

亜美？

「ははっ、まさか亜美にそんなこと言われるなんてな」

「もうー、誠二先輩最後のコンクールなんですよ？しっかりして下さいー！」

「悪い悪い。山本さんと荻野さんにはちゃんと教えられてるか？」

「ばっちりですよ！安心してサヨナラして下さい！」

サヨナラして下さい…。

「まだ終わってないっつーの。ま、安心して任せるよ」

「そして亜美を見直した誠二先輩が亜美に愛の告白を……ブツブツ……」

えへえへ笑いながら妄想の世界に旅立って行った。

「勝手にやってろ」

成長してるのかしてないのか…。

オレも気合い入れないと。でも、やっぱりめぐと一緒にコンクールに出たかったな。

めぐからの手紙は月に一度くらいのペースで届いていた。

写真も何枚か。

元気そうなめぐの姿が写っていた。紗耶香も喜んで見てたな。その内の一枚にめぐのセクシーショットがあつたのは紗耶香には秘密だ。

もちろんオレもその度に返事を送っている。

めぐの手紙の最後に必ず書いてある”会いたい”の言葉。オレも必ず書いて送っている。

その気持ちが揺らぐことはなかった。日が経つにつれて、学校行事が来る度に隣にめぐがいれば…。なんて思う。

会いたい気持ちが減ることはないけど、めぐがいない寂しさだっ
て消えることはない。あいつらのおかげで少しは紛れるけど。

”会いたい”

いつも思う。

まだめぐと離れて四カ月。

いつ会えるかな…。

そう思う夏の日、空は青く澄み渡っていた。

そして、吹奏楽コンクールは金賞。代表にはなれなかった。オレたちの吹奏楽部の生活は終わりを迎えた。

美香、紗耶香、みんなは泣き、吹奏楽部との別れを惜しんだ。

オレは涙は流れなかった。

もちろん一生懸命練習してコンクールに挑んだ。ただ、めぐとの別れを経験したオレは、またみんなとは学校で会えると思っていた。コンクールの結果が悔しくなかったわけじゃない。吹奏楽部での思い出もめぐとの事が思い浮かんで…。この場にめぐが居ないことが寂しかった。

みんなには悪いと思いつつもめぐのことを考えずにはいられなかった。みんなとの別れも悲しめない、薄情な男だな。めぐのとことばっかりで。

美香が部長としてみんなに声を掛ける。

涙を流しながら話していたな。立派な部長だった。美香にとってはとても感慨深いものだろう。

学校へ帰って来てから楽器を片付けて、恒例の送別会の話だった。

明日、オレたちの送別会が行われる。

コンクール翌日。

またまた千秋先輩宅のレストランで送別会が行われた。

みんな思い思いに今までのことやこれからのことを話していた。

奈美先生は来た時にはすでに出来上がっていて、最初っからエン

ジン全開だった。

今年は理恵先輩じゃなく亜美に追いかけまわされた。

「待ってー！誠二せんぱーい！」

理恵先輩を意識してか胸を強調して迫っていた。

んー…。

オレは立ち止まる。

「誠二先輩！捕まえた！亜美の胸に飛び込んで別れを惜しんで下さい！」

「めぐの胸と比べたら…」

オレはジェスチャーで大きさの違いを差す。

「むっきゃー！ー！！！」

「はははっ！亜美の胸には顔は埋まらないなあ！」

「椿くん、あんまり後輩をいじめちゃダメよ」

奈美先生…うわっ！酒くさ！

「先生ー！どうやってたら先生みたいにグラマーになれるんですか？」

「そうですね…椿くんに揉んでもらったら？」

「……………」

「……………」

「誠二せんぱーい！」

「来るなー！ー！！！」

教師が何を言うか！

「紗耶香ちゃん、相変わらずだね、あの二人も」

「そうね。でもそれももう見れなくなっちゃうんだね」

「うん…寂しいよね…」

「美香ちゃん…誠二のことは…」

「…実際…まだ好きかな。誠二の前では普通にしてるけど」

「そっか…美香ちゃんも辛いよね」

「誠二とめぐの間には入れないよ。誠二のこと好きだけど、誠二には幸せになつて欲しいし。私にもその内いい人見つかるよ！」

「美香ちゃん…。あーあ、誠二は罪作りな男ね。いつそ勇介くらいでいいんじゃない？」

「オレもそう思うぞ」

「うわっ！どこから出た変態！近寄らないで！」

「ひでー…」

「ふふふ…勇介ももつと頼りになる男の子になったらね」

「なに！見てくれ美香！オレは頼りになる男になるぞ！」

「やっぱり変態は止めておいた方がいいよ、美香ちゃん」

「せーんぱい！揉んでくれるくらいいいじゃないですかー！」

オレは不覚にも亜美に捕まっていた。

ない胸をぐりぐり押しつけてくる。

「女の子が自分から揉んでくれなんて言うな！」

「誠二先輩ならなんでもありですよ！」

「亜美ちゃん、それくらいにしてあげなよ」

おお！救世主美香！

「美香先輩は誠二先輩に揉んでもらったことあります？」

「えっ！そ、そんなのないよ！」

またバカなことを聞いて…。

「じゃあ一緒に揉んでもらいましょう！」

ホワツツ！？

「えっ…そ、そんな…」

美香よ、なぜそこで恥じらう…？

「誠二先輩！」

「誠二…いい、いいよ？」

おかしい！絶対におかしいよね！

「この変態が――！！！」

「ぶあー！！」

「あんたは何やってんの！」

紗耶香にいつものように殴られた。今日は一段と強烈だ。

「紗耶香！この状況理解しろ！オレが迫られ

「うるさい！」

「ペぎやつー！！」

ひどいよ紗耶香…。

でも、こんなことももうないのかな。そんなことを思うおと寂しい。

楽しかったよな、吹奏楽部。めぐと付き合えたのもこの部に入ったから。吹奏楽部に入らなかつたら、オレはずっと本気で人を好きになることなんてなかつたのかもな。

めぐ…。

「あんた…何泣いてんの？」

え？

いつの間に…？

「紗耶香がばか力で殴るからだろ！」

「誰がばか力よ！おりゃあ！」

ひよいつ！

オレは軽やかに身をかわした。ふふふ、もう何度も紗耶香の攻撃は喰らっている。見切るのも簡単さ。

「はははっ！残念でしたー！ばか力ー！」

さー逃げる！

「あっ！このっ！待ちなさい！」

「待てと言われて待つバカがいるか！」

距離さ置けばこっちのもの。

「勇介！」

「はいはい」と

ガシツ！

「てめえ！離せ！」

勇介に捕まえられた。いつもいつもこいつは…！

「すまん。オレは頼りになる男になるんだ」

「何わけわからないこと…」

「うわー…」

「覚悟はいいわね？」

死亡フラグ…。

「ぎゃああああー！！」

あー…。

……

「あは…あはは…あははははははは〜」

「紗耶香ちゃんやりすぎじゃない？誠二壊れちゃったよ」

「これくらいで上等よー！」

「誠二先輩がおかしくなっちゃったー！」

「夢の中で相田さんと戯れてるんだろっよ」

「えっ！誠二先輩！戻ってきてー！」

ゆっさゆっさゆっさゆっさ…。

「うっ…うぐっ…うがっ…うがあああ！」

「きゃっ！」

「はっ…めぐ！めぐはー！」

「ほらな」

めぐと戯れていたのに…。

「そろそろお開きよ〜ん！」

ん…もうそんな時間か。

めぐは…いないな。妄想か。オレもヤバいな。

その後、美香がみんなに挨拶をして、恒例の次期部長発表サプライズだった。次期部長は美香と同じトランペットの子だった。やっぱりびっくりしていたけどやる気は十分みたいだった。

これで吹奏楽部ともホントにお別れだな。

部活があったからこそ、今まで楽しく過ごせていたと思う。

奈美先生には相談に乗ってもらったり。美香には誘ってくれて感謝。紗耶香は同じパートで一緒の時間が長かったな。勇介は…記憶にない。亜美ともなんだかんだで楽しかった。

みんな、ありがとう。

そして、めぐ。

めぐが居てくれたからこそ、今のオレがいる。

早く会おうね。

三年生 二学期

夏休みも終わり二学期を迎えた。
卒業まであと半年。

そう考えると残りの学校生活はもう短いものだった。あつという間だったかな……。

今日は体育祭。

オレたち三年生が本格的に参加する最後の学校行事だった。

文化祭では三年生は後輩の催し物を楽しむだけで、オレたちが何かを用意したりすることはない。最後の年は単純に文化祭を楽しむようにとの学校側からの配慮だった。

今年は美香も紗耶香も勇介も渉も同じ組みだから、この体育祭はみんなで一致団結して頑張ろうと気合いが入っていた。

「誠二、あんた元陸上部の意地見せなさいよ？」

「おう！」

って言っても三年も前の話しなただけ。

「負けたらゆるさねえぞ」

「お前は自分の心配をしる。変態」

「安心しろ、オレは捨て駒の種目だけだ」

それは安心しよう。

オレが今から出るのは百メートル走。

「誠二、頑張つて！」

「任せとけ！」

よし！オレの全てを賭ける！

………

『位置について、よーい……』

パンッ！

うおおおおおおお！

甦れ！総合グラウンドを駆け抜けたオレ！

！

まずい！負ける！

めぐ！オレに力を！

（誠二くん！）

ゴールにめぐが見える…！

「めぐー！ー！ー！ー！」

ゴール！！

オレは一着でゴールテープを切った。

ありがとう、めぐ。

やってやったと胸を張って自陣へ戻る。

「やったぞ！」

「「「「「」」」」」

…なに？この空気？一着だよ？

しらけた顔で見えてないでよくやったの一言くらい…。

そんな時、紗耶香が口を開いた。

「あんた、恥ずかしいわよ」

「オレたちの恥だ」

「誠二、あれはちょっと…」

「誠二くん、何で僕の名前じゃないの？」

名前…？

「あんた、”めぐー”って叫びながら走ってたの気付いてないの

？」

「みんなひいてたよな？」

「う、うん」

「なんで僕の名前じゃ…」

うっ…オレは…。

ん？後ろから視線を感じる。

さっ！

「うわっ…」

オレが視線を感じて振り向くとクラスメイト達がみんなオレを見

ていた。視線が合うとみんな振り向いて見て見ぬふりをした。

「……………」
めぐ…オレは君のためだけに走ったんだよ。

「ま、まあこれでリードだよ！」

美香…ありがとう。

この後は二人三脚を紗耶香と。

「足引っぱらないでよね！」

「そっちこそ！」

お互いに自信たっぷりだったオレたちは練習もしないで本番に挑んだ。

一昨年はめぐとしたんだよな。一着でめぐに抱きつかれて美香がヤキモチやいてたんだっけ。懐かしい…。

『位置について、よゝい…い』

パンツ！

イッチに、イッチに、イッチに、イッチに、イッチに、イッチに、イッチに…。

「紗耶香！早い！焦るな！」

「あんたが遅いのよ！」

「ま、待てっ！おいっ！うわっ！」

ズドンッ…。

倒れた。痛たたた…。

！

うわわわわわわ！

……………

足引っぱらずに…ズボン引っぱっちゃいました…。下着丸見え…。

「……………」

オレは倒れたまま動かさず顔を伏せて気付かないふりをした。でも、手は紗耶香のズボンにかかっていたわけで…。

「きゃああー！誠二！手離しなさいー！」

ヤバイよね…。

一、二発は覚悟しよう。そ、それだけだからな。オレだって一応人間だし。

「誠二……」

「まっ、待て！うわっ！」

逃げようとしただけで足がしっかり結ばれていたわけで…。

「誠二……」

「ぐぼっ！待てっ！さやがぐえ！わざとぐお！じゃぎやあ！ないっぶえー！！」

「誠二……」

「ぎやあああああああー！！」

オレは全校生徒が見ている前で紗耶香にボロボロにされた。完全に血が上ってたな…。

しかし、見ていた男子生徒からはオレに向けて拍手と歓声が沸き起こっていた。

「あんたたち……！黙りなさい！！」
ピタッ。

紗耶香の一喝ですぐに止んだ。

「はあ……はあ……」

オレはよろよろと立ち上がり、会場へ向けてガッツポーズを掲げた！

「純白の白だ！」

『おお……』

そしてまた拍手と歓声が起こった。

「ふんっ！」

「ぐはあっ……」

紗耶香にトドメの一撃を喰らう。

めぐ…今まで楽しかった。ありがとう…。

オレはそこで意識を手放した。

「はっ……」

「ここは…保健室か。」

「やっとお目覚めね」

「紗耶香…！ たたた…」

「紗耶香が運んでくれたのか？ まだまだ不機嫌そうだけど…」。

「感謝しなさいよ」

「運んでくれたんだな。 っていうか当然だろ！」

「あれだけ痛めつけといて。」

「はあ！？ あんたのおかげで全校生徒の前で下着姿をさらしたのよ！？」

「だから…あれはわざとじゃないって…」

「ふんっ…まあいいわ」

「あれ？ 一撃覚悟したのに。」

「やけにあっさり引いたな。」

「あんた、うわ言のようにめぐの名前呼んでたわよ」

「えっ！」

「あんたの辛さはよくわかるわ。 …だから…私をめぐの代わりだと
思っ…」

「さ、紗耶香！？」

「紗耶香がこっちに寄って来る。」

「ちよっと待って！ オレにはめぐが…！ めぐが…！」

「……………！」

「だからあんたをおぶってる時にめぐの代わりに私の胸揉んでいい
ことなんてこれっぽっちもないのよ…！」

「がはあっ…！」

「不意打ちの一撃！」

「そんなの知らないし！」

「そんなの無意識だろ！ 感触だって残ってないし…」

「貧乳だって言いたいのか？」

「な、なぜそうなる！？ちよつ、待てっ！」
拳を構えるなー！！

「いっぺん死んどきなさい！！！」

「ぐふっ……！」

ああ……めぐ……。空の上から見守っておくよ……。

……

「紗耶香ちゃん、誠二の具合は？」

「美香ちゃん、交代しよう」

「え……う、うん。あれ？傷が増えてるような……」

「私の胸揉んだあげくに貧乳だって言ったからね」

「そんなの！？誠二……。言ってくれば……」

「え？」

「な、なんでもない！後は任せてもらって大丈夫だよ！」

「うん、じゃあまた後でね」

「はい」

……

「誠二……。どうしよう……。誠二が寝てる……。めぐはいいな。誠二の寝顔なんか当たり前に見てたんだろっな」

……

「やっぱり……。私……。ダメ！抑えて美香！我慢よ我慢！」

……

「少しくらい……。んっっ！ダメっ！」

「何やってんだ？美香」

目を覚ますと横で美香がぐねぐねしていた。

「ひゃっ！お、おはよう誠二」

「ああ。何してたんだ？」

「あ〜〜…ス、ストレッチだよ！ストレッチ！体動かした後はちゃんとしとかないとね！」

「ふーん…」

変なストレッチだな。

「体育祭は？」

「も、もう終わったよ。優勝は出来なかったけど…」

まああんな騒ぎになればな。

「そっか。よつと…」

痛たたた…。

起き上がろうとしたけど体が痛む。紗耶香のやつ、思いっきりやりやがって。

「まだ休んでた方がいいんじゃないの？」

「大丈夫。みんなは？」

「教室に居ると思うよ」

なら戻るか…。

「いたたた、戻るか！」

「うん。ホントに大丈夫？」

「だーいじょうぶ！ほらっ！あつ！たたたた…！」

平気なところを見せようとしたけど逆効果だった。

「もう…無理しないで。肩貸して」

「い、いや、いいよ」

「良くない！ほらっ！」

なかば強引に腕を取られた。

「わ、悪い…」

「気にしないでいいよ」

そのまま教室まで戻った。保健室も三年の教室も一階なのでそれ

ほど苦勞はしなかった。

美香の香りが懐かしかった。

「おう！男子のヒーローのご帰還だな」

「変態。あんたも同じ目に合わせるわよ？」

「誠二くん、大丈夫？」

教室に戻ると、みんなはもう帰る準備が出来ていた。なんだかんだ言っただって待っていてくれたみたいだ。

「悪い、待たせた。ホントに悪いのは紗耶香だけど」

「またベッドに戻りたいの？」

暴力女め！

「もう、余計なこと言わないの！」

「へいへい」

それから美香に時折支えられながら家に帰った。

めぐ：今年もなかなか騒がしかったよ。

手紙に体育祭のことももちろん書く。一致団結して頑張ったこと。紗耶香にボコボコにされたこと。優勝出来なかったこと。めぐと過ごした体育祭の思い出のこと。

思わず前のことを思い出してにやけてしまう。

「ははっ、そういえばこういう事もあったよな」

手紙を書いていく度に今までのめぐとの学校生活の思い出が甦る。めぐが笑ってたこと、怒ってたこと、泣いてたこと。

今までの日々全部が宝物だ。

”会いたい”

もはや決まった言葉の綴り。

単に書いている言葉じゃなくて、今会いたい気持ちを込めて書く。きつと、ちゃんと伝わってるはずだ…。

（あははっ！誠二くん、おっかしー！）

ふふふ…。めぐのかわいい笑顔を思い浮かべながら眠りにつく。

「いらつしやいませ！」

「ちよつと貧相だな」

「むつきゃー！ー！！」

文化祭当日。

亜美の教室のコスプレ喫茶に来ていた。亜美がバニーガールの格好で迎えてくれていた。

「これでも頑張ってるんですうー！」

胸パットが入っているみたいだった。

「頑張つてそれなら仕方ないな」

「ひどーい！ひどすぎますー！誠二先輩！」

「はは…悪い悪い。さ、案内してくれよ」

「む…こちらへどうぞ！」

案内されて席に着いたがこれといって何も置いていないテーブルだった。

「メニューは？」

「ありませんよ。何がいいです？」

メニューがないのに何がいつて…。

「じゃあ…瓶入りのコーヒー牛乳」

「かしこまりましたあ！斎藤くん！瓶入りのコーヒー牛乳！ダー

ツシュ！！」

ええっ！？

「承知！！」

ガララッ！

斎藤くんと呼ばれた人はダツシュで教室を出て行った。

「なに？どういうシステム？」

「メニューはなしで、万が一用意してないものが注文されたら買いに行きます」

えー、そんなに待てないし。

「お待ち…」

「はっっ！」

オレの目の前にはコーヒー牛乳が置かれた。
ゴクツ…。

「冷たい…。うん、あのコーヒー牛乳だ。」

「それにしても早すぎるだろ。どこまで買いに行ってたんだ？」

「ふふふ…企業秘密です」

亜美は得意気に鼻を鳴らしていた。

「いや、何でもカフェ。当たると思うぞ。」

「メニューがないなら値段は？」

「千円です」

「たかっ！」

いくらなんでもコーヒー牛乳一本千円はないだろ！

「サービス料込みです」

「サービス料って、おつかい料…？」

「…明日はここに用意してあるやつを頼むよ」

亜美の店でぼったくられたオレは山本さんと荻野さんのクラスへ。

二人は同じクラスらしい。何をするんだらう。

「ちゃんとさっきのコーヒー代は払ったよ？」

「えーと…んー？ペットボトル…コンサート？」

「なに？」

「あっ、先輩」

荻野さんがオレに気付いて話しかけてきた。

「荻野さん、これ何するの？」

「ペットボトルに水を入れて飲み口のところをふーって吹けば音が出るんですよ」

「へー。それで？」

「水の量を調整して音階を作って、それを一人二本持って曲を演奏します！」

「ハンドベルみたいな感じ？」

「はい、そうですね！」

エコだな…。

「もうすぐやりますんで見て行って下さい」

そう言われて教室に並べられた椅子に座って演奏を待っていた。

………

しばたく待っていると学級委員長らしき子が挨拶して演奏が始まった。

~~~~~

へー、ちゃんと曲になってる。

確かどこかの国の民謡かなんかだよな。みんな息が合ってるし、頑張って練習したんだろうな。

パチパチパチパチ…

「どうでした？先輩」

演奏が終わり、荻野さんが駆け寄ってきた。

「ちゃんと曲になってたね。スゴイよ。難しそうだな」

「そんなことはないですよ。やってみます？」

そう言っって自分が持っていたペットボトルをオレに差し出す。

「こっつ？」

そしてオレがいざ試してみようとした時…。

「間接キス…」

荻野さんがぼそつと呟いた。その言葉にオレはピタリと止まる。

「や…やっぱり難しそうだからやめとくよ」

「ちっ…」

え！？今舌打ちしたよな！？

「明日は違う曲なのでまた来てくださいね！」

最後は素敵な笑顔で送り出してくれた。

うん、きつと舌打ちなんて他の誰かがやったんだ。

その後もいろんなところを見て回り、文化祭一日目は終了した。

## 文化祭二日目

今日のメインイベントはオレの中で吹奏楽部の公演。



みんなの成長を会場から見ることに。今まではなかったからな。午後からなので午前中は美香や紗耶香と一緒に回った。

「はぁーっ!?!千円!?!ふざけてんの!?!」

紗耶香が亜美のところに行つてないと言つたから連れて来たんだ。くくく…ざまあみる。

注文する時、オレはいかにもありそうなオレンジジュースを注文した。紗耶香に用意してなさそうなものを注文させるようにあつて、紗耶香はシュークリームを注文した。用意してあつたのは飲み物だけだつたようで、また斎藤と呼ばれる人が買いに行つていた。

そして、紗耶香の目の前にはやや小ぶりなシュークリームが置かれた。

「かわいい。でも一口ね」

「あゝ、千円が一口で」。

「行くわよ。亜美ちゃん、いくら?」

「紗耶香先輩は千円です!」

「はあゝ!?!」

…で、今に至る。

「サービス料込みです!」

「ふざけんじやないわよ!誠二!行くわよ!」

「ああ、オレにもこの強引さがあつたなら…」。

「食い逃げは許されません!犯罪です!」

「ぼつたくりに払うお金なんてないわ!」

「斎藤くん!」

「うわっ!」

「うわっ!忍者か!?!」

斎藤と呼ばれた人は呼び声がかかると亜美のそばに突如現れた。

「紗耶香先輩にこのシュークリームの価値を教えてあげて」

「承知した!」

「誰よあんな」

紗耶香は初対面でも強いなー。

「斎藤と呼ばれる者です。お初にお目にかかります、純白の女王」  
ん？純白の…女王？紗耶香のこと？

「何よ？それ」

「体育祭での騒動、拝見させて頂いておりました故に」

紗耶香は意味がわかったらしく、顔を真っ赤にさせて右拳を振りかぶった。

パシンッ…。

「なっ！」

斎藤と呼ばれた人は軽々と紗耶香の右ストレートを受け止めた。

「さすが女王。いい拳です。それでは説明いたしましょう。まず、用意されていないシユークリムの注文を受け、教室を飛び出し、生徒たちの波をくぐり抜け、学校を教師に見つからないように抜けだし、それから…」

「わかった！わかったわよ！千円ね！」

おお、あの紗耶香が負けた。

「ありがとうございますうー！」

そしてコスプレ喫茶をあとにした。

「やけに素直に払ったじゃないか」

「…斎藤くんかあ…。」

「ええっ!？」

紗耶香は恋する乙女の顔になっていた。

あれか？恋人は私よりも強くなきゃダメ！とかいうあれか？

「あの子いじめたら気持ちいいだろうなあ…。」

「……………」

あの目は屈服させた時を想像してのことだったか…。

怖え…。

……………」

そして午後。

吹奏楽部の公演だ。

体育館へ集まり公演を聞く。

おーおー、すでに眠そうにしてるやつがいるよ。仕方ないって理恵先輩は言ってたしな。

多少腹を立てながらもステージに目を向けた。

亜美はしっかりやってるみたいだった。一年生二人も上手になってる。

よかった。これなら気にすることもないな。

オレたちが抜けたあとでも大丈夫そうだった。

そして生徒会が歌を歌って文化祭は終わりを迎えた。

「誠二、後夜祭行くの？」

「ゴメン、美香。一人で帰るよ」

「なら私も……」

「いや、一人で帰るよ」

「そ、そっか！じゃあまたね！」

ゴメンな、美香。後夜祭はカップルばかりなんだから美香とは行けない。それにもう期待させちゃダメだって思うし。一人で帰るよ。

そして一人で学校をあとにして帰り道を歩いた。

……

またもうすぐクリスマス。今年はクリスマスカードとプレゼントを送る予定だ。プレゼントはビデオレターとネックレス。ちょっと恥ずかしいけどね。

もう、冬がやってくる。

二学期も終わるころ、学校にはいくつか就職案内が来ていた。まだ数は少ないけど。今のところはまだ決められなかった。

頭の中はクリスマスプレゼントのことでいっぱいだったんだ。

もう、めぐのところには送った。

自分で自分を撮るのが恥ずかしかった。途中で泣いてしまったし。元気にしてる？とか、うまくやれてる？とか、お決まりのセリフ

から入って…。このクリスマスプレゼントを選んだ理由とか、思い出話をして懐かしいよねって言ったり。二人の将来のことについて話したり。それでやっぱり最後は会いたいて一言。そこで泣いてしまった。

もう少しでめぐが旅立って一年の月日が経つ。

めぐ…。

会えた時には笑顔で話そう。

メリークリスマス！

三年生 三学期

クリスマスが過ぎて年も明けた。

めぐからクリスマスカードと手袋が届いた。手編みの手袋だった。  
『毎年手袋送るからね』

そう手紙に書かれてあった。覚えてたんだな。手袋の数だけめぐと繋がってる証。サイズもぴったり。何も忘れてない、全て覚えてくれてるんだ。

何も心配することはない。オレたちは繋がってる。

三学期、二月。

めぐが贈ってくれた手袋をして学校へ向かう。

オレたちが実質学校に来るのは一月までだった。二月は登校日以外は自由だ。就職が決まってない人はもちろん探しに来る。

オレもその中の一人だった。

どうするかなあ…。

いろいろ案内を見ていたけれど決められないでいた。

この町で探すのって難しいのかな…。

「椿くん、どう?」

奈美先生…。

「決まりません」

「困ったわねえ」

どうしたらいいんだろ。

「今日届いた案内なんだけど、こっちも見てみて」

そう言っただけに案内の束を渡す。

ん…。

一通り目を通してみるけどやっぱり美容師と営業が多いなあ。  
ん?

楽器販売員か…。

給料は安いけど…こういうので社員募集なんて珍しいなあ…。

就職場所も隣町の黒岩町くろいわで家から通える。楽器に詳しくなればめぐのサポートだって出来るかも。

「先生、この面接受けてみたいんですけど…」

「なにになに？ふーん、なるほど…頭の中は相田さんのことでもいいね」

「そんな…！…間違いじゃないですけど…」

「まだまだ椿くんの青春は続いていくのね！先生が話し通しておくから、面接、しつかりね！」

「よろしく願います」

それから面接の日時が決められ、面接の練習に学校へ通う日々だった。

その練習の甲斐があつてかオレは無事ぬ内定が決まった。

そして進学しんがくの三人。美香、紗耶香、渉はそれぞれ合格を決めた。

これから学校を卒業してそれぞれの場所に旅立って行くんだな…。

どれだけ離れたって友達だなんて、わかつてはいるけど寂しいよね。めぐ…もうすぐ卒業だよ。

仕事頑張つて、絶対会いに行くからな！

「誠二」

「どうした？美香」

「紗耶香ちゃんと話してたんだけど、みんなめでたく進路も決まったことだしパーっと遊びにでも行かない？」

そうだな、卒業式まで今日の登校日一回だけだし。

「いつ行く？」

「明日！」

明日？

「おいおい、急じゃ？」

「いいでしょ？どうせ暇なんだし」

「まあ、な。紗耶香は？」

「私も明日でいいわよ」

「勇介」

「いいぜ！」

「渉はどうする？」

「明日一緒に行くよ！」

「じゃあ明日で決まりだな。」

「どこに行くんだ？」

「もうみんな地元で遊ぶこともないだろうし、普通に街で遊ぼうよ！」

そう美香が提案する。

「紗耶香はそれでいいか？」

「私は構わないわよ」

そっか、じゃあ…。

「明日十一時くらいに街中の噴水でいいか？」

みんなそれに了解した。

めぐと初めて街デートした時の待ち合わせ場所。

いつもオレが先に来ていた。待ち合わせの時間にはお互い早かったのに。

ははっ…また思い出しちゃったな。プリクラ苦手だけど、まためぐと撮りたい。手を繋いで歩きたい。

いつ…叶う？

翌日、オレは十一時ぴつたり待ち合わせ場所の噴水に着いた。

「おっそーい！」

みんなはもう集まっていた。

「悪い！今からどうするんだ？」

「先にご飯食べてから遊ばない？」

まだ十一時だけど…。

「オレはいいけどみんなは？」

みんな小腹が空いているみたいで近くのファミレスに寄った。め

ぐと初めて一緒にご飯を食べた場所だ。

「誠二くん、決まってるの?」

オレはメニューを見ようとしなかった。

「ハンバーグ定食」

めぐと初めて一緒に食べたメニュー。嫌いなものは食べてくれた  
っけ。

あの頃と変わらない味だった。

そして、みんなそれぞれ注文して食事を済ませた。

「あそこ寄らないか?」

オレは雑貨屋を差して言う。

「へー、誠二でも雑貨なんて見るのね」

紗耶香が意外そうに言う。

「まあ、な」

みんなを連れて店に入る。

……

まだあつたんだ…。

前に見た場所には置いてなかったけど、めぐと見た占いの本を探  
しだした。バージョンは新しくなってるみたいだけど中身は一緒だ  
った。もう二年前だしさすがにね。身体の相性はうちりだったんだ  
よな。めぐを最初に怒らせたのもここだっけ。

「誠二、何見てんの?」

「うわっ! 紗耶香!

「た、ただの占い」

「ふーん… 占いねえ…」

紗耶香は疑うようにじーっと見ている。

「占いは占いでも、あんたの頭の中を疑うわ」

…バレてる。

「た、たまたま手に取った本がこれだったただけだよ」

「あーあ、こんな変態にめぐを取られちゃうなんて」



「でもな…めぐはああ見えて結構エツチだぞ？」

「やめなさいっ！」

「あでっ！」

本の角でこづかれた。ダメだよ、商品なんだから。問題はそこじゃない？

「私の中のめぐを汚さないで！」

「ホントのことだし…。だってめぐはな、オレが風呂に入ってるときいきなり入ってきてオレの……」

「いやああああ！！！」

紗耶香は耳を押さえて逃げ出した。

勝った！オレは紗耶香に勝ったぞ！

非常にすがすがしい気分になったオレはみんなと合流した。

「ケーキでも食べに行かない？」

「涉？やっぱり女みたいないやつだ。」

「涉に連れられてケーキ屋へ。」

「こども……」

めぐの甘いものは別腹って思い知らされたケーキ屋だ。

「美香も紗耶香も甘いものは別腹なのか？」

「別腹っていうほどは食べれないよ」

「私もそうね」

「うぬう、やはりめぐの胃袋は異次元に……」

「めぐと来たことあるの？」

オレの聞き方に引っかけたのか美香が尋ねてきた。

「ああ、めぐはこのパフェを一人でペロリと食べたよ。オレは見るだけでお腹いっぱいになったよ」

オレはそう言ってメニューにある巨大パフェを差した。

「ど、どれくらいの大きさだったんだ？」

「勇介が値段を見て驚いて聞いてくる。」

「ちようどお前の顔が隠れるくらいの大きさだよ」

「」「」「」

そりゃ驚くよね。普通絶対無理だもん。

「めぐなら食べるかも」

「そうだね、めぐなら」

えっ！美香と紗耶香は納得してるし！

「ありえないだろ」

「誠二くん、言い過ぎだよ」

そう、こっちが普通。

「めぐにつき食べてしまっわよ」

「そうだよ、めぐだもん」

オ、オレの知らないめぐを知ってるな。さすが女同士ってことか。

それからケーキを食べてゲームセンターに行った。

なんか、めぐと行ったとこばっかりだな。

「誠二、勝負よ！」

紗耶香が太鼓の鉄人で勝負を挑んできた。

「オレに勝てるんでも？」

「やってみないとわからないわよ」

「いいだろう」

いざっ！尋常に勝負！

！

あ、危ない。負けるところだった。

「もう一度よ！」

えっ…勝つまでやる気かよ…？

「さ、紗耶香ちゃん落ち着いて。後ろで待ってる人いるから」

「えっ…もうっ…」

ほっ…よかった。いつまでやるかわからないもんな。

「誠二！こいつで勝負よ！」

エア―ホッケー…。

絶対負ける気がする。

カツ！カツカツカツカツカシャンツ！

「よーし！やったわ！たいしたことないわね！」

むかつ…！

無性に腹が立つ。絶対負けん！

「これからだよ！そりゃ！」

「甘いわよ！そこっ！」

カシヤンツ！

「ぬあっ！」

「ふふん、まだまだね」

くっそー！

「ちつくしよー！」

「だから甘いのよ！」

カシヤンツ！

「ムキヤキヤキヤキヤーー！！！」

「来なさい！」

……………

「はあっ…！はあっ…！」

「これで私の十戦全勝。まだやるの？」

「くっ…！」

「誠二ー、もういいだろ？紗耶香には勝てねえって」

ぐぬぬぬぬ…。

「誠二くん、諦めが肝心だよ」

「二人とも、周りの人みんな見てるよ？」

え？

「あう…！」

「うわ…！」

熱くなり過ぎて周りのギャラリィに気がつかなかった。

夏祭りと一緒にじゃん！

（紗耶香！）

（ええっ！）

「みんな、行くぞ！」  
そそくさとその場から逃げ出した。

「もう！二人とも恥ずかしいよ！」

「見てるこつちはおもしろかったけどな」

「誠二くん弱い……」

面目ない……。渉の一言は気に入らないが。

「ね！みんなで撮ろう！」  
ん？

ここはプリクラブースか。

そして最後にみんなで遊んだ記念をプリクラブに残した。

めぐに送ろう。

ヤキモチ焼くかな？美香と紗耶香がいるし。でもみんなの顔も見たいだろうし。

でもなあ……。

プリクラブでは美香がオレの隣に写っていた。

誤解しないかなあ。

心配……。

めぐならわかってくれるよな。

オレはプリクラブを手紙に入れて送ることを決めた。

その後、みんなで少し話しをしていた。

卒業を間近に控えてそれぞれ思うことがある。

これからの旅立ちに胸躍らせる人もいれば、寂しさが重くのしかかったり。

「あはははっ！ははっ……もう、こんなにみんなが集まれることもホントにないかもね……」

美香はすごく寂しそうな表情で言う。

「また集まるうよ！みんなここが地元なんだし、帰って来たらまたこんな感じだよ！」

渉が言う。

「オレはいつどこへ行くかわからないから最後かもしれないねえな。こ  
つちの祭りには出店出すと思うけど」

寂しいことを言うなよ、勇介。

「私も、遠くの大学だからね。なかなか帰って来れないだろうし……」  
紗耶香……。

「でも……離れたってお互い友達だ」

「誠……うん。そうだよな！紗耶香ちゃんも勇介も涉くんも、帰っ  
て来たら遊ぼうね！」

めぐ……みんな旅立ちの時を迎えるよ。

また、めぐも含めてみんなで騒げたらいいよな。

もうすぐ卒業だよ！めぐ！

オレは今でも変わらずにめぐを想ってるよ。

大好きなめぐ。

君も、オレのことを変わらずに想ってくれていますか？

手紙だけじゃわからないから。めぐに会って話したいよ。

会いに……行くからな！

それぞれが思い思いの日々を過ごし……。

そして。

三月一日。

卒業

あなたのそばですっと

三月一日。

オレたちの卒業式。

無事に卒業を迎えられた。

柳ヶ浦高校。

いろんなことがあった。

新しい友達との出会い。先輩たちとの出会いと別れ。

吹奏楽部。

初めてのステージでの演奏。

体育祭、文化祭。

修学旅行。

めぐとの出会い。

初めての恋。

苦悩の日々。切なさと苦しさ。その先にあった幸せ。

そして、めぐとの別れ。

めぐ：オレたち、少しは大人になれたのかな？

『卒業証書、授与』

オレたち卒業生の代表が卒業証書を受け取る。

三年間：短かったよなあ。

『校歌、斉唱』

最後の校歌斉唱。

みんな泣いていた。

オレもいろんな思いが思い返されて涙した。

楽しかった。

みんながいたから。

めぐがいたから。

みんな旅立つ。

この場所から。

” 一生の思い出は？ ”

そう聞かれれば俺は間違いなく高校時代と答えるだろう。

三年間の思い出が詰まったこの学校と今日、別れを告げる。

みんなとも。先生達とも。

オレたちは柳ヶ浦高校を卒業する。

それぞれの思いを胸に。

卒業式が終わり自分達の教室へ。

いろんなことがあった教室。

みんならぐがきを彫ったりしたいた。

「みんな！卒業おめでとう！」

奈美先生からの最後の言葉。

「先生はみんなと出会えて本当によかった！先生はみんなにこの学校で、このクラスでよかったって思ってもらえるようにしてきたつもりだけど、どうだったかしら？」

オレは奈美先生でよかった。奈美先生じゃないとダメだったかもいろんなことを相談出来た。奈美先生だったからこそ。

オレは奈美先生を尊敬しています。

ちよつと酒ぐせ悪い先生だったけど、三年間ずっと奈美先生が担任でよかった。

「もうお別れなんて思っちゃうとすごく寂しいけど、あなたたちのことは一生忘れません。だから、ここで過ごした三年間、楽しかったって少しでも思ってもらえたら先生は本望です」

きつと、みんなそう思ってくれてるはずだ。

「……ひっ……グスッ……」

奈美先生……。

「……ひっ……あんまり……しみりしちゃうのもって……思ってた……けど……グスッ……ごめん！……先生……我慢出来ない……！……うっ……グスッ……」

オレも、みんなも涙を流していた。

「あはっ…。ゴメンねみんな！最後まで頼りない先生で」  
その言葉にみんなが「そんなことない！」って口を揃えて言った。

「みんな…！…う…グスツ……ありがとう！…ホントに今まで…ありがとう…！」

パチパチパチパチ！！！！

「先生！今までありがとうございました！！」

奈美先生のおかげで素晴らしい三年間が送れました。

ありがとうございました！

教室で一人一人がみんなに挨拶をする。

涙ながらに話す人。最後までおちゃらけて話す人。いろいろだった。

卒業アルバムが配られる。

みんな友達同士お互いにメッセージを書き込んでいた。

オレも仲が良かった友達や美香、紗耶香、勇介、涉とお互いに書き合いをした。

美香はオレのアルバムに”頑張って夢叶えて”と書いた。

夢…。

めぐとの約束…。

めぐと一緒に卒業したかった…。

アルバムの集合写真にめぐはいない。

ところどころ写っていた写真もあったけど。やっぱり寂しいよな。  
なあ…めぐ。

お互いに卒業を祝いたかった…。

向こうで祝ってくれてるかな？

「誠二。卒業…しちやったね」

「ああ、そうだな。卒業したんだな」

美香…。オレは彼女をたくさん傷つけてきた。でも、変わらずに接してくれた。気持ちに答えられなかったオレを逆に励ましてくれたりもした。



「今まで、ありがとうな」

「誠二…。幸せになるんだよ？」

「美香…。オレは頑張るよ。美香も…な？」

「うん。実家は近所なんだからまた会えるよ！そのうち素敵な旦那さん紹介するからね！幸せになって誠二なんか後悔させてあげるんだから」

「ははっ…そのときは祝福するよ」

これからも頑張れよ、美香。

「よかったわね。無事に卒業出来て」

「オレはお前が思うほどバカじゃないぞ、紗耶香」

「紗耶香…。いつでもオレに厳しくて何度三途の川を渡りかけたか…。でも紗耶香のおかげでめぐと出会えた。感謝してる。」

「そのバカ力どうにかしないといい人見つからないぞ？」

「大きなお世話よ！」

「ぎゃひっ！」

痛たっ！ほんっとこいつは最後まで…。

「そのうちお前Mに目覚めるんじゃないやね？」

「勇介…。さらば勇介！」

「それだけかよ！」

「心を読むな、変態」

ま、こんなやつでも一応親友だった。

「誠二くん、一人で勉強出来る？」

「涉…。今まで散々テストで世話になったがオレはお前の気持ちがわからない…。」

「僕が作ったフィギュア、送るから大事にしてね？」

「いや、ははは…はあ…。」

最後までいい顔いとくか…。

……

「みんな！本当に卒業、おめでとう！」

奈美先生の言葉で最後のホームルームが終わった。

柳ヶ浦高校。

お世話になりました。

教室をあとにする。

もうこの教室に来ることはないんだな…。

「誠二先輩！」

「亜美…。来てたんだな」

在校生は本当なら休みだ。

「卒業、おめでとございます！」

「ありがとな。オレがいなくてもしつかりやれよ？」

「うう…。先輩…。誠二せんぱーい！！」

亜美が泣きながら勢いよく抱きついてきた。

「あっ！こらっ…！」

…まあいいか。こんな時くらいはな…。

「うう…グスンツ…」

オレは黙って頭をなでていた。

「もうオレを追いかけるなんて出来ないからな。いい人見つけるよ？」

「亜美を舐めたらダメですよ！誠二先輩の職場の情報は入手済みです！行きますからね！」

……………。

「やっぱ離れるー！！」

だ、大丈夫か？こいつ。

それを笑って見る者もいた。

「最後まで相変わらずだね、あの二人」

「そうだね、あとはめぐが居ればなあ。ああん、めぐに会いたい！」

「紗耶香ちゃんはホントにめぐが好きなんだね」

「そう。でも…誠二がいないとめぐもあんなに笑うことはなかったんだらうなって思う。感謝してるんだ、誠二には」

「紗耶香ちゃん…」

「美香ちゃんも、めぐと変わらずに接してくれてありがとう」

「お礼なんて…。私は…めぐに会えたら謝らないと…」

「どうして？」

「めぐがフランスに行っちゃった時、チャンスって思っちゃったんだ。最低なんだよ、私」

「美香ちゃん…」

「だから絶対にまた会って謝らないと。そして、今度はちゃんと二人を見るんだ。目を反らさないで」

「…うん」

この話しはオレも後々知ることになる。

「美香ー！亜美を止めてくれー！！」

「誠二先輩！逃げないでください！」

「ふふふ…紗耶香ちゃん、行こう！」

「うん！」

……………

「なあ涉。オレたち絶対忘れられてるよな」

「勇介くん、たちじゃなくて勇介くんだけだよ。きっと誠二くんは僕を思ってるよ」

……………

「ほらほら亜美ちゃん、誠二を離してあげて？」

美香がやつと助けに来てくれた。

「美香先輩…う…。そうだ！ここは協力しましょう！」

「協力？」

「一緒に誠二先輩で遊びましょう！」

オレで遊ぶ！？

「み、美香？美香はそんなこと…し、しないよな？」

「誠二で…遊ぶ…誠二で……ブツブツ…」

こ、これは…。

「紗耶香！もはやお前しかない！」

ガシッ！

「あつ……」

「誠二先輩、亜美たちといい事しましょうね？」

「誠二、楽しもうね？」

う……うああ……。オレにはめぐが……めぐが……！

「ストーリーップ！亜美ちゃんいい加減にしなさい！美香ちゃんも！めぐに謝るんでしょ！」

ふ、ふうう……。

ナイス紗耶香！

「ぶう……」

「わ、私は何を……」

よかったよかった。

「誠二！あんたも甘いのよ！」

うっ……ごもつとも。

……

「なあ、絶対忘れられてるって」

「大丈夫。僕は誠二くんを信じるよ」

ん？勇介と渉。

「お前ら、まだ居たのか？」

「渉、こういうやつだぞ？」

「気付いてくれたよ？」

「オレはもう帰るぞ？明日からおじさんのところ行くからな」

「そうか。勇介、世話になったな」

いじめられ役だったけど、お前にはお前の存在理由があった……  
気がする。

「また夏祭りにでも会おうぜ！誠二。みんなもな」

「おう！」

そして勇介は先に帰って行った。ちよつとだけその背中が知っている勇介とは違った気がした。

オレも……。

「オレもそろそろ行くよ」

「えー！誠二先輩もう帰っちゃうんですか？」

「吹奏楽部の卒業式には顔出すから。またな」

亜美の頭をなでる。

「むう…：しょうがないですう」

む…：少しかわいいな。

「紗耶香も、こっちにいる間はまた遊ぼうな」

「考えとくわ」

素直じゃないんだよな。何だかんだで寂しいくせに。

「渉も、彼女くらい作れー」

「いいの？誠二くん」

いつからこんな風に…：。

「大いにけっこう！彼女出来たら紹介してくれ！」

ちゃんと三次元のな。

「誠二、帰る？」

「美香悪い。今日は一人で帰るよ」

「え…：何か用事？」

「そんなんじゃないけど、一人で帰るよ。家は近いんだから、また

な。今までありがとうな、美香」

「う、うん…。またね、誠二」

そして、オレは一人で柳ヶ浦高校をあとにした。

途中でいるんな卒業風景が見られた。

一人帰るオレはそれを背中に家までの道のりを歩いた。

一人で帰ったのは、卒業の帰り道、隣はめぐの場所だと思ったか

ら。

美香には悪いけど明日にでもまた会えるから。

めぐ…：ついに卒業したよ。

めぐと一緒に卒業したかったな…：。

これからめぐとの約束を果たすために頑張るから、待っていてくれよな。

ペアリングを取り出して指にはめる。

大事に持っていてくれるかな？

(これがあるなら離れても大丈夫だよな？)

オレは信じてる。

めぐの気持ちが変わってないこと。

最近届いた手紙には、”もうすぐ卒業だね。もうすぐ会えるかな

あ”って書いてあった。

会いたい気持ちはお互いだよな、めぐ。

一年間、めぐが居ないことが当たり前前の日常だった。

寂しかった。

本当に心の底から笑えたのってどれくらいあったんだろう。

どんなに楽しい時だって、めぐが居ればなって思ってた。

やっぱりめぐが欠けた心の隙間は、めぐが居ないと埋まらなかった。

たんだ。

「会いたいよ…めぐ」

一人呟く。

みんなが居たから笑えた。最後の学年が楽しかった。

だけど、いつも足りないものはあった。

でも、これからオレは頑張るんだ！

めぐに会って、今までの寂しさを埋めるんだ。

そして、またみんなが集まるう。美香と紗耶香と勇介に涉。先輩

たちも呼んでみんなまで。

めぐも一緒に…。

「んーーーーーーー！！やるぞーーーーーーー！！……」

帰り道の公園で空に向かって叫んだ。

………

「ふふふ…人が見てたらどうするの?」  
「えっ!? 誰!？」

!!!

あっ…。

「卒業おめでとう。誠二くん」  
「ウソだろ？」

「少し、痩せたんじゃない?」  
「どうして…?」

「…会いたかったよ…」

オレは無意識に駆け出していた。

オレの目の前に立っている、ここに居るはずのない彼女に向かって。

「めぐ!!」

「えへへ…誠二くん。ただいま」

目の前の彼女を思いつきり抱き締める。

「めぐ…本当にめぐなんだな!？」

「ひどいなあ、もう顔忘れたの?」

疑わずにはいられなかった。突然目の前に現れた彼女のことを。彼女の顔を見る。

少しだけ、前に会った時よりも大人びていた。

「めぐだ。間違いなくめぐだ…!」

また思いつきり抱き締める。

「あっ…。そうだよ、誠二くんの彼女だよ」

「めぐ…」

「誠二くん…」

抱き締め合った。

なんでここに居るのか?

そんなことどうでもよかった。

確かにめぐがいる。

またオレの腕の中にいるんだ。

めぐの声、めぐのぬくもり。

もう懐かしい、この暖かさ。

「会いたかった。めぐを思わない日なんてなかった。何をするにしてもめぐが居なかつたら何か足りなかつたんだ」

「うん…」

また会えた…。

でも…また行っちゃうんだろうな。

考えたくない。また離れることなんて。

「私も会いたかった…！誠二くんと同じだよ。最初は何も出来なかつた。いつも誠二くんが頭の浮かんで…。誠二くんがいないとダメだったの」

めぐ…。

「オレ…不安だった。また会えるのか。本当に会えるのか」

「私も…！」

ぎゅっ…！

抱き締める力が強まる。

今だけでもいい。

また会えたんだ。

「めぐ…いつまでこっちに？」

「……………えへへ…私、誠二くんに会えた時、何て言った？」

え？

「何て？卒業おめでとう？」

「うーん…そのあと！」

そのあと…？

「ただいま？」

「そっだよ。ただいま…。帰って来たの」

何言ってるんだ？

帰って来たからここに居るのはわかるけど…。え？

「あははっ、わけわからないって顔してるね！」

「えっ？…えっ？…？…またフランスに戻るんだろ？」



「…誠二くんは…行って欲しくない？」

「オレは…めぐと離れるのはイヤだ。もうどこにも行かないで欲しい。そばに居て欲しい」

…なんて、また無茶苦茶言うよな、オレ。

「じゃあそつする！」

……………。

「ふえ？」

「私ね、向こうで頑張ってたつもりだよ。フルートの先生も優しく、私が向こうに着いたばかりの時も親切にしてくれた。お父さんもお母さんも家に居る時間は全然長かったよ。でも私…私に必要なのは誠二くんなの。誠二くんがいないとダメだったの。練習も一生懸命やったけど無理だった。誠二くんがいないなんて。だから…お父さんとお母さんを説得して帰って来たんだ。でもね、お父さんはこうなることは何となくわかってたみたい。日本を出る時、こっちは何も残さないようにしてるはずだったんだけど、家は手放してなかったんだ。私が戻って来れるように」

「でも…めぐの将来が…」

「私はお父さんやお母さんみたいに有名になることは望んでないよ。それよりも誠二くんのそばにいたい。ただ、楽団には所属するんだけどね。活動は国内だけだから、家を長く空けるってことはないよ！」

「じゃあ、フルートは…」

「続けて行くよ！日本で！」

な、何だか話しが急過ぎるけど…。

「そっか…よかった！めぐがフルートやめたら天然しか残らないからな」

「ひどおい！そんなことないよー！」

「ははっ、冗談だよ！」

「もっつ！……………ふふふ…あはははー！」

また笑い合えた。

「でも、よく許してくれたな」

「実はね…お母さんも同じ経験してるみたいなの。日本を出てお父さんに出会って幸せになってるけど、それまでは日本で愛し合ってた人がいたんだって。その人とは何年も会えなくて、連絡も取れなくなっただって。お母さん、その時はすごく後悔したって言った。今だから笑って話せるって言ってたけど。だから、お母さんは私の味方をしてくれたんだ」

「そうだったんだ…」

「びつくりさせたくて内緒にしてたんだ。それと、これお父さんから誠二くんの手紙」

「オレに？」

「うん、中身は…大体想像出来るかな…」  
めぐが引きつった顔で渡す。

「絶対渡せって…」

「あ、あとで読んでみる」  
きつと”泣かせるな”とかたくさん書いてあるんだろっな。

「オレ、手紙にも書いたけど、めぐみたいに立派じゃないけど就職決まったんだ。そして、頑張ってお金貯めてめぐに会いに行こうって思ってた。でもその必要なくなっちゃったな」

「約束は…約束だよ？」

約束か…。

「仕事頑張って、自分に自信持てるようになったらその時は…」

「誠二くんのこと、信じて待つてるから」

絶対にめぐを幸せにしてみせる。

「今まで寂しかった。めぐとせめて夢でも会えたらって思った。でも、めぐとの約束があったから、それを信じてきたから頑張ってたんだ。みんなにも助けてもらった。…これからはめぐがそばにいるんだよな？」

「そっだよ！私のもうどこにも行かないよ」

まだ実感ないけど…。

「めぐ…」

「ん？」

「おかえり…」

「えへへ…ただいま！」

もう離さない。

この笑顔。

「ねえ誠二くん」

「なに？」

「就職先、黒岩町なんだよね？」

「そうだけど？」

「じ、じゃあさ、私の家に来ない？」

ん？

「反対側だけど仕事帰りには寄れると思うよ」

「ホント！？…っじゃなくって！い、一緒に住まない？一人だと広すぎるし、誠二くんも仕事通えるよね？」

「え…ええ！？」

「そんなに驚かなくても…」

一緒に…。同棲！？

「い、いいの？」

「そしたらずつと一緒にだよ！」

そんないきなり幸せなサプライズが…！

「ふ、ふつつかものですがよろしくお願いします！」

「あははっ！何それ！。私の真似？」

「い、いや、だって…！そんなの…嬉し過ぎるよ！」

「今まで離れてた分まで、ずつと一緒に居よう？」

めぐ…。

「これから、オレたちずつと一緒にだよな？」

「うん！どこにも行かないよ！誠二くんのそばにいるよ！」

「オレも、もう二度と離さない！めぐ…大好きだ！」

「私も！誠二くん大好き！」

めぐが帰って来た。

一度失ったからこそ分かる。

めぐという存在の大きさ。

今まで寂しかった分。

会えて嬉しかった。

おかえり…。

めぐ。

これからケンカだってするかもしれない。

辛いことや苦しいこと。

まだまだあるかもしれない。

でも。

会えない辛さに比べたら。

そばにずっと居てくれる。

その幸せの方が大きい。

だから。

どこにも行かないで。

そばに居て欲しい。

オレも。

あなたのそばですっと。

幸せを運ぶから。

幸せになろうね。

「誠二くん！だい好き！」

完

## あなたのそばですつと（後書き）

しゃーむです。

ここまで読んでいただいた方々本当にありがとうございました。

誠二とめぐのお話しはいかがでしたでしょうか？

少しでもみなさんの心に残るお話しになれたのなら幸いに思います。最後の方は短かったと思う方もいるかも知れませんが、私としてはめぐの存在を忘れて欲しくなかったという思いから、最後の学年を短くしました。文章能力の低さの言い訳かもしれませんが…。

さて、次回作ですが、

『あなたのそばですつと（reverse）』  
を執筆いたします。

この物語が少しでも面白いと感じた方はぜひ目を通して下さいね。

一応、『あなたのそばですつと』は三部で物語の完結予定になっております。

身勝手な作品になるかもしれませんがお付き合いいただけたら光栄に思います。

では、また次回に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7008k/>

---

あなたのそばですっと

2010年10月8日12時32分発行